HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	未完結文における語用論的選好に関する研究
Author(s)	劉, 暁苹
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12076号
Issue Date	2016-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12076
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61595
Type	doctoral thesis
File Information	Liu_Xiaoping.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士学位論文

未完結文における語用論的選好に関する研究

北海道大学文学研究科

劉　暁苹

平成 27 年度

博士学位論文

未完結文における語用論的選好に関する研究

北海道大学文学研究科

言語文学専攻

指導教員　加藤重広

氏　　名　劉　暁苹

――目　次――

第 I 部 1
第 1 章　はじめに 2
1.1　研究対象と研究目的 2
1.2　本論文の構成 5
第 2 章 先行研究のまとめと研究方法 7
2.1　語用論的選好における先行研究 7
2.1.1　Ariel（2008）の考え方 7
2.1.2　日本語における研究 8
2.1.2.1　「非節化」という言語現象 8
2.1.2.2　可能表現への選好現象 8
2.1.3　まとめ 9
2.2　未完結文に関する先行研究 10
2.2.1　未完結文の定義に関する先行研究 10
2.2.2　文法論における先行研究 13
2.2.3　語用論における先行研究 15
2.2.4　会話分析における先行研究 18
2.2.5　認知言語学における先行研究 19
2.2.6　日本語教育における先行研究 20
2.2.6.1　個別の表現に関する先行研究 20
2.2.6.2　総体的な先行研究 21
2.2.7　まとめ 23
2.3　研究方法 24
2.3.1　未完結文の定義 24
2.3.2　理論的な枠組み 27
2.3.2.1　Grice（1975）の協調原理 27
2.3.2.2　推意の定義と種類 28
2.3.2.3　文脈 29
2.3.2.4　正の動機と負の動機 30
2.3.3　分析資料 30
2.4　本章のまとめ 32

第Ⅱ部 33
第 3 章　未完結文における要求性 34
3.1　未完結文の分類に関する先行研究 34
3.2　発話内力に関する先行研究と問題点 35
3.3　要求の種類に関する仮説 36
3.4　仮説の問題点 39
3.5　仮説の改善による解決 40
3.5.1　行為と知識の違い 40
3.5.2　【受容要求】の再考察 42
3.5.3　無標な要求と有標な要求 45
3.5.4　二つのレベルの会話的要求 46
3.5.5　仮説の修正案 48
3.6　未完結文における要求性 48
3.6.1　接続助詞から要求性の種類を推測しやすい未完結文 48
3.6.1.1　形式文脈のみによる未完結文 49
3.6.1.1.1　「たら」「ば」「と」の統語的整理 49
3.6.1.1.2　「たら」「ば」で終わる未完結文 50
3.6.1.1.3　「と」で終わる未完結文 52
3.6.1.2　形式文脈と状況文脈による未完結文 53
3.6.2　接続助詞から要求性の種類を推測しにくい未完結文 54
3.7　未完結文における要求性の特徴 56
3.8　本章のまとめ 57
第 4 章　未完結文における境界性 59
4.1　未完結文における意味機能的完結度の差異 59
4.2　先行研究と問題点 60
4.2.1　白川（2009）の考え 60
4.2.2　丸山（2008）の考え 60
4.3　統語論の観点から 61
4.3.1　文法形式に基づく境界性の仮説 61
4.3.2　仮説の問題点 62
4.3.3　修正案 63
4.4　語用論の観点から 64
4.5　本章のまとめ 68

第Ⅲ部 69
第 5 章　未完結文の使用における語用論的条件 70
5.1　先行研究と問題点 70

5.2 未完結文の使用における制約 71
5.2.1 伝達の媒体における制約 71
5.2.2 発話の公式性に関わる各要素 72
5.2.3 内的要素による公式性 73
5.2.4 外的要素による公式性 74
5.2.4.1 場面による公式度 74
5.2.4.2 人間関係による公式度 77
5.3 調査の結果 78
5.3.1 未完結文の使用状況の概観 79
5.3.2 内的要素における制約と逸脱 80
5.3.2.1 形式の不完全による制約と逸脱 80
5.3.2.2 行為要求における制約と逸脱 81
5.3.3 外的要素における制約と逸脱 83
5.4 本章のまとめ 84
第 6 章 未完結文への選好に現れる正の動機 85
6.1 未完結文に現れる情報量のバリエーション 85
6.2 未完結文に現れる多情報性と経済性 86
6.2.1 言葉の経済性と未完結文の情報処理 86
6.2.2 接続助詞の有無における情報処理 87
6.2.3 二種類の完結文 89
6.2.4 情報伝達における原理 90
6.3 活性化される情報の種類 92
6.4 共有知識に基づく相互理解の可能性 94
6.5 本章のまとめ 95
第 7 章 未完結文への選好に現れる負の動機 96
7.1 話者交替における未完結文の重要性 96
7.2 メタポライトネス 98
7.2.1 Brown&Levinson のポライトネス 98
7.2.2 メタレベルにおけるポライトネス 98
7.3 話者交替における規則 100
7.3.1 話者交替の定義 100
7.3.2 話者交替の規則 101
7.4 統語的形式と話者交替の関係 102
7.4.1 発話の完結点 102
7.4.2 発話の切れ目と統語形式の関係性 103
7.4.3 統語形式における TPR の強弱 105
7.4.3.1 各統語単位における TRP 105

7.4.3.2　文のタイプ..... 106
7.4.3.3　各完結文における TRP..... 108
7.5　話者交替における未完結文..... 109
7.5.1　未完結文の疑似義務性..... 109
7.5.2　未完結文の予測性と柔軟性..... 111
7.6　ストラテジーとしての未完結文..... 113
7.6.1　ネガティブポライトネスとしての未完結文..... 113
7.6.1.1　疑問文による話者交替..... 113
7.6.1.2　疑問文における要求性の弱化..... 115
7.6.2　ポジティブポライトネスとしての未完結文..... 117
7.6.2.1　話者交替における平叙文..... 117
7.6.2.2　平叙文における要求性の弱化..... 119
7.7　本章のまとめ..... 121

第Ⅳ部..... 122
第 8 章　構文としての言いさし文..... 123
8.1　言いさし文の定義と形成要因による分類..... 123
8.2　省略と付加の相違点..... 124
8.3　省略による言いさし文の下位分類..... 127
8.4　本章のまとめ..... 131
第 9 章　意味論的な省略による言いさし文..... 132
9.1　「なきゃ」／「なくちゃ」／「ないと」言いさし文..... 132
9.1.1　形式の整理..... 132
9.1.2　言いさし文の形成..... 133
9.1.3　言いさし文における機能..... 134
9.2　「たら／ば」言いさし文..... 136
9.2.1　形式の整理..... 136
9.2.2　「たら（どうしよう）」言いさし文..... 137
9.2.3　「たら／ば（どう）」言いさし文..... 137
9.2.4　「たら／ば（よかった／いいのに）」言いさし文..... 138
9.3　「って（言った／聞いた）」言いさし文..... 139
9.3.1　「って」の先行研究と問題点..... 140
9.3.2　用法の分類..... 140
9.3.3　意味論的な省略による場合..... 144
9.3.4　付加による場合..... 146
9.4　本章のまとめ..... 148
第 10 章　語用論的な省略と付加による言いさし文..... 149

10.1 「のに」で終わる言いさし文 149
10.1.1 「のに」に関する先行研究 149
10.1.2 「のに」言いさし文のパターン 149
10.1.3 付加による「のに」言いさし文は存在するのか 152
10.1.4 「のに」言いさし文の機能と発話効果 155
10.1.5 「〜ばよかったのに」言いさし文の位置づけ 157
10.1.6 まとめ 159
10.2 「けど」で終わる言いさし文 159
10.2.1 二種類の「けど」言いさし文 159
10.2.2 「けど」の意味用法の整理 160
10.2.2.1 先行研究によるまとめ 160
10.2.2.2 「けど」に関わる二つの問題点 160
10.2.2.2.1 各意味の関連性問題 160
10.2.2.2.2 「逆接」と「対比」 161
10.2.2.3 対比に基づく「けど」の意味用法の整理 161
10.2.3 語用論的な省略による場合 164
10.2.4 付加による場合 166
10.2.5 まとめ 169
10.3 「から」で終わる言いさし文 170
10.3.1 「から」の意味用法に関する先行研究 170
10.3.1.1 「から」の意味用法の種類 170
10.3.1.2 理由を表すか 171
10.3.2 因果関係に基づく「から」の意味用法 172
10.3.2.1 「から」の使用範囲 172
10.3.2.2 因果関係の強弱 175
10.3.3 語用論的な省略による場合 177
10.3.3.1 形式文脈による場合 177
10.3.3.2 状況文脈に基づく場合 177
10.3.3.3 想定された条件節による場合 180
10.3.4 付加による場合 181
10.3.4.1 聞き手の考えと行為へ働きかける場合 182
10.3.4.2 聞き手への反論の場合 183
10.3.5 意味論な省略による場合 184
10.3.6 まとめ 185
10.4 「て」で終わる言いさし文 186
10.4.1 「て」に関する先行研究 186
10.4.1.1 接続助詞としての「て」 186

10.4.1.2　文末に現れる「て」に関する先行研究.....188
10.4.2　言いさし文の種類を判断する基準.....188
10.4.2.1　各用法の確認.....188
10.4.2.2　言いさし文の二種類.....189
10.4.2.3　各用法と省略による言いさし文.....189
10.4.2.3.1　前後件における論理関係の緊密度.....189
10.4.2.3.2　各用法の省略による言いさし文の成立容易度.....191
10.4.2.4　言いさし文の種類と統語形式の関係.....192
10.4.2.5　「て」言いさし文の種類を区別する基準.....193
10.4.3　語用論的な省略による場合.....194
10.4.3.1　「なぜ～」に基づく二種類.....194
10.4.3.2　成立条件.....196
10.4.3.3　発話内行為の明確性.....197
10.4.4　付加による場合.....201
10.4.4.1　二種類の発話効果.....201
10.4.4.2　感情の曖昧化.....201
10.4.4.3　内容の背景化.....203
10.4.5　「て」言いさし文の慣習化.....204
10.4.5.1　慣習化された表現.....204
10.4.5.2　「と思って」.....206
10.4.5.2.1　文末の「と思う」.....206
10.4.5.2.2　「と思って」言いさし文.....207
10.4.5.3　「たりして」.....209
10.4.6　まとめ.....211
10.5　本章のまとめ.....211
第 11 章　言いさし文のマーカーから談話標識への変化.....213
11.1　談話標識.....213
11.1.1　談話標識の定義と種類.....213
11.1.2　談話標識の機能について.....215
11.2　言いさし文のマーカー「みたいな」.....216
11.2.1　先行研究と問題点.....217
11.2.2　言いさし文としての位置づけ.....217
11.2.2.1　「みたいな」の統語的特徴.....217
11.2.2.2　引用に基づく言いさし文.....218
11.2.2.3　言いさし文の二種類.....220
11.2.3　文末用法の分類.....221
11.2.3.1　「引用」の用法.....221

11.2.3.2 「先行発話の補足」の用法.....223
11.2.4 使用動機と談話機能.....223
11.2.4.1 「みたいな」の使用における正の動機.....223
11.2.4.2 「みたいな」の使用における負の動機.....225
11.2.5 まとめ.....226
11.3 談話標識としての「というか」.....226
11.3.1 先行研究と問題点.....226
11.3.2 接続形式から談話標識への脱文法化.....227
11.3.3 前後の言語形式による機能分類.....230
11.3.4 談話上の機能と語用論的分析.....231
11.3.4.1 「S というか S」から『「S というか」「H」』へ.....232
11.3.4.2 「S というか S」における修復機能.....232
11.3.4.3 「S というか S」から『「S というか」Ø』へ.....233
11.3.4.4 「S というか S」から『「H」「というか S」』へ.....234
11.3.4.5 『「H」「というか S」』から『Ø「というか S」』へ.....235
11.3.4.6 「というか」の談話機能のまとめ.....237
11.3.5 まとめ.....237
11.4 本章のまとめ.....237

第Ⅴ部.....239
第 12 章 全体のまとめと今後の課題.....240
12.1 全体のまとめ.....240
12.2 今後の課題.....246
参考文献.....248

第Ⅰ部

序　論

第 1 章　はじめに

本章では，本研究の研究対象と研究目的について述べた上で，本論文の構成を説明する。

1.1　研究対象と研究目的

言語の発達に従い，私たちは同一の意味を持つ情報を伝達する際に，一つの限定された形式のみならず，複数個の異なる形式の言葉の中から選択することができるようになった。つまり，私たちは日常の会話をする際に，常にその同じ発話機能を持つ複数の形式から一つを選び出して使用しているのである。実際に複数の選択肢から選択して使用する際に，その選び出された選択肢に注目して見ると，その選択肢（言語形式）には性質の段階性が観察できる。その中に，共通性がなく，使用場面や使用主体によって常に変わるようなものもあれば，ある程度共通性が見られ，形式が決まっているようなものもある。

複数の選択肢から選択する際，選び出された選択肢に共通性が見られる場合，本研究ではそこに選好が現れたと考える。選び出された表現を選好されるものとし，選び出されていない表現を選好されないものとする。ここで考えている複数の表現に現れる偏りは個人の好みによって変わるものでもなく，個々の場面に従って常に変化するものでもない。全体的な使用状態から見れば，表現の偏りは，話し手と場面を問わず，基本的に変わらない。つまり，選好は個人レベルや使用場面を超え，言語使用上に現れるある種の普遍的な傾向である。例えば，日本語は「する」より「なる」のほうが多用される（池上 1981）という現象である。そのとき，「なる」への偏りは個人の好みでもなく，常に場面に変化するものでもないので，選好として考えられる。

また，私達は日常会話で必ずしも文法の規則通りに言葉を使用しているわけではない。むしろ，文法の規則から逸脱することこそ話し言葉の特徴であると言える。例えば，語順の変換，省略，言いさしなど。書き手と文字化した言葉という情報しか含まない書き言葉より，話し言葉は場面性が強く，言葉自体のみならず，会話参加者の属性や個性，会話を行なう物理的場面などもある意味で言葉としての性質を持っている。

そこで，会話を通して伝達された意味は，文字通り以上の意味を持つ場合が普通である。言い換えれば，会話では，話し手は意味や意図を伝達する際に，言葉を通してすべて明確に話さないことも多い。

以上の観点により，日本語の使用傾向を考察するとき，日本語は曖昧な言語で，婉曲的な表現やぼかし表現などが多用されると言われることが想起される。三好（2013）は日本語表現の曖昧さを「ぼんやり型」「遠回り型」「隠れみの型」に分類した議論さえ試みている。そして，日本語の全体的な印象に関する三好（2013）の考えに対して，加藤（2014）は，文法構造の観点から日本語の言語構造の特徴を次のようにまとめた。

①日本語では、すべて言い終わらないと主節が確定しない。しかも、主節（主要部）があとから追加されるので、構造がオープンである時間が長い。
②主要部左方型言語では、早い時期に構造が確定してクローズドである時間が長い。文末付加は、構造解釈を変えない。
③日本語では、主述一致義務や主語明示義務がなく、構造保持の動機が弱い。
④日本語では、従属節述語と主節述語が近接しやすく、主節が従属節の述部複合に取り込まれやすい状況がある。
⑤日本語は、構造開放性が強いことから、話し手は構造を決めずに話すことが許されやすい。話し手には、発話形成の途上で、柔軟に構造を変える余地が残されている。

加藤（2014：513－514）の（61）～（65）による引用

この曖昧である日本語の特徴と柔軟である日本語の文法構造を念頭に置くとき，実際の日常会話における具体的な表現に，どのよう現象が見出されるかというと，述部後置という文法的な特徴と，言葉を使用する人の心理によって，完結している発話より未完文のほうが頻繁に使用されているという現象が見られる。加藤（2009a）はそれを日本人の「文を閉じたくないという病」と述べている。

未完結文は，文法的な規則を基準に考える際に，文として欠如する部分があるという共通点があるが，具体的には，欠如部分の内容や位置によって，それぞれが異なる。本研究での考察は，文末の欠如に限定する。更に，文末の欠如と言っても，その文末に欠如している部分が様々で，述語や主節のみならず，語の一部になる場合もある。本研究は，主節欠如の場合に限定して考察を行なう。主節欠如の未完結文については，今まで「言いさし」や「中途終了型発話」，「中断節」，「非従属化」などの様々な名称で研究されているが，本研究は，発話の時間軸にある静止的な時点を抽出し，その時点において結果として存在している言語形式を研究するという立場により，結果からの捉え方に基づく「未完結文」という名称を使用する。

主節欠如の従属節で終わる未完結文は，大きく連用修飾節で終わるものと連体修飾節で終わるものの二種類があるが，従来の研究においては，連用修飾節に関する研究がほとんどである。その分，連用修飾節である未完結文に関する研究は，ある程度の研究の積み重ねが見られる。その研究における偏りは，言いさすことによって生まれる未完結文において，連体修飾節より，連用修飾節のほうが，頻度が高く，より多く運用されているという現状があるからであると考えられる。以上の背景を念頭に，本研究は，連用修飾節で終わる未完結文を主たる研究対象とするが，最後の第 11 章で連体修飾節の議論を入れながら，従属節で終わる未完結文の全体像を明確にしたい。

以上より，本研究の研究対象は，主節欠如の従属節で終わるような未完結文であると言える。

そして，未完結文に関する最初の研究は，国立国語研究所（1951）であり，その助詞の

意味用法に関する「言いさし」や接続助詞の「終助詞的な用法」という名称による説明に辿ることができる。後に，大石（1971）にも「中断節」の名称での議論が見られるが，活発に現象が指摘され，研究され始めたのは，1990 年代からである。その意味で言うと，未完結文に関する研究は，まだ比較的新しい分野であると言える。1990 年代に入ると，文法論や語用論，認知言語学，会話分析，日本語教育における様々な分野での研究が現れてきた。しかし，大多数の研究は，個別の表現や現象に触れる程度で終わるものが多く，未完結文の全体像を目指す代表的な研究は白川（2009）ぐらいであると言っても過言ではない。だが，白川（2009）は文法論の観点から，「ケド」，「カラ」，「タラ」・「レバ」，「シ」，「テ」の特徴を個別的に考察したが，分類基準の不明確や，「言いさし」全体像の不明瞭などの問題点がなお多数残っている。

未完結文に関する以上の研究状況に基づき，本研究は，先行研究をまとめ，残された問題点や課題を確認した上で，要求や文脈，ポライトネスなどの語用論の観点を取り入れ，主節欠如の未完結文に関する全体像の解明を目指す。具体的に，「静的な視点」「動的な視点」「選好が文法論への影響」という三つの角度に分けて，次の五つの課題を立てる。

①未完結文にどのような種類のものがあるかについては，言語形式による分類基準が最も明確であるが，本研究の研究対象である従属節で終わる未完結文は，言語形式が不完全であるので，言語形式による分類が最善案であるとは言いがたい。白川（2009）は，母語話者の語感に基づき，意味機能の完結度によって分類を行ったが，主節が欠如している以上，単なる母語話者の語感に基づく分類にはなお検討の余地があると言える。そのため，本研究は，未完結文と完結文を関連付けられるような分類案を考える。

②未完結文は文法形式上完結していないという共通点があるが，意味内容的に完結度が異なる。主節を復元しないと意味内容が理解しにくい場合もあれば，逆に主節を復元しようとしても復元しづらい場合もある。完結度の違いについて，既に多くの先行研究での指摘が見られる。その意味内容上の完結度を決める条件を含め，管見の限りでは，まだ詳細な議論が見られない。そのため，本研究は，未完結文における意味機能の完結度の違いを明確にしたい。

③主節欠如の未完結文は，日常会話で頻繁に用いられていることが事実であるが，場面や，意味文脈によって未完結文の使用が制限され，完結的に発話しなければならない場合もある。そのため，どんな場面に，どのような状況で未完結文が使用されているのかを明確にする必要がある。

④未完結文への選好は日本語の特徴と使用者の心理によるものであると言える。日本語の述部後置の特徴によってその選好が発現したと考えられるが，使用者の心理はまだ不明確である。そのため，使用者の動機を解明することは，未完結文の使用における全体像を明確にするための不可欠な条件であると言える。

⑤選好されることによって，運用の頻度の増加とともに，未完結文は，形式上が未完

結でありながら，意味機能上完結文と考えてもよいような場合がある。そのときに，未完結文より，それらの発話を新たな構文（本研究では「言いさし文」と呼ぶ）として位置づけたほうが適切になる。選好を原動力とする「言いさし文」という新たな構文の形成要因や形成過程を明確にしたい。

以上の五つの課題を提起し，本研究は，従属節で終わる未完結文の全体像の解明を目的とする。以下，本論文の構成について述べる。

1.2 本論文の構成

本論文は，全体として 12 章からなる。大きく「第Ⅰ部」，「第Ⅱ部」，「第Ⅲ部」，「第Ⅳ部」，「第Ⅴ部」に分けることができる。「第Ⅰ部」（第 1 章，第 2 章）では，本論文の研究目的と研究対象を明確にし，先行研究をまとめた上で，本論文の研究方法を提示する。「第Ⅱ部」（第 3 章，第 4 章）では，静的な視点から，発話の時間軸にある静止的な時点を抽出し，その時点における未完結文の要求性と境界性についての考察を行う。「第Ⅲ部」（第 5 章，第 6 章，第 7 章）では，未完結文の使用できる語用論的な条件を確認した上で，動的な視点を入れ，正と負の二角度から，未完結文の選好される動機を考察する。「第Ⅳ部」（第 8 章，第 9 章，第 10 章，第 11 章）では，未完結文を「言いさし文」という新たな構文と位置づけ，「言いさし文」の形成や特徴を考察し，「言いさし文のマーカー」が談話標識への変化過程を検討し，「選好が文法論への影響」を明確にする。「第Ⅴ部」（第 12 章）は全体のまとめと今後の課題である。

まず，「第Ⅰ部」の構成について述べる。第 1 章では，本研究の目的と対象を述べた後，全体の構成について説明する。第 2 章では，語用論的選好と未完結文という二つの部分に分けて先行研究をまとめた上で，本研究のドラマの台詞を分析資料とし，語用論の視点から未完結文を考察する研究方法を確立する。

次に，「第Ⅱ部」の構成について述べる。第 3 章では，未完結文における要求性の種類と特徴について考察する。要求性は未完結文のみならず，すべての発話に共通的に存在するものなので，まず形式を問わず，すべての発話における要求性のモデルを提案する。次に，要求性のモデルに基づき，未完結文を分類する。第 4 章では，完結度における差異を明確にするために，未完結文における境界性を考察する。具体的には，形式上の完結度と意味内容上の完結度に分けて考察するが，統語論の観点では，完結文との文法構造上の類似度によって形式上の完結度を決め，語用論の観点では，要求性との関係で意味内容上の完結度を考察する。

次に，「第Ⅲ部」の構成について述べる。第 5 章では，未完結文の使用できる語用論的な条件を考察する。まず，未完結文が公的な場面で使用しづらいという仮説を以って，使用に関与する各要素を理論的に分析する。そして，実際の例を集め，統計データによって仮説と理論を検証する。第 6 章と第 7 章では，未完結文への選好にどのような動機がある

のかを考察する。第 6 章は正の動機から，第 7 章は負の動機から分析を行なう。具体的に，第 6 章では，情報の処理という観点から，完結文に比べ，未完結文は多情報性と経済性という特徴を持つことを検証し，それによって未完結文が好まれることを述べる。第 7 章では，メタポライトネスという観点から，会話管理において，完結文に比べ，未完結文は予測性と柔軟性によって，話者交替における緊張関係や相手へのフェイス侵害を回避することができることを検討し，使用者にとって無難なストラテジーであることを明確にする。

また，「第Ⅳ部」の構成について述べる。第 8 章では，意味機能の完結している未完結文を「言いさし文」という新たな構文として位置づけた後に，その形成要因によって，「言いさし文」を省略（意味論的な省略と語用論的な省略に下位分類できる）と付加の二種類に分け，それらの関係と特徴を述べる。第 9 章では，「なきゃ」／「なくちゃ」，「ないと」，「たら／ば」，「って（聞いた／言った）」で終わる発話を典型的な例として，意味論的な省略による「言いさし文」の形成と特徴を考察する。第 10 章では，「のに」及び「けど」で終わる発話を対比関係の例として，「から」で終わる発話を因果関係の例として，「て」で終わる発話を並列関係の例として取り出し，語用論的な省略と付加に分けて，それぞれの「言いさし文」としての特徴を考察する。第 11 章では，「みたいな」と「というか」を例として，「言いさし文」の固着に伴い，「言いさし文のマーカー」が談話標識への拡張過程について検討を行う。

最後に，「第Ⅴ部」（第 12 章）は全体のまとめと今後の課題である。

以上より，本研究は四つの部分に分けて展開していく。

第一に，研究目的と研究対象を明確にし，先行研究をまとめた上で，研究方法を確立する。

第二に，未完結文における要求性と境界性を考察する。

第三に，未完結文の語用論的な使用条件，選好される動機について検討を行う。

第四に，「言いさし文」の特徴や「言いさし文のマーカー」の談話標識化について考察する。

以上の考察に基づき，第 12 章の「全体のまとめと今後の課題」で，全体をまとめた上で，残された今後の課題について述べる。

第 2 章 先行研究のまとめと研究方法

本章では，語用論的選好と未完結文に分けて，先行研究をまとめ，本研究における未完結文の定義を確認し，ドラマの台詞を分析資料とし，語用論の視点から未完結文を考察する研究方法を確立する。

2.1 語用論的選好における先行研究

今までの選好についての研究では，内容によって，言語形式の選択とストラテジーの選択に大きく分けることが可能である。管見の限りでは，構造的な現象である「選好による組織化」（preference organization）[1]として，会話分析の分野で後者のストラテジーの選択について盛んに議論されてきた（Levinson1983，Boyle2000，Sifianou2012）。

本研究における選好は，ストラテジーの選択におけるものではなく，言語形式の選択におけるものである。それについては，主に Ariel（2008）と加藤（2014，2015a）の研究が見られる。次に，それぞれについて主要な考え方をまとめる。

2.1.1 Ariel（2008）の考え方

言語学の伝統では，文法論は形式（コード）に関する研究で，語用論は推意（文脈）に関する研究として議論されているが，Ariel（2008）は「all linguistic phenomena actually invoke both codes and inferences」（Ariel 2008：67） と述べ，文法論と語用論のインターフェスにおける実例を通して，言葉の選択における preference を指摘しながら，文法論と語用論の関係を詳細に論じている。

具体的には，Ariel（2008）はまず指示表現の階層性，「選好項構造」[2]（Preferred Argument Structure；PAS），接続を表わす‘and’や量を表わす‘most’及び‘all’などを例として，文法論と語用論の境界事象を通して，コードされた意味と推論された意味の違いを考察し，推論を単純なものではなく，「Explicated inferences」（表意推論）「Strong implicatures」（強い推意），「Nonstrong implicatures」（強くない推意）の三種類に分けて考える必要があることを指摘した。

そして，文法が恣意的か有契的かという問題に対して，Ariel（2008）は共時的と通時的な言語現象を通して，言葉の変化は動機付けられ，有契的であるが，結果は恣意的であるという回答を述べた。更に，“Once we recognize the central role of conventionalization in language, we can understand why language can be motivated and arbitrary at the same time”（Ariel

[1] 田中訳（2011：50）による訳語である。具体的には，会話の流れの中で，どのような発話の連鎖が好まれるかという会話の構造に関する研究が主である。
[2] 訳語は加藤（2009b）による。

2008：148）と述べたように，それが同時に存在可能なのは，慣習化によると指摘した。

更に，言葉の変化過程である文法化を考えるには，コード（文法論）と推論（語用論）とを合わせて考えるべきとし，再帰代名詞を含めて，通言語の例に触れながら，文法化に働きける外力をまとめ，“pragmatics, together with other extragrammatical triggers, provides the raw materials and impetus for grammar”（Ariel2008：111）と述べ，語用論が文法論に材料や原動力を与える動機付けであると指摘した。

2.1.2　日本語における研究

加藤（2014，2015a）は，Ariel（2008）で述べた preference という表現を，「選好」と翻訳し，更に，選好の意味を「いくつかの方法で表現したい内容を伝えられるとき，特定の表現形式が好まれること」（加藤 2015a：276）と説明した。そして，使用頻度や運用効果が言葉の変化を完成させる力であると指摘し，「好まれる形式や表現が多用され，頻度が高くなれば慣用化して，機能が限定されることで文法化が進行する」（加藤 2015a：275）とまとめた。

Ariel（2008）の語用論が文法論の動機付けであるという基本の考え方を持って，加藤（2014）では「非節化」を，加藤（2015a）では「可能構文」を例として，日本語における選好を考察した。

次に，加藤（2014）と加藤（2015a）に分けてそれぞれの具体的な分析をまとめる。

2.1.2.1　「非節化」という言語現象

加藤（2014）では，「主節全体を含むシンタグマが文法的な機能を確立させたとき、そのシンタグマ全体は助動詞相当になり（＝文法化し）、それまでの主節が節でなくなる構造解釈変化」（加藤 2014：509）を「非節化（declausalization）」と定義した。

そして，加藤（2009c，2011，2013，2014）は，「ことがある」や「はずだ」などの形式名詞化による「非節化」と，「なければならない」や「かもしれない」などの従属節と主節の慣習化に基づく助動詞化による「非節化」を考察し，その文法化のプロセスを可能化にしたのは，「節右方標示型言語」による強い構造開放性を持つ日本語の類型的特性であると述べた。その具体的な特徴は，1.1 で引用した「①②③④⑤」である。更に，日本語の類型的特性の成立には，日本語の主要部右方性という「前適応」と，「だらだらと文が完結せずに続く」や「文の完結を先延ばしにする」（加藤 2014：515）という日本語における選好が関与していると指摘した。

2.1.2.2　可能表現への選好現象

加藤（2015a）は，語用論の位置づけを確認し，推意についての検討を行った上で，選好

が文法化の強い動機であることを説明するために，例として，日本語の可能構文について検討を行った。具体的には，まず，日本語で可能を表わす方法を四種類にまとめた。そして，可能を明確に分類できない「能力可能」と「状況可能」の二種類に分けてから，可能表現に「（A）意図成就」と「（B）許可・依頼，禁止」の二種類の構文推意があることを述べた。最後に，「《事前確定認識の不成立》」と「《謙虚さ》」という可能表現のタ形の構文推意を確認した上で，いずれも文法的には適格である「合格しました」と「合格できました」の二つの表現において，可能表現がより好まれるのは，非可能表現が「淡々と事実を述べている印象を与え，相対的に謙虚な感じが少なく，ややぶっきらぼうに響くこともある」（加藤 2015a：287）のに対して，可能表現がそれの効果を回避でき，謙虚な印象を与えることができるからであると述べた。更に，越権的認識行為という観点から見ると，「『合格できた』が越権行為なしの表示で，『合格した』が越権行為非表示であるとすれば，相対的に前者のほうが謙抑の意を強く伝える」（加藤 2015a：287）という特徴もあると指摘した。

そして，非可能表現より，可能表現が選好されることを議論した際に，加藤（2015a）は日本語の表現が選好されることに関与している要素として，「情報へのアクセス階層」に従って言語表現を構成することを述べた。但し，それはいつでも優先的に考えられるわけではなく，それより「日本語の表現世界ではアクセス階層とは別に自慢と思われる表現を回避し，謙虚さを好む傾向」（加藤 2015a：291）のほうがもっと強く関与しているとも指摘した。

詳細には議論されていないが，加藤（2015a）は「～してみる」などの「結果の見通しがないことを明示する表現」（加藤 2015a：287）や「させていただく」のような謙抑に関わる表現も選好されているものであると指摘した。

2.1.3 まとめ

以上より，語用論的選好に関する先行研究はまだ数多くないが，Ariel（2008）の選好されることで運用頻度の増加によって，語用論が文法論に動機付けを与えるという基本な考えのもとに，加藤（2009c，2011，2013，2014）は日本語の「非節化」現象と可能表現への選好現象を説明できた。

加藤（2014）でも触れたように，日本語の日常会話は，文を完結しないという特徴が顕著である。特に，文を完結してもよい時点で，文を意図的に完結しないということには，未完結文への選好が見られる。本稿は，Ariel（2008）と加藤（2009c，2011，2013，2014）の文法論と語用論における基本的な考え方を持って，日本語における未完結文への選好現象を説明することを目指す。そのために，次に，まず未完結文における先行研究をまとめる。

2.2 未完結文に関する先行研究

2.2.1 未完結文の定義に関する先行研究

新たな構文としての従属節のみで終わっている発話に関するこれまでの先行研究は，研究者によって用語もそれぞれ異なる。ここではまずその用語を整理する。

全体的から見れば，大まかに「言いさし」系列（曺 2004，林 2008，荻原 2008，白川 2009，朴 2010，上村 2014，永田 2015，森 2015，三牧 2015），「中途終了発話」系列（宇佐美 1995，陳 2001，元 2005，李 2010，高木 2012，Taguchi 2014，楠本 2015），「中断節」系列（大堀 2000），「非従属化」系列（堀江・パルデシ 2009，Kato 2014）の四つの大きなグループに分けられる。

「言いさし」系列と「中途終了文」系列は，「中断節」系列と「非従属化」系列より，高い頻度で使用されている。具体的には，「言いさし」系列は，日本語の文法論における伝統的な研究で使用されることが多いが，日本語教育などでも範囲広く使われている。「中途終了発話」系列は，宇佐美（1995）をはじめ，会話分析の研究で使用されることが多い。「中断節」系列は，大堀（2000）の認知言語学における研究のみで使用されている。「非従属化」系列は，Evans（2007）の通言語学的な研究における「insubordination」の訳語として使用されることが多い。

以上の四つのグループ以外に，大石（1971）の「中断文」や高橋（1993）の「省略ののべかけ形式」，「接続助詞の文末用法」（横森 2006 など）などの個別の名称も見られる。

勿論，同じく系列にある研究は，「言いさし文」や「言いさし表現」などのように，細かな相違点もあれば，たとえ同じ名称であっても，定義の範囲もばらばらである。

以上のような背景で，先行研究での名称と定義の不一致という現状に対して，各研究における名称と定義を表 1 のようにまとめた。

論文名	名称	定義と記述
曺（2004）	言いさし表現	形式上，述部が省略されていると見られる発話[3]。 具体的に，次の 2 種類がある。1．形の上で、文を最後まで言わずに途中で終わっている発話である ;2．相手割り込みではなく、話者の意志により完結している発話である。
荻原（2008）	言いさし発話	文末が省略されたために、文として完結されなかったもの。依頼・希望などの機能を持つ例にかぎらず、文末部分が省略されているために文としての形式が完全でないものはすべて「言いさし」である。

[3] 定義は，曺（2002）による。更に，曺（2002）は，「言いさし表現」の定義の上に，「相手の発話の継続を促す『うん』『はい』のようなあいづち的な発話以外の発話で話者が交替した場合」（曺 2002：81）と補足した。

論文名	名称	定義と記述
白川（2009）	言いさし文	言うべき後件を言わずに中途で終わっている文。広義の言いさし文を「関係付け」・「言い尽くし」・「言い残し」に分け，「言いさし文」は「関係づけ」と「言い尽くし」を指す。
朴（2010）	言いさし表現	（1）発話文の形式上, 文を最後まで言い切らず複文の主節が省略されている発話である；(2）文を最後まで言い切っていないのにもかかわらず，情報伝達においては完全文と同じ機能を果たしている発話である。
上村（2014）	言いさし文	白川（2009）の説明に従う。
永田（2015）	言いさし表現	
森（2015）	言いさし	「完全文」となるものを想定した上で，その一部が欠けている，省略されているものという判断に疑問を持ち，「言いさし」という用語が必ずしも研究対象の絞り込みに役立つとは言いがたい。
三牧（2015）	言いさし	宇佐美（1995）の定義に従う。
林（2008）	言いさし文	
宇佐美（1995）	中途終了型発話	述部が省略される場合や，複文の場合，従属節のみで主節が省略されたりする発話，すなわち，最後まで言い切っていない発話。
陳（2001）	中途終了型発話	文法的には言い切っておらず不完全な発話であるが，情報伝達においては不完全なところは何もなく，言い終わっているもの。具体的に，次の 3 種類がある。(1）複文の主節が省略されている発話：「テ形」表現，「接続助詞」表現，「条件形」表現；(2）述部が省略されている発話：「引用」表現，「トピック呈出」表現，「例示」表現，その他；(3）形式は「ダ体発話」に見えるが，音声的には「ダ体」と認められない発話。
元（2005）	中途終了文	何らかの目的で主節，述部が省略されていながら，情報の伝達を終了している文。具体的には，「1．接続助詞、接続語尾のついた形で終わる文」と「2. その他（引用助詞、疑問詞、陳述副詞などで終わる文」の二種類に分けたが，研究対象を「1」に限定した。
李（2010）	中途終了型発話	宇佐美（1995）の定義に従うが，対話相手にたまたまオーバーラップされたり，遮られたりしたために言い切られなかったものを含めない。

論文名	名称	定義と記述
高木（2012）	中途終了発話文	（1）＜形態・統語論＞―主節や主節の述部（終止形語尾）が，文の末尾に現れていない発話文；（2）＜話者交替と音声＞―話者の交替が起こる直前に現れる場合も，そうでない場合もあるが，非言語情報や音声，意味によって区切りが明らかである発話文；（3）＜発話意図伝達＞―発話上には現れない言語形式，および，その発話者の意図が対話者に推測可能な場合もあれば，そうでない場合もあるが，発話者の主体的選択の結果として終了した発話文。
Taguchi（2014）	incomplete sentences	宇佐美（1995）の定義に従う。
楠本（2015）	中途終了型発話文	構文的には主節が言語化されていない，つまり省略されている文。
大堀（2000）	中断節（suspended clause）	依存関係をもった節が主節を伴わずに出る構文。
Kato（2014）	非従属化	[4]
堀江・パルデシ（2009）	従属節の主節化	
大石（1971）	中断文	文法的に文として不完全なもの。更に「あたま切れ」と「しり切れ」[5]の 2 種類に分けた。
高橋（1993）	省略ののべかけ形式	省略ののべかた形式のなかでいちばんおおいのは，接続助辞まででおわっている文である。全体の半分ちかくがこれだろう。つぎに，条件形，第二中止形（「～して」のかたち），引用助辞でおわる文。以上をあわせると，九わりぐらいになるのではないかとおもう。そのほかのまとまったものとしては，疑問詞または陳述副詞でおわる文，「～ように」でおわる文などがある。

表 1　先行研究における未完結文についての名称と定義[6]

[4] Kato（2014）と堀江・パルデシ（2009）は詳細に定義していないが，Evans（2007 :367）の「the conventionalized independent use of a formally subordinate clause」（「形式的には一見明白な基準で従属節のように見えるものの慣習化された主節用法」堀江・パルデシ訳 2009：126）という「insubordination」の定義を引用した。

[5] 「しり切れ」は「述語の省略、陳述をになうべき述語を欠くものである」（大石 1971：298）。

[6] 定義と記述における空白は，詳細な説明が述べられていないことを表す。

2.2.2　文法論における先行研究

記述を含め，未完結文に関する先行研究は，管見の限りでは，国立国語研究所（1951）の記述が最初で，その後に大石（1971），高橋（1993），白川（2009，2015）のものが見られる。次に，順番に詳しくそれぞれの考察をまとめてみる。

国立国語研究所[7]（1951）は，「が」・「から」・「けれども（けれど・けど・けども）」・「し」・「たら（ったら）」・「って」・「て（で）」・「のに」の八つの「助詞」についての意味用法の説明の中で，「終助詞」や「言いさし」の用法に言及した。具体的には，「が」については，「終助詞」の用法として，「①事実と反対の事がらの実現を願う気持。②はっきり言うのをはばかる気持。」（国研 1951：27）を列挙した。「から」については，「終助詞的な用法」として，「理由となるべき事がらを挙げていったん言いさし，帰結を言外に暗示する。さらにそれを『と』で受けて，その帰結から導かれる行動の叙述へと移る」（国研 1951：39）と説明した。「けれども（けれど・けど・けども）」については，「終助詞」の用法として，「①事実と反対の事がらの実現を願う気持。②はっきり言うのをはばかる気持で言いさす。③けいべつ・なげやりの気持のこめられる場合。」（国研 1951：50）の三つを述べた。「し」については，「言いさし」という用法として，「前項の変形したもの。後続すべき立論を控えめに言外に響かせる。終助詞的用法」（国研 1951：58－59）と述べた。「たら（ったら）」については，「終助詞」の用法として，「注意を促がし，じれったい気持で呼びかける。（『てば』に同じ」）」（国研 1951：70）と説明した。「って」については，「終助詞」の用法として，「①他人の話を紹介する。（『ということだ』の意。）②ひとのことばを，おうむ返しにくり返して反問する。」（国研 1951：74-75）を列挙した。「終助詞（『って』の形をもとる）」「て（で）」については，「①質問・発問《女性専用。動詞・形容詞の連用形につく。》②自分の立場・意見の主張。〔てよ〕の形。《女性専用。連用形につく。》③依頼。（『てね（よ）』の形をとることもある。『ないで』ともなる。）」（国研 1951：87）の三つにまとめた。「のに」については，「終助詞」の用法として，「①思わざる結果に対するあきらめ切れぬ不服な気持。希望の果たされたぬうあらみ。②なじる気持，つめよる気持。（希望・欲求をすてきれずに。）」（国研 1951：178）の二つを述べた。

大石（1971）は，話しことばにおける「省略文」の考察において，文法的に文として不完全なものを「中断文」と呼び，「中断文」を更に「あたま切れ」と「しり切れ」の二種類に分けた。更に，「中断文」の発生動機・原因を「省略」[8]と「中止」[9]に分類し，それぞれの具体的な発生場面を 14 個列挙した後に，「省略あるいは中止という言語行動的動機をもたず、完全な文と同じものとして用いられる」（大石 1971：303）ものを「慣用中断

[7] 「国立国研究所」を以下で，「国研」と略して表記する。
[8] 大石（1971）によると，「省略とは、文的表現の遂行に際し、なんらかの条件にもとづき、文頭あるいは文末の文法的に必要な語句を言い表わさずにすますことをいう」（大石 1971：298）。
[9] 大石（1971）によると，「中止とは、さえぎられ・言いよどみなどで、文的表現の遂行を中途でやめることをいう」（大石 1971：298）。

文」と定義し，「慣用中断文」に「（1）あいさつの文、（2）命令的要求の表現の文、（3）詠嘆表現の文」（大石 1971：303）の三種類があると述べた。そして，本研究と関係のある「しり切れ」に限定して考察すると，大石（1971）は，「しり切れ」を「述語の省略、陳述をになうべき述を欠くものである」（大石 1971：298）と定義した後に，「しり切れ」の下位分類である「条件句止め」・「引用文止め」・「省略質問文」の三種類に注目した。その中では，「条件句止め」は末尾が主として接続助詞であり，「（1）条件句によって、それに続くべき主要句がある程度規定されるもの」「（2）条件句に発話の意味の中心が託され、主要句にまつものがほとんどないもの」（大石 1971：308）の二種類が目立つ。「話し手においては、言いさしや省略の意識はなく、これで言い納めているつもりであり、聞き手においても完全な文表現として受け取る」（大石 1971：309－310）用法であるので，一種の「慣用中断文」と見ることができると指摘した。更に，「慣用中断文」である「条件句止め」は，一般に「命令的要求や、非難・抗議・弁解・拒否等」（大石 1971：310）の余情を伴うのが接続助詞本来の働きが残っているからであると論じた。

高橋（1993）は話し言葉で主文の省略や述語の省略などによって現れた文を「省略ののべかけ形式」とし，述語の省略された文であっても，文として成立していれば，のべかけかたをもっていると述べ，小説の会話文を分析資料として，「省略ののべかけ形式」を①[10]「接続助辞までででおわっている文」（全体の半分近くがこれ），②「条件形、第二中止形（「～して」のかたち）、引用助辞でおわる文」（①とまとめて九割ぐらいになる），③その他（例えば，「疑問詞または陳述副詞でおわる文、「～ように」でおわる文など）の三つに分類した後に，それぞれのタイプにおける省略の特性のばらつきを考察した。具体的には，まず，「接続助辞のついたかたちでおわる文」については，「この形式は、文の内容としての、ことがら的な論理関係をあらわすだけでなく、はなしての、ききてに対するやりとり関係にかかわる役わりをも演じる」（高橋 1993 :22）と述べ，更にそれらの「接続助辞」を「終助辞」として捉えるべきであり，「こういう転成は、従属節の述語から、文の述語へという機能の変化の結果」であると述べた。そして，「条件形でおわる文」については，「＜すすめ＞をあらわす」ものや，「義務をあらわす」もの，「願望をあらわす」もの，「陳述副詞または後置詞に転成しかけている」などの場合を列挙した。更に，第二中止形で終わることによって，新しいタイプの「はたらきかけ形」が生まれることや，「引用助辞」で終わることによって，新しいタイプの「といかえし形」が作られたことを述べた。

白川（2009）は，「『言いさし文』と『完全文』を統一的に説明する立場」に立って，「ケド節」「カラ節」「タラ節」「レバ節」「シ節」「テ形節」で終わる発話の考察を通して，「言いさし文」の完結性や機能，文法体系における位置づけを議論した。具体的には，「主節を欠いた統語的に不完全な文による発話」を「言い残し」と「言い終わり」に分け，「言いさし」が後者の「言い終わり」のみを指すことを確認し，そして，「言い終

[10] 番号を付けて分類したのは筆者によるものである。

わり」（＝言いさし）を「関係付け」と「言い尽くし」の二種類に分けた後に，「ケド」節・「カラ」節・「タラ」節・「レバ」節を「言い尽くし」の例として，「カラ」節・「シ」節・「テ」形節を「関係づけ」の例として，別々に考察を行った。その結果，「言い尽くし」の「言いさし文」は対人的な態度を表すのに対して，「関係づけ」の「言いさし文」は話し手の何らかの対事的な態度を表すと述べ，「言いさし文」を独立文と同等に位置づけることができると主張し，日本語教育における提言を指摘した。そして，白川（2009）の補足として，白川（2015）は，主節が従属節化したケースもあるので，「主節と従属節は截然と分けられるものではなく、それと対応して、述語の形も、南（一九九三[11]：二二〇）の言うように、『言い切り的なもの』と『接続的なもの』というふうに、境目をぼやかした整理をしたほうが妥当だ」「従属節を『文』を構成する部分と見るのではなく、談話というより大きな単位の中で主節と相対的に位置づけるという考え方が必要である」（白川 2015：13）と主張した。

2.2.3　語用論における先行研究

語用論における未完結文の先行研究は，様々な観点からの考察が見られる。未完結文の機能に関する研究（曺 1998・2000a，朴 2008）もあれば，ポライトネスの語用論の理論に合わせながらの研究（許 2010，三牧 2015）もあり，日韓における対照研究（元 1999・2005，李 2010）もあれば，未完結文の多用される動機や理由，種類に関する研究（加藤 2009a・2014，Kato 2014）もあり，また聞き手の視点からの発話解釈に関する研究（荻原 2008）もある。次に順番通りにまとめてみる。

まず，未完結文の機能についての先行研究である。

曺（1998）は，実際の生のデータを分析資料として，「言いさしの『けど』」で終わる発話に「非実現を表わす」・「不納得を表わす」・「相手に対する働きかけを表わす」という三つの談話機能があるという考えのもとに，フォーマルな場面とインフォーマルな場面に分けて，収集したデータに基づき，それぞれの機能における使用場面の違いを明確にしようとした。その結果，「相手に対する働きかけを表わす」場合と「不納得を表わす」場合は，場面に応じて使い分けているが，「非実現を表わす」場合は場面に応じて使い分けがないことを論じた。更に，曺（2000a）は，自然談話資料に基づき，「言い終わり」の「けど」で終わる発話に「発話緩和」・「発話補完」・「発話断定回避」という三つの機能があることを指摘し，場面（公的な場面／私的な場面）及び対人関係（遠慮が必要な関係／遠慮が必要でない関係）に分けてデータの分析を通して，「『発話緩和』『発話補完』はくつろいだ状況で使われている傾向があるのに対し「発話断定回避」はあらたまった状況で使われている傾向がある」（曺 2000a：99）という結論を述べた。

朴（2008）は，テレビドラマ及び映画の会話文を分析資料として，「接続助詞としての機能」を持つ「から」「けど」で終わる「言いさし表現」を対象として，そこに現れる機

[11] 「南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店」を指す。

能を考察した。その結果，「けど」には，「『誘い』や『申し出』等の働きかけをする用法」・「『断言』を和らげる用法」・「自分の意見をぼかすための曖昧的な用法」（朴：258）という三つの機能，「から」には，「依頼、勧誘など相手に対して働きかける用法」・「原因・理由を表す用法」・「話し手が自分の意志を告知する用法」「情報を提示する用法」の四つの機能があることを述べた。

次に，語用論の理論に合わせる先行研究について概観する。

許（2010）は，語用論の理論や省略，複文の先行研究をまとめた上で，語用論の観点から，文末の「ケド」・「カラ」・「ッテ」の意味機能や，「トイエバ」「トイッタラ」の意味機能，文末表現と終助詞「ネ」や「ヨ」などの共起関係などを分析し，最後に中国人日本語学習者と日本語母語話者同士の「情報要求」における対照研究を行った。その中に，本研究と関係のある部分に注目して細かく考察すると，まず，文末の「ケド」については，「グライス（1989）[12]の『協調の原理』、ブラウンヴィンソン（1987）[13]の『ポライトネス理論』及びスパーバー＆ウィルソン（1995）[14]の『関連性理論』」（許 2010：71）の三つの観点に合わせながら分析を行った。そして，文末の「カラ」については，「カラ」の「判断の理由」と「働きかけの理由」が「叙述内容めあてのモダリティ」と「伝達態度のモダリティ」との類似点を述べた後に，中国語の訳語を参考しながら，「カラ」の機能と「Aンダカラ B」の使用条件を考察した。更に，「トイエバ」「トイッタラ」については，それらの意味機能を「仮定条件を表わすもの」と「話し手の強い主張を表わすもの」に二分類した後に，意味機能の派生プロセスと理由を考察した。文末の「ッテ」については，具体的な例を通して，「第三者の話を伝える」・「相手に働きかける」・「自分の考えを説明として伝える」という三種類に分けて「ッテ」の意味機能を考察した後に，「ンダッテ」と「ッテ」の相違を考察した。最後に，ポライトネスの観点から，「接続助詞（カラ、ケド、ノニ）」「条件形（バ／タラ）」「テ形」「引用助詞（ッテ）」の使用機能を総合的に分析した。

三牧（2015）は，ポライトネスという観点から，同性初対面会話データにおける言いさしを捉えている。まず，言いさしを B&L における「オフ・レコード・ストラテジー」の一つとして位置づけ，ネガティブフェイスとポジティブフェイスに分けて，それぞれにおける言いさしの FTA 補償ストラテジーとしての用法を述べた。具体的には，「自己開示要求」を「相手のネガティブフェイスへの FTA 補償」の例として，「違和感の表明」を「相手のポジティブフェイスへの FTA 補償」の例として，「ほめへの応答としての謙遜」を「双方のポジティブフェイスへの FTA 補償」の例として，議論を行った。そして，「文末スピーチレベル表示回避による接近」と「会話の協働構築による接近」という二つの場合を例として，FTA 補償ストラテジーのみならず，言いさしには「FTA 補償ではなく会話参加者

---

[12] 許（2010）によると，「Grice, P.1989.Studies in the way of words.Harvard University Press」を指す。
[13] 許（2010）によると，「Brown, P. & Levinson,S.C.1987.Politeness:Some universals in language usage.Cambridge University Press」を指す。
[14] 許（2010）によると，「Sperber, D. & Wilson,D.1995.Relevance:Communication & Cognition.Blackwell Publishing」を指す。

間の距離を短縮させるようなポジティブポライトネスの働き」（三牧 2015：32）もあると指摘した。

次に，日韓における対照研究について概観する。

元（1999）での「中途終了文」の定義[15]と「断り表現の使用実態」と「断り表現の丁寧度」の質問紙調査の結果を踏まえ，元（2005）は，「何らかの目的で主節、述部が省略されていながら、情報の伝達を終了している文」（元 2005：119）を「中途終了文」と改めて定義した。元（2005）は，具体的に，「1．接続助詞、接続語尾のついた形で終わる文」（元 2005：121）と「2．その他（引用助詞、疑問詞、陳述副詞などで終わる文」（元 2005：122）の二種類に分けたが，断わりの場面における「1」を研究対象として限定し，ポライトネスの観点から日韓両言語における「中途終了文」の違いを考察した。

李（2010）は，日本語と韓国語の初対面二者間の会話における「中途終了型発話」の使用様相をポライトネスの観点から考察した。

そして，未完結文の多用される動機や理由，種類に関する研究である。

加藤（2009a）は，文を閉じると，日本人にはぶっきらぼうな言い方に感じられることが多いので，文を早めに閉じてしまうことに対する心理的な抵抗があると述べ，従属節だけで主節を言わないことを含む文を閉じたくないという病の原因，①断言してしまうことへの恐怖。②話者交替におけるトラブル発生の回避。更に，文を閉じないことによって生まれる発話の取り消し可能性という柔軟性と責任回避の効果も述べた。そして，加藤（2014）は，文を完結しない「言いさし」という多用現象を，日本語の特性との関係から論じた。その結論を―①「日本語の右方主要部は、話者が右方付加を繰り返すなど言語構造の確定を先延ばしにすることを可能にする」；②「前項の特性を前適応として、右方付加や非従属化（未完結性の文）の頻度が増やす」；③「日本語で未完結性の文が頻用されると、その伝達上の効果を活用する（弱い TRP による柔軟な発話形成など）傾向が強まる」―の三点にまとめた。以上は，未完結文の動機や理由に関する考察であるが，Kato（2014）は，白川（2009）で述べた研究対象の中にある「言い終わり」というタイプのものを「非従属化（insubordination）」と呼び，日本語における具体的な種類を考察した。考察した結果，日本語における「非従属化」を「省略（elliptic type）」と「付加（additional insubordination）」の二種類にまとめ，そして，「ば」・「たら」・「なら」の条件節や「し」・「たり」の並列節，「て（ください）」の慣習化，「から」・「ので」の原因理由節，「が／けど」の逆接節における「非従属化」を個別に考察した。

最後に，発話解釈に関する先行研究である。

荻原（2008）は，「言いさし発話」という名称を使用しているが，取り上げられている研究対象が，伝統の「言いさし」と違い，「言いさし―対応」という対話の連鎖で，「相手の発話の一部を単語または句で繰り返しているが、その言いさし発話の対応では異なる

[15] 元（1999）は，「形式的には主節、又は述部が省略され、接続助詞（連結語尾）や動詞・形容詞のテ形や名詞・副詞で終わっている文であり、機能的には、直接的な断りを避けるものである」（元 1999：136）と定義している。

対応をしていた」（荻原 2008：18）というようなものに限定されている。更に，「言いさし発話」自体に関する研究よりは，その「言いさし発話」に対して，聞き手がどのように解釈し，どのように対応していくのかを研究の目的としている。即ち，荻原（2008）は，主流の「言いさし」に関する研究とは違い，聞き手側という視点から，発話解釈のメカニズムを構築しようと考えている。

2.2.4　会話分析における先行研究

会話分析における先行研究は，水谷（1988），曺（2000b），横森（2011a），高木（2012），永田（2015）の考察が見られる。次に，順番通りにそれぞれの考察をまとめてみる。

水谷（1988）は，あいづちが話しことばの文の形に大きく影響することがあり，あいづちが入る前の部分が通常，「て」「けど」「が」「から」などで終わっているとという間接の角度から，未完結文に関する記述をした。

曺（2000b）は，用件を伝えるというはっきりした目的がある電話会話において，「言いさし表現とそれに後続するターンの最初の発話がどのような機能をもつか」（曺 2000b：28）を明確にしようとした。その結果，「言いさし表現」には「相手伺い」・「話者思考中」・「ターン譲り」[16]という三つの機能があることと，後続する発話に「先行話者の発話を促したり、正しく理解したかどうか確認したりする」（曺 2000b：27）という談話上の機能があることを述べた。

横森（2011a）は「カラ節が主節を伴わずにそれ単独で完結した発話」を「カラ節単独発話」と呼び，複数の発話の間の「連鎖（sequence）」という視点を導入し，自然会話を録画や録音したデータを分析資料とし，「カラ節単独発話」が生起する連鎖と行為のパターンには，大きく「先行文脈で話題になっている事柄に関する理由を説明する」タイプと「直前の時点における認識を改めることを聞き手に求める」タイプの二種類に分けられることを述べ，更に，「カラ節単独発話」の連鎖と行為の構造を「［1］参与者 B が、何らかの振る舞いによって、認識上の問題点や不備を公にする→［2］参与者 A が、B の認識を改めさせる情報を『カラ節単独発話』で提供する→［3］参与者 B が、認識を改める」の三つのステップにまとめた。

高木（2012）は，「＜形態・統語論＞」，「＜話者交替と音声＞」，「＜発話意図伝達＞」の三つの角度から「中途終了発話文」を定義した後に，実際の談話を文字化した資料を対象として，「統語論」・「談話構成論」・「中途終了発話文の機能」の三つの観点に分けて，日本語と韓国語における「中途終了発話文」の差異を考察した。日本語の考察に限定すると，次のような結論がわかる。まず，統語論的な観点から見ると，日本語では「（1）引用の動詞の連体形」や「（2）例示表現」，「（3）属格助詞」で終わる発話文が多いことを，そして，談話構成論の観点から見ると，「日本語の談話においては，『中途終了発

[16] ここでの「ターン譲り」は「相手からの割り込みがあり、途中で話が中断されたことから、ターンを譲る」ことを意味する（曺 2000b：27）。

話文』が発話者の『発話終了マーカー』，対話者の『発話誘発因子』として機能し，話者交替を促進し，円滑な相互作用を継続させる例」（高木 2012：95）が多いことを，最後に，発話機能の観点から見ると，日本語では「情報要求」と「言い直し」の生起比率がより高く，「各言語の内部において，談話における発話文の出現は，規範文法の体系と必ずしも一致するものではない」（高木 2012：95）という結論を述べた。

永田（2015）は，自由談話に最も多く現れる「接続助詞ケドの言いさし表現」が談話展開にどのように関わるかについて、「トピック展開」と「ターン・テーキング」という二つの観点から明確にしようとした。具体的には，まず，「トピック展開」を「開始部」・「主要部」（更に「開始位置」・「主要位置」・「終結位置」に下位分類されている）・「終結部」に分けた後に，「接続助詞ケド言いさし表現」は「開始部」と「主要位置」に用いられてトピックの継続に関わることが明らかにした。更に，「ノデの言いさし表現」が談話の終結部に特徴的に見られることをふまえ，「各接続助詞の言いさし表現は談話のトピック展開に関して、それぞれ独自の役割を担っている」（永田 2015：23）と指摘した。そして，「ターン・テーキング」に関して，「接続助詞ケドの言いさし表現の後にはすべての場合においてターンの移行が見られ、談話中でターンを明示的に譲渡する指標としての役割を果たしている」（永田 2015：23）と述べ，更に，「接続助詞ケドの言いさし表現」の後に，明示的なターン譲渡の指標が伴われる形式で再びターンが返ってくるので，「接続助詞ケドの言いさし表現」によるターン譲渡は，「その後の談話展開を相手に委ねるかたちでのターンの譲渡である」（永田 2015：23）と指摘した。最後に，「接続助詞ケドの言いさし表現」の談話展開における特徴は，複文としての用法と，「関係づけられる事態が文脈中に存在する」場合には，存在しないと補足した。

2.2.5　認知言語学における先行研究

認知言語学における理論を未完結文の分析に利用する先行研究は，大堀（2000），横森（2006，2011b），上村（2014）が見られる。次に，順番通りにそれぞれの考察を確認する。

大堀（2000：309）は通言語的に複文の考察の中で，日本語に限定し，「依存関係をもった節が主節を伴わずに出る構文」を「中断節」（suspended clause）と定義し，中断節が構文スキーマとして独自の意味を持っており，更に，中断節という構文的枠組みが与えられると，元来複数のありうる接続が一定の解釈に限定されることを指摘した。そして，「中断節という構文スキーマには，推論集約的な（inference-intensive）意味関係を優先的にとるという解釈手続きが付与されている。具体的には時間的連鎖や並列ではなく，理由や譲歩（ないし期待に反する出来事）と解釈される傾向がある」（大堀 2000：310）とまとめた。

横森（2006）は，「接続助詞の文末用法」と呼び，「ケド」と「カラ」の二つを取り上げ，文末用法をもたらす要因について考察を行った。具体的には，先行研究を批判的に検討した上で，相互行為における参与者の認知という観点を明確にし，「カラの文末用法」

と「ケド」の文末用法の成立条件を次のようにまとめた。

①［P カラ］の成立条件

「P に基づくと妥当な情報 I」が発話の場において、聞き手によって利用可能である。

②［P ケド］の成立条件

「P に基づくと予想外な情報 I」が発話の場において、聞き手によって利用可能である。

横森（2006：70）の（34）と（35）からの引用

そして，横森（2011b）は相手との行為に着目し，「カラ」で終わる文の機能を，「疑問への説明」「相手の認識に含まれる誤りの訂正」「相手が充分に認識していない情報の告知」の三つに，「ケド」で終わる発話の機能を，「詳述促し」，「問題対処促し」と「想定からの逸脱に対する反応叫び」の三つにまとめた。

上村（2014）は，「言いさし文」の定義を詳しく言及していないが，白川（2008）の分析方法を参考し，文末の「という」を「関係づけ」と「言い尽くし」に大別し，それぞれの種類における「という」の特徴を考察し，「言い尽くし」に「叙述を『外部視点化』する意味での『メタ化』の働きがある」（上村 2014：44）ことを述べた後に，「という」の従来の用法から「言い終わり」の用法への変化過程を文法化ではなく「語用化[17]の一つ」として位置づけた。

2.2.6　日本語教育における先行研究

「第二言語としての日本語の学習者の関わる自然会話をデータとして、『言いさし』に特化して分析した研究はあまりない」と森（2015：42）で述べられているが，管見の限りでは，未完結文に関する先行研究の収集の中で，日本語教育における考察が最も多く，活発な状況にあると言える。具体的には，個別の表現に関する研究（佐藤 1993 ・ 1994，三原 1994，金城 2001 ・ 2002，林 2008，楠本 2015）もあれば，全体に関する研究（宇佐美 1995，陳 2000 ・ 2001，曺 2002，朴 2010 ・ 2012，Taguchi 2014，森 2015）もある。次に，個別の表現と全体に分けてそれぞれにおける先行研究をまとめる。

2.2.6.1　個別の表現に関する先行研究

三原（1994）は，ビデオ化された映画や日本語教育のためのビデオ教材から分析資料を取り上げ，文末が接続助詞ケレドモで終始する「ケレドモ」文に現れる機能を考察した。その結果，「ケレドモ文は、依頼、要望や断り、また自分の意見を述べること等、表わされた内容が、聞き手に対して何らかの負担（実際的あるいは心理的負担）をかけてしまう、

[17] 「語用化とは、談話標識に顕著なように、談話における新たな意味の獲得が論点となる。それゆえ、共時レベルの現象であり、多くの場合一方向プロセスでは集約できず、複数の要因が絡み合って出現する」（上村 2014：41）ものである。

または話し手が相手に負担をかけてしまうと推測するような場合に使われることが多い」（三原 1994：87）ということを述べた。

佐藤（1993，1994）は，日本語教育のテキストにある会話文を分析資料として，「けれども」や「が」による「言いさし」表現からを「明示的情報要求のサインの送信」，「明示的情報要求に伴う忌避侵犯の回避」，「敬語の過剰使用の回避」，「依頼や勧誘における目的達成の方略としての明示的情報要求の回避」，「討論での Turn 譲渡における turn-taking 強制の回避」という五つの機能を抽出した。

そして，金城（2001）は，佐藤（1993，1994）の研究を批判的に検討した上で，Situational Functional Japanese という日本語教科書における例文を調査資料として，「『S けれども／が』を「言いさし」とは捉えずに、これまで逆接の接続助詞として扱われてきた「けれども／が」が終助詞化したものである」（金城 2002：97）という立場で，話題を提供する場合を除き，質問に対する答えの形として現れる「S けれども」に限定し，その機能を考察した。その結論として，文末表現としての「けれども／が」には，「相手に対して情報提供が十分ではなく、そのために相手に迷惑をかけるおそれがあるかもしれない、相手の質問の動機を満足させるものではないかもしれない」（金城 2002：97）という話し手の意識があることを述べた。更に，金城（2002）では，「S けれども」の「前置き」用法と「逆接」の助詞としての用法を補足し，「期待」という観点から，それらを文末用法と統一的に説明できることを述べた。

林（2008）は，「シ」と「タリ」で終わる「言いさし文」を研究対象に限定し，インターネット上のブログと『女性のことば・職場編』における自然会話との比較を通して，ブログにおける「シ」と「タリ」で終わる「言いさし文」の機能を四つにまとめた。

楠本（2015）は，「中途終了型発話文」を具体的に定義していないが，注意・要求、断りの場面における「～けど」と「～ので」で終わる「中途終了型発話文」を対象として，両者に現れる待遇上の表現効果の違いを明確にしようとした。その結果，「ケド文」は，「聞き手への能動的要求が含意される」ことによって，「聞き手の感情的反応を誘発し待遇性が低められた表現効果をもたらす」のに対して，「ノデ文」は，「事情説明を表すというノデの機能により」，「聞き手の理解を求めるという懇願的行為が暗示され、聞き手の認識改変を求めるケド文と比べ談話効果として待遇的に高められたものとなる」（楠本 2015：56）と述べた。

2.2.6.2　総体的な先行研究

宇佐美（1995）は，初対面同性による会話を分析資料として，すべての発話をそこに現れるスピーチレベルシフトを「＋レベル」・「0 レベル」・「－レベル」の三種類[18]に分け

[18] 宇佐美（1995：30）によると，「＋レベル」は「＋：尊敬語，謙譲語，美化語，『わたくし』，『～でございます』等を含む改まり度の高い発話」，「0 レベル」は「丁寧体を含む発話」，「－レベル」は「常体を含む発話や，質問に対する簡略すぎる答え（『いつ頃いらしたんですか。』に対する『87 年。』）等。改まり度の低い発話」を指す。

た後に，「該当会話内の談話レベルの要因」という「ローカル要因」と「該当会話外の人間関係等の社会・文化的要因」という「グローバル要因」という二つの方面から，母語話者の発話に現れるスピーチレベルシフトを考察し，日本語教育における言語形式の丁寧度の「使い分け」の原則に対する指導の重要性を指摘した。その分析の中で，スピーチレベルシフト生起条件の考察において，「ローカル要因」の一つとして，言語的文脈の影響による「中途終了型発話」を提出した。具体的には，「中途終了型発話」を「－レベル」の発話と位置づけ，「最後まではっきり言い切らないことによって，明言を避け，発話を緩和したり，相手に発話の機会を与える機能を持つ」（宇佐美 1995：35）という機能があることを述べた。

陳（2000，2001）は，文字化した会話資料に基づき，「中途終了型発話」の種類と生起要因を考察し，日本語学習者の相手に対する配慮が上手に言語化できないという問題を指摘した。詳しく見ると，まず，「文法的には言い切っておらず不完全な発話であるが、情報伝達においては不完全なところは何もなく、言い終わっているもの」（陳 2000：129）を「中途終了型発話」と定義し，具体的には―（1）複文の主節が省略されている発話：「テ形」表現、「接続助詞」表現、「条件形」表現；（2）述部が省略されている発話：「引用」表現、「トピック呈出」表現、「例示」表現、その他；（3）形式は「ダ体発話」に見えるが、音声的には「ダ体」と認められない発話―の三種類に分けた。そして，「中途終了型発話」の生起理由について，陳（2000）でまとめた「言語文脈的要因」及び「心理的要因」の二つに対して，陳（2001）では―（1）「統語的に復元できるので後続要素を略す」という統語的要因；（2）「意味理解に必要なコンテクストがあるので後続要素を省く」という「談話的要因」；（3）「失礼にならないように言い切りを避ける」という「心理的要因」―（陳 2001：181）の三つに拡大し，更に，（1）と（2）を「会話の冗長性を減らす」という目的に，（3）を「話し相手への配慮」という目的にまとめた。

曺（2002）は，「話者の発話が完結し、それで言い残すような感じがない」（曺 2002：81）という「完結の言いさし表現」と「話者の発話が完結せず、途中で話者が交替し、不完全な感じがする」（曺 2002：81）という「非完結の言いさし」を研究対象として，初級・中級・上級・超上級の韓国人日本語学習者の OPI データを資料として，それぞれの使用頻度と使用状況のデータを紹介した。更に，曺（2004）は，字幕付きの韓日の映画から音声と字幕による「述部有りの言いさし表現」を対象として，対訳の比較を通して，日本語では「言いさし表現」の方が好んで使われている傾向があるという結論を述べた。

朴（2010）は，自然発話資料である学習コーパスと母語話者コーパスのデータを利用し，機能が完結している複文の主節が省略されている「言いさし表現」を対象として，各習得レベルにおける「言いさし表現」の表現形式及び使用頻度の違いや接続助詞の習得順序，異なる母語の学習者に現れる相違を明確にしようとした。その結果，各習得レベルにおける違いについては，中級学習者が「て」「から」「けど類」を集中的に使用し，上級学習者の間に「て」の使用が大幅に減少するとともに「けど類」の頻度が増進し，超級学習者による「けど類」の使用頻度が母語話者を大幅に上回ることが，接続助詞の習得順序につ

いては，「『て」「から」（中級）→「けど類」（上級）→「ので」（超級）の順番に習得が進んで行く」（朴 2010：232）ということが，母語別の学習者の違いについては，韓国語母語話者が全体的に「言いさし表現」の使用頻度が高く，「て」の使用が多いのに対して，中国語母語話者に「から」の多用が特徴であることがわかった。

朴（2012）は，中国人の日本語学習者と日本語母語話者の会話データを分析資料として，断り発話に現れる「言いさし表現」の違いについて，中国人の日本語学習者と日本語母語話者の間に現れる違いを明確にしようとした。その結果，母語話者は「相手との人間関係が異なることによって、『言い切り』表現か『言いさし』表現のいずれかを優先的に選択している」（朴 2012：105）のに対して，学習者は「人間関係の相違にかかわらず『言いさし』表現をより多く選択している」（朴 2012：105）という全体的な違いがあることを述べた。

Taguchi（2014）は，日本語学習者の開始時と十二週間後の会話データの分析を通して，中途終了型発話の総数の全発話数に占める割合が上昇した結果を指摘し，個別の中途終了型発話の使用についての考察を通して，学習者による中途終了型発話の使用が「インタラクション能力（interactional competence）」の伸びの指標の一つであると述べ，従来の日本語教育における教材の完全文の強調しすぎに対して批判した。

森（2015）は，研究者によって「言いさし」の定義が異なるという現状を確認した上で，「文」と「行為」の関係についての論述を通して，従来の「言いさし」を「完全文」と対比する位置に置くことに対して疑問を提出し，「『言いさし』という用語が必ずしも言語行動の緻密な描写に有用であると考えるわけでも、また、用語の再定義の必要性を主張するでもない」（森 2015：42）という立場を確認し，先行研究の考察を通して，「言いさし」と呼ばれうる事例に関する言語学の研究が, 実際の会話とのギャップがあることを指摘し，学習者になるべく早い段階で，文法モデルを実際の会話に応用できるような道を模索していくべきであると主張した。

2.2.7　まとめ

2.2.1 では，研究者によって未完結文に関する名称と定義にばらつきがあるという現状を持って，研究者別にそれぞれが使用している名称と定義をまとめた。

2.2.2～2.2.6 では，文法論，語用論，会話分析，認知言語学，日本語教育という五つの観点に分け，それぞれにおける未完結文の先行研究をまとめた。その結果，未完結文に関する研究が，最も早い段階で行われた分野は文法論であり，最も活発に行われた分野は日本語教育であり，最も少ない分野は認知言語学であることがわかった。さらに，日本語と韓国語の類似性が高いことによって，日韓言語における対照研究も数多く見られる[19]。

そして，2.2.2～2.2.6 でまとめているように，「言いさし」という表現自体は，1951 年からもう既に存在しているが，その現象自体に注目し，研究され始めたのは，1990 年代から

[19] 韓国語は本研究の考察対象ではないので，日韓対照における研究を詳細に論じていない。

である。つまり，未完結文に関する研究は，まだ現象自体を指摘する段階で，比較的新しい分野である。日本語教育における先行研究が活発であるのも，日常会話（未完結文が多い）と教科書の記述（完結文が基本である）の相違点に関心を持ち始めたからであると考えられる。よって，未完結文に関する課題は，まだ多数残っていると言える。

まず，名称と定義の問題である。未完結文に関する研究は，まだ名称と定義が不統一な状況にある。「言いさし」は伝統的で一番多用されるが，「言いさし文」「言いさし発話」「言いさし表現」などのばらつきや「言いさし」の指す範囲などの問題がある。さらに「言いさし」以外に，「中途終了型」「中断節」などの名称も同時に存在する問題もある。

そして，現象のみならず，体系的な研究の不足である。この点に関しては，二つの方面からわかる。第一に，1990 年代から今まで，未完結文に関しては，様々な観点から数多くの先行研究が見られるが，その中に，個別の表現に関する研究や，現象自体に触れることが多い。未完結文という現象全体を対象として体系的な研究を行ったのは，まだ白川(2009)ぐらいであると言える[20]。第二に，個別の表現に関する研究で言うなら，言語表現における研究の偏りがある。「けど／が」・「から」を例とする研究はほとんどで，「て」で終わる発話や連体修飾節に関する研究は少ない。

以上のような先行研究における課題を持って，本稿は未完結文の全体像を明確にすることを目指す。

2.3 研究方法

本研究は，テレビドラマや映画，番組における台詞を主な分析資料として，文脈によって主節を復元した上で，語用論の視点を入れて未完結文の考察を行う。

2.3.1 未完結文の定義

（1）a 記者「ねえ，よかったら，話を…[21]」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話

b【吉成は新入社員で，西原は先輩である。吉成が入社した当日の夜に，レストランで二人がたまたま会った場面】

吉成「改めまして，吉成なちみです。いろいろと教えてください。」

西原「いや，俺も相当下っ端だから。」

フジテレビ系列『FIRST　CLASS』第 1 話

c【奈月は息子の好きな人である。朝，出かけようとする息子の姿を見て，母が発話する場面】

---

[20] 荻原（2008）も体系的な研究を行っているが，本研究での研究対象と異なるので，ここでは除外した。
[21] 本稿の発話にある「…」は，未完結文が「②客観的な物理的状況によって中断される場合」（後述する）を指す。

母「もう出かけるの？病院昼からだと思った。」
息子「奈月を大学まで送っていこうと思って。」

NHKBS『タイムスパイラル』第 2 話

未完結文は文法構造上から見れば，文末が不完全な発話である。文末に欠如された部分は形式上現れていないという共通点があるものの，（1a）のような述語や（1b）のような主節，（1c）[22]のような語の一部など様々な形での省略が可能である。

これらの中から，本研究は主節欠如の場合に考察対象を限定する。そして，欠如している内容が現れていない以上，明確に判断することができないので，本研究は欠如している部分ではなく，形式上に現れている未完結の部分に基づき，未完結文の範囲を決める。

加藤（2014）は統語論の観点から，従属節を連体修飾節と連用修飾節の二種類に分けた。「連用修飾節は、述部が連用形をとるか、接続助詞を後接させることで形成する従属節である」と加藤（2014：500）で述べているが，日常会話で，用言の連用中止形より，「～て」の形で現れることが多いので，連用修飾節は基本的に接続助詞を後接させることが多いと考えられる。一方，加藤（2006）は，文法論の観点から，接続助詞と複合要素に分けて，連用修飾節として使用される表現をまとめている。加藤（2006）でまとめられている表現を参考にし，日常会話で未完結文として使用しづらいものを削除した後に[23]，連体修飾節と連用修飾節[24]に分けて考えると，日本語における従属節は表 2 のようにまとめられる。

節の種類	未完結文の文末要素
連用修飾節	「ので/んで」，「から」，「たら」，「ば」，「なら」，「のに」，「ても」，「が/けど」，「たり」，「し」，「て」，「ように」，「みたいに」「と $_2$[25]，って $_1$[26]」，「と $_1$[27]」，
連体修飾節	「ような」，「みたいな」，「って $_2$[28]」

表 2　日本語における従属節

説明の便宜のため，本研究は未完結文の基本形を「AX，B」と仮定する。「X」は形式

[22] （1c）の「思って」は「思っている」の省略から考えれば，語の一部が省略されていると考えられるが，それ以外に，完結の「と思う」を回避するために使用された可能性も考えられる。
[23] まず，書き言葉にしか使用されない「つつ」「ものの」「ゆえに」を除外する。また，「ながら」「ところで」「ところを」が未完結文として使用されにくいので，対象外にする。さらに，「ために」，「せいで」，「くせに」という四つの接続助詞化した複合語は，接続助詞としての性質はまだ変化途上にあるものと考えられるので，本研究では例外的に扱う。
[24] 連用修飾節にある「て」は用言の連用形である場合もあり，後に主節が省略される場合もあるが，後が省略されている以上，「て」の用法を決めることが難しい。さらに，従属節の「て」について，南（1974，1993）は，機能によって「て」を四種類に分けて考察している。いずれにせよ，「て」で終わるものは未完結としての性質が変わらないので，本研究は形式上に現れている部分に注目し，「～てください」を除き，単に形式という観点からの結果として，「て」で終わるものをすべて研究対象として扱う。
[25] と $_2$は引用を表す用法の「と」である。以下では，「って」で総括して表記する。
[26] 「って $_1$」は「って」の連用用法を表す。
[27] と $_1$は条件を表す用法の「と」である。以下では，「と」で表記する。
[28] 「って $_2$」は「って」の連体用法を表す。

文脈に現れている従属節の文末にあり，従属節であることや未完結であることを表すマーカーである。本研究は，それを「未完結文のマーカー」と呼ぶ。「X」は「から」や「ので」の接続助詞になる場合もあれば[29]，「みたいな」や「と/って」などの要素になる場合もある。「A」は言語形式に現れている「未完結文のマーカー」以外の部分を指し，完結文としての性質を持っている[30]。「B」は，文法と文脈によって，追加可能な主節を指す。

また，主節欠如の未完結文はその欠如の理由によって，次の三種類に分けて考えられる。

①欠如された未完結文が単に形式文脈[31]によって簡単に復元できる場合である。具体的に，（2a）のように主節が発話者自身の発話に倒置された場合（①－1 と呼ぶ）と（2b）のように相手の発話によって補完される場合（①－2 と呼ぶ）がある。

②客観的な物理的状況で中断される場合。具体的に，相手の割り込みや周囲の環境によって中断される場合と発話者の一時的な忘失によって中断される場合がある。

③発話者の積極的な意思による場合。非従属化についての研究で，Kato（2014）は省略によるパターン以外に，「additional insubordination」という付加的なパターンもあると提言した。よって，未完結文という結果を招く理由の中で，発話者の積極的な意思による時は，具体的に二つの場合が考えられる。一つは，発話者が主節を省略する場合，例えば，（3a）である。もう一つは，発話者が接続助詞などの追加によって，完結した文を未完結文にする場合，例えば，（3b）である。

（2）a【試験で 1 位を取った人は同級生の頭をなでるという城徳高校の伝統について】

亀沢「えっ？[32]じゃあ，監督も 1 位だったってこと？」

青志「それ，嫌なんだよな。帰る時，手がべとべとするから。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 4 話

b【泰治，手塚，小田三人はパイロット志望の受験生である。手塚の発言に怒った小田は，一人で立ち去った。それを遠くから見た泰治は，手塚に向かって発言する。】

泰治「ああ，怒らしちゃった。」

手塚「そんなつもりなかったのに。」

日本テレビ系列『ミス・パイロット』第 1 話

（3）a【店のおかみさんは常連である監督の青志に向かって】

母「いっそ男子として試合に出しちゃえば？」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

b【晴樹は家庭教師の先生にサンダルのプレゼントを渡した後】

---

29 「て」は接続助詞になるかどうかまだ検討する余地がある。

30 「A」の述語が連体形や終止形ではない場合に，「A」を完結するには，「A」の述語の形式を調整する必要がある。例えば，「わからなくて」という未完結文の「A」の部分を完結するには，「わからない」のように調整する必要がある。

31 ここでの形式文脈は加藤（2009d）の定義に従う。詳しい内容は 2.3.2.3 で考察する。

32 本研究では，文末の「？」が非下降調というイントネーションを表す。

晴樹「俺のと色ち。」
先生「私に？」
晴樹「うん。超安いけどね。」

NHK ドラマ『聖女』第 1 話

本研究では, 主に③を対象とするが, ①－1 と②を対象外として, ①－2 を例外的に扱う。

以上より，本研究では，未完結文を「発話者の積極的な意思によって，主節が発話者の発話の前後の形式文脈に現れていない従属節のみで終わる発話」と定義する。

2.3.2　理論的な枠組み

この節では，本研究の前提となる Grice（1975）の「協調原理」と「推意」という二つの語用論の基本的な考え方, 加藤 (2002) の正の動機と負の動機における考え方, 加藤 (2009d) の文脈における枠組みを確認しておく。

2.3.2.1　Grice（1975）の協調原理

言葉を発話として扱い，会話の中で考察する際に，Grice（1975）の協調原理は避けられない問題である。Grice（1975）の考えは不十分な点があるにも関わらず，語用論の研究の中で基礎的な理論である。

Grice（1975）は会話の参加者が「会話のそれぞれの段階で、そのときの会話の目的ないし方向から要求されるように、貢献せよ」[33]という協調の原理（cooperative principle）に従うとする。また，この協調の原理のもとに，次の四つの格率を提出している。

【A】量の格率
（1）必要な量の情報を発話に盛り込め。
（2）必要以上の情報を発話に盛り込むな。
【B】質の格率
（1）間違っていると思うことを言うな。
（2）十分な証拠のないことを言うな。
【C】関連性の格率
（1）関連のあることを話せ。
【D】方法の格率
（1）はっきりしない表現は避けよ。
（2）解釈が分かれるような言い方をするな。

33　日本語訳は加藤（2004）による。

（3）簡潔に話せ。

（4）順序よく話せ。

加藤訳（2004：52-53）

2.3.2.2　推意の定義と種類

意味論も語用論も言語形式に関する意味の研究であるという共通点がある。語用論が誕生してから，意味論との関係が論じられてきた。意味論と語用論との関係は，加藤（2015a）の記述でまとめられる。

①意味論とは，文の意味を対象とする。文は，慣習性の強いコードに従って構成されており，文の意味は文脈を考慮せずに決定される。

②語用論は，発話の解釈を対象とする。発話は，語用論的原理によって形成されるが慣習性は弱く，文脈を考慮して個別に解釈を決めなければならない。

加藤（2015a：261-262）の（1）及び（2）からの引用

そして，語用論の観点から発話の解釈を考察する際に，「推意」（implicature）[34]は基礎的な概念である。「推意」を「慣習的に含まれる情報で、成立することが経験的に見こまれるが、必ず成立するわけではない」（加藤 2004：71）のように簡単に定義できる。

「推意」に関する研究は，Grice（1975）から加藤（2015a）まで，数多くの先行研究が見られる。「推意」に関する研究とともに，語用論に関する研究が進展し続けていると言っても過言ではない。本研究では，最初の Grice（1975）の推意に関する考えと加藤（2015a）の新しい考えを触れることにしておく。

Grice（1975）は，語用論研究における「推意」（implicature）という表現の使用を提言した。Grice（1975）は，「推意」（What is IMPLICATED） を「慣習推意」（What is COVENTIONALLY implicated）と「会話推意」（What is COVERSATIONALLY implicated」[35]に分けたが，「慣習推意」は，言語形式との関係が緊密で，取り消しの可能性を持っていないので，語用論の研究で「会話推意」に関する研究がほとんどである。

「推意」の特徴について，加藤（2015a）は先行研究を参考した上で，「慣習推意」と「会話推意」は完全に分けられるものではなく，連続的に捉える立場を取り，推意を「（A）失効可能性（B）非分離可能性（C）計算可能性（D）非慣習性（E）強化可能性（F）普遍性（G）非確定性」（加藤 2015a：264）という七つの特質にまとめた。

さらに，加藤（2015a）は，「推意」の種類について，言語形式との緊密性ではなく，推意が生じる言語形式の単位によって，「推意」を①「語彙推意」（lexical implicature），②構文推意（constructional implicature），③テキスト推意（textual implicature）に分類した。

---

[34] “implicature”の日本語訳は研究者によって異なるが，本研究は「推意」を使用する。

[35] 日本語訳は加藤（2015a）によるものである。

2.3.2.3　文脈

未完結文は，文法的な規則によって欠如の部分が存在する以上，その欠如の部分を補完せず分析者の自省による考察なら，科学的な研究にならない。そのため，より科学的な分析を行うために，未完結文の主節を復元してから考察を行うという基本的な立場を取る。

未完結文の主節を復元するには，文脈が重要な指標である。文脈は，意味論と語用論を区別する重要な尺度である。それにもかかわらず，文脈という表現については，範囲広く曖昧な意味で使用されることが多い。文脈をより具体化し，分析に応用できるようにするために，加藤（2009d）の考えは参考になる。

加藤（2009d）は文脈を一次文脈と二次文脈に分類した。一次文脈には「形式文脈」，「状況文脈」，「知識文脈」がある。二次文脈は「形式文脈と知識文脈，また，状況文脈と知識文脈など複数の文脈を利用して，あるいは，知識文脈の内部で，推論を行うことで新たに得られる想定」である（加藤 2009d : 214-215）。そして，「形式文脈」「状況文脈」「知識文脈」について，表 3 のように詳細に述べている。

種別	定義
形式文脈	同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。狭義には基準点以前に言語化された顕在的な形式文脈を指すが，広義には基準点以後に言語化される潜在的な形式文脈も含む。原則として，セッション参加者が共有していなければならないものであり，命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の情報である。
状況文脈	セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況を認識することで意味化したもの。原則として，セッション参加者が共有可能であり，命題の形にすることができるが，その度合いは一定でない。認識が容易なものは共有度が高く，共有も義務的であるが，容易に認識できないものは共有の義務も低い。例えば，会話の相手が気づいていない（従って認識されず意味化されていない）事物の存在に注意を向けさせることで，共有させることは可能である。また，物理的に知覚されていても，意味化のプロセスを経ていなければ状況文脈には数えない。
知識文脈	セッションが開始する以前から，セッション参加者が持っている知識のうち，言語知識を除外した世界知識にあたるもの。世界知識全体が個人間で完全に一致することはないが，共有度の高いものも少なくない。原則として命題の形で集約されている膨大な知識であるが，あまりにも膨大であるために，すぐに推論に使えるとは限らない。活性化されていないものは，推論に即時的に用いることはできないと考える。ただ，「知識文脈」はセッション参加者がそれぞれ持っており，分析に必要なものをおおむね指して用いることが多い。

表 3　加藤（2009d）における文脈の種類と定義

以上より，本研究は，加藤（2009d）における文脈の考えを利用し，未完結文の主節を復元してからの研究方法を取る[36]。

2.3.2.4　正の動機と負の動機

未完結文への選好における言語使用者の心理や動機を分析する際に，加藤（2002）の「正の動機」と「負の動機」に関する記述が示唆的である。

加藤（2002）は言語使用者が特定の対象物を指示する際に使用可能な複数の語形を選択するときに，正の動機と負の動機が考えられると述べ，そして表記や統語面，語用論の例を提示しながらその有効性を説明した。

正の動機と負の動機の定義について，加藤（2002）では次のように述べている。「正の動機とは、《新しい形式（語形や用法）が必要とされているという判断によって、旧来の形式を用いず、新しい形式を用いる意思》のことであり、負の動機とは《旧来の形式（語形や用法）では不適切、あるいは、不十分だという判断によって、旧来の形式を用いることを回避するために、新しい形式を用いるという意思》のことである」（加藤 2002：43）。

定義で述べているように，加藤（2002）は「新たな語形が生じるといった変化を引き起こす動機」という前提でその二つの動機を定義した。しかし，言葉の新形式や新用法にはもちろん，従来ある複数の表現を選択する際にも正・負の動機で説明できる。

そこで，本研究は，加藤（2002）の正の動機と負の動機という名称の使用範囲を拡大する。言語使用者が特定の意味内容を伝達するために，使用可能な複数の語形を選択する際に，積極的にある表現の機能や効果を利用する動機を正の動機と呼び，ある表現の機能や効果を回避する動機を負の動機とする。

2.3.3　分析資料

未完結文の使用は，書き言葉より話し言葉のほうが圧倒的に多い。日常会話を分析する際に，母語話者によって行われた会話の録音データがもっとも理想的であるが，そのようなデータには一つの弱点が考えられる。つまり，会話の録音データは，ある話題に関する雑談が多いので，参加者の考えの記述や意見のアピールがほとんどになることである。

無論未完結文は，雑談でも多用されているが，それのみならず，生活上における各方面で使用されている。例えば，依頼や喧嘩などの場面である。会話の録音データでは，そのような場面ごとにおける現象を捉えがたい。その点を考慮した上で，実際の生活上における場面を最大にし，比較的日常会話に近いという趣旨のもとで，本研究は，テレビドラマや映画の台詞，参考程度でテレビ番組の台詞とコーパスを分析資料とする。

---

[36] 本研究で使用される「形式文脈」「状況文脈」「知識文脈」の定義は，すべて加藤（2009d）の説明に従う。

具体的には，本研究では，テレビドラマから 20 部，映画から 3 部，テレビ番組から 1 部，コーパスから 1 個をそれぞれ分析資料として抽出した。それらをまとめたものが表 4 である。

資料の類別	系列	名称	数
ドラマ	日本テレビ系列	『弱くても勝てます』，『海の上の診療所』，『きょうは会社休みます』，『Dr.倫太郎』	4
	フジテレビ系列	『FIRST CLASS』，『ミス・パイロット』，『HERO 2』，『LEGAL HIGH 2』，『若者たち 2014』，『ディア・シスター』，『ようこそ、わが家へ』，『医師たちの恋愛事情』，『ほっとけない魔女たち』，『すべてが F になる』	10
	TBS 系列	『アリスの棘』，『半沢直樹』	2
	テレビ朝日系列	『BORDER』	1
	NHK ドラマ	『聖女』	1
	NHK BS プレミアム	『タイムスパイラル』	1
	読売テレビドラマ	『恋愛時代』	1
映画		『桐島、部活やめるってよ』，『ストロボ・エッジ』，『神様のカルテ』，『今日、恋をはじめます』	3
テレビ番組		『おしゃれイズム　』	1
コーパス		「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年版）」[37]	1
総計			25

表 4　本研究における分析資料のまとめ

表 4 では，具体的な分析資料を示したが，次に具体的にどの言語形式を分析対象にするかを考える。

2.3.1 では，本研究における研究対象を未完結文に限定し，そして未完結文を「発話者の積極的な意思によって，主節が発話者の発話の前後の形式文脈に現れていない従属節のみで終わる発話」と定義することを述べた。しかし，一言で未完結文と言っても，具体的な表現形式が多い。本研究では，定義されている未完結文の典型的な例として，表 2 から，「ば」[38]「たら」[39]「と」[40]「から」「ので／んで」[41]「て」「って」[42]「のに」「し」「け

[37] 以下では，「BTSJ」と略称する。
[38] 本研究では，省略の慣用化による「よろしければ（どうぞ受け取りください）」などの定型表現を研究対象から除外する。
[39] 本研究では，省略の慣用化による「よかったら（食べてください）」などの定型表現を研究対象から除

ど／が」[43]の 10 種類の表現に限定し，合計の 409 例を抽出した。それらは表 5 のようにまとめられる。

形式	「ば」	「たら」	「と」	「から」	「ので／んで」	「て」	「って」	「のに」	「し」	「けど／が」
数	6	9	14	110	29	66	47	23	26	79
総計：409 例										

表 5　未完結文の総計データ

以上のような分析資料を基盤として，本研究は未完結文に関する研究を行っていく。

2.4　本章のまとめ

以上，第 2 章では，先行研究のまとめと研究方法を述べた。具体的には，語用論的選好と未完結文に分けて，それぞれにおける先行研究を 2.1 と 2.2 で考察しながらまとめを行った。そして，2.3 で，未完結文の定義を明確にし，本研究の理論的な枠組みとなる基本的な理論や考えを確認しておき，最後に本研究における分析資料のデータを明示した。

次章では，以上の先行研究と研究方法を基に未完結文を分類するために，まず未完結文における要求性の考察を行っていく。

外する。

[40] 分析資料とする「と」は，「早くしないと」などのように条件用法の「と」を指す。本研究における以降の分析ではすべて適応する。

[41] 本研究は，「ので／んで」の相違点を議論しない。

[42]主節が欠如している以上，本研究の「って」は，連体修飾節か連用修飾節かを議論しない。総括して引用の「って」を指す。改まった場面で，「と」で終わる場合もあるが，「と」と「って」の相違を議論しない。総括して「って」で表記する。

[43] 本研究では，「けど」と「が」の違いを認めるものの，議論の対象としない。更に，「けど」は，「けれど」・「けども」「けれども」などの変形もあるが，本研究では，総括して「けど」で表記する。

第Ⅱ部

「静的視点からの未完結文の種類と境界性についての考察」

第 3 章　未完結文における要求性

本章では，未完結文の分類に関する先行研究と問題点を検討し，要求性に基づく分類方法を確認した上で，要求性の種類を区分し，それに基づいて未完結文の種類を明確にする。

3.1　未完結文の分類に関する先行研究

未完結文の分類を捉える代表的な先行研究は，白川（2009）である。

白川（2009）は主節欠如の文を言いさし文と呼び，「言いさし文」[44]と「完全文」を統一的に説明する立場から出発し，①「言いさし文」が独立文と同等の完結性を持つのはなぜか②「言いさし文」はどのような機能を持つか③日本語の文法体系の中で従属節をどのように位置づけたらよいか―という三つの問題点から「言いさし文」を考察した。

それらの問題点を解決する前提として，白川（2009）はまず研究対象である「言いさし文」の範囲を限定した。具体的には，まず「形式上、主節を伴わずに従属節のみで表現される文」という広義の言いさし文を，「言い終わり」と「言い残し」の二種類に分類した。「言い終わり」は「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」であり，「言い残し」は「言うべき後件を言わずに中途で終わっている文」である（白川 2009：7）。そして，「言い終わり」タイプの「言いさし文」を「後件に相当する内容、すなわち、従属節の内容と関係付けられるべき内容が文脈上に存在するか否か」によって，「関係づけ」と「言い尽くし」に分けた。すなわち，白川（2009）は広義の言いさし文を次の三種類に分類した。

a. 関係付け：関係づけられるべき事態が文脈上に存在する文
b. 言い尽くし：関係づけられるべき事態が文脈上に存在しない文
c. 言い残し：言うべき後件を言わずに中途で終わっている文

白川（2009：11）の（24）からの引用

白川（2009）は文法論という観点から未完結文の種類を分けたが，本稿は語用論という観点から，違う文脈における未完結文の種類を考える。

Austin（1962）と Searle（1969）は，すべての発話にある種の発話内力が存在すると考えている。未完結文は形式上未完結であっても，発話内力を有すると見られる。発話内力は，聞き手に対する作用という点において，要求性を潜在させていると解釈することが可能である。要求性は未完結文のみならず，すべての発話にあると考えられるので，要求性を基準とする分類により，未完結文を完結文と関連付け，すべての発話に対して統一した視点

[44] 白川 (2009) によると，括弧なしの言いさし文は主節を伴わずに従属節のみで表現される広義のもので，括弧つきの「言いさし」は「言い終わり」（「関係づけ」と「言い尽くし」を含む）のみを指すと述べた。

からの分析が可能になる。よって，本研究は要求性に基づく未完結文の分類を提案する。

まず要求性における先行研究を批判的に検討し，本研究における要求性の考えを確認してから，未完結文に限定して要求性による分類を考察する。

3.2 発話内力に関する先行研究と問題点

Austin（1962）は言葉を発することを言語行為と考え，すべての発話がある種の力，すなわち発話内力を持つと考えている。発話内力の種類を明らかにするために，Searle（1969）は発話の目的によって発話内行為を「断定・断言型（assertives）」「行為拘束型（commissives）」「行為指示型（directives）」「感情表現・表明型（expressives）」「宣言型（declaratives）」[45]の五種類に分けた。しかし，加藤（2004）でも述べられているように，Searle（1969）の分類には「実際の分析には使えない」「排他的な関係とは限らない」（加藤 2004：45）などの問題点があるので，再考察する必要がある。

また，発話を言語行為[46]として捉え，発話に具体的にどのような機能があるかについての研究は，従来のモダリティに関連する研究にも見られる。その代表的なものとして仁田（1991）がある。仁田（1991）は発話・伝達のモダリティの下位的タイプとして，「①<働きかけ>，②<表出>，③<述べ立て>，④<問いかけ>」の 4 種類があると提言した。さらに，それぞれのタイプが具体的にどのような形式で現れるかをまとめ，基本的に文の形式から文の機能を捉えようとしている。しかし，発話に現れる機能は必ずしも文の形式と一致しない。

（4）【会議室から出た同僚が，ノートを持って隣の人と雑談しているレミ絵に向かって】
同僚「レミ絵さん，準備できました。」

フジテレビドラマ『FIRST CLASS』第 6 話

例えば，（4）の発話を補足すると，「会議の準備ができました」になる。仁田（1991）の分類によると，（4）の発話は「ガ格に来る名詞」が「三人称者」で，「テンスの存在・分化がある」（仁田 1991：37-39）ので，「現象描写文」[47]になる。しかし，聞き手のレミ絵はノートを持って会議に参加する予定であるという状況文脈から，（4）の発話は聞き手に「会議に来てください」という働きかけ[48]の性質を持つと考えられる[49]。そのため，言語行為としての発話がどのような種類の力，即ち発話内力を持つのかを再考察する必要がある。

---

45 日本語訳は加藤（2004:45）による。
46 正確に言うと，仁田（1991）では「言語活動」という表現を使っている。
47 「現象描写文」は「述べ立て」の下位分類である。
48 働きかけの文について，仁田（1991）では次のように述べられている。「命令・依頼・禁止といった対他命令の働きかけの文は，ガ格に来る名詞句の人称が基本的に二人称に限られる」「働きかけの文は，テンスの存在・分化を有していない」（仁田 1991：25）。
49 （4）のように，ある発話行為が別の発話行為によって間接的に遂行されることについて，Searle（1975）は間接発話行為（indirect speech acts）と定義した。

力というものは受け入れる対象があって初めて存在するものなので，言葉が発話内力を持つには聞き手が必要とされる。私達が聞き手に向かって発話するのは，ある種の目的を実現するためと考えられる。そして，目的を持つということは要求することとも考えられるので，要求によって発話内力を分類することが可能であろう。そこで，本研究は要求という観点から発話内力の種類を明確にする[50]。

3.3 要求の種類に関する仮説

本研究は，要求を「聞き手に対する，言語を通じた働きかけである」と定義する。そして，尾上（1975）による要求の有無による分類を踏まえ，仮説として，要求の有無によって発話を二つに分類する。要求性のない発話は，相手に働きかけることのない単方向のものであり，要求性のある発話は，相手に働きかけのある双方向のものである。

まず，双方向である要求性のある発話を考える。要求の種類に関する先行研究では，依頼や命令，勧誘などが列挙されているが，定義が困難であることや，相互の違いが不明瞭であることなどの問題点があるので，本研究は要求内容によって発話の要求性を考える。

会話参加者の要求に関するやり取りで，内容として登場するものは，基本的に行為，知識，感情の三つである。ただ，感情は行為と知識のやり取りに付随して生じる可能性もあり，二次的なものとして捉えられる。よって，発話は内容によって行為要求と知識要求に分けられる。また，やり取りの内容として登場する行為の要求には，実施・調整・受容の種類が考えられるので，行為要求を誰がどのように遂行するかによって，行為要求は行為提供要求，行為受容要求，行為調整要求に分類されうる。これと同様に，知識に関わる要求も知識提供要求，知識受容要求，知識調整要求に分けられるはずである。知識受容要求は話し手が積極的に聞き手の知らない知識を提供し，理解を求める場面に現れる。行為が現実世界に実際の形として現れることが可能であるのに対して，知識は人間に見えない状態として頭の中にしか存在していない。それゆえ，知識受容の要求は相手に働きかける性質が弱く，働きかける性質を持たないもの，すなわち無要求性として捉えたほうが適切であろう。そこで，知識要求の種類は知識提供要求と知識調整要求に分けられることになる。

次に，単方向である要求性のない発話について考える。話し手が相手の知らない知識を提供することは要求性のないものとして考えたほうが適切であると述べたが，実際の状況を考えた場合，話し手が聞き手に知識を提供するときには，話し手による提供という行動が能動的であるか受動的であるかという違いがある。すなわち，話し手の知識を提供するという行動は，積極的に行われる場合もあれば，相手の質問に応じて受動的に行われる場合もある。そこで，要求性のない発話は二種類に分類される。一つは，話し手が積極的に知識を表出する場合で，もう一つは相手の質問に応じて，聞かれた情報を提供する場合である。

以上の分類を図示すると，表 6 のようになるが，表 6 の有効性については次節で検証す

[50] 要求という観点から，発話の機能の種類を考察する着想は尾上（1975）に既に見られる。

る。

要求の有無	内容による分類	実施状況による分類	説明	例
要求性あり	行為要求	行為提供要求	話し手は相手が行為を行うことを相手に求める。	(5a) (5b)
		行為受容要求	話し手は自分が提言・実行した行為を相手に受け止めてもらうように求める。	(6)
		行為調整要求	相手が提言した行為に対して，話し手は拒否したり，相手に変更を求めたりする。	(7)
	知識要求	知識提供要求	話し手は相手に知識を求める。	(8)
		知識調整要求	話し手は相手の持っている知識を変えてもらうように求める。	(9a) (9b)
要求性なし		能動的な場合	話し手は積極的に知識を提供する。	(10)
		受動的な場合	相手の質問に応じて話し手は知識を提供する。	(11)

表 6　要求による発話内力の分類仮説

(5) a【野球部が文化祭で芝居をすると決めた後】
監督「だから，何だよ。」
マネージャー「台本をお願いします。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話
b【走り終わったところ，地面に倒れて疲れきった赤岩の様子を見ながら】
白尾「休むな。素振り行くぞ，素振り。」
赤岩「ちょっと待って，俺達は昨日の死闘の疲れが･･･」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話

(5a) と (5b) は「行為提供要求」の例である。(5a) は聞き手[51]である監督のみが行為を行う場合であるが，(5b) は話し手と聞き手が一緒に行為を行う場合である。

(6)【帰り道で白尾と赤岩は前を，亀沢は後を歩いている場面】
白尾「あと 2 日で本番か。」
赤岩「なんか緊張して来たなあ。」
亀沢「じゃあ，またね。」

[51] 本研究では，事例中の下線部分の発話を考察対象とする。考察対象となる発話を行う側が話し手で，聞いているほうが聞き手である。

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話

「行為受容要求」で，話し手は行為を実施するほうで，聞き手は行為を受け取るほうである。例えば，（6）である。（6）で，話し手は亀沢で，聞き手は白尾と赤岩である。（6）の亀沢の「じゃあ，またね」という発話は白尾と赤岩の発話を中断させ，聞き手に「自分が先に失礼する」という行為を受けてもらう要求性を持つと考えられる。

（7）【二人がエレベーターに向かって歩いているところ，石川が突然立ち止った場面】
立花「どうした。」
石川「トイレに寄るから，先に行っててくれ。」
立花「俺も行く。」

テレビ朝日系列『BORDER』第 8 話

（7）は「行為調整要求」の例である。（7）で，話し手は立花で，聞き手は石川である。聞き手の「あなたは先に行って，俺はトイレに行く」という提案に対して，話し手は「俺も行く」を通して，聞き手の提案を拒否し，「あなた一人でトイレへ行く」ことを「一緒にトイレへ行く」というように調整することを求めている。

（8）静香「そういえばさ，誰に聞いたの。MIINA の居場所。」
樹「え，それは･･･」
静香「まあ，別にいいけど。」

フジテレビ系列『FIRST CLASS』第 6 話

（8）は「知識提供要求」の例である。（8）で，話し手は静香で，聞き手は樹である。MIINA の居場所を聞き出したのが聞き手であるということを話し手は知っているが，聞き手がどうやって知ったのかを話し手は知らない。そこで，（8）の発話を通して，話し手は自分の知らない情報を聞き手に求めている。

「知識調整要求で，調整対象としての知識が相手にあることに問題はない。ただし，間違いだと話し手が考えている知識自体は，相手の発話に実際に現れた場合もあるし，単なる話し手の推測である場合もある。

（9）a 記者「話したくないですよね。あの試合のことは。」
監督「いや，別に話したくないとか，そういうことじゃなくて，特に面白い話ではないってことなんですよ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話

b【岡留と志方は野球部部員である。志方が野球の練習に集中できないと言った後】
岡留「志方。スカウト組の根性見せろよ。亀沢いなくなってもう俺とお前の二人しかい

ねえんだよ。」

志方「僕にそんな仲間意識ないです。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 7 話

例えば，（9a）で，話し手は監督で，聞き手は記者である。話し手は聞き手の形式文脈にある「話したくない」という知識を否定して言い直している。それに対して，（9b）で，話し手の志方の「僕にそんな仲間意識ない」という発話は，聞き手の岡留の発話の形式文脈にある内容を否定しているのではなく，聞き手の発話にある「スカウト組であるお前と俺は仲間である」という推意を否定している。

（10）【部員達がスイングの練習をしているところを見ながら，マネージャーは監督に向かって】

マネージャー「監督に言われた通り，みんな思いっきり振ってます。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話

（11）警察官「その班は何人だった。」

赤井「確か 5 名かと。」

テレビ朝日系列『BORDER』第 8 話

（10）と（11）は要求性なしの例である。（10）は話し手であるマネージャーが積極的に知識を提供している場面であるが，（11）は聞き手の警察官の質問に応じるために，話し手の赤井が受動的に知識を提供している場面である。

3.4 仮説の問題点

表 6 で提出した仮説には二つの問題点がある。

（12）a 監督「つうかさ，お前ら，そろそろ現実受け入れろよ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 7 話

b 赤岩「息子として助言する。何をするにももっとよく考えろ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 5 話

c 岡留「志方。スカウト組の根性見せろよ。亀沢いなくなってもう俺とお前の二人しかいねえんだよ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 7 話（再掲）

一つ目は行為と知識の違いである。表 6 の仮説によると，（9）のような聞き手に知識を求めている疑問文は「知識提供要求」という機能になる。だが，相手に聞いて答えを求めるところから考えると，（8）の疑問文は相手に「答えてください」という「行為提供要求」

をしている例としても見なすことができる。また，（5a）の「台本を書く」という行為は人間の動きを伴うので，「行為提供要求」と見なすことができるが，（12a）～（12c）にあるような「現実を受け入れる」「考える」「根性を見せる」などは行為として捉えられるかどうかは問題である。

（13）【青志が店の外で待っていて，おかみさんが外出から戻って来た場面】
青志「おはよう。」
おかみさん「青志君，ごめんごめん，今開けるから。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

二つ目は発話の要求の種類を決める基準である。例えば，（13）で，話し手はおかみさんで，聞き手は青志である。（13）の「今開けるから」は未完結文になっているが，状況文脈から話し手の発話にある「開ける」を「ドアを開ける」のように復元できる。「ドアを開ける」ことによって，店に入ることができるので，（13）の主節を「すぐ入れるよ」のように復元できる。つまり，（13）の発話は聞き手に，話し手の「ドアを開ける」行為を受容するように要求していると考えられる。言い換えれば，（13）の発話は「行為受容要求」になる。しかし，非過去形の「開ける」という形式文脈と話し手がまだドアに着いていないという状況文脈から，話し手が（13）の発話をするときに，ドアを開けるという動作をまだ実施していないことがわかる。話し手が鍵を出しドアを開けるには時間が必要なので，（13）の主節を「もうちょっと待ってください」のようにも復元できる。つまり，（13）の発話は聞き手に「待つ」という行為を求めている。言い換えれば，（13）の発話は「行為提供要求」としても考えられる。さらに，もし聞き手が既に待っている状況であれば，（13）は聞き手に働きかける度合いが弱いので，要求性なしの発話とも理解できる。そうすると，一つの発話が同時に二種類以上の要求性を持つことになり，要求性をどのように限定すればよいのかという問題が現れる。

3.5　仮説の改善による解決

3.5.1　行為と知識の違い

相手に要求するということは，基本的に相手に何らかの影響を及ぼすはずである。行為と知識の区別を明確にするために，まず聞き手という存在に影響を起こす可能のあるカテゴリーとしてどのようなものがあるかを考える必要がある。明確な行為は人間の動きを伴うことがあるのに対して，知識に関わるものは基本的に外側から読み取りにくい。そこで外側から観察可能かどうかによって，聞き手に影響可能なカテゴリーを「外部活動のカテゴリー」，「内部活動のカテゴリー」，「知識ベース」の三つに分類する。

「外部活動のカテゴリー」は，外側から観察可能な人間の状態の集合である。例えば，

「走る」・「ドアを閉める」などの身体部位の明確な動きや，「しゃべる」・「笑う」などの身体部位の微小な動きなどがこれに含まれる。つまり，外部から観察可能な行為は基本的に外部活動のカテゴリーになる。次に，「内部活動のカテゴリー」は外側から観察不可能な人間の心や脳の中の動きである。例えば，「考える」や「理解する」などがこれに含まれる。最後に，「知識ベース」というのは，話し手が想定した聞き手の世界知識である。それは基本的に聞き手の発話及び発話に含まれる推意からなる。言い換えれば，ここで定義している「知識ベース」とは聞き手の発話及びその推意の集合である。

そして，この聞き手に関わる三つのカテゴリーと関連し，仮説として立てた「行為提供要求」「行為受容要求」「行為調整要求」「知識提供要求」「知識調整要求」という五つの要求について再考察する。

まず，（13）の「今開けるから」のような発話が，「行為提供要求」とも「行為受容要求」とも要求性なしとも考えられるという問題を解決するために，「行為提供要求」と「行為受容要求」の分類基準「話し手と聞き手のどちらが行うか」を，廃棄する必要がある。聞き手にかける負担の度合いに違いがあるが，「行為提供要求」であれ，「行為受容要求」であれ，聞き手の「外部活動のカテゴリー」の自由に関与しているという点では同じなので，本研究は「行為受容要求」と「行為提供要求」の区別を廃棄し，これらを同じく【行為要求】として扱う。

（14）a【聞き手のイが歩いている場面で，話し手のアの発話】
ア「待ってください。」
b【聞き手のイが既に待っている場面で，話し手のアの発話】
ア「もう少し待ってください。」

例えば，聞き手の要求に応じるには，（14a）で，聞き手は「歩く」状態から「立ち止まる」状態に変わる必要があり，（14b）で，聞き手は単に「立つ」という状態の続きを継続して保持すればよいという違いがあるが，両方とも話し手が聞き手の「外部活動のカテゴリー」の自由に関与しようとしているので，（14a）も（14b）も【行為要求】になる。

そして，聞き手が具体的な行動を取る必要がある「外部活動のカテゴリー」に対して，「内部活動のカテゴリー」に含まれる「考える」ことなどは，聞き手にかかる負担が比較的小さいとはいえ，「考える」こと自体も一種の行動とも考えられる。そのため，聞き手の「内部活動のカテゴリー」の自由に関与しようとする話し手の意図も【行為要求】とする。つまり，聞き手の「外部活動のカテゴリー」の自由に関与するか，それとも「内部活動のカテゴリー」に関与するかは，要求の力の強さに違いはあるが，要求の種類に変わりはなく，同じく【行為要求】である。つまり，（12a）～（12c）は全て【行為要求】の性質を持つ発話として扱う。

さらに，（8）のように疑問文の形で現れることの多い「知識提供要求」が行為として考えられるかどうかの問題について，話すことは外部活動のカテゴリーになるので，「教え

てください」「答えてください」は，聞き手の外部活動のカテゴリーの自由に関与することになる。しかも聞き手がしゃべるには口の形を変えなければならないので，上で定義した【行為要求】の範囲になる。そこで，仮説として立てた「知識提供要求」は基本的に【行為要求】の範囲に入れられるということになる。

また，「行為調整要求」を「相手に提言された行為に対して，話し手は拒否したり，相手に変えてもらったりする」と定義したが，実際に行為の調整は知識の調整の上で行われる場合が多いので，「行為調整要求」と「知識調整要求」を区別するのが不可能であるとも考えられる。

（15）【二人がエレベーターに向かって歩いているところ，石川が突然立ち止った場面】
立花「どうした。」
石川「トイレに寄るから，先に行っててくれ。」
立花「俺も行く。」

テレビ朝日系列『BORDER』第 8 話（再掲）

例えば，（15）は「行為調整要求」の例として示したが，話し手の「俺も行く」という発話は行為の調整より，まず聞き手の発話の推意にある「あなたは行かない」という知識を調整して，その後二次レベルで聞き手に行為の調整を提案していると考えたほうが適切であろう。つまり，知識の調整は行為の調整の前提条件であり，「行為調整要求」は「知識調整要求」と明確に区別できないと言える。そこで，仮説の「行為調整要求」と「知識調整要求」の区別を廃棄し，【調整要求】のみにする。

以上のように考えると，仮説で立てた「行為提供要求」「行為受容要求」「行為調整要求」「知識提供要求」「知識調整要求」という五つの要求は【行為要求】【調整要求】としてまとめることができ，それぞれは表 7 のように定義できる。

要求の種類	定義
【行為要求】	話し手の発話が，聞き手の発話時の「外部活動のカテゴリー」や「内部活動のカテゴリー」の自由に関与しようとする場合。
【調整要求】	聞き手の「知識ベース」の内容に変化を起こさせようとする場合。

表 7　要求の種類と定義

3.5.2　【受容要求】の再考察

表 6 の仮説では，知識受容要求は働きかける性質が弱く，要求性なしのものと考えたほうがよいとした上で，行為受容要求のみを定義していた。そして，3.5.1 で，「行為受容要求」という分類を廃棄し，【行為要求】のみについて論じたが，ここになお問題が残されている。働きかける性質の強い受容要求とは何か，【受容要求】は存在しないのか，そも

そも【受容要求】とは何かを明確にする必要がある。

ここで，表 7 の【行為要求】と【調整要求】をもう一度考える。聞き手は話し手の【行為要求】や【調整要求】に対して具体的な行動を行なう前に，常に話し手の要求を受容するというプロセスがある。つまり，受容は調整と行為をする前提条件で，【行為要求】と【調整要求】の前段階に常に【受容要求】があると言える。

（16）亀沢「俺，やっぱり学校やめることにします。辞めます，学校。」
先生「両親には言ったのか。」
亀沢「まだっすけど。」
先生「じゃあ，話せ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話

（17）【赤岩と白尾は同級生である】
赤岩「お前は日増しに大胆になってるよ。」
白尾「俺は初めから大胆だろ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 5 話

例えば，（16）は【行為要求】の例であるが，聞き手の亀沢が話し手の先生の要求に応じて実際に「話す」という行動を取るには，当然ながら話し手の要求を受容するという前提がある。また，（17）は【調整要求】の例であるが，聞き手の赤岩が「白尾は日増しに大胆になっている」という知識を調整するには，話し手の白尾の「白尾は初めから大胆だ」という知識を受容する必要がある。

以上のように考えると，同じ要求内容に対して，【受容要求】【行為要求】【調整要求】という三つの要求性には実は段階性があり，【行為要求】と【調整要求】の前段階に常に【受容要求】があると考えられる。ただし，前段階にある【受容要求】は必ずしも次の段階にある【行為要求】と【調整要求】に移行するわけではなく，【受容要求】で止まることもある[52]。そこで，仮説として立てた排他関係にある「行為提供要求」「行為受容要求」「行為調整要求」「知識提供要求」「知識調整要求」の五つの要求に対して，「行為受容要求」を安易に廃棄するのではなく，むしろ【受容要求】【行為要求】【調整要求】の三つが異なる段階にあると考える必要がある。

そして，【行為要求】や【調整要求】は，聞き手の「外部活動のカテゴリー」・「内部活動のカテゴリー」・「知識ベース」に変化を持たせることを前提とするので，常に前段階にある【受容要求】も当然「外部活動のカテゴリー」・「内部活動のカテゴリー」・「知識ベース」の三つのカテゴリーに関与することを前提とする。よって，【受容要求】は，話し手が聞き手に関する発話をした際，聞き手にその発話内容を受け入れるよう求めるこ

[52]【受容要求】は常に【行為要求】と【調整要求】の前段階にあることは確かだが，【行為要求】と【調整要求】の間にも段階性が現れる時がある。すなわち，聞き手の知識を調整してもらった後にさらに行為が求められるなどの場合である。

とであると定義できる。具体的には，その受容の内容は―①聞き手向けの行為②聞き手に関する評価③聞き手の世界知識への関与―の三つに分類される。例えば，（18a）は，①の例で，（18b）は②の例で，（18c）は③の例である。

（18）a 明日 10 時ぐらいに伺います。
b 君は他人の好意をちっとも感謝せずに文句ばっかり言うのはよくないと思います。
c 君の覚え間違いだよ。私そんなことを言ったことはありません。

以上より，3.5.2 の考察を通して，【行為要求】【調整要求】【受容要求】の関係性を図 1 のように示すことができる。

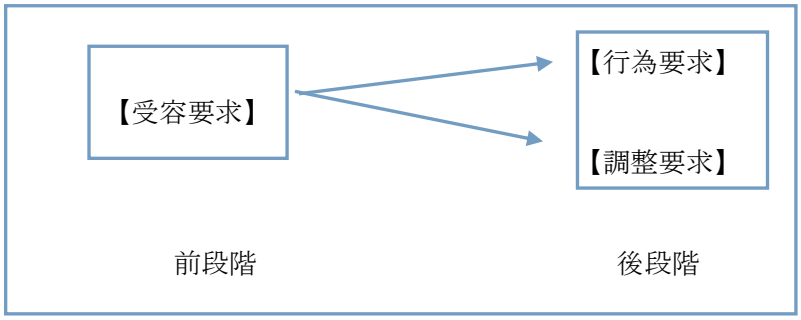


図 1　各要求の関係性

さらに，以上で考察した【行為要求】【調整要求】【受容要求】の定義を次の表 8 のようにまとめられる。

要求の種類	定義
【受容要求】	話し手が聞き手に関する発話をした際，聞き手にその発話内容を受け入れるよう求めることである。
【行為要求】	話し手の発話が，聞き手の発話時の「外部活動のカテゴリー」や「内部活動のカテゴリー」の自由に関与しようとする場合。
【調整要求】	聞き手の「知識ベース」の内容に変化を起こさせようとする場合。

表 8　各要求の種類と定義の補完

上では，【行為要求】と【調整要求】との比較を通して，【受容要求】の位置づけを確認した。しかし，一つの問題がなお残されている。【受容要求】は【行為要求】と【調整要求】と違うレベルにあり，常にそれらの前段階にあるものであると述べた。この議論を敷衍すれば，【受容要求】や【行為要求】，【調整要求】の前段階にさらに聞き手に対するある種の要求が存在するのではないかとも考えられる。次節では，この点について検討

する。

3.5.3　無標な要求と有標な要求

表 6 の仮説は要求の有無から出発して発話の機能を考えていた。しかし，要求の定義，すなわち，話し手は聞き手に何かを求めるということを考えると，会話で，聞き手が存在している以上，聞き手に対する話し手の発話には，常にある種の要求が存在しているとも考えられる。例えば，話し手は聞き手に向かって発話している以上，まず聞き手に「自分の発話を聴いてください」という要求や「自分の発話を理解してください」という要求が常にある。そのように考えると，要求を少なくとも二つのレベルで考える必要がある。すなわち, あらゆる発話に存在する普遍的な要求と個別の会話にしか存在しない要求である。

加藤（2012a）は無標と有標の概念が形態論だけでなく，意味や機能からも捉えることが可能であると述べ，意味や機能から捉えた場合に，使用頻度が高く一般性を持つものは無標になり，その逆のケースは有標になると述べている。加藤（2012a）によれば，あらゆる発話に存在する要求は，普遍性や一般性を持つとも考えられるので，無標な要求と言える。それに対して，個別の会話にしか存在しない要求は有標な要求と言える。

では，この二つのレベルの要求，即ち無標な要求と有標な要求とはどのようなものであるかを考えてみる。

まず，無標な要求について考える。私達は相手との人間関係を構築し，会話を続けるために，その前提条件として，相手の発話を聴き，理解し，反応することが基本とされる。会話の進行を保証して社会礼儀性を持つ特徴があるところから，こうしたすべての発話に存在する無標な要求を社会規範的要求とも称せよう。具体的には，話し手の発話を聴くという【注意要求】，話し手の発話内容を理解するという【理解要求】，話し手の発話に対して反応を行うという【反応要求】がある[53]。【反応要求】はすべての発話に存在するという考えには説明が必要であろう。ここでの【反応要求】は言語的反応要求[54]と非言語的反応要求に分けて考える必要がある。つまり，聞き手の【反応要求】は言語という形態で現れる場合もあれば，動きなどの非言語という形態で現れる場合もある。

（19）ア「さようなら。」→相手の言語的反応要求が求められる
　　イ「さようなら。」→相手の「別れる」という非言語的反応要求が求められる

例えば，（19）に示しているように，アが「さようなら」という挨拶を言った後，挨拶の交感機能と社会の礼儀によって，基本的に相手のイに「さようなら」という言語的反応要求が求められている。さらに，イの答えとしての「さようなら」は，相手のアに「別れ

[53] この三つの要求は，【注意要求】→【理解要求】→【反応要求】の順序で求められると考えられる。
[54] 正確に言うと，言語的反応要求は内容が限定された場合もあれば，自由である場合もある。疑問文に対する答えは言語的反応要求が限定されると考えられる。

る行動を取る」という非言語的反応要求を求めている。このように考えると，【反応要求】はすべての発話に存在すると言える。そこで，表 6 の仮説にある要求性なしのものは，厳密には，全く要求性を持たないのではなく，無標な要求を持つと言えるだろう。

次に，個別の発話で現れる有標な要求について考える。社会規範的要求という無標なものに対して，有標な要求は個々の会話で現れるものなので，会話的要求とも言える。聞き手が話し手の発話を聴いて理解したかどうかを問わず，あらゆる発話は聞き手の【反応要求】を求めていると述べたが，具体的にどのような反応が起こるかは，それぞれの個別の発話で現れる形が異なる。そこで，聞き手の反応の具体的な形がわかれば，会話的要求の種類も明らかになる。聞き手の反応をまとめると，3.5.1 と 3.5.2 で議論した「受容」「行為」「調整」になるのではないかと思われる。つまり，有標な要求である会話的要求には具体的に【受容要求】【行為要求】【調整要求】があるということになる。

（20）【馬場検事はいつも自分の事務官のことを無視している。二人きりの事務室で，馬場検事は自分の昨夜の夢について事務官に話をしている。】
馬場検事「ゆうべ嫌な夢見ちゃった。」
事務官「夢？」
馬場検事「城西支部のみんなが出てきたの。毎日仕事で顔合わせてるのに。」
事務官「僕も出てきたんですか？」
馬場検事「特に田村検事よ。夢の中でも強欲で，計算高くってさ。」
フジテレビ系列『HERO 2』第 4 話

さらに，【行為要求】【受容要求】【調整要求】という有標な要求を持っておらず，無標な要求のみ持っている発話も存在可能なので，本稿はそれを【要求性なし】の発話とする。例えば，（20）で，話し手は馬場検事で，聞き手は事務官である。「て」で終わる未完結文は，「僕も出てきたんですか」という質問に続く応答であるが，発話の内容が第三者の「田村検事」についての話題であることから，話し手が聞き手の質問を無視したとわかる。未完結文自体は，聞き手と直接に関わりのない第三者に対する内容であるので，【要求性なし】の発話として考えられるだろう。

3.5.4　二つのレベルの会話的要求

仮説の二つ目の問題点で，一つの発話が同時に二種類以上の要求性を持つ場合に，要求性の種類を限定することが問題となると述べた。その問題点を解決するためには，「一つの発話の要求は必ず単一のものに限定される」という前提を，「一つの発話に同時に複数の要求が存在することが可能である」という前提に変更して検討する必要がある。

言語の形式は必ずしも機能と一致しないので，会話的要求はさらに命題と推意の二つのレベルに分けるのが適切であると考えられる。

命題レベルの会話的要求は形式文脈に現れるもので，推意レベルの会話的要求は発話の推意に現れるものである。推意は，取り消し可能性を持っているので，推意レベルの会話的要求も取り消し可能である。

（21）【スイングの練習中に野球部部員の牛丸がよそ見をしている姿を見て】
樫山「牛丸。どこ見てんだよ。」
牛丸「見たことないチョウが飛んでたからさ。」
樫山「練習中だぞ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話

例えば，（21）で話し手は樫山で，聞き手は牛丸である。話し手の「どこ見てんだよ」という発話は疑問文なので，命題レベルには聞き手に答えを求めるという【行為要求】がある。「どこ見ているのだ」にある「の」の使い方によって，話し手は聞き手が見ている場所を既にわかっていると判断できるので，話し手の発話には「今見ている場所を見ないで」という推意がある。「見ないで」は聞き手の物理的カテゴリーの自由に関与しているので，（21）の発話は，推意レベルでは聞き手に「見る場所を変える」という【行為要求】を持つ。また，スイングの練習中という状況文脈によって，話し手の発話に「スイングしなさい」という推意も考えられるので，推意レベルではさらに「スイングをする」という【行為要求】を持つとも考えられる。以上をまとめると，（21）は，命題レベルには答えを求める【行為要求】があり，推意レベルには，今見ている場所をやめるという【行為要求】とスイングの練習を求めるという【行為要求】があると言える。もちろん，推意レベルにある要求は取り消し可能なので，聞き手は命題レベルにある話し手の疑問文のみに対して反応することも可能であり，推意レベルの要求に対して反応する場合もある。

会話的要求（＝有標な要求）である【受容要求】・【行為要求】・【調整要求】は，すべての発話に含まれるわけではないが，社会規範的要求（＝無標な要求）はすべての発話に存在する。そして，場合によって社会規範的要求は，メタ的な手段によって有標な要求になる場合になる可能性もある。例えば，（22a）～（22c）はそれぞれ，【注意要求】【理解要求】【反応要求】がメタ的な表現によって有標になる場合である。

（22）a「私の話をよく聴きなさいよ。」
b「話の意味をよく理解してください。」
c「何か反応してくださいよ。」

以上をまとめると，有標な要求として現れる会話的要求は，さらに命題レベルの要求と推意レベルの要求に分けて考えられる。それぞれのレベルには【受容要求】【行為要求】【調整要求】の三種類の要求があると言える。

3.5.5　仮説の修正案

3.5.1～3.5.4 の分析より，表 6 の仮説を表 9 のように修正できる[55]。

<table>
<tr><td rowspan="2">有標な要求
（会話的要求）</td><td>命題レベル</td><td rowspan="2">【受容要求】→【行為要求】
→【調整要求】</td></tr>
<tr><td>推意レベル</td></tr>
<tr><td>無標な要求（社会規範的要求）</td><td colspan="2">【注意要求】→　【理解要求】　→【反応要求】</td></tr>
</table>

表 9　要求による発話内力の分類の修正案

以上の要求性の基本的な考えに基づき，次節では，未完結文に限定し，要求性による種類を考察する。

3.6　未完結文における要求性

本研究は，未完結文の推意レベルに現れる会話的要求（【受容要求】【行為要求】【調整要求】の三種類）に基づいて未完結文の種類を考える。その上で，【行為要求】【受容要求】【調整要求】という有標な要求を持っておらず，無標な要求のみ持っている発話を，【要求性なし】の発話とする。以上をまとめると，発話の推意レベルにおける要求性に基づき，未完結文は，【受容要求】【行為要求】【調整要求】【要求性なし】の四種類があると言える。

そして，以上の要求性に関するモデルに基づき，2.3.3 で述べた分析資料に基づき，「ば」「たら」「と」「から」「ので／んで」「て」「って」「のに」「し」「けど／が」で終わる未完結文を代表的な例として，409 個の発話を集めて考察した。分析の結果，文脈に頼る程度が低く，要求性の種類がある程度安定し，接続助詞のみで容易に要求性を判断できる未完結文もあれば，文脈に頼る程度が高く，要求性の種類が豊富である未完結文もあるということがわかった。そこで，その要求性が単一か豊富かによって二種類に分けて未完結文を考察する。

3.6.1　接続助詞から要求性の種類を推測しやすい未完結文

「たら」「ば」「と」「のに」で終わっている未完結文は，要求性が接続助詞との関係が緊密で，接続助詞からある程度要求性を推測できる。「たら」「ば」「と」は形式文脈のみで推測することが可能で，「のに」は形式文脈と状況文脈によって，推測することが可能である。

---

[55] 加藤（2015b）は「発話の中で聞き手に作用する力」を「発話的な力」（＝言語形式に由来する作用」と「発話内的な力」（＝「発話の命題内容に由来する作用」の二つに分けて記述する枠組みを提案した。「発話内的な力」と「発話的な力」は本研究で定義した要求性とどういう関係があるかについては，今後の課題とする。

3.6.1.1　形式文脈のみによる未完結文

3.6.1.1.1　「たら」「ば」「と」の統語的整理

「たら」「ば」「と」の前にどちらも否定形の「ない」とアスペクトの「ている」が来ることは可能であるが，テンスを表す「た」は使用されにくい。しかし，実際の使用では，「たら」「ば」「と」の三つの表現にはそれぞれ違う性質も見られる。

（23）a　静かにしたら，どうですか。
　　b　静かにすれば，どうですか。
　　c*[56] 静かにすると，どうですか。
（24）a　でも，そんな大金を渡して，彼が戻って来なかったら，どうしましょう。
　　b?[57]でも，そんな大金を渡して，彼が戻って来なければ，どうしましょう。
　　c*　でも，そんな大金を渡して，彼が戻って来ないと，どうしましょう。

（23）と（24）に示しているように[58]，「たら」は「どうですか」とも「どうしましょう」とも共起することが可能で，「ば」は「どうですか」[59]としか共起できず，「と」は両方とも共起しにくい。そのため，「たら」「ば」「と」で終わる未完結文は，要求性を持つ発話にしか使われないにも関わらず，性質が異なる。

（23）と（24）にある「たら」と「ば」の完結文を未完結文にすると，それぞれ（23）’と（24）’のようになる。

（23）’a 静かにしたら？
　　b 静かにすれば？
（24）’a でも，そんな大金を渡して，彼が戻って来なかったら。

（23）’と（24）’は次のような相違点が見られる。（23）’はイントネーションが上昇調になるのが普通で，主節は「どうですか」という決まっている表現に復元できる。話し手からの提案を表すのが主である。その意味で言うと，（23）’の未完結文は慣習性に基づいて省略されたものである。それに対して，（24）’は，イントネーションが上昇調にならないのが普通で，主節は「どうしよう」「困るなあ」「まずいだろう」などの様々

[56] 本稿で，「*」は文に文法的な問題があることを意味する。
[57] 本稿で，「?」は文法論か語用論か判断できないが，不自然なところがあることを意味する。
[58] （23）と（24）は完全文という前提での考察である。
[59] 「たら」と「ば」は両方とも「どうですか」と共起できるが，「たら」は必ず発話時に聞き手に行為を求めることを表しているのに対して，「ば」は「そういうところでみんな静かにすればどうですか」のように必ずしも発話時に聞き手に行為を求めているのではなく，話し手のある種の評価を表す場合もある。

な形式に復元できる。その復元できる形式は決まっていないが，事態に対する好ましくない・避けたい・いやだという判断や評価を表す点は同じである。

（23）と（24）に示しているように，「たら」「ば」と「と」の性質が異なるので，次は実例と関連しながら，「たら」「ば」と「と」に分けてそれらの特徴を考察する。

3.6.1.1.2 「たら」「ば」で終わる未完結文

Kato（2014）は，条件節の典型的な非従属化が「～たら」と「～ば」で終わるものであり，基本的に省略される主節が疑問文に限定され，アドバイスや勧誘を表すという特徴があると述べている。集めた「たら」（8 例）と「ば」（4 例）の合計 12 例[60]はすべて提案や勧奨を表す【行為要求】の性質を持っている。その中の 11 例は聞き手に動作の実施を要求しているが，1 例は聞き手に知識の提供を要求している。

（25）【赤岩と白尾は野球部の部員で，柚子は野球部のマネージャーである。試験前でも白尾が野球ばかりをやっている。それについて】
赤岩「白尾，お前本当に一切勉強しない気か。」
白尾「しない。」
柚子「試験前ぐらいは勉強したら？」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 4 話

（26）【柚子が野球選手になりたいということについて】
柚子の母「いっそ男子として試合に出しちゃえば？」
監督「ばれたら出場停止ですよ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話（再掲）

（25）は「たら」，（26）は「ば」の例である。（25）と（26）は両方とも聞き手に動作の実施を要求している例である。（25）の主節を復元すれば，「試験前ぐらいは勉強したらどうですか」になる。つまり，（25）で，話し手の柚子は，「～たら」という未完結文を通して，聞き手の白尾に勉強するという行為を要求している。しかもその要求される行為の内容は，未完結文の形式文脈に現れているので，主節を復元しなくてもわかるものである。（26）も（25）と同じように，「～ば」で終わっている未完結文の主節を復元すると，「試合に出しちゃえばどうですか」になる。つまり，話し手である柚子の母は「柚子を試合に出す」という提案を通して，聞き手である監督に動作の実施を要求していると言える。

---

[60] 実際の集めたデータによると，「たら」9 例，「ば」6 例の合計 15 例があるが，その中に「～ばよかったのに」及び「～ばよかったのに」の省略によると考えられる例は，それぞれ 1 例と 2 例がある。本研究は，「～ばよかったのに」及び「～ばよかったのに」の省略による「たら」及び「ば」で終わる未完結文を「のに」の未完結文として分析する。

（27）【新しく開発された薬を山田という患者に使うかどうかについて，部下は教授に意見を伺う場面】

部下「この患者で試すということですか。」

教授「病院にとって，患者は二種類。絶対死なせてはならない患者とそれ以外の患者だ。」

部下「でも，万が一副作用が起きたら。」

教授「彼は術後間もない進行胃がんの患者だ。いつ何が起きたとしても不自然はない。」

TBS 系列『アリスの棘』第 4 話

（25）と（26）に対して，（27）は聞き手に知識の提供を要求している例である。（27）では，話し手は部下で，聞き手は教授である。（27）は山田という第三者についての話題である。部下はまず「ということですか」を通して患者に薬を使わせるかどうかについて教授に確認を求めている。教授の回答を受けた後に，部下は「たら」で終わる未完結文を使っている。「万が一副作用が起きたら」は「新しい薬を使った場合に」という限定条件を補足できる。「たら」で繋ぐ従属節と主節には時間の前後関係がある。「万が一」は可能性としての事実を述べているので，主節は仮定事実が起こった後の結果になる。そこで，（27）の主節は，「どうしましょう」や「まずいでしょう」などのような否定的な評価の意味を含む表現に復元できる。つまり，（27）は，話し手は聞き手に動作の実施を求めているのではなく[61]，知識の提供を要求しているとわかる。同時に，二次レベルで，事態に対する話し手の判断や評価という感情も付随していると言える。

知識の提供を要求する「たら」の使い方に対して，（24）で示すように「ば」は，「どうしましょう」と共起しにくいので，知識の提供を要求する用法も見つけられなかった。

以上より，「たら」「ば」で終わる未完結文は意味機能が固定されている側面があるとわかる。「ば」には聞き手に動作の実施を要求する機能しかないが，「たら」には聞き手に動作の実施を要求することと知識の提供を要求することの二つの機能がある。「ば」と「たら」は聞き手に動作の実施を要求するときに，イントネーションが上昇調になり，未完結文に現れる動詞の動作主が聞き手になり，主節を「どうですか」のように復元できる。また，聞き手に求める動作の具体的な内容は未完結文の形式文脈に現れる。他方，「たら」は聞き手に知識の提供を要求するときに，イントネーションが上昇調にならず，未完結文に現れる動詞の動作主が聞き手以外のものになり，主節が「どうしよう」「困るなあ」などの表現に復元できる。また，事態に対する話し手の否定的な判断や評価を表す。

[61] もし対策を実施するには，聞き手が実際の動作を取る必要があるなら，聞き手への行為要求になる。だが，それは知識を提供する要求の次の段階にあるものである。

3.6.1.1.3 「と」で終わる未完結文

集めた「と」の 14 例のうち，5 例は【行為要求】の特性を持つが，他の 9 例は【要求性なし】の例である。この 14 例には，二つの共通点が見られる。一つは，一律に「～ないと」という否定の形で終わっていることである。もう一つは，欠如されている主節が，全て「だめだ/いけない」などの否定的な評価を含む文に復元できることである。そこで，「と」で終わる未完結文は，「ないと＋否定」の省略によるものであるとわかる。否定と否定を組み合わせて強い肯定を構成する表現は，どの言語にも見られるが，日本語は「なければならない」や，「～ないと～ない」，「～べからず」のような表現が選好され，助動詞相当の形式に文法化している。そして，否定を含む従属節と否定を含む主節の組み合わせが慣習化しているからこそ，「ないと」のように省略が可能になったと言える。

（28）【娘は野球部のマネージャーである。娘が小さいときに，野球部の監督はよく一緒に遊んであげた。監督についての話題】
母「あなたのキャッチボールの相手してくれたもの。お父さんの代わりに。恩返ししないとね。」
娘「うん。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

（29）同僚「ちなみちゃんはもともとファッションの仕事とかしたかったんだよな。」
ちなみ「まあね。もう好きなことにこだわっていられる年でもないし。現実見ないとね。」

フジテレビドラマ『FIRST　CLASS』第 1 話

（28）と（29）の未完結文はそれぞれ「恩返ししないと」と「見ないと」という否定形の形をしており，主節を同じく「駄目だね」に復元できるが，（28）は【行為要求】の例で，（29）は要求性なしの例である。（28）では，「恩返しする」という動詞の動作主を補うと，「あなた」になるので，（28）は話し手である母は聞き手である娘に「恩返しをする」という行為の実施を求めていると言える。（29）では，「見る」という動詞の動作主を補うと，「私」になる。（29）は，話し手であるちなみが，聞き手である同僚からの質問に答えている場面で,話し手の答えている内容が自分自身についての情報なので,（29）を【要求性なし】の発話として考えたほうが適切であろう。

以上により，「と」の未完結文は次のようにまとめられる。「用言の否定＋と」の形で現れ，主節は「だめだ」などの否定的な評価を含む文に復元できる。「用言の否定＋と」は義務を表すような意味を持っている。従属節にある用言に関わる動作を行う動作主が聞き手であれば，義務を相手に課すことになるので，「と」の未完結文は【行為要求】の性質があり，聞き手が要求されている動作は用言そのものになる。それに対して，従属節にある用言に関わる動作を行う動作主が話し手である場合，義務の意味である点は変わらな

いが，行為要求は話し手自身に対して行うことは考えられないので，「と」の未完結文に行為の要求性はないと言える。

3.6.1.2　形式文脈と状況文脈による未完結文

「たら」「ば」「と」と違い，「のに」で終わる未完結文は，形式文脈のみによって要求性の種類を推測にくく，状況文脈と緊密な関係を持っている[62]。

「のに」は伝統的には「逆接」の接続助詞に分類され，対照性を強調する機能を持っている。「のに」は，事態が話し手の希望や期待・予測・予期と異なることを述べるのが本来の機能である。現状と話し手の希望のずれによって，話し手の現状への不満や非難・悔恨といった感情的な解釈を推意として引き出すことができる。そのため，「のに」は基本的に話し手の感情を表し，【要求性なし】の発話として現れる。しかし，話し手の不満を招く理由が違うことによって，「のに」で終わる未完結文には要求性が現れる可能性もある[63]。

（30）【エアコンがおかしくなって，事務官が寒い部屋から出た後の発話】
事務官「29 度まで上げてるのに。」
フジテレビ系列『HERO 2』第 4 話

（31）【今日は本来 MIINA に仕事はないが，再撮によって，仕事をすることになった】
川島「MIINA さん，ごめんなさい。再撮なんて。」
MIINA「超無駄。今日オフだったのに。」
フジテレビドラマ『FIRST　CLASS』第 1 話

具体的に言うと，「のに」で終わる未完結文は，（30）のように，その不満が聞き手以外の行為などに起因する場合は，単に話し手の不満を表す【要求性なし】の発話であるが，（31）のように，その不満が聞き手の行為などに起因する場合は，要求性を持つ可能性がある[64]。（30）の未完結文には，事実に対する不満を持つと同時に，聞き手の川島に対する不満や非難もある。聞き手に対する不満や非難は聞き手に対する評価なので，（30）は【受容要求】の性質も持つと考えられる。更に，聞き手にこれから同じようなミスを犯さないことや仕事をしっかりすることを要求している可能性もあると考えると，（30）には【行為要求】の性質もあると言える。それに対して，（31）で，エアコンの調子が悪いという状況文脈から，話し手の事務官の不満をもたらす理由は，聞き手以外のもの（エアコ

---

62 「たら」「ば」「と」は，省略されている形式がある程度固着化したので，文脈との関係が相対的に弱く，推意の取り消しが難しく，慣習的な推意と考えられる。それに対して，「のに」は，省略されている形式が決まっておらず，文脈との関係が強く，推意の取り消しが可能である。
63 形式文脈と状況文脈による「のに」の要求性の変化に関する詳細な分析は，10.1.4 で行う。
64 話し手が聞き手の起こした事実に対する不満を言い出すことは，間接的に聞き手に対して評価をする行為とも理解できる。更に，その事実に関わる行為がまた生じる可能性があれば，発話には聞き手に行為を要求する可能性も現れてくる。ただし，その要求性は必ずあるわけではなく，取り消し可能性を持つ。

ン）であることがわかる。そこで，（31）は聞き手とは関係なく，単なる話し手の感情を表す【要求性なし】の発話である。

3.6.2　接続助詞から要求性の種類を推測しにくい未完結文

「たら」「ば」「と」「のに」と違い，「ので/んで」「から」「が/けど」「し」「て」で終わる未完結文は，その要求性が接続助詞のみから推測しにくく，文脈と緊密な関係を持ち，場面の変化とともに違う要求性が現れうる。ここでは「から」を代表として，未完結文に現れる要求性の種類を考察する。

（32）【柚子がみんなに大事なことを言っている最中，亀沢が居眠りをしている場面】
青志「亀沢。今柚子が大事な話をしてるから。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

（32）は【行為要求】の例である。（32）で，話し手は青志で，聞き手は亀沢である。「柚子が大事な話をしてるから」という形式文脈，柚子の話す対象の一人である亀沢が寝ているという状況文脈，「寝ていると人の話が耳に届かない」という知識文脈から，未完結文の主節を「起きなさい」や「柚子の話を聞きなさい」のように復元できる。また，「亀沢」という呼びかけは，相手を起こすという機能を持つと考えられるので，起きるという行為より，（32）の発話内力は，話し手である青志が聞き手である亀沢に柚子の話を聞くという行為を要求していると考えたほうが適切であろう。

（33）【吉成は研修生で，白雪は同じ職場の先輩である】
吉成「私，新人アルバイトの吉成ちなみです。皆さんよろしくお願いします。」
白雪「ちょっと，あなたの自己紹介なんていらないから。」
フジテレビドラマ『FIRST　CLASS』第 1 話

（33）は【受容要求】の例である。（33）で，話し手は白雪で，聞き手は吉成である。聞き手が自己紹介をしているという状況文脈と「あなたの自己紹介いらない」という形式文脈から，（33）の主節を「やめてください」のように復元できる。「あなたの自己紹介なんていらないから，やめてください」という文の形式から言えば，話し手は聞き手に行為を要求しているようにも見える。だが，聞き手の自己紹介が終わった後に話し手が「あなたの自己紹介なんていらないから」と禁止の意を表したという状況文脈は，知識文脈上，話し手の不満を表していると解釈できるため，（33）は【行為要求】ではなく，聞き手に関する話し手の評価を聞き手に受けてもらうことを要求する【受容要求】として考えたほうが適切である。即ち，話し手は聞き手に対して，「あなたはまだここで自己紹介できるような立場ではない」という評価を下している。

（34）【柚子が野球選手になりたいということに対して】

柚子「何で全部だめなの。」

監督「そうやってマネージャーの仕事放棄していること自体もう勝負の足引っ張ってるだろ。」

柚子「諦めませんから。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

（34）は【調整要求】の例である。話し手は柚子で，聞き手は監督である。まず，（34）には，柚子が野球部のマネージャーであるという状況文脈と，柚子が野球選手になることを希望しているという知識文脈がある。その状況文脈と知識文脈によって，柚子の願望に対する監督の返事には，「マネージャーの仕事を怠らずやりなさい」という推意があることがわかる。また，柚子の発話である「諦めません」の対象を「野球選手になりたい気持ちを」のように補足できる。つまり，柚子の「諦めませんから」という形式文脈は，監督の発話にある推意に対する答えである。言い換えれば，聞き手の「マネージャーの仕事を怠らずやる」という推意に対して，話し手は形式文脈を通して拒否する意を表し，「柚子はマネージャーではなく，野球選手として行動する」のように聞き手の考えの調整を求めている。そこで，（34）の未完結文は，主節を復元しなくても意味機能が完結しており，主節を復元しようとしても，「ご理解ください」などのような意味の希薄なものになるだろう[65]。

（35）【大学院に行くと決心した人をほめた後で】

ア「私なんか、全然もう、大学入学したときから、全然、院なんか頭になかったですからね。」

『BTSJ 初対面雑談 2』[66]

（35）は【要求性なし】の例である。話し手が大学院に行くと決めた人をほめたことから，（35）の発話には，話し手が院に行く人に対してプラスの評価を持つという知識文脈があるとわかる。その知識文脈と「私なんか」「全然、院なんか頭になかった」という形式文脈や，話し手が大学院へ行くと決めた人と同じような大学生であるという状況文脈から，（35）は話し手が自分に対するマイナスの評価を下していると言える。そこで，（35）の主節を復元しようとしても，「私は全然だめだ」などのような自分に対するマイナスの評価になるだろう。つまり，（35）は話し手の個人の感情で，【要求性なし】の発話である。

---

[65] （34）のような場合は，主節が省略されていると考えるより，接続助詞「から」が付加されているという考えも可能である。それについては，10.3 で詳しく議論する。

[66] BTSJ における引用は，発話内容のみを掲示しており，「」が筆者によるものである。

3.7　未完結文における要求性の特徴

主節を復元した上で，要求性による未完結文の種類を考察すると，未完結文に現れる要求性には三つの特徴が見られる。

第一の特徴は，要求性が復元された主節から推測できる場合のほかに，主節に関わりなく従属節のみから推測できる場合もあるということである。

（36）a【シーンが変わったところで，年上の先輩が訓練生たちに向かって】
年上の先輩「さっそく頼みたいことがあるんだけど。」
フジテレビ系列『ミス・パイロット』3 話
b【亀沢が家の事情で，お金に困っていると聞いた後に，同級生の樫山は助けようと思って】
樫山「亀沢さん，すいません，あの，これただの文法具屋の割引券なんですけど」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』3 話

例えば，（36a）と（36b）である。（36a）と（36b）は両方とも【行為要求】の例であるが，（36a）は主節を復元しなくても，未完結文にある「頼みたいことがある」という形式文脈から要求性を推測できるのに対して，（36b）の要求性を判断するには主節を復元する必要がある。（36b）の形式文脈にある未完結文は単に話し手の手元にあるものの特性を述べている。「割引券は買い物を安くするもので，お金に困っている亀沢にとって必要なものである」という知識文脈によって，「どうぞ受け取ってください」という主節を復元してはじめてその要求性がわかるだろう。

第二の特徴は，復元した主節があくまでも推意であり，そこから推論した要求性が取り消し可能だということである。

（37）【悠馬は同僚の水野に好意を持っている。二人が歩いている場面】
悠馬「ところで，水野先生は週末何されてます。」
水野（悠馬の顔を見た）
悠馬「あの，バーベキューパーティーがあるらしくて。」
TBS 系列『アリスの棘』第 4 話

例えば，（37）で，話し手の悠馬はバーベキューパーティーがあることを言う前に，聞き手の水野の週末の予定を聞いた。世界知識によって，（37）は話し手が聞き手を誘う場面であることが判断できるので，主節を「一緒に行きませんか」のように復元できる。しかし，話し手の発話が未完結である以上，「バーベキューパーティーがあるらしくて」の後に「僕は用事でいけないですよ」などの別の発話も可能である。

第三の特徴は，会話的要求において，完結文は命題レベルと推意レベルの二段階に分けて考えられるが，未完結文は主節が省略されているので，二段階ではなく，三段階に分けて考える必要がある点である。つまり，未完結文という言語形式というレベル，主節を復元した完結文の命題レベル，復元された完結文の推意レベルという三つの段階である[67]。

（38）【吉成は研修生で，白雪は同じ職場の先輩である】
吉成「私，新人アルバイトの吉成ちなみです。皆さんよろしくお願いします。」
白雪「ちょっと，あなたの自己紹介なんていらないから。」
フジテレビ系列『FIRST　CLASS』第 1 話（再掲）

例えば，（38）で，話し手は白雪で，聞き手は吉成である。結論から言えば，（38）は，未完結文のレベルでは【調整要求】の発話で，主節の復元した完結文の命題レベルでは，【行為要求】を持つ発話で，推意レベルでは【受容要求】の発話である。（38）で話し手の未完結文は，聞き手が必要と思われる行為に対して，必要性はないという観点を述べているので，聞き手の世界知識へ関与し，調整してもらおうとする【調整要求】の発話として考えられる。聞き手が自己紹介をしているという状況文脈と「あなたの自己紹介いらない」という形式文脈から，（38）の未完結文の主節を「やめてください」のように復元できる。「あなたの自己紹介いらないから，やめてください」という文の形式から言えば，話し手は聞き手に行為を要求しているようにも見える。だが，話し手が「あなたの自己紹介なんていらないから」を発するときに聞き手の自己紹介がもう既に終わっているという状況を考慮すれば，（38）は推意レベルで，話し手が聞き手に対して，「あなたはまだここで自己紹介できるような立場じゃない」という評価を下していると考えられる。（38）で，話し手が聞き手を評価することが許容されるのは，話し手は上，聞き手は下という人間関係による。そこで，（38）は，未完結文としては，聞き手に世界知識の変化をしてもらおうとする【調整要求】の発話である。主節を復元した完結文としては，命題レベルで「自己紹介をやめる」という【行為要求】をしているが，推意レベルとしては聞き手に対する評価を受けてもらおうという【受容要求】の発話と考えることができる[68]。

3.8　本章のまとめ

本章の目的は，要求性に基づき，未完結文の種類に明確にすることである。そのために，大きく二つの部分に分けて考察を行なった。

一つ目は，未完結文や完結文を問わず，日本語の発話における要求性の種類を明確にした。具体的には，発話の要求性の有無と要求の内容によって要求を分類する仮説を立てた。しかし，この仮説には要求内容としての「行為」と「知識」の区分や要求性を決める基準

[67] 無論，この三段階は要求性が必ず違うわけではないが，考察の仕方としては三段階に分けて考えることができるということである。
[68] 要求性なしと言っても，無論，【注意要求】【理解要求】【反応要求】という無標な要求がある。

などに関してなお問題がある。そのため本章では，それらの問題を解決するべく，仮説の改善を試みた。その修正案は次のようなものである。無標である社会規範的要求と有標である会話的要求に分けた後，会話的要求に対して，更に命題レベルと推意レベルの異なる尺度を立てた。その結果，日本語の発話において，無標な要求は，【注意要求】【理解要求】【反応要求】の三種類があり，有標な要求は，【受容要求】【行為要求】【調整要求】の三種類があることがわかった。

二つ目は，要求性に関する修正案に基づき，未完結文を分類する方法を提案した。即ち，推意レベルから未完結文における有標な要求（会話的要求）によって，未完結文を【要求性なし】【行為要求】【受容要求】【調整要求】の四種類に分けることである。そして，実例に基づき，要求性を通して未完結文を考察した結果，未完結文には，接続助詞から要求性を容易に推測できるタイプ（「たら」「ば」「と」「のに」）と要求性を推測しにくいタイプ（「ので/んで」「から」「が/けど」「し」「て」）の二種類があることがわかった。さらに，未完結文における要求性は，「形式文脈に頼る場合もあれば頼らない場合もある」「取り消し可能性がある」「三段階に分けて考える必要がある」という三つの特徴があることがわかった。

要求性の有無や種類の違い，要求性のレベルの違いによって，未完結文は意味上の完結性がそれぞれ違うという特徴も見られる。これについては次章で論じる。

第 4 章　未完結文における境界性

本章では，同じく未完結文であっても，それぞれに現れる境界性と意味機能の完結度が異なるという点について，文法構造に基づく統語論の観点と，第 3 章で考察した要求性に基づく語用論の観点に分けて，未完結文における境界性の違いを考察する。

4.1　未完結文における意味機能的完結度の差異

文法形式上は同じ未完結の文でありつつ，実際の使用では，意味上の完結度がそれぞれ異なっており，完結度が低いものもあれば，完結度が比較的に高いものもある。

（39）【野球の監督である青志はおかみさんのところで下宿している。おかみさんは青志の自信のないところを見て，励まそうとする場面】

おかみさん「いい？私はあなたに投資してるんだからね。アパートだって貸してあげたし。」

青志「だから，家賃だって，ちゃんと払ってるじゃないですか。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話

（40）【男子 1，男子 2，梨沙の三人がいる場面。男子 1 が梨沙と男子 2 の共通友人で，梨沙と男子 2 はお互いに知らない】

男子 1（友達の梨沙に向かって）「今さ，こいつがお前のことかわいいって。」

男子 2「言ってないす。」

男子 1「言ってたじゃねえかお前。」

男子 2「言ってないす。」

男子 1「言ってたし。」

映画『桐島、部活やめるってよ』

例えば，（39）と（40）は同じく接続助詞「し」で終わる未完結の文であるが，（39）は「頑張りなさい」などの主節を復元することが可能であるのに対して，（40）は主節を復元することが困難で，意味上の完結度がより高く感じられる。そこで，本節では文法形式上で未完結である文を対象とし，そこに現れる完結度の差異を明確にすることを目的とする。

4.2 先行研究と問題点

4.2.1 白川（2009）の考え

2.2 と 3.1 の先行研究で白川（2009）の言いさし文に関する分類という考えを述べた。

白川（2009：7）は「形式上、主節を伴わずに従属節のみで表現される文」を「言い残し」「言い終わり」の二種類に大きく分けた。白川（2009）で明確に述べられていないが，同じく未完結文という形式でありながら，話し手の伝達しようとする内容が言い終わっているかどうかというところが異なるというのは，未完結文における意味内容の完結度が違うと理解できる。言い換えれば，「言い残し」と「言い終わり」は，完結度が違う。「言い残し」に比べ，「言い終わり」というタイプの未完結文は意味の面で高い完結度を持つと考えられる。

以上より，同じく従属節のみで終わる未完結文であっても，完結度はそれぞれ異なるとわかる。ただし，完結度の違いによって未完結文を単純に「言い終わり」と「言い残し」の二種類に分類できるかどうかはなお検証する必要がある。

本研究は，未完結文に完結度の違いがあるという白川（2009）の考えを参考するが，未完結文における完結度の違いを連続的に捉える立場を取る。

4.2.2 丸山（2008）の考え

加藤（2007）は日本語の述語構造に「弱境界」と「強境界」があると述べたが，その概念を利用し，丸山（2008）は話し言葉を対象として，節境界直後の構造的な切れ目の大きさという観点から，節境界に「絶対境界」，「強境界」，「弱境界」という 3 段階のレベルを設定した。絶対境界は「いわゆる文末表現に相当する境界であり、その直後には発話の完全な切れ目があると見なされる」，強境界は「いわゆる文末表現ではないが，構造的に大きな切れ目を成すと考えられる節境界」であり，弱境界は「通常は発話の切れ目になることはないが，稀に発話の切れ目になり得る従属節の境界である」（丸山 2008： 86）。そして，丸山（2008）は具体的な表現と関連させつつ次のようにまとめている。

絶対境界　文末、文末候補、と文末

強境界　並列節ガ、並列節ケレドモ、並列節ケレド、並列節ケドモ、並列節ケド、並列節シ

弱境界　条件節タラ、条件節レバ、理由節カラ、理由節ノデ、タリ節、テ節、テハ節、テモ節、テカラ節、トカ節、ノニ節、連用節、引用節、トイウ節、間接疑問節、並列節デ、並列節ナリ、フィラー文、感動詞、接続詞

（丸山 2008：86）

本研究は丸山（2008）の従属節で終わる未完結文に境界の強弱があるという考えを参考

にする。ただし，次の二点で丸山（2008）とは異なる立場を取る。第一に，境界が「強境界」と「弱境界」に単純に二分類できるものではなく，段階性を持つものであると考える。丸山（2008）は従属節で終わる未完結文を「強境界」と「弱境界」の二種類に分けたが，「強」と「弱」の定義が曖昧であるように，境界は明確に「強境界」と「弱境界」に二分類できるものではない。第二に，境界は単に文法形式によって決められるものではなく，意味と文脈によって変わる場合もあると考える。丸山（2008）は文法形式を基準に，「が」「けれども」「し」で終わる未完結文を除き，それ以外の従属節で終わる未完結文を全て「弱境界」に分類したが，（39）と（40）からわかるように，同じく「し」で終わる未完結文でも文脈によって違う完結度が見られ，境界性も異なると考えるのが適切であろう。

そこで，本研究は丸山（2008）の境界性の考えを参考にしつつ，統語論と語用論という新たな二つの観点から，主節欠如の未完結文における境界性の強さの違いを明確にする。

4.3 統語論の観点から

4.3.1 文法形式に基づく境界性の仮説

文法形式上から考えれば, 主節欠如の未完結文は完結文と構造的に類似する場合もある。

（41）a 返事は今じゃなくていいから。
　　b 返事は今じゃなくていいよ。

例えば (41) に示しているように，(41a) は接続助詞「から」で終わる未完結文で，(41b) は終助詞「よ」で終わる完結文であるが，「から」と「よ」の品詞性の違いを除き，(41a) と（41b）は文法的な構造としては同一である。そこで，本研究で完結文との構造の類似度から，未完結文の統語論的境界性を捉える。

（42）明日天気がよかったら／よければ／よくて。

（41a）は，接続助詞「から」が「いい」という形容詞の連体形（＝終止形）に接続しているので，（41b）の完結文と同じような構造を持っているが，（42）に示されているように，接続助詞の統語的制約によって，未完結文と完結文との構造的類似度が下がるような場合もある。

そこで，統語的観点から未完結文の境界性を考えるときに，完結文と構造的類似度が高い未完結文を「強境界」に，完結文との構造的類似度が比較的低い未完結文を「弱境界」に分類することが考えられる。構造的類似度が高いかどうかを判断するには，従属節の節末に現れる用言の形態（＝接続助詞「X」が前接する形態）が終止形であるかどうかということが，分類の基準として考えられる。具体的には，節末が終止形である場合が「強境

界」にあたり，終止形でない場合が「弱境界」にあたる。これを表 10 ように示すことができる。

特徴	「X」の形式	境界
用言の活用形に付く	「たら」「ば」「て」	弱境界
用言の終止形/連体形に付く	「と」「ので／んで」「のに」「から」「が/けど」「し」「って」	強境界

表 10　未完結文における統語的境界性の仮説

4.3.2　仮説の問題点

4.3.1 で，完結文との文法的構造の類似度から，未完結文を表 10 のように「強境界」と「弱境界」に分類してみたが，そこには二つの問題点がある。

一つ目は，「と」の分類である。表 10 では，単に接続助詞「X」が前接する用言の形式から考察したが，各形式の性質を明確にするには，用言のみならず，従属節「AX」に現れうる各要素の全体像を考察する必要がある。南（1974，1993）は従属句の種類を考察する際に，様々な構成要素に分けて従属句の特徴をまとめている。表 10 にある考察対象に限定してそのまとめの結果を見ると，「過去形」（南 1974）・「～タ・ダ」（南 1993）という項目におけるばらつきが最も顕著である。それに基づき，「X」の前にテンスが現れるかどうかによって，表 10 にある研究対象を表 11 のように整理することができる。その整理した結果は南（1974，1993）でのまとめと一致している[69]。表 11 からわかるように，テンスが用いられない未完結文では，「と」を除き，全て「弱境界」にある。そこで，「と」を「強境界」にするのは再検討する余地があると言える。

テンスの使用は可能	強境界	「ので/んで」「から」「のに」「し」「が/けど」「って」
テンスの使用は不可能	弱境界	「たら」「ば」「て」
	強境界	「と」

表 11　従属節「AX」に現れるテンスの可能性

二つ目は，「ので」「のに」「から」「が/けど」「し」「って」を全て「強境界」に分類することの妥当性である。現代日本語では，形容詞と動詞の連体形と終止形が中和されているので，形式上区別できない。そこで，同じく「強境界」に分類された未完結文は，実際は用言の終止形に付いているのか，用言の連体形に付いているかが判断しにくく，「強境界」にある未完結文はそれぞれ違う性質を持つ可能性もある。

[69] 南（1974，1993）は，機能によって「て」を四種類に分けて考察しているが，表 11 にある「て」は単に形式という観点から考察された結果である。

（43）a 空気がすごくきれいなので。
　　b 空気がすごくきれいだし。
　　c 空気がすごくきれいだね。

例えば（43）で，a と b はそれぞれ「ので」と「し」で終わる未完結文であるが，c は完結文である。表 5 によると，「ので」と「し」は同じく「強境界」に分類されるが，（43）に示しているように，（43a）の「ので」より，（43b）の「し」は完結文との構造的類似度が高い。そこで，表 10 の「強境界」にあたる表現を再検討する余地があると言える。

4.3.3　修正案

まず，「と」の分類に関して，テンスが付けられない点から言うと，完結文としての性質を揃えていないとも理解できるので，本研究では「と」を「弱境界」にする。

そして，表 10 の「強境界」にある表現の不均質の問題について，本研究は形容動詞によって再分類するという修正案を考えている。

2.3.1 で，Kato（2014）は非従属化に主節の省略によるパターンと接続助詞の付加によるパターンの二種類があることを紹介した。さらに，接続助詞が付加されたことを証明するには，（44）と（45）に示しているように，Kato（2014）は形容動詞という基準を通して，「もの」と「こと」が形式名詞から終助詞に変わったと指摘した。

（44）a 立派なものだ。
　　b 立派だもの。
（45）a 立派なことだ。
　　b 立派だこと。

Kato（2014）の（40）と（41）からの引用[70]

現代日本語では，動詞と形容詞の終止形と連体形が統合されたが，形容動詞の連体形と終止形の語形は異なる。そこで，Kato（2014）の考えを参考にし，表 10 の「強境界」にある未完結文の境界性が不均質であるという問題を解決するために，形容動詞によって，「強境界」にある表現を再分類する。具体的には，接続助詞「X」が形容動詞の連体形に付く場合は「強境界」にあたるとし，接続助詞「X」が形容動詞の終止形に付く場合は「特強境界」にあたるとする。そうすると，「ので」「のに」は形容動詞の連体形に付くので，「強境界」にあたること，「から」「が/けど」「し」「って」は形容動詞の終止形に付くので，「特強境界」にあたることが簡単にわかる。

以上より，表 10 にある仮説を表 12 のように修正できる。

[70] 原文は英語であるが，日本語訳は筆者による。

境界性	性質	「X」の形式
弱境界	用言の活用形に付く。文法構造上完結文としての性質を備えていない。	「たら」「ば」「て」「と」
強境界	動詞/形容詞の終止形/連体形に付くが，形容動詞の連体形にも付く。	「ので／んで」「のに」
特強境界	動詞/形容詞の終止形/連体形に，形容動詞の終止形に付く。文法構造上完結文としての性質を備えている。	「から」「が/けど」「し」「って」

表 12[71]　未完結文における統語的境界性の修正案

4.4　語用論の観点から

語用論から未完結文の境界性を考えるときに，発話の意味が完結であるかどうか，すなわち意味上の完結度が有効な基準である。つまり，意味的完結度が高い未完結文はより強い境界を持つと考えられる。

本稿は第 3 章で述べた要求性の観点から，未完結文の意味的完結度を明確にする。

まず，第 3 章での要求性の考察結果を確認する。第 3 章で，未完結文は形式上未完結であっても，完結文と同じように，要求性という観点から捉えられることを述べた。第 3 章で社会規範的要求と会話的要求に分けて考察したが，ここでは会話的要求に限定する。【受容要求】【行為要求】【調整要求】という三種類の有標な要求と【要求性なし】という無標な要求のみ持っているものと組み合わせて，未完結文は，【受容要求】【行為要求】【調整要求】【要求性なし】の四種類があると言える。

そして，2.3.3 で述べた分析資料に基づき，409 個の「ば」「たら」「と」「から」「ので／んで」「て」「って」「のに」「し」「けど／が」で終わる未完結文を例として，その要求性に基づき，それぞれに現れる境界性について考察した。その結果，未完結文は基本的に二つの場合で意味の完結度がより高く，比較的強い境界性を持つ傾向が見られる。一つは，【行為要求】【受容要求】【調整要求】という有標な要求を持っておらず，無標な要求のみ持っている発話，即ち【要求性なし】の未完結文である場合であり，もう一つは，要求性のある未完結文において，その要求される具体的な内容が形式文脈のみで判断できる場合である。以下でそれぞれの場合について詳しく考察する。

まず，【要求性なし】の未完結文の場合について述べる。

（46）a【新人の明日美という医者が周りの同僚と仲良くなれないところを見たのち，看護師の星野が明日美に向かって】

星野「来たばっかで，うまくいかないこともあるだろうけど，愚痴でも何でも聞くから，ねっ，明日美。」

[71] 8.1 の節で言いさし文を完結文に調整する際に，表 12 の考えが参考になる。また，本来未完結文における完結度を考察するには，統語論の観点からの表 12 の考えを 4.4 の語用論の考えと総合的に考察して議論するのがより理想的であるが，それを今後の課題にする。

TBS 系列『アリスの棘』第 4 話

b【大学院に行くと決心した人をほめた後で】

ア「私なんか、全然もう、大学入学したときから、全然、院なんか頭になかったですからね。」

『BTSJ 初対面雑談 2』（再掲）

（46a）は【行為要求】の未完結文で，（46b）は要求性のない未完結文である。（46）より，（46b）は，意味機能の完結度が高く，より強い境界性を持つ。（46a）で，話し手は星野で，聞き手は明日美である。話し手の「愚痴でも何でも聞く」という発話の主語を補完すると，「私は愚痴でも何でも聞く」になるので，（46a）の主節は「私に言ってくださいね」のように補足できる。つまり，（46a）で，話し手は聞き手に「言う」という行為を要求しており，しかもその要求の内容は形式文脈に現れていないと言える。それに対して，（46b）で，話し手が院に行く人に対してプラスの評価を持つという知識文脈と，「私なんか」「全然院なんか頭になかった」という形式文脈から，話し手が自分に対するマイナスの評価を下していることが推測できるので，（46b）は要求性のない未完結文だと判断でき，その主節を復元しようとしても「自分はだめだ」などの意味希薄の内容になる。そこで，（46a）より，（46b）の要求性のない未完結文は意味的完結度が高く，より強い境界性を持つと言える。

次に，要求性のある未完結文の場合について，要求の種類ごとに考察する。

まず，【行為要求】の場合について述べる。

（47 ）a[72]【百貨店子供服売り場の会話】

店員「可愛らしい感じとかだったらもう 1 つ売り場のほうがね、結構ねー、全然デザインが違うんで。」

客「あー、じゃあ、向こう見てきます。」

金（2007）の（7）の引用

b【赤岩と白尾は野球部の部員で，柚子は野球部のマネージャーである。試験前でも白尾が野球ばかりをやっている。それについて】

赤岩「白尾，お前本当に一切勉強しない気か。」

白尾「しない」

柚子「試験前ぐらいは勉強したら？」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 4 話（再掲）

（47 a）と（47 b）は両方とも【行為要求】の未完結文であるが，（47 a）より，（47 b）は意味機能の完結度が高く，より強い境界性を持つ。（47 a）で，話し手は店員で，聞き

[72] 下線は筆者によるものである。

手は客である。「可愛らしい感じとかだったら」という形式文脈から，聞き手が物を探しているという状況文脈が推測でき，また，「もう 1 つ売り場のほう」という形式文脈から聞き手の探しているものが別の場所にあると考えられるので，（47 a）の主節は「そこへ行ってください」のように復元できる。つまり，（47 a）は聞き手に行為を要求している場面で，しかもその行為の内容は形式文脈に現れていない。それに対して，（47 b）は話し手の柚子が聞き手の白尾に「勉強する」という行為を要求している場面であるが，その要求の内容は「試験前ぐらいは勉強したら」という未完結文の形式文脈に現れているので，主節を復元しなくてもわかる。つまり，（47 a）より，（47 b）は意味の完結度が高いと言える。

次に，【受容要求】の場合について述べる。

（48）a【長女と次女の兄弟関係は悪いので，長い期間連絡を取っていない状況である】
次女「もしもし」
長女「あ，夏江さん，お久しぶり。さっきもかけたんだけど。」
次女「しょうがないでしょ。店忙しいんだから。」
『ほっとけない魔女たち』第 1 話

b【柚子は城徳高校の野球部のマネージャーであり，記者は城徳高校の野球部の記事を書くことを任命された。】
記者「まったく。これじゃあ，弱い高校について弱いと書くだけの誹謗中傷の記事になっちゃうわ。」
柚子「だったら，書かなきゃいいじゃないですか。」
記者「そういうわけには行かないでしょ。私はもう城徳野球部のルポを書くって決めちゃったんだから。」
柚子「そんな勝手に決められても困るんですけど。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話

（48a）と（48b）は両方とも「けど」で終わる【受容要求】の未完結文であるが，（48a）より，（48b）は，意味機能の完結度が高く，より強い境界性を持つ。（48）で，話し手は長女で，聞き手は次女である。（48a）の電話中という状況文脈によって，「さっきもかけたんだけど」という発話をまず「さっきも電話をかけたんだけど」のように補完できる。また，電話をかけて，しかし聞き手が出なかったという状況文脈と，補完した形式文脈によって，（48a）の未完結文の主節を「なんで出なかったの。／しかし君は出なかった」という事実に復元することができる。話し手と聞き手の関係がよくないという文脈を含めて考慮すると，話し手の発話は，聞き手が電話に出なかったということに対して，話し手が不満を持ってマイナスの評価をしていることがわかる。つまり，（48a）には，聞き手に対する評価を聞き手に受けてもらうという【受容要求】の性質を持っていると言える。しかも，その要求性は，主節を復元してはじめて読み取れるものである。それに対して，（48b）

は，その【受容要求】の内容，即ち聞き手に対する評価が，未完結文という形式文脈に現れている。（48b）で，話し手は柚子で，聞き手は記者である。話し手は，城徳高校の野球部のマネージャーであり，聞き手は城徳高校の野球部を取材する立場である。話し手と聞き手のそれぞれの身分によって，（48b）の未完結文の主語は，「私」や「私たち野球部」のように補完できる。そのため，（48b）は，聞き手の行動に対して，話し手は「困る」というマイナスの評価を下していることがわかる。つまり，（48b）は，聞き手の行動に対するマイナスの評価を聞き手に受けてもらうという【受容要求】の性質を持っている。しかも，その要求の内容は，（48b）の未完結文の形式文脈に現れており，主節を復元しなくてもわかるものである。よって，（48a）より，（48b）は，より強い境界性を持っていると言える。

最後に，【調整要求】の場合について述べる。

（49）a【航太は美織の父が経営している診療所の医師である。美織も医師である。なぜ医者になったという話題について】

美織「患者さんを自分の手で助けてさ，私も『ありがとう』って感謝されたいなって。」
航太「いや，すばらしいね。そうやって，人の命を救いたいっていう気持ち。」
美織「って思ってたんだけどね。」
航太「うん？」
美織「なんでもない。」

日本テレビ系列『海の上の診療所』第 4 話

b【スウェーデン語の言語研究がまだあるかどうかについて】

ア「あ、ありましたよね。」
イ「はい、ありましたありました。」
ア「今は」
イ「今もあります。」
ア「もうないんですけど。」

『BTSJ 初対面同性同士雑談 1』

（49a）と（49b）はともに【調整要求】の未完結文であるが，（49a）より，（49b）はより強い境界性を持つ。（49a）で，話し手は美織で，聞き手は航太である。（49a）は，「医者になる理由という話題についての発話である」という状況文脈と，聞き手の「すばらしいね。そうやって，人の命を救いたいっていう気持ち」という形式文脈から，聞き手の発話には「美織が人の命を救いたいから医者になったのである」という推意が推測できる。さらに，話し手の「思ってたんだ」という過去形から，発話時点でその考えがもう既に変わったということが推論できる。つまり，話し手は，「思ってた」という過去形を通して，聞き手に「美織が人の命を救いたいから医者になったのである」という考えを調整するように要求している。その要求の内容は話し手により文法形式を通して明確に言及さ

れていない。それに対して，（49b）は調整の内容が形式文脈に現れている。（49b）で，アは話し手で，イは聞き手である。聞き手の「あります」という発言に対して，話し手は「もうないんですけど」を通して聞き手に明確に知識の調整を要求している。そこで，(49a)より，（49b）はより強い境界性を持つと言えるだろう。

4.5 本章のまとめ

本章では，「ので/んで」「から」「たら」「ば」「と」「のに」「が/けど」「し」「て」「って」に限定し，統語論と語用論の二つの観点から，主節欠如の未完結文に現れる境界性の違いについて考察した。その結果，統語論の観点では，完結文との文法的構造上の類似度から，「たら」「ば」「て」「と」が「弱境界」に，「ので」「のに」が「強境界」に，「から」「が/けど」「し」「って」が「特強境界」に分類された。語用論の観点では，無標な要求のみ持っている【要求性なし】の未完結文と，要求の内容が未完結文の形式文脈に現れる場合は，意味機能の完結度が高く，比較的強い境界を持つという傾向が明らかになった。本章では，語用論の観点からの考察で，要求性という基準しか考察できなかったが，要求性以外にどのような要素が関わるかは今後の課題にする。

以上のように，第 3 章と第 4 章という第Ⅱ部では，未完結文の要求性と境界性を考察し，未完結文の種類と完結度の違いを検討した。次に，第Ⅲ部では，未完結文の選好される動機を考察する。未完結文の選好される動機を考察するための前提条件として，まず第 5 章では，未完結文が使用できる場面を考察する。

第Ⅲ部

「動的視点からの未完結文の使用条件と使用動機についての考察」

第 5 章　未完結文の使用における語用論的条件

書き言葉では，聞き手は不確定であり，さらに正式性が要求されるため，未完結文は文法形式上不完全であるので，使用が難しいと予測される。そこで，本章は，語用論という観点から，接続助詞で終わる未完結文の典型的なパターンを中心に，外的要素と内的要素に分けて未完結文の使用にどういう制約があるのかを考察する。

5.1　先行研究と問題点

（50）【秘書は頭取の命令を受けて半沢を連れて訪ねる場面，頭取の事務室の外で】

a　秘書「営業第二部半沢次長がいらっしゃいました。」

a’秘書「#[73]営業第二部半沢次長がいらっしゃいましたから。」

TBS 系列『半沢直樹』第 6 話

日本語の日常会話では，文末に言い切らないような発話が，言い切ることより，頻繁に用いられている。しかし，未完結文は日常会話で頻繁に用いられているのが事実であるが，それがどんな時も問題なく使えるか，あらゆる場面に一律に言えるかという問題点が残っている。例えば，（50）の場面で，未完結文の（50a’）の容認度が下がる。そこで，本章は，未完結の言い切らないような表現があらゆる場面が使えるか，そうでないなら，どのような制約があるかを明確にすることを目的とする。

未完結文については，個別の表現であれ，系統的な記述であれ，機能に関する研究がほとんどである。管見では，未完結文の使用場面などについての議論がまだ少ない。

加藤（2009a：70-71）は日本人の「文を閉じたくない」ということについて，「ゆったりした雰囲気で使う文体ということなら、むしろ適切だとも言えるくらいである。しかし、逆に言えば、これは仲間内での非公式の話し方として許されるものであって、公式の場で厳密さや厳格さが重要となる場合にはそぐわない」と述べている。そこで，加藤（2009a）によると，言いさしは公式の場で使用しにくいことがわかる。

金（2007）は調査に基づき，接客によく用いられる非定型表現をまとめた中で，「接続助詞終了型」を一つの種類として述べた。そこで，未完結文は接客の場面で使用可能であると推測できる。

上原・福島（2004）は普通体と丁寧体の「裸の文末形式」について考察し，「聞き手を意識しない状況での独話や回想」の場合，「相手に対する待遇意識が一時的に消える状況」のときに「独話的なニュアンス」を伴う場合，「相手の求める情報なり，自分の表明・伝達したい情報なりを提示するのみで用が足りる」（上原・福島 2004：109）場合，「裸の

[73] 本研究では，「#」とは文が語用論的に不適切であることを意味する。

文末形式が用いられている」と述べている。未完結文は接続助詞などで終わることが多いので，上原・福島（2004）の研究は，未完結文が「裸の文末形式」のよく使用される場合に，逆に使用が制限されているという可能性があることを示唆している。

以上からわかるように，未完結文の使用上の制約についての先行研究が少なく，ほとんど触れる程度である。加藤（2009a）は未完結文が公式の場で使用されることが少ないとまとめたが，公式の場とはどのような場を指すのかを議論していない。そこで，本研究は，公式の場に関与する要素を明確にし，未完結文の使用状況を詳しく分析する。

5.2 未完結文の使用における制約

5.2.1 伝達の媒体における制約

伝達の媒体は情報を伝達する手段を指し，大きく文字と発話の二つが考えられる。いわゆる書き言葉と話し言葉の違いである。言葉の使用は発話のみならず，文章でも可能なので，ここではまず伝達媒体の違いに注目して未完結文の使用を確認する。

未完結文は基本的に話し言葉でしか用いられず，書き言葉では使用しにくいが，その理由は概ね二つ考えられる。

一つは，書き言葉における聞き手の不確定の性質による。未完結文が主節の省略による場合が多いということからわかるように，未完結文を理解するには，省略されている主節を補完することが聞き手に要求されている。そこで，未完結文に関する話し手と聞き手の共通認識が必要となる。典型的な書き言葉は，話し手が発話する時点と聞き手が反応する時点に比較的長い期間のずれがあり，聞き手が不特定であることが多い。そうなると，聞き手の瞬時的な反応を観察することは不可能なので，話し手は未完結文を使用しても，聞き手が理解できるかどうかを確かめることができない。更に，話し手の言葉を読む相手は不確定である以上，話し手と聞き手の共通認識も保証できず，未完結文を簡単に理解できない可能性も高い。

もう一つは，書き言葉に現れる正式性による。正式性は言葉の正確度，即ち言葉が文法の規則に従う程度とも理解できる。典型的な書き言葉は，線条性がないので，言葉の作成において，話し手は時間をかけて作ることができるのみならず，書き終わった言葉を削除したり修正したりすることもできるので，話し言葉より文法の規則に従って作成することが比較的容易である。また，文字の記録として存在するという性質も，書き言葉が文法通りになることを要求する。基本的には，言葉の発生元の属性が公的であればであるほど，言葉の読む相手が多ければ多いほど，書き言葉の正式性が強く，未完結文も使用しにくくなる。

（51）【大学の学生証の裏に】

a　本証を拾得された方は、本学までご連絡願います。

b? 本証を拾得された方は、本学までご連絡願いしたいけど。

（52）【事務室共有の冷蔵庫に長時間置きっぱなしのものについて】

a これ，長時間置きっぱなしなので，明日処分します。

b これ，長時間置きっぱなしなので，明日処分しますから。

例えば，（51）の言葉の発生元は大学という公的機関で，言葉の読む相手は特に限定されていないので，（51b）のような未完結文は使用できない。それに対して，（52）は同じく文字になっている言葉であるが，発生元は事務室に所在する個人で，読む相手も事務室の人に限定されている。同じ事務室に所在する人は比較的親しい関係にあると想像でき，また発話の内容もプライベートの話なので，総合的に考えた上で，（52a）は（52b）のように未完結文にすることが可能である。そこで，（51）と（52）は同じく書き言葉でありながら，（52）より，（51）はより正式的で，未完結文の使用における制約がより強い。

以上は理由を分析しながら，伝達の媒体が文字である場合は未完結文が使用しにくいことを確認した。しかし，ネット上のチャットやメッセージ等は文字でありながら，典型的な言葉の性質から逸脱し，話し言葉に近い性質が見られ，擬似話し言葉とも考えられるので，未完結文の使用が可能である。例えば，（53a）～（53c）の例である。

（53）a【友人同士の line でのやり取り】

ア「明日遊びの日だよね。」

イ「朝 10 時迎えに行くから。」

b【twitter でのメッセージ】

「例え付き合っていても、仕事だったり試験だったりで一緒にいられない時があるのは当たり前のことなんだよね。どちらが悪いわけでもないし、仕方がないことなんだよ。でも、なぜか寂しさが優先されて相手を責めたくなってしまうときがあるのを、どうにかできたらいいのにな･･･」

c【広告のキャッチコピー】

「僕なんか、ホームがあっても、ホームレスですけどね。」

『住まい賃貸　ハウスメイト』

以上より，未完結文は基本的に伝達媒体が文字であるときには使用しづらいが，話し言葉に準ずるような伝達媒体であるなら，容認度が上がることがわかった。次に，文字の場合を除外し，話し言葉の発話における未完結文の使用制約を考察する。

5.2.2　発話の公式性に関わる各要素

加藤（2009a）で述べたように，日常会話において，未完結文は公的な場面で使用するこ

とが少ない。公的な場面がどんな場面なのかを明確にするために，場面の公式度[74]に関与する要素は何があるかを明らかにすることが必要となる。

その問題を解決するために，山本（2004）の考えが参考になる。山本（2004）は先行研究を批判的に検討した上で，発話の形成に関与するものとして，「事態」「話し手」「聞き手」「場」の四つの要素を抽出した。本研究では，山本（2004）の考えを参考にし，場面の公式度に関わる要素を外的要素と内的要素に分けて考える。

言葉の使用において，場面と発話の内容が関与しているので，言葉という文法形式を基準として考えるなら，発話に関わる要素は大きく二種類に分けられる。一つは，文法形式の内部に存在する要素。基本的に発話の内容を指す。本研究では，こういう文法形式に現れる発話の内容を内的要素と定義する。もう一つは，文法形式の外部に存在する要素。文法形式の外部に存在する要素は，発話の内容と直接的な関係はなく，文法形式とは別次元にあるものである。文法形式の外部に存在する要素は主に場面と人間関係の二つの下位区分が考えられる。本研究では，こういう文法形式から独立的に存在している要素を外的要素と呼ぶ。

この外的要素と内的要素は総合的に発話の公式度を決める。次は，それぞれの要素が発話の公式度にどのように関与しているかを考察する。

5.2.3　内的要素による公式性

内的要素は主に発話の内容のことを指す。明確な境界線を引くのが難しいが，発話の内容の全体的な性質で言うと，大まかに私的な話か公的な話かに分けて考えられる。ここでは，典型的な例として，雑談と仕事に関する例を比べながら，そこに現れる発話の改まり度の違いを考える。

（54）【川島が白雪の同じ会社の先輩である。二人が会社にいて，仕事についての話題】
川島「そういえば，読モスナップどうでした。ちゃんと揃いました？」
白雪「まあね。」
フジテレビ系列『FIRST　CLASS』第 1 話

（55）【白雪が川島の鞄を見ながら】
白雪「クロエの新作？」
川島「ちょっとママの借りてきちゃって。」
フジテレビ系列『FIRST　CLASS』第 1 話

（54）と（55）で，会話に参加している二人は同じで，会話の場所も同じく会社であるが，（54）は仕事に関する内容で，（55）は川島が使っている鞄についての話なので，雑談である。川島は白雪の後輩なので，敬体を使うのが無標と考えられる。川島の発話に注

[74] 公式度は，発話における各要素によって総合的に決められる発話の改まり度を指す。

目すると，（54）で敬体を使っているが，（55）は「て」で終わる未完結文と「ちゃう」という表現から，タメロで話していると判断できる。（54）と（55）で，場所と人物が同じで，発話の内容のみ異なり，（54）の仕事関係の発話で，川島は敬体を使い，（55）の雑談で，川島は常体を使っていることから，雑談より，仕事に関する発話の内容はより公式的であると言えるだろう。

5.2.4　外的要素による公式性

5.2.4.1　場面による公式度

場面というのは，発話がどういう物理的な状況で行なわれているかを指す。発話の物理的な状況が発話の公式性に関与するときに，大まかに「会話の場所」と「会話の参加者」の二つの要素が関係する。

まず，「会話の場所」は絶対的な物理空間のことであるが，理論的に考えれば，私的な場所より，公的な場所で行なう発話のほうが公式度は高いと考えられる。但し，会話の場所の変化によって，会話参加者の身分も同時に変わることが多いので，発話の公式度を決める要因として，「会話の場所」は単独的に考えにくい。

そして，「会話の参加者」は主に会話に参加する人数を指す。発話する時点で，話し手は基本的に一人しかいないが，聞き手の人数や性質は一律にまとめにくい。そこで，本研究は聞き手の性質の違いによって，発話の場面を分類した後に，発話の公式度との関係を考える。

独り言があるように，発話というのは聞き手がいなくても存在しえるものである。そこで，ある発話場面において，聞き手がどんな存在であるかは二つの段階に分けて捉えられる。一つは，聞き手が存在するかどうかであり，もう一つは，存在するなら，明確であるか潜在的であるかである。

まず，一つ目の聞き手が存在するかどうかの判断基準は，話し手が聞き手を意識できるかどうかである。話し手が聞き手を意識できるような発話状況であれば，聞き手が存在する発話と呼び，逆に話し手が聞き手を意識できないような発話なら，聞き手が存在しない発話と呼ぶ。例えば，話し手は自分の部屋で独り言をしゃべるときに，隣の部屋にいる人がたとえその内容を聞くことができるとしても，話し手は意識できないから，その場合は聞き手が存在しない発話とみなす。それに対して，大人数がいる部屋で，たとえ話し手が特に誰かに向かって発話しているのでなくても，自分以外の人がいるということは話し手が意識できるので，その場合は聞き手が存在する発話とみなす。

そして，二つ目の聞き手の存在が明確であるか潜在的であるかの判断基準は，会話の始まりから話し手が発話する前の時間内で，聞き手が会話に参加したかどうである。聞き手が会話に参加したなら，聞き手が顕在するであると捉え，一方，聞き手が会話に参加しなかったら，聞き手が潜在的な存在であると見る。

（56）【久利生検事と自分の事務官である麻木は事務室から会社の共用スペースに出て外出しようとするところ，宇野検事は共用スペースで座って聞いている場面】

久利生検事「ほら。行くぞ，元ヤン。」

麻木事務官「その呼び方はやめてください。携帯忘れた。」

久利生検事「何やってんだよ。ほら，行くぞ。ヤンキー事務官，レッツゴー」

麻木事務官「だから，ヤンキーやってたのは 10 年前ですから。」

フジテレビ系列『HERO 2』第 4 話

例えば，（56）の場面で，「から」という未完結文を言った麻木事務官を話し手として考えるなら，登場人物は久利生検事，麻木事務官，宇野検事の三人が存在するが，話し手が最後にある未完結文を言うまでの時間内で，会話に参加しているのは久利生検事，麻木事務官のみで，宇野検事は会話に参加していないので，（56）で，久利生検事は明確な聞き手で，宇野検事は潜在的な聞き手である。

ある発話において，聞き手が存在しないか，それとも存在しないのではなく，潜在的に存在しているかという二つの状況は，連続的な関係にある。それを判断する基準は，話し手が聞き手の存在を意識できるかどうかである。例えば，（56）で，宇野検事は会話の参加者である久利生検事と麻木事務官の前に座っているので，存在する潜在的な聞き手であると言えるが，仮に久利生検事と麻木事務官は（56）の会話を話している最中，その内容が隣の事務室にいる馬場検事に聞かれたとしても，馬場検事が聞いていることは会話参加者の二人には意識できないので，馬場検事を存在している聞き手と考えにくい。

以上の基準に基づき，聞き手が存在するかどうか，潜在的な存在であるか顕在するかによって，発話の場面を表 13 のようにまとめられる。

聞き手の人数	聞き手の性質	例
聞き手が存在しない		独話
聞き手が一人存在	聞き手が顕在する	(57)
	聞き手が潜在的な存在	(58)
聞き手が多数存在	全員潜在的な存在	(59)
	一人のみ顕在する	(56)
	複数は顕在する	(60)
	全員顕在する	(61)

表 13　聞き手の性質に基づく発話場面の分類

（57）【赤岩は家を出て，同級生の亀沢の家で泊まろうとする場面】

亀沢「泊めるのは今晩だけだからな。」

赤岩「わかったって，しつこいな。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

（58）【疲れでソファーに横になりながら寝てしまった娘に】

母「だから，風邪引くって。」

（59）【大人数がいる授業中】

先生「この 2 年の 2 学期に書く調査票が一番大事だから，よく考えて保護者と相談して，ちゃんと自分で決めて記入してくるように，来月の三者面談でこれ使うから。」

映画『桐島、部活をやめるって』

（60）【傍聴者がたくさんいる裁判所で，殺人事件について，容疑者は弁護士を裏切り，検事の質問に対し，犯罪を認めている場面】

検事「あなたはそのことに怒り，絶望し，復習を計画。土屋秀典より毒物を入手。2011 年…」

弁護士「何の茶番なんだ。これは。」

検事「黙りなさい。私が質問している。2011 年 6 月 30 日，あなたは徳永家の勝手口より侵入し，鍋に用意してあったスープに毒物を混入，間違いありませんか。」

容疑者「はい。」

フジテレビ系列『LEGAL HIGH 2』第 1 話

（61）【白尾がどうしても城徳という高校に入りたかったという話について】

赤岩「何が何でも城徳に入りたかったんだ。」

母「それは柚子あなたもね。」

柚子「だって，赤岩君も入るって言うし。ねっ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話

聞き手の性質と場面の公式度とは，次のような関係がある。顕在する聞き手が大人数いても，場面の公式度が必ずしも上がるのではない。例えば，（61）は顕在する聞き手がたくさんいる場面であるが，お互いに常体を使っていることから，比較的に親しい関係にあることが推測できるので，発話の場面の公式度が高いとは言いにくい。それに対して，潜在的な聞き手は，会話に参加にしていないので，話し手との関係は簡単に決めにくい。しかも，その人数が多ければ多いほど確定できない要素も多くなるので，場面の公式度も相対的に上がるはずである。そこで，場面の公式度は潜在的な聞き手の人数と関係があり，潜在的な聞き手が多ければ多いほど場面の公式度が上がる。例えば，（62）と（63）は両方とも検事が容疑者に質問をする場面であるが，（62）より，（63）のほうは公式度が高いことが容易に判断できるだろう。

（62）【宇野検事の事務室で，事務官と警察官の二人が潜在的な聞き手として存在し，宇野検事は容疑者の犯罪について確認をしている場面】

容疑者「確かに僕はそのおばあちゃんのお宅へ何回も行ってます。でもね，商品を進

めたのは最初だけで，後はお喋りの相手してただけですから。」
検事「そうやって相手が気を許すのを待ってたんじゃないですか。」

フジテレビ系列『HERO 2』第 4 話

（63）【傍聴者が多数いる裁判所で，検事は殺人事件について容疑者に質問している】
検事「2011 年 6 月 30 日，あなたは徳永家の勝手口より侵入し，鍋に用意してあったスープに毒物を混入，間違いありませんか。」
容疑者「はい。」

フジテレビ系列『LEGAL HIGH 2』第 1 話（再掲）

5.2.4.2　人間関係による公式度

敬語体系があるような言語であれ，敬語体系がないような言語であれ，私達が使う言葉は話す相手によって異なる。そして，私達は社会にいる以上，人間と人間の間にある関係も社会性が付与される。しかし，人間は同時に感情を持つ生き物でもあるので，他人との付き合いで，個人の感情が働く場合もある。そこで，本研究は社会的な属性と個人の心理や感情に分けて，それぞれ「社会的な人間関係」と「心理的な人間関係」と定義し，人間関係による発話の公式度を考察する。

まず，「社会的な人間関係」は会話参加者の社会的な属性によって決められるものである[75]。社会的な属性は，主に会話参加者の社会的な地位と年齢の上下を指す。社会的な地位については，同じ職場や集団にいる会話参加者なら，職位や集団での上下関係によって決められるが，違う職場や集団にいる会話参加者なら，社会的な地位は平等であると考えられる。年齢の上下については，「社会的な人間関係」は年齢の上下と正比例関係にある。また，社会的な地位は同じであれば，年齢の上下が決め手となる。「社会的な人間関係」は基本的に社会的な地位と年齢の上下の総合関係によって決められるが，年齢の上下より，社会的な地位は「社会的な人間関係」に与える影響がより大きい現象も見られる。

（64）【宇野検事は 31 歳で，末次事務官は 53 歳。検事の事務室での発話】
宇野検事「ちゃんと仕事してよ。末次さん。何，その顔，ちゃんとしないからでしょ。」

フジテレビ系列『HERO 2』第 4 話

例えば，（64）で，年齢上で宇野検事は下位にあるが，社会的な地位は上位にある。宇野検事の常体になっている発話から，年齢の上下より，社会的な地位が優先されると言える。

発話の公式度は「社会的な人間関係」と次のような関係がある。「社会的な人間関係」

[75] 話し手と聞き手の社会における人間関係について，Brown& Levinson（1987）は，言語行為に現れる FTA の深刻度に関与する要素として，話し手と聞き手の「社会的距離」（social distance:D）と話し手と聞き手の相対的「力」（power:P）の二種類を述べた。D と P を決める要因が様々考えられるが，本研究ではまず話し手と聞き手の年齢と，ある集団における上下関係に限定して考察する。

において，話し手は聞き手より下位にある場合，しかもその差が大きければ多いほど，発話の公式度が上がり，未完結文の使用もしにくくなるということが推測できる。

（65）【上司は半沢に伊勢島ホテルに融資したお金を取り戻すように命令をしている場面】
上司「ただ大阪西支店で回収不可能と思われた 5 億の損失を見事に取り返した。その実績が買われたのかもしれんな。」
半沢「5 億と 120 億では桁が二つ違います。」
上司「それでもやってもらわなければ困る。」

TBS 系列『半沢直樹』第 6 話

例えば，（65）で，話し手は半沢で，聞き手は上司である。話し手の「5 億と 120 億では桁が二つ違います」という発話は聞き手に対する反論なので，「5 億と 120 億では桁が二つ違いますけど」とも考えられるが，聞き手より，話し手が下位にある「社会的な人間関係」によってその使用が制限されていると言える。

そして，「心理的な人間関係」は個人の心理や感情によって決められるものなので，絶対的なものではなく，様々な要素によって変わりうる。その変わる頻度で言えば，一律に言えない。比較的に長期間その関係が保持する場合もあれば，同じ会話参加者であっても，発話場面や発話の内容によって瞬時的に変わる場合もある。また，「社会的な人間関係」は上下で判断するものであるが，「心理的な人間関係」は親近度で判断するものである。

発話の公式度は「心理的な人間関係」と次のような関係がある。話し手と聞き手の間の関係が近ければ近いほど，発話の公式度が下がり，未完結文の使用もしやすくなるということが推測できる。

（66）【先生は柚子の母が経営しているレストランで下宿している】
先生「どこ行くんだ，これ。」
柚子「今日も白尾君練習来てないから。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話

例えば，（66）で，話し手は社会的な地位が下位にある柚子で，聞き手は上位にある先生である。（66）の話し手の未完結文が許容されたのは，話し手と聞き手の親しい「心理的な人間関係」が関与していると言える。

5.3 調査の結果

5.2 では，伝達の媒体における違いを確認した後に，話し言葉に限定し，発話の公式度に関与する外的要素と内的要素を考察しながら，未完結文の使用制限を理論的に考察した。実際の使用では，未完結文の形式によってそれぞれ違う性質が現れる場合もあるので，本

研究はテレビドラマを中心に，ランダムに 131 個の未完結文を抽出し，そこに現れる特徴を分析した。

5.3.1 未完結文の使用状況の概観

本章では，「たら」「ば」「と」「ので/んで」「から」「のに」「が/けど」「し」「て」を対象として，外的要素と内的要素を総合的に考慮し，発話の内容，発話場所，潜在的聞き手の存否，社会的な人間関係[76]の四つの項目に分けて未完結文の特徴をまとめた。その結果は表 14 のようになる。

接続助詞	総数	発話の内容		発話場所		潜在聞き手		社会的な人間関係		
		雑談	仕事	私的	公的	有	無	話し手は上	話し手は下	平等
「たら/ば」	7	5	2	5	2	0	7	1	1	5
「と」	7	7	0	5	2	3	4	0	0	7
「て」	17	14	3	6	11	4	13	1	4	12
「ので」	10	7	3	7	3	4	6	1	2	7
「から」	39	29	10	19	20	7	32	10	4	25
「のに」	13	10	3	7	6	7	6	3	2	8
「し」	15	13	2	11	4	0	15	3	2	10
「が/けど」	23	15	8	13	10	11	12	3	7	13
総計	131	100	31	73	58	36	95	22	22	87
		76%	24%	56%	44%	27%	73%	17%	17%	66%

表 14　未完結文における使用状況のまとめ

個別の表現を除き，未完結文全体の特徴から言えば，発話の内容が仕事関係より雑談のほうが，また潜在的聞き手が存在する場面よりしない場面のほうが，人間関係が上下であるときより平等であるときのほうが，未完結文の使用頻度がより高いことがわかった。発話の場所に関して，私的な場所であれ，公的な場所であれ，未完結文の使用は明確な違いはないと言える。

[76] 「心理的な人間関係」の判断基準が科学的に決めにくいことを考慮した上で，表 14 では「社会的な人間関係」のみをまとめた。

5.3.2　内的要素における制約と逸脱

5.3.2.1　形式の不完全による制約と逸脱

未完結文の発話の内容は共通的に三つの特徴がある。即ち「断言回避の機能を持つ」「会話参加者の共通認識が必要とされる」「相手の推論が必要とされる」。次は，それぞれの特徴に従って，実際の使用での制約を考察する。

まず，「断言回避の機能を持つ」ことについて，加藤（2009a）でも述べたように，未完結文は文を閉じていないので，断言を回避するという機能がある。逆に考えれば，断言しなければならない場合, つまり確定することが要求される場合は未完結文が使用しにくい。

（67）【一日目の仕事が終わり，みんなはお別れの挨拶をしている場面】
同僚 1「では，明日 10 時に中央郵便局の前で。」
同僚 2 「#はい。わかりましたけど。」

例えば，（67）の場面で，聞き手である同僚 1 の発話に対して，話し手である同僚 2 の明確な答えが必要となるので，「けど」で終わる未完結文は不自然である。

そして，「会話参加者の共通認識が必要とされる」ことについて，形式上が不完全であることは，言い換えれば，話し手が発話の途中でやめ，話し手の伝達しようとする情報や意図が，文法形式上に現れている言葉以上にあるとも理解できる。つまり，未完結文を通して話し手の意図を理解するには，相手は文法形式上に欠如している内容を自分で補完しなければないらい。そうすると，相手が話し手の意図を正確に理解できるかどうかは，欠如している内容が話し手と相手の共通認識になっているかどうかによって決められる。言い換えれば，未完結文の欠如している内容が話し手と相手の共通認識になっていない場合に，未完結文は使用しづらい。

（68）【航太は美織の父が経営している診療所の医師である。美織も医師である。なぜ医者になったという話題について】
美織「患者さんを自分の手で助けてさ，私も「ありがとう」って感謝されたいなって。」
航太「いや，すばらしいね。そうやって，人の命を救いたいっていう気持ち。」
美織「って思ってたんだけどね。」
航太「うん？」
美織「なんでもない。」

フジテレビ系列『海の上の診療所』第 4 話（再掲）

例えば，（68）で，話し手は美織で，聞き手は航太である。（68）は医者になる理由についての発話である。話し手の「思ってたんだ」という過去形から，発話時点で話し手の

考えがもう既に変わったということが推論できる。聞き手のその後の「うん？」という疑問から，話し手の考えが変わったことが，聞き手にとって未知の情報であると推測できる。そこで，話し手は「けど」で終わっている未完結文を使ったが，聞き手に共通している情報がないので，発話の情報伝達は成功できず，話し手の発話は独話に近い性質を持つと考えられる。

最後に，「相手の推論が必要とされる」ことについて，未完結文は形式上が未完結であり，相手の推論が必要とされるので，未完結文は相手に働きかけの性質を持つ場合が多い。それによって，未完結文は基本的に聞き手のいない独り言や独話には用いられないはずである。しかし，実際の考察では，発話の内容の意味によって，「のに」は例外的に独り言でも頻繁に使用されていることが分かった。

3.6.1.2 で述べたように，「のに」は事実が話し手の考えとずれているときに使われるので，事実に対する話し手の強い個人的な不満を含んでいる言葉と考えられる。そこで，「のに」は基本的に話し手の感情を表し，働きかけの性質のない発話として現れることが多い。

（69）【雨の中で生徒達が慌てて干している洗濯物を部屋へ持っていく場面】
生徒 1「もう最悪だ。もうすぐ試験だってのに。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

例えば，（69）は，雨の中で，数人の生徒が慌てて洗濯物を外から部屋へ持って行く場面である。雨にぬれると風邪を引きやすいことと，風邪になると試験中普段通りに質問を解決できない可能性もあるということを考えると，話し手の生徒 1 の未完結文は，「もうすぐ試験だってのに，何でこんなことしなきゃいけないの」などの自分の不満を表すような主節を補完できる。話し手が（69）の未完結文を話したときに，周りに同級生が同じ作業をやっており，話し手は他者の存在が意識できるので，聞き手が存在すると言える。しかし，同級生達はみんな走りながら作業をやっているので，話し手の話に耳をかけて聞いてない可能性が高い。そのことは話し手も認識できるはずである。そこで，聞き手が存在するにもかかわらず，（69）は独話の性質を持っていると言える。

以上より，未完結文は通常聞き手が存在しない独話では使用しづらいが，「のに」の意味機能によって，「のに」で終わる未完結文は特別に独話でも使用可能であると言える。

5.3.2.2　行為要求における制約と逸脱

発話の内容との関係で，形式ごとに未完結文の例を考察すると，一つの共通点が見られる。相手に行為の実施を要求するときに，未完結文の使用には比較的強い制約がある。話し手と聞き手は平等関係にある場合がほとんどであるが，話し手は聞き手より下位にあるときは使用が制限されている。

3.6.1.1 で考察したように，「たら」「ば」「と」で終わる未完結文は意味機能が固定さ

れている側面がある。「ば」には聞き手に動作の実施を要求する機能しかないが，「たら」には聞き手に動作の実施を要求することと知識の提供を要求することという二つの機能がある。そして，「と」は「用言の否定＋と」の形で現れ，主節が「だめだ」などの消極的な評価を含める文に復元でき，聞き手に動作の実施を要求することが多い。

（70）【新しく開発された薬を山田という患者に使うかどうかについて，部下は教授に意見を伺う場面】
部下「この患者で試すということですか。」
教授「病院にとって，患者は二種類。絶対死なせてはならない患者とそれ以外の患者だ。」
部下「でも，万が一副作用が起きたら。」
教授「彼は術後間もない進行胃がんの患者だ。いつ何が起きたとしても不自然はない。」
TBS 系列『アリスの棘』第 4 話（再掲）

表 14 にある「たら／ば」「と」に注目すると，「たら」の 1 例以外に，総計 14 例のうち 12 例は話し手と聞き手が平等関係にある場合，1 例は話し手が上位にある場合である。話し手が下位にある 1 例の例外があるが，それを考察すると，（70）に示しているように，聞き手に実際の行為を要求しているのはなく，知識の提供を要求していることがわかる。

但し，この行為要求における制約は，話し手のフェイスが侵害された場合に，逸脱するような例が見られる。

（71）【久利生検事と自分の事務官である麻木は事務室から会社の共用スペースに出て外出しようとするところ，宇野検事は共用スペースに座って聞いている場面】
久利生検事「ほら。行くぞ，元ヤン。」
麻木事務官「その呼び方はやめてください。携帯忘れた。」
久利生検事「何やってんだよ。ほら，行くぞ。ヤンキー事務官，レッツゴー。」
麻木事務官「だから，ヤンキーやってたのは 10 年前ですから。」
フジテレビ系列『HERO 2』第 4 話（再掲）

例えば，（71）で，話し手は下位にある麻木事務官で，聞き手は上位にある久利生検事である。（71）の形式文脈から，話し手の未完結文を「ヤンキーやってたのは 10 年前ですから，その呼び方をやめてください」のように補完できる。つまり，（71）で，話し手は未完結文を通して聞き手に行為を要求している。それが許容されたのは，聞き手の「ヤンキー事務官」という呼び方が話し手のフェイスを侵害したからである。

以上より，逸脱の例がありながら，未完結文は聞き手に行為を要求する機能を表すときに，話し手と聞き手の人間関係に比較的厳しい制約があり，話し手は聞き手より下位にある場合は使用しにくい。

5.3.3　外的要素[77]における制約と逸脱

5.2.3 と 5.2.4 で発話の公式性に関わる要素を分析しながら，公的な場所と潜在的な聞き手が大人数いる場面で，「社会的な人間関係」において上位にある人に対して，未完結文の使用が制限されていると述べた。実際の使用では，発話の公式度はそれらの要素によって総合的に決まるものなので,個別の要素における制約から逸脱するような例も見られる。

まず，外的要素より，内的要素が優先されるような場合が見られる。つまり，公的な場所で，「社会的な人間関係」において上位にある相手でありながら，発話の内容が雑談になっているからという理由だけで，未完結文の使用制約が緩和される場合が見られる。

（72）【入社の初日に，副編集長は新人アルバイトの吉成が会社に入る経緯について】
副編集長「編集長のお母さんと？」
吉成「そう。お友達なんです。それでお願いしてくれて。」

フジテレビ系列『FIRST　CLASS』第 1 話

例えば，（72）で，話し手は 20 代の吉成で，聞き手は 40 代の副編集長である。「社会的な人間関係」において，話し手は下位，聞き手は上位にある。二人は初めて会う関係なので，「心理的な人間関係」は特に親近感がないはずである。発話の場所は会社であるが，場面は二人きりである。ここで，理論的に考えるなら，（72）で，聞き手に負担をかけるような未完結文は使用しにくいはずである。それにもかかわらず，（72）で話し手の未完結文が許容されたのは，聞き手の質問は話し手のプライベートについてのもので，発話の内容が雑談であるからである。

また，「場所」「聞き手の性質」「社会的な人間関係」「心理的な人間関係」という四つの外的要素において，「心理的な人間関係」が優先されるような場合も見られる。

（73）【半沢と会った後，古里課長は支店長の事務室で報告をしている場面】
貝瀬支店長「帰ったか。」
古里課長「はい。随分としつこく伊勢島ホテルについて聞かれましたが。」
貝瀬支店長「古里，厄介事は･･･分かってるな。」
古里課長「はい。」

TBS 系列『半沢直樹』第 6 話

例えば，（73）で，話し手は部下の古里課長で，聞き手は貝瀬支店長である。「社会的な人間関係」において，話し手は下位，聞き手は上位にある。発話の場所は会社で，内容も仕事関係の話になっているので，発話は公式度が高く，未完結文が使用しにくいはずである。しかし，（73）の発話には，話し手と聞き手が融資事件を共謀したという知識文脈

[77] 外的要素はポライトネスという観点からの考察も可能であるが，詳しい分析は今後の課題にする。

がある。つまり，話し手と聞き手は同じグループにあり，比較的親近的な「心理的な人間関係」である。話し手は「が」で発話を終えているが，その欠如された内容は二人が共通に認識できる会社の同僚に知られてまずいものである。内容の共通認識は二人の親近的な関係によるとも理解可能なので，場面が公式であるにもかかわらず，（73）で，下位にある話し手の未完結文が許容されたのは，話し手と聞き手の親近的な「心理的な人間関係」によると考えられる。

5.4 本章のまとめ

本章では，「ので/んで」「から」「たら」「ば」「と」「のに」「が/けど」「し」「て」で終わる未完結文を研究対象として，131 個の例文に基づき，外的要素と内的要素に分け，発話の公式度に関与する要素をまとめながら，未完結文の使用における制約を考察した。その結果，次の三点がわかった。まず，「発話の内容」「聞き手の性質」「社会的な人間関係」「心理的な人間関係」は発話の公式度に関与し，「発話の内容」と「心理的な人間関係」が優先される場合があることである。また，発話の内容が雑談で，潜在的聞き手は存在しない場面，人間関係が平等であるときは，未完結文の使用率が高いことである。最後に，逸脱の例がありながら，独話や聞き手に行為を要求するときは，未完結文の使用が制限されていることである。次章では，第 5 章で考察したものを前提として，未完結文が選好される動機を考察する。

第 6 章　未完結文への選好に現れる正の動機

会話では，話し手は意味や意図を伝達する際に，言葉を通してすべて明確に話さないことも多い。さらに，完結文と比べ，未完結文はより経済的な言語形式で，かつ，より多くの情報量があるという特徴が見られる。本章は情報量・経済性という観点から未完結文の選好に現れる動機を考察する。

6.1　未完結文に現れる情報量のバリエーション

（74）【柚子は野球部のマネージャーで，志方は野球部の部員である】
柚子「テーピングマスターしたら，スコアブックの付け方教えるから。」
志方「えっ？まさか僕をマネージャーに？」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

なぜ未完結文が多用されるのか，即ち未完結文の選好にはどういう動機があるのかということは，様々な角度から捉えられるが，（74）の聞き手である志方の反応から，未完結文は言語形式に含まれる情報内容より以上の情報量を持っていることが直感的にわかる。そこで，本稿は情報量・経済性という観点から未完結文の選択に現れる動機を考察する。

実用例の考察により，情報の量に関しては，接続助詞なしの完結文と比べ，接続助詞あり主節欠如の未完結文は，より多くの情報量を持つ場合もあれば，情報量に相違はない場合もあることがわかった。

（75）【スウェーデン語の言語研究がまだあるかどうかについて】
ア「あ、ありましたよね。」
イ「はい、ありましたありました。」
ア「今は」
イ「今もあります。」
ア a　「もうないんですけど。」
a’　*「もうないんです。」*[78]
『BTSJ 初対面同性同士雑談 1』（再掲）

（76）a 樫山「亀沢さん，すいません，あの，これただの文法具屋の割引券なんですけど。」
a’*樫山「亀沢さん，すいません，あの，これただの文法具屋の割引券なんです。」*

[78] 本研究では，斜体の文字は筆者による追加である。

例えば，（75a）と（75a’）の比較からわかるように，話し手のアの発話は，「けど」の有無で情報の量に変わりはなく，同じく「スウェーデン語の言語研究はもうない」という内容であると言える。それに対して，（76a）と（76a’）に現れる情報の量は違う。（76a’）で，聞き手が話し手から受け取った情報内容は，「樫山の手元にあるものはただの文房具屋の割引券である」というもののみである。それに対して，（76a）は「けど」の追加により，「樫山は俺に割引券を受け取ることを要求している」という情報も追加される。本章は（75）のような接続助詞の追加で情報量に変化がない場合を対象外として，（76）のように接続助詞の有無によって情報の量に変化がある場合に限定する。

6.2　未完結文に現れる多情報性と経済性

6.2.1　言葉の経済性と未完結文の情報処理

経済性という抽象的な概念は，古くから様々な分野で使用されているが，本研究での経済性は話し手が言語形式を選択する際に現れる指標である。即ち，話し手が聞き手に同じ意図を伝達する際に，言語形式が短ければ短いほど表現が経済的であるということである。人間にとって最小の労力で目的を達することが好まれるので，言葉が簡潔で経済的であるほうが話し手にとって好ましいということは言うまでもない。

加藤（2009d）は人間の記憶領域を「処理記憶」「談話記憶」「知識記憶」の三つに分け，話し手から受け取る情報は，処理記憶で処理された後に談話記憶に送られると述べた。本研究で述べられている情報量とは，話し手が未完結文を通して伝達し，聞き手が短期記憶で処理した後に談話記憶に送るものである。そして，聞き手は処理記憶で情報を処理する際に，話し手による情報内容のみならず，その情報が記憶にある他の情報とどういう関係があるかを表すメタ情報（情報のタグ）[79]も，同時に処理され談話記憶に送られると言う。

メタ情報は，発話上の目印として，その一部が話し手によって提示される場合もある[80]と加藤（2004）で述べられている。前節と後節の関係を表す接続助詞はまさにメタ情報の一種類であると言える。つまり，話し手による接続助詞は，そのスコープ内の情報内容の性質を表し，聞き手の情報処理に役立ち，更にその情報処理の方向性も指定する。

（77）【高校野球部の監督はマネージャーの最近のおかしい様子について，部員に確認をしている場面】
監督「気づいてたのか。」
生徒 1「ずっと気になってはいたんですけど…」

[79] 加藤（2004）は，メタ情報とは情報に関する情報であると述べ，また，メタ情報を情報のタグとも呼んでいる。
[80] 加藤（2004）は，話し手の発話にあるメタ情報を表す表現を談話標識として捉えている。

a　生徒 2「先輩たちが一切触れなかったんで…」

a’ *生徒 2「先輩たちは一切触れませんでした。」*

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

例えば，（77）は，マネージャーのおかしな様子について，監督は複数の人に確認している場面である。監督の質問に対して，話し手の生徒 2 は気づいていたかどうかについて直接答えていない。その代わりに，「先輩たちが一切触れなかった」という事実を述べている。（77）で，話し手の生徒の発話にある「ので」を a’のように削除したら，情報内容は単に事実についての報告になる。「ので」が追加されてはじめて，その事実が理由になる。言い換えれば，「ので」を追加することにより，前接する情報が理由であるというタグを付けている。このため，話し手の生徒 2 が直接答えていないにもかかわらず，聞き手の監督は「生徒は気づいていたけど，『先輩たちが一切触れなかった』という理由で，監督に言わなかった」という結論を推論できる。

そして，接続助詞で終わる発話が，文法構造上まだ未完結で，後節が欠如しているということは，日本語話者にとっては自明である。これが意味するのは，話し手が接続助詞で終わる文を発話する際に，発話が未完結であるというパラ情報も同時に聞き手に伝えられるということである。つまり，話し手の接続助詞で終わる発話は，聞き手によって処理される際に，未完結文であるというメタ情報が付加されるということである。人間は形式通りの意味のみならず，欠如している内容を自動的に復元したり，推意を読み取る能力があるので，聞き手は，話し手による未完結文を処理する際に，自動的に内容を推論して欠如している情報を補完する。そこで，聞き手の処理記憶で処理される内容は，形式文脈による情報内容のみならず，接続助詞によって決められた情報内容のタグ，推論した情報内容も含まれる。

（78）【食堂で，福山が半沢に初対面の挨拶をした後】

福山「すみませんが，次の案件がありますので。」

TBS 系列『半沢直樹』第 8 話

例えば，聞き手が（78）の発話から受け取る情報を処理する際に，その処理する処理する内容は，話し手には「次の案件がある」という情報内容のみならず，話し手は「次の案件がある」ということを理由に，「この場所から離れる」という情報も含む。

6.2.2　接続助詞の有無における情報処理

話し手による未完結文を処理記憶から談話記憶に送る際に，聞き手は情報内容，接続助詞によるメタ情報，メタ情報によって方向付けられた推論を一緒に処理するということを 6.2.1 で確認した。ここには一つの疑問点がなお残されている。接続助詞が削除される完結

文は，未完結文とほとんど同様の言語形式を持っているので，聞き手は未完結文を処理するときと同じような推論を行うことができるのではなかろうか。つまり，接続助詞が削除された完結文に対して，聞き手はどのような処理過程をしているのか。このような場合には，未完結文と異なり，形式文脈による情報内容しか処理されないと断言できるだろうか。

結論から言うと，接続助詞で終わる未完結文と接続助詞なしの完結文は，形式文脈による情報内容としては同様であるが，相違点が二つある。一つ目は，情報伝達において，話し手が聞き手に推論することを明確に求めているかどうかという点である。基本的には未完結文では話し手が聞き手に明確に要求しており[81]，しかもその推論の方向性も指標しているのに対して，完結文は不明確である。二つ目は，聞き手の情報処理において，未完結文は推論による追加の情報内容が必ず活性化状態になるのに対して，完結文は同様の推論した情報が必ず活性化状態になるとは断言できないことである。

（79）【家庭教師の肘井先生が生徒の晴樹の回答を見ながら】
先生「だいぶ正答率が上がってきてる。」
晴樹「すごいでしょ。」
先生「でも，まだできてないところもあるから。英語は頭の中で日本語に変換しないで，英語として理解しなきゃ。何度も何度も繰り返すこと。そしたら，どんどんできるようになるから。」

NHK ドラマ『聖女』第 1 話

例えば，（79）で，話し手は家庭教師の肘井で，聞き手は生徒の晴樹である。「だいぶ正答率が上がってきてる」という発話からは，話し手が聞き手をほめていることがわかり，「すごいでしょ」という発話からは，聞き手が自慢しているということがわかる。ただし，「まだできてないところもあるから」という話し手による未完結文に対して，聞き手の情報処理は次のようになる。まず，「まだ回答ができていないところもある」という情報内容を受け取り，そして「から」というメタ情報によって，受け取った情報内容に「理由」というタグを付け，それと同時に，「未完結である」というパラ情報によって推論し始める。「まだ」「できてない」という理由によって，「もっと続けて頑張る必要がある」や「自慢してはいけない」という結論が簡単に推論できるので，話し手の未完結文により，聞き手は「自分には回答ができていない部分もまだあるから，先生は頑張ることと自慢しないことを要求している」のように情報処理ができるはずである。

では，（79）の話し手の発話内容をもし（79）’のような完結文にするなら，聞き手はどのような情報処理をするだろうか。

[81] 未完結文は，「早く帰ったら」などの習慣によって主節が省略され，未完結文になっている場合には，発話に関する話し手から聞き手への推論要求が弱く，不明確になるとも考えられるが，ここではまず対象外として扱う。

（79）’先生「でも，まだできてないところもある。」

（79）’は単に事実を述べている。人間は受け取る情報を自動的に三つの記憶領域にある情報と関係づけようとするので，（79）’の話し手の発話によって，聞き手の処理記憶は，「先生が私のことをだめだと言っている」や「先生は私が自慢に思っていることを責めている」，更に（79）と同じような推論が活性化状態になることが可能である。しかし，それらの推論の中で，具体的にどれが活性化されるかは明確に判断できない。もちろん，それら以外に，他の情報が活性化されることも十分可能である。それに，そもそも聞き手が必ず推論を行うということも断言し切れない。よって，接続助詞の削除された完結文においては，未完結文と同じような追加情報が活性化され，聞き手が未完結文と同じような推論を行うとは断言できないと言える。

6.2.3　二種類の完結文

ここまでの議論では，接続助詞で終わる未完結文と比較する際に，接続助詞なしの完結文のみを比較対象としてきた。だが，主節欠如の未完結文と対応する概念である完結文は，従属節のみで接続助詞なしの完結文のみならず，主節を含む完結文の場合も当然ある。

（80）a 今行くから。　→未完結文
　　b 今行く。　→A 類完結文
　　c 今行くから，待ってくださいね。　→B 類完結文

例えば，（80a）の「今行くから」という未完結文を完結するには，（80b）のように接続助詞「から」を削除することのみならず，（80c）のように「待ってくださいね」という主節を追加することも可能である。それらを区別するために，本研究は，接続助詞を削除する方法で完成した完結文を A 類完結文と，主節を追加することで完成した完結文を B 類完結文と呼ぶ[82]。

まず，言語の経済性について，（80a）の未完結文と（80b）の A 類完結文はおおよそ同じような長さであるが，（80c）の B 類完結文はより長い形式を持っている。つまり，B 類完結文より，未完結文と A 類完結文は言語形式が簡潔で，話し手にとってより経済的であると言える。そして，6.2.1 と 6.2.2 の分析でわかるように，情報の内容については，（80b）の A 類完結文は「話し手は今行く」という情報内容のみ明確であるが，（80a）の未完結文と（80c）の B 類完結文による情報内容は同じで，「話し手は今行く」こと以外に，「話し手は聞き手に自分を待つことを要求している」ことも同時に活性化されている。つまり，

[82] B 類完結文は，「未完結文のマーカー」の「X」が違っても，完結方法が同じである。すなわち，主節を復元することである。それに対して，A 類完結文は，「X」の性質が違うことによって，具体的な完結措置が異なる。それについては，8.2 で詳しく議論する。

A 類完結文より，未完結文と B 類完結文は聞き手にとっての情報量が多いと言える。以上の内容を簡単にまとめると，表 15 のように理解できる。

言語形式	情報量	経済性
未完結文	比較的に多い	あり
A 類完結文	比較的に少ない	あり
B 類完結文	比較的に多い	なし

表 15　未完結文と完結文についての情報量と経済性の比較

表 15 から，A 類完結文及び B 類完結文と比べると，未完結文は情報量が多く，形式が経済的であるという特徴を持つことがわかる。

6.2.4　情報伝達における原理

Horn（1984）は，Grice（1975）が唱えた会話の協調原理に関する四つの格率を再検討し，量に関わる Q 原理と関係に関わる R 原理に整理し直した。

The Q Principle(Hearer-based):
MAKE YOUR CONTRIBUTION SUFFICIENT
SAY AS MUCH AS YOU CAN(given R)
「一定の R 条件下では，発話を十分なものとせよ。できるだけ多く語れ」

The R Principle(Speaker-based):
MAKE YOUR CONTRIBUTION NECESSARY
SAY NO MORE THAN YOU MUST(given Q)
「一定の Q 条件下では，発話を必要なものとせよ。言わねばならぬことのみ語れ」

Horn（1984：13）[83]

Horn（1984）の話し手と聞き手の間に存在する二つの緊張関係に対して，Levinson（2000）は（話し手と聞き手の間の）ある種の利害関係の一致を想定する上で，「発見法（heuristics）」という観点から，話し手と聞き手の両側から出発した説明を通して，量に関わる Q 原理，情報性に関わる I 原理，様態に関わる M 原理を提出し，Q 原理と M 原理は Horn（1984）の Q 原理に，I 原理は Horn（1984）の R 原理にほぼ等しいと述べた。

Q 原理
話し手の格率：情報提供上強い言明を提供すると「I 原理」に抵触する場合は除いて，

[83] 日本語訳は加藤（2008）による。

自分の世界知識が認めるものより情報提供的に弱い言明を与えてはならない．とりわけ，事実と一致する最も強い代替形を選択せよ．

受け手の系（corollary）：話し手が自分の知識と一致する最も強い言明を行っているのだとみなせ．

（田中など訳 2007：96）

I 原理

話し手の格率：最小化の格率．（Q を心にとめておいて）「できるだけ少なく述べよ」すなわち，伝達目的を達成するだけの最小の言語情報を産出せよ．

受け手の系：詳細化の規則．話し手が m 意図をしていると考えられる点まで，最も特定的な解釈を見つけて，話し手の発話の情報内容を増幅せよ．ただし，話し手が有標あるいは冗長表現を使って「最小化の格率」を破っている場合は除く．

（田中など訳 2007：146）

M 原理

話し手の格率：有標表現を使って，通常でなく，またステレオタイプ的でない状況を示せ．その有標表現とは，通常の，ステレオタイプ的な状況を述べるのに使う表現とは対照的な表現のことである．

受け手の系：通常でない言い方で言われたことは，通常でない状況を示すか，あるいは，有標のメッセージは有標の状況を示す．

（田中など訳 2007：175）

Horn（1984）の Q 原理は，伝達される情報が最大化されることは聞き手にとって好ましいということを言い，R 原理は，言葉の簡潔さを求めることは話し手にとって経済的であるということを言っている。より多くの情報を伝達するにはより多くの言語形式が必要とされるので，話し手と聞き手の欲求が拮抗関係にあるとも理解できる。しかし，拮抗するものは均衡点にあるときにバランスがよく取れるので，私達はその均衡点を見つけようと常に言葉の表現を調整している。未完結文はまさにその一つの現象である。

表 15 でまとめたように，A 類完結文は話し手にとって経済的であるが，聞き手にとって情報量が少ない。B 類完結文は聞き手にとっては情報量が十分であるが，話し手にとっては経済的でない。そして，話し手にとって経済性を持ちながら，聞き手にとっても十分な情報を提供し，両者のバランスを取った中間に位置するのが未完結文である。

しかし，未完結文は，聞き手に推論などの追加的な情報処理を求めるため，聞き手にかける負担が大きいという欠点がある。未完結文と同じような情報量を持つ B 類完結文なら，意味内容が明確なので，聞き手にかかる負担は小さい。それにも関わらず，B 類完結文より聞き手にかかる負担が大きい未完結文が多用されるのは，次の三点によると考えられる。まず，Levinson（2000）の I 原理が働いているからである。つまり，話し手は最小の言語情報を提出し，聞き手は話し手の情報内容を詳細化する。そして，英語と比べ，日本語が聞き手責任の重い言語であるからである（Hinds 1986，海賓 2010）。さらに，B 類完結文

より，未完結文は聞き手にかける負担が大きいにもかかわらず，聞き手の情報理解において，B 類完結文より，未完結文は，聞き手が情報をより強く容易に理解できる効果がある。B 類完結文は，内容が全部話し手によるものなので，聞き手の意思を問わず，話し手の発話通りに理解することが要求されている。それに対して，未完結文は，聞き手が自分で情報を処理するので，情報をよりよく理解できる。

以上の三点によって，聞き手への負担が大きいにもかかわらず，日本語には聞き手の責任が重いという特徴があることや，聞き手自身による情報処理が内容をよりよく理解できるという効果があることによって，完結文より，話し手にとって経済的で，聞き手にとって多情報的である未完結文がより選好されていると理解できる。

6.3 活性化される情報の種類

実用例の考察を通して，接続助詞の追加により，未完結文は A 類完結文よりも多く伝達される情報が二種類あることがわかった。一つは，情報内容が活性化されるケースである。もう一つは，情報内容が特に増えるわけではないが，情報間の関係を明確に示すパラ情報が活性化されるケースである。

（81）は情報内容が活性化される【行為要求】の例である。

（81）【指導教官が自分の学生を連れて他の先生に紹介した後】
a　指導教官「先生，出張帰りでお疲れだから。」
a’*指導教官「先生，出張帰りでお疲れだ。」*
　学生「すいません。お話できて光栄でした。」
　指導教官「じゃあ行こうか。」

NHKBS『タイムスパイラル』第 1 話

（81）で，話し手は指導教官で，聞き手は学生である。未完結文を a’のように A 類完結文にすると，単に先生の心理状況を述べている。「から」の追加で，a’の内容に「理由」というタグが付けられる。それによって，聞き手は記憶領域から「疲れている人には休みが必要である」という知識と「紹介がもう既に終わった」という知識を活性化させ，「指導教官は会話を終わらせ，この場所から離れることを提言している」という情報を自動的に推論し追加することができる。

そして，同じように（82）は情報内容が活性化される【要求性なし】[84]の例である。

（82）【佐藤と新城先生は友達である。佐藤は彼女に子どもができてしまったと言われた。その話について，佐藤は新城先生に相談しようとする場面】

[84] ここでの【要求性なし】というのは会話的要求というレベルにおけるもので，無論，【注意要求】【理解要求】【反応要求】という社会規範的レベルの無標な要求がある。

佐藤「ねえ。どうしよう。」
新城先生「嫌なら，おろせばいい。」
佐藤「そんなことできるかよ。」
新城先生「なら，産めばいい。」
a 佐藤「ねえ。ちょっと。真面目に聞いてよ。ねえ。産んだら，結婚するってことなんだよ。昨日まで結婚のけの字も意識しなかったのに。」
a’ *佐藤「ねえ。ちょっと。真面目に聞いてよ。ねえ。産んだら，結婚するってことなんだよ。昨日まで結婚のけの字も意識していなかった。」*

フジテレビ『若者たち 2014』第 1 話

（82）で，話し手は佐藤で，聞き手は新城先生である。（82）の未完結文も a’のように A 類完結文にすると，単なる過去の事実になる。a’の過去の事実に関する情報の上に，「のに」の追加によって，a’以上の情報内容が伝達され，活性化される。「のに」は，現実が話者の願望に違反することや事実に対する話し手の強い不満を表す。そこで，「のに」の追加によって，a’の情報内容「昨日まで結婚のけの字も意識していなかった」という事実を踏まえ，「結婚する」という現実が話し手である佐藤の願望に違反し，話し手に不満の気持ちを持たせるという情報内容が活性化される。それらの活性化されている情報内容によって，聞き手は「佐藤さんは結婚できない」という情報内容を推論できる。

（81）と（82）に対して，（83）は情報間の関係を明確に示すパラ情報が活性化されるケースである。

（83）【斉藤と奈月は同僚である。二人は，一緒に歩きながら，奈月の幼馴染である健太郎についての話題をしている。】
斉藤「幼なじみが初恋の人になって，そしてそのまま旦那さん？」
奈月「やめてよ。それに，健太郎は私の初恋じゃないから。」

NHKBS『タイムスパイラル』第 1 話

（83）で，話し手は奈月で，聞き手は斉藤である。まず，聞き手の発話は「幼なじみの健太郎が奈月の初恋の人になって，そしてそのまま旦那さんになるのですか」のように補完できる。それに対して，話し手は「健太郎は私の初恋じゃない」という情報内容を通して相手の間違いを指摘した。その後に因果関係を表す「から」が追加されているが，「健太郎は私の初恋じゃない」という情報内容から他の何かの情報内容を結論として推論することが難しい。ここでの「から」はより多くの情報を提供しているというより，前接の情報と他の情報との関係を明確にするというパラ情報が伝達されていると考えたほうが適切であると考えられる。具体的に言うと，（83）の「から」は，聞き手の記憶にある「健太郎は奈月の初恋の相手である」という情報が間違いであることを示し，その間違いの情報を「健太郎は奈月の初恋の相手じゃない」のように入れ替えるよう指示している。それは，

（83）の未完結文の主節を「あなたは間違っている。そう考えないでください」のような結論に復元できることからもわかる。そこで，（83）は接続助詞「から」の追加で，より多くの情報内容が伝達されていないにもかかわらず，聞き手の記憶にある情報の不適切性と情報の修正命令というパラ情報が明確化されていると言える。

6.4　共有知識に基づく相互理解の可能性

以上で，話し手はA類完結文に接続助詞を追加することを通して，より多くの情報を聞き手に伝達しており，聞き手も話し手からの情報をスムーズに読み取り，言語形式から受け取った情報と推論した情報を談話記憶に送っていることを明らかにした。以上の仮説が正確であるとしても，なお原理的な問題が残されている。すなわち，話し手が伝達しようとする情報と聞き手が読み取る情報はなぜ一致できるのかという問題点である。

結論から言うと，話し手の伝達意図と聞き手の推論が一致するのは，未完結文が終わる時点で，未完結文と関連付けられる情報が既に話し手と聞き手の共有知識になっているからである。具体的には，その共有知識は先行発話で既に活性化されている旧情報になっている場合もあれば，世界知識によって慣習化された推意の場合もある。

例えば，（84）は活性化された旧情報の場合である。

（84）【健太郎は幼馴染である奈月に好意を持っている。二人には夜に食事するという約束がある】
奈月「どう研究員生活。忙しい？」
健太郎「もう今朝5時まで。」
奈月「大変だね。」
健太郎「あっ，でも夜は大丈夫だから。」

NHKBS『タイムスパイラル』第1話

（84）で，話し手は健太郎で，聞き手は奈月である。（84）の発話が行なわれる前の時点で，話し手と聞き手が夜に一緒に食事するという情報を共通に持っている。その情報が活性化されているかどうかは話し手と聞き手の間にずれがあるかもしれない。だが，話し手が「でも夜は」という言葉を発した瞬間，その旧情報は話し手にも聞き手にも活性化された状態になっているはずである。そこで，話し手の発話が「大丈夫だから」という未完結文のものであっても，聞き手がその活性化状態にある「一緒に食事する」という旧情報を自動的に追加できるのである。

そして，（85）は慣習化された推意の場合である[85]。

（85）【初対面の二人で】

[85] （85）は，Grice（1975）で定義された会話的推意より，慣習的推意に近い性質を持つと考えられる。

辰巳「今夜食事でもどうですか。」
奈月「え？あの…母と約束があるので。」

NHKBS『タイムスパイラル』第 1 話

（85）で，話し手は奈月で，聞き手は辰巳である。聞き手からの食事の誘いに対して，話し手は自分には約束があるという情報を提供した。誘いに対して約束があると返事することは，同じようなやり取りの使用頻度が高いことによって，社会経験がある人間ならば，「断る」（拒否）という推意を自動的に想定できる。このやり取りはある程度パターン化されたので，一種の慣習化された推意とも考えられる。このため，（85）で，「誘いに対する返事として都合が悪いということなら，相手の誘いを断っている」という慣習化された推意は，話し手と聞き手の共有知識になっているので，聞き手は話し手から受け取った未完結文について，「行けない」という情報をスムーズに追加して処理できるのである。

6.5　本章のまとめ

本章では，未完結文が選好される動機を明らかにするために，情報量と経済性に注目し，未完結文を二種類の完結文と比較した。その結果，完結文と比べ，未完結文はより経済的な言語形式で，かつ，より多くの情報量があるという特徴を確認し，話し手にとっても聞き手にとっても経済的であるから選好されるという動機が明らかになった。

具体的に，まず，A 類完結文・B 類完結文との比較を通して，未完結文のより経済的な言語形式でより多くの情報量があるという特徴を確認した。そして，実用例に基づき，活性化される情報を情報内容とパラ情報に分類し，未完結文における情報量の特徴を考察した。最後に，未完結文が未完結でありながら，話者間で相互理解が可能な理由を究明した。

本章では，A 類完結文と未完結文の情報量に差異はあまりないものを除外し，完結文より未完結文はより多くの情報量を持つ場合に限定し，情報量と経済性という観点から，未完結文への選好における動機を考察した。

次章は，情報量と経済性以外の観点から，その除外されるものを含め，A 類完結文と B 類完結文より，未完結文が選好される動機を考える。

第 7 章　未完結文への選好に現れる負の動機

日本語ではあいづちが多用されているとよく言われる。会話のやり取りで，発話者の未完結文で終わる発話の後に，あいづちを含む相手の反応がよく見られる。その現象に基づき，会話で未完結文が多用される動機を明らかにするために，本章は，メタポライトネスという観点から，未完結文が話者交替における良好な人間関係を作るための有効なストラテジーであることを検討する。

7.1　話者交替における未完結文の重要性

私達が言葉を使って会話をするときに，会話の参加者は常に順番を交替しながら会話のやり取りを行なう。理論的に考えると，話を終えるか続けるかということは話している本人しかわからないので，会話中にスムーズに発話権を交替することは困難なはずである。しかし，実際には，発話の重複や空白などが確かに存在するものの，話し手と聞き手は基本的に発話権をスムーズに移譲することができる。ということは、会話における話者交替には何らかの暗黙のルールがあるはずである。会話の参加者がどのように発話の順番を決め，どのように話者交替を行なうかについては，Sacks，Schegloff & Jefferson（1974）をはじめ，これまでにも数多くの先行研究が見られる。発話を行なうことや相手とコミュニケーションを取ること自体は，本人の自由を侵害する行為になる。会話参加者がしゃべりたいときに発話権を持ち，しゃべりたくないときに発話権を持たないのは最も理想的な状態である。しかし，しゃべりたいかどうかは本人しかわからない心理状態なので，現実は必ずしも理想通りにはならない。会話参加者がしゃべりたくないときに，他人に発話権を委譲され，逆にしゃべりたいときに，他人に発話権を委譲してもらえない可能性もある。その場合に，当事者のフェイスが侵害されることになる。そこで，会話の参加者の人間関係の構築において，発話権をスムーズに交替することも重要である。インポライトなことを回避するために，話者交替におけるストラテジーも同様に重要な意味を持つ。

日本語の日常会話に限定してみると，未完結文が多用されているのみならず，あいづちを含めて未完結文の後に聞き手の反応がよく現れているという現象が見られる。例えば，（86）の 7-19 の会話で，石川は自分の練習メニューを説明しているが，15 以外は全て未完結文になっており，それらの未完結文のほとんど全てに対して上田の反応が見られる。

（86）1 上田「どうなの。練習メニューって，どんな感，何時間ぐらい練習していらっしゃるの。」
2 石川「試合前だと，8 時間か。」
3 上田「えっ？」

4 上田「8 時間もやってんの？」
5 石川「はい。」
6 上田「朝何時ぐらいからまずやっていらっしゃるの？」
7 石川「朝は九時半ぐらいから始めて，」
8 上田「うん。」
9 石川「ま，11 時半 12 時までやって，」
10 上田「あ。」
11 石川「昼休みが 3 時で，」
12 上田「お。」
13 石川「3 時半ぐらいからやって，ま 7 時半ぐらいまでやって，後ご飯食べてから。」
14 上田「ん。」
15 石川「夜練習したりもします。」
16 上田「は？その後？（相手が頷く）え？連日そんなメニューなの？」
17 石川「ずっとやっぱりできないので。」
18 上田「ん。」
19 石川「4 日なら 4 日って決めて，あとはま 7 時半までやって，夜練はなしとか。」
20 上田「え？でも，夜練なしなだけ？」
21 石川「はい。」
22 上田「ほかの日は？」
23 石川「はい。」
24 上田「お昼とかはずっとやっていらっしゃるの？」
25 石川「基本は。たまに人事休みも一週間一回はあるんだけど，それ以外は…」
26 上田[86] 「いや，それはそうだよね。一週間一回も休まないとねえ。」
27 石川「はい。」

『おしゃれイズム　石川佳純×上田晋也×森泉 2014/09/21』

以上より，未完結文の会話での多用が，話者交替において未完結文が特別の効果を果たすからではないかと予測できる。この問題を以って，本章は，ポライトネスという観点から，なぜ未完結文が多用されているか，発話権の交替において未完結文にどのような機能があるかを明らかにする。

[86] ここでは，「それ以外は…」という石川の発話と上田の発話が言い重なっている。

7.2　メタポライトネス

7.2.1　Brown＆Levinson のポライトネス

Goffman（1967）は社会的相互行為を考察するために，「面目（face）」という概念を提出した。「面目とは、認知されているいろいろな社会的属性を尺度にして記述できるような、自分をめぐる心象（イメージ）である」[87]。そして，具体的な行為の儀礼的成分の基本的な要素として，Goffman（1967）は「敬意表現」と「品行」を提出した。「敬意表現」とは，「相手についての高い評価を適切に当の相手に対して伝える手だてになる行動」（浅野訳 2002：56）で，「品行」とは，「その場にいる人たちに対して、自分がまわりから見て望ましい性質をもっている人間であること､あるいは望ましくない性質をもった人間であることを、表現する」（浅野訳 2002：77）。つまり，Goffman（1967）の面目という概念は，相手向けのものと自分向けのものに分けられている。

Goffman（1967）の「面目」という考えを Brown＆Levinson（1987）は発展させ体系化し，「社会のすべての能力ある成人構成員」（competent adult members of a society）にネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスがあると考え，それぞれについて次のように定義した。

> negative face：the want of every‘competent adult member’that his actions be unimpeded by others.
> positive face：the want of every member that his wants be desirable to at least some others.
>
> Brown＆Levinson（1987：62）
>
> ネガティブ・フェイス：「すべての『能力ある成人構成員』が持っている、自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求」
> ポジティブ・フェイス「すべての構成員が持っている、自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求」
>
> （田中訳 2011：80）

そして，構成員が用いることのできる一連のストラテジーを，「1．補償行為をせず、あからさまに」「2．ポジティブ・ポライトネス」「3．ネガティブ・ポライトネス」「4．オフ・レコードで」「5．FTA[88]をするな」[89]の五つにまとめた。

7.2.2　メタレベルにおけるポライトネス

発話権の獲得や委譲は，従来の会話分析研究においては，会話の構造におけるポライト

---

[87] 日本語訳は浅野訳（2002：5）による。
[88] FTA は「face-threateningact」（「フェイス威嚇行為」）の略称で，日本語訳は田中訳（2011）による。
[89] 日本語訳は田中訳（2011）による。

ネスとして考察されることが多い。滝浦（2008）は「高関与体」の「会話のスタイル」として「話者交替が早い」ことや「聞き手は積極的に反応する」ことを列挙し，「高配慮体」の「会話のスタイル」として「話者交替が遅い」ことや「聞き手は割り込みなど積極的な反応を避ける」ことを列挙した。三牧（2013）は「自己に関する情報を提供する行為、すなわち、『自己開示（self disclosure）』は、自らのネガティブフェイスへの FTA となり、自己開示要求も相手のネガティブフェイスへの FTA となる。しかし、同時に、自己開示は自らのポジティブフェイス欲求を満たし、また情報内容によって相手への関心を示すことは相手のポジティブフェイス欲求を満たす行為ともなる」（三牧 2013：191）と述べ，発話をする行為（＝自己開示）と発話権を委譲する行為（＝自己開示要求）に関わる話し手と聞き手のフェイスを分析した。しかし，Brown＆Levinson（1987）のポライトネスは言語内容に関わるもので，話者交替は言語内容ではなく，メタレベルに関わるので，話者交替におけるポライトネスはメタレベルで考える必要がある。

西條（1999）は先行研究を踏まえて，メタ言語と言語との違いについて，「実質的な強調点の変化」が重要であることを主張した。そこで，メタレベルにおけるポライトネスを考えるときに，「実質的な強調点の変化」は何かを考える必要がある。

まず，本研究は話者交替における発話者の相手への配慮や，発話に対する調整を「メタポライトネス」と定義する。その上で，結論から言うと，ポライトネスとメタポライトネスにおける「実際的な強調点の変化」は，「言語内容」という強調点から「言語行動自体」という強調点への変化であると考える。従来のポライトネスは「言語内容によるポライトネス」であるのに対して，話者交替におけるポライトネスは「言語行動自体によるポライトネス」である。

Brown＆Levinson（1987）は，ポライトネスをポジティブポライトネスとネガティブポライトネスとして分類し，それぞれ 15 個と 10 個の下位ストラテジーを提出した。それらの大半は，発話で言及した内容による相手のフェイスの侵害を回避するためのストラテジーである。つまり，相手が話し手の発話内容を受け取る際のフェイスであれ，受け取ってから具体的な行動を取る際のフェイスであれ，話し手の発話内容を既に受け取ったという前提で，相手のフェイスに関わる部分に対して，話し手は調整を行うことである。しかし，「相手が話し手の発話内容を受け取る」という前提には問題点がある。話し手が相手に向かって話し続けるということ自体は，相手に対する【注意要求】【理解要求】【反応要求】という普遍的な無標の要求を持つ。無論，話しかけられているほうは話しかけてくる人の話を聞きたくない場合もあれば，その話に対して反応したくない場合もある。つまり，特定の人に話しかけるという言語行動自体は，当事者の自由を侵害することになる。人間は，相手の発話を聞き，受け取ってから具体的な行動を取るという手順で行動する。そうすると，発話という言語行動自体は，言語の内容に先立つ。それと同じように，発話という言語行動による相手へのフェイス侵害は，言語内容によるフェイス侵害の前段階にあると考えられる。そのため，従来のポライトネスとは異なる次元で，言語行動自体におけるポライトネスを考えたほうが適切である。従来のポライトネスは「言語内容によるポライトネ

ス」であるとすれば，これとは異なる次元の言語内容の前段階にあるポライトネスは「言語行動自体によるポライトネス」として考えられる。本研究では従来のポライトネスと区別するために，この「言語行動自体によるポライトネス」を「メタポライトネス」（meta politeness）とする。

そして，メタポライトネスにおける言語行動自体は具体的にどのように現れるかを考える。まず，話者交替に伴う発話権の獲得と委譲は，もちろん言語行動自体の具体的な現れとして考えられる。また，範囲を拡大して考えると，会話参加者は発話権を取るかどうかのみならず，相手との交流を行なうかどうかも具体的な行動の現れになる。ここでの相手との交流は，相手を，会話を行なう仲間として扱うかどうかを指す。特定の人を仲間として扱い，相手と会話を行なうなら，相手との交流が成り立つ。つまり，このように考えると，基本的に発話の種類を問わず，すべての発話は相手との交流になる。自分からの情報提示や，相手への情報要求はもちろん，相手への行為要求や相手との友好度を高める共感形成を含め，全部相手との交流になる。以上より，本研究は Brown＆Levinson（1987）の考えを参考とし，話者交替における会話参加者のフェイスを次のように定義する。

ネガティブフェイス：発話権を取りたくない，相手との交流を行ないたくない[90]という欲求。

ポジティブフェイス：発話権を取りたい，相手との交流を行ないたい[91]という欲求。

7.3　話者交替における規則

7.3.1　話者交替の定義

Turn-talking は研究者によって訳語が異なるが，本研究では話者交替という名称を使用する。具体的にどのような場合が話者交替として認められるかということを明確にするために，まずあいづちとターンという二つの基本概念を確認する。

あいづちについて，本研究はメイナード（1993）の定義に従う。すなわち，「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語行動を含む）で，短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる反応を示したものは，あいづちとしない」（メイナード 1993：58）である。

ターンについては中井（2003）の定義に従う。

> ターンとは、会話の中で、一人の参加者が話を開始してから終了するまでの連続した単位であり、文・節・句・語彙等の統語的単位、イントネーション等の韻律的単位、

[90] 具体的には，相手へ情報を提示したくない，情報を引き出したくない，行為を要求したくない，共感を形成したくないを含む。

[91] 具体的には，相手へ情報を提示したい，情報を引き出したい，行為を要求したい，共感を形成したいを含む。

非言語行動の単位で構成されているものである。また、ターンは本筋の話に関係する実質的な発話から構成されており、あいづち的な発話やうなずきはターンに含めない。したがって、一人の参加者のターンの間に、別の参加者のあいづち的な発話が数回打たれても、そのターンは終了したことにならない。ターンが終了するのは、ターン保有者が自らの意志で話すのをやめてターンを終了させたり、他の参加者にターンを譲ったりする場合と、他の参加者の実質的発話の開始や、外的事情（例：突然の来客、地震等）でターンを遮られたりした場合である。また、長い沈黙の後に、前と同じターン保有者が再び話し始めた場合は、新たなターンが開始されたことになる。

（中井 2003：29）

以上より，会話のやりとりにおける形式的な面から考えれば，話者交替とは基本的に聞き手が新しいターンを始める場合であり，もし聞き手の反応が単に話し手の内容を聞いているというメッセージを送るためのあいづちであるなら，そこに順番交替はなく，話者交替を行なっていないと言える。

7.3.2　話者交替の規則

Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）は発話順番の変化，話者の交替における規則をまとめた。それについて，様々な先行研究で紹介されているが，本研究では山田（1999）のまとめを引用する。

1a 規則――他者選択：Current-Selects-Next（C-S-N）
もし今の話し手（Current Speaker）がつぎの話し手（Next）を選択（Selects）したら，今の話し手は話すのをやめ，つぎの話し手が移行適切場でつぎの発話順番を取得する。この時，つぎの話し手に話す義務が生じる。

1b 規則――自己選択：Self-Selects（S-S）
もし今の話し手（C）が，つぎの話し手（N）を選択しなかったら《つまり，1a 規則がはたらいていない場合》，最初に話し始めた者（つまり，自分をつぎの話し手として選択した者）がつぎの発話順番に対して話す権利をもつ。

1c 規則――自己継続：Current-Continues（C-C）
もし今の話し手（C）が，つぎの話し手（N）を選択せず，また他の会話参加者による自己選択も起こらない場合《つまり，1a 規則も 1b 規則もはたらかない場合》，今の話し手（C）は続けてもよい。しかしその義務はない。

2 規則――つぎの移行適切場において，もし 1c 規則がはたらいていたら，1a―1b―1c 規則がこの順番で優先権をもって再適用される。

（山田 1999：5-6）

7.4 統語的形式と話者交替の関係

7.4.1 発話の完結点

聞き手は話し手の発話にあるイントネーションや非言語の行動以外に，言葉の統語形式によって話し手の発話の終了を予測し，発話権を取ることも推測できる。話者を交替することが可能で適切な場所を Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) は「TRP」(transition-relevance place）と名付けた。聞き手がどのタイミングで発話権を取り，発話を始めるか，TRP がどのような性質を持つかについて，統語形式との関係から考える。

まず，話し手が発話権を取り，自分の順番内でどのような形式で話を進め，話を終えるかは，様々な単位のタイプから選択することが可能である。この単位のタイプについて，「文として，節として，句として，語として組み立てられる」[92]と Sacks, Schegloff&Jefferson（1974）で述べられている。

話し手は単位のタイプから形式を選択し，発話を組み立てる。しかし，実際に話すときに，文が語や句，節によって構成されているものなので，話し手の発話が語や句，節，文のいずれで終わるか，すなわち，発話順番内にある話し手の発話の完結点がどこにあるのかは判断しづらい。この問題に関連し，西阪（2008）は「表現形式的完結性」という概念を提起し，「表現形式的完結性」とは「とりあえず，句点（マル）によって区切ることができるような様態を指していると言ってもよいが，実際には多様な形式を取りうる」[93]ものである（西阪 2008：86）と述べた。西阪（2008）は厳密な定義をしていないが，「表現形式的完結性」が「順番構成的完結性」から独立しており，順番構成的に完結しているところが必ず表現形式的にも完結しているわけではないと指摘した。言い換えれば，話者交替が現れる場所は必ずしも表現形式的に完結している場所とは限らず，表現形式的に完結している場所も必ずしも話者交替が現れるとは限らない。話し手は，意味のまとまりのある発話の途中で，聞き手に話す機会を渡すこともできると言える。

さらに，西阪（2008）は日本語の会話に限定して考察した結果，「表現形式的にも順番構成的にも未完結の場所でありながら，聞き手の反応が体系的に観察できる場所がある」と述べ，そのような場所を「反応機会場」と名付けた。

西阪（2008）の考察により，話し手の順番内の発話は完結性の度合いが異なり，より強い場合もあれば，より弱い場合もあると言える。発話が完結している場所は話者交替の適切な場所とも理解できるので，TRP にも強さの違いがあると言うことができる。そして，西阪（2008）が「反応機会場」「順番構成的完結性」「表現形式的完結性」の三つの異なる概念を指摘しているように，TRP の強さもこれに対応して少なくとも三つの段階に分けて考えられるのではないかと考えられる。つまり，「反応機会場ではあるが，順番構成的に完結していない場所」→「順番構成的には完結しているが，表現形式的には完結してい

---

[92] 日本語訳は西阪訳（2010）による。

[93] 「表現形式的完結性は，文法的な形式だけではなく，終結の音調が下降もしくは（質問であることが際立つような形で）上昇することによっても特徴付けられるだろう」とも西阪（2008：86）は指摘した。

ない場所」→「表現形式的完結性を持つ場所」の順序で TRP が強くなる。本研究では，個々の特徴に合わせ，それぞれ「弱い TRP」「自由な TRP」「強い TRP」と名づける。それを簡単に表で明示すると，表 16 のようになる。

TRP の強弱	特徴
弱い TRP	反応機会場ではあるが，順番構成的に完結していない場所
自由な TRP	順番構成的には完結しているが，表現形式的には完結していない場所
強い TRP	表現形式的完結性を持つ場所

表 16　TRP における強弱

7.4.2　発話の切れ目と統語形式の関係性

7.4.1 で，西阪（2008）の考えを参考にし，発話の完結性及び TRP の強さと話者交替を概念的に分析したが，西阪（2008）は「表現形式的完結性」を厳密に定義していないので，TRP の強弱や話者交替は言葉の形式自体と関係があるかどうかはまだ不明確である。

2.3.2.1 で Grice（1975）の協調の原理（cooperative principle）を紹介した。この原理に従えば, 話者交替ができる場所は基本的に話し手の発話に意味のまとまりがある場所である。発話の意味のまとまりがある場所は発話の切れ目でもあるので，話者交替に適切な場所としての TRP は，発話の切れ目としても考えられる。

（86）の 7－16 に注目してみると，面白い現象が見られる。15 を除き，石川の発話は全て未完結文になっている。それらに対する上田の答えも，16 を除いて，全てあいづちになっている。石川の 15 の完結文という発話に対して，上田は新たなターンを始めている。

そして，（86）と同じような現象は次の（87）にも見られる。

（87）【上田は佐藤が綾野剛と友達であることを知った後】
1 上田「共演してからすごく仲良くなったの？」
2 佐藤「いや，実は共演したことはあるんですけど，」
3 上田「ん。」
4 佐藤「その前にこうなんか突然来て，僕のほうに突然来て，」
5 上田「お。」
6 佐藤「僕のこと CM でかなんかで見たんですって。」
7 上田「お。」
8 佐藤「それで，なんか気に入ってもらったらしくて，」
9 上田「え？」
10 佐藤「共通の知り合いに連絡して，」
11 上田「お。」
12 佐藤「ちょっと佐藤だけど一緒に会いたいんだけどみたいな感じで，」

13 上田「おー。」
14 佐藤「会いに来たんですよ。」
15 上田「え？おーおー。それで？」
16 佐藤「それで，僕からすると，ま先輩だし，」
17 上田「ん。」
18 佐藤「あっすみませんみたいな感じじゃないですか。」
19 上田「え，ま，ねえ。」
20 佐藤「あっ始めましてみたいな感じで言うと，」
21 上田「お。」
22 佐藤「ちょっと敬語やめてよみたいな，」
23 上田「ん。」
24 佐藤「仲良くしてよみたいな感じで，」
25 上田「お。」
26 佐藤「ま，ちょいちょい飲むことがあって，1 年，で，それでその間に共演したりとかして，」
27 上田「ん。」
28 佐藤「2 年ぐらいたってやっと今では剛くんっていう感じで，」
29 上田「うぇー。」
30 佐藤「敬語じゃなく話せる仲になった。」

『おしゃれイズム　佐藤健×上田晋也×森泉 2014/07/20』

（87）は佐藤が上田の 1 の質問に答えている場面である。2－13 で，佐藤の発話は全て未完結文で，それらに対する反応として，上田は全てあいづちで答えている。14 になって，佐藤の発話のターンはまだ終了していないが，完結文になっている。それに従って，上田は単なるあいづちではなく，「それで」を通して発話権を取り，ターンの続きを要求している。そして，上田は，佐藤の 16 の未完結文に対して，あいづちで返事し，17 の共感を求める完結文に対して，単なるあいづちではなく，発話権を取り，共感に応じている。その後，18－29 で佐藤の発話はまた全て未完結文になって，上田も単なるあいづちで反応をしている。以上より，（87）は（86）と同じように，話し手の未完結文に対して，聞き手は単なるあいづちで反応を示しているが，話し手の完結文が意味のまとまりではなくターンの途中であっても，聞き手はあいづち以上の反応を示していることがわかる。以上のことから，未完結文に比べて，完結文の後は切れ目が大きく，TRP も強いということがわかる。発話の切れ目や TRP の強さは，統語形式とある程度関連していると言える。

7.4.3　統語形式における TPR の強弱

7.4.3.1　各統語単位における TRP

7.4.2 で，TRP の強さは統語形式と関係があることを確認したが，その関係を明らかにするために，7.4.1 でまとめた弱い TRP，自由な TRP，強い TRP が具体的にどのような場合に現れるかを考察する。

まず, 話し手が選択可能な単位のタイプは語から始まっているように, 単語の内部に TRP の存在が不可能であることは容易に推測できる。

弱い TRP は基本的に聞き手の反応，即ちあいづちのみ許容される場合である。橋本文法では，意味を有する単位として，「文を実際の言語として出来るだけ多く句切った最も短い一句切」が「文節」として定義されている。文節の後に間投助詞「ね」や「さ」などが付けられるのと同様に，話し手の一つの意味のまとまりのある発話順番内で，理論上聞き手のあいづちが許容される最小の単位は文節の後である[94]。

（88）a 私は明日学校行きたくない。
　　b 私はね，明日ね，学校ね，行きたくない。[95]

例えば，（88a）は意味のまとまりがある完結文であるが，話し手は（88b）のように間投助詞を入れながら句切って言うことができるので，聞き手はその間投助詞の後にあいづちを打つことが可能である。但し，話し手の発話がまだ完結していないので，会話の協調原理に従うには，発話権を取り，新たなターンを始めることが許容されにくい。ここから，文節の後は弱い TRP であるということができる。

次に，文節より上位にある統語的な単位として，節が考えられる。節は文節を含んでいるので，意味がある程度まとまっていると言える。節は文節より上位の単位にあるので，その後に聞き手のあいづちが許容されるのは言うまでもないだろう。さらに，節の意味のまとまり性によって，聞き手は節の後に，あいづちのみならず，新しいターンを始めることも可能である。但し，節は表現形式上未完結である以上，聞き手の反応が必ず要求されるとは断言できない。つまり，節の後にある聞き手のあいづちや発話権の移譲は，あくまでも可能性である。あいづちを打つかどうか，発話権を取って新しいターンを始めるかどうかは，聞き手の自由である。

（89）1 看護師「ねえ，おなかすかない？昨日さ，カレー作りすぎちゃって。」
　　2 明日美「いや，私は…」
　　3 看護師「捨てるのもったいないし，うち来ない？」

---

[94] ただし，実際には，話し手の邪魔になることや聞き手の負担になることなどの理由によって，話し手が話している最中に，聞き手が句（＝文節）ごとにあいづちを打つことは少ない。
[95] （88b）は Twitter による。

例えば，（89）で，看護師の 1 の「て」節に対して，明日美は単なる「ん」のあいづちも許容されるし，（89）のような新たなターンの始まりも可能で，更に反応しないことも可能性として考えられる。それにもかかわらず, あいづちしか許容されない弱い TRP より，節の後はあいづちのみならず, 新しいターンの始まりや話者交替も可能性としてあるので，切れ目が文節より強く，TRP も文節の後より強いと言える。節の後に聞き手の反応が非常に自由であるという特徴によって，節の後の TRP を自由な TRP と名づける。

最後に，節より上位にある統語範疇は文になる。文の後は基本的に句点（マル）を付けられるので，西阪（2008）が述べた「表現形式的完結性」を持つと言える。完結している文の後は明確な TRP であり，会話の協調原則に従えば，そこに話者交替が要求されると言える[96]。但し，話者交替の中には話し手が話を続けるという規則もあるので，実際上，聞き手が発話権を取らず，話し手が話を続けるパターンもある。そして，話者交替を明確に要求する特徴からすれば，文の後にある TRP は強い TRP として考えられるだろう。

以上より，各統語形式における TRP の特徴は表 17 のようにまとめられる。

統語形式	聞き手の反応	TRP の強さ
句[97]の内部	反応するのは会話の協調原理に違反する。	TRP なし
発話順番内の中にある句	あいづちのみ可能。	弱い TRP
節	あいづちと話者交替は両方可能で, 反応するかどうかは聞き手に決める権利がある。	自由な TRP
完結文	反応しないことは会話の協調原理に違反する	強い TRP

表 17　統語形式における TRP の強さ

7.4.3.2　文のタイプ

表 17 のまとめには一つの問題点が残っている。完結文の後が強い TRP であることに問題はないが，完結文の種類の違いによって，現れる TRP の強さはそれぞれである。そこで，次に完結文の種類ごとに現れる TRP の強さを明確にする必要がある。それを解決するために，まずどういうタイプの完結文があるかを確認する。

完結文のタイプについて，加藤（2006）は従来の分類を検討し，形式による新しい区分を提案した。まず，形式に基づき，すべての発話を大きく「文の体裁をなさない」ものと「文の体裁をなす」ものに分けた。そして，「文の体裁をなさない」ものを「未分化な文」

[96] Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）は，順番移行に適切な最初の場所でありうるところで順番が移動することが見込めると指摘した。

[97] ここでの「句」は議論で述べた「文節」と同じ意味で使っている。「文節」は「節」という概念が紛らわしいところがあることを考慮し，本研究では，「文節」を「句」と呼ぶ。

と「不完全文」に分け[98]，「文の体裁をなす」ものを命令文・疑問文・平叙文のように分けている。また，命令文・疑問文・平叙文は具体的にどういうものであるかについては，形式に基づくという原則で，「従属節になれない」ものを命令文とし，「そのまま名詞節にのみなる」ものを「疑問文」とし，「名詞節の一部、副詞節の一部、形容詞節になれる」ものを「平叙文」としている。

しかし，「命令」と「疑問」の二つの表現は形式上に現れるのみならず，機能として現れることも可能である。そこで，命令文と疑問文を考えるときに，形式と機能の二つの段階に分けて考えることが必要になる。本研究では，形式から捉えるときに，命令文と疑問文の表現を使用し，それと区別するために，機能から捉えるときに，命令表現と疑問表現を使用する。

まず，形式という観点から考える。形式による命令文は，例えば，「黙れ」のように，動詞の命令形で終わる文である。形容詞や形容動詞は命令形を持たないが，例えば，「美しくなれ」「静かにしろ」のように，軽動詞を通して命令文を作ることができる。形式による疑問文は,疑問詞を含む特殊疑問文,イントネーションが上昇調になる文,文末が「か」・「か＋終助詞」で終わる文である。例えば，次の（90）である。

（90）a 誰ですか。
　　b 日曜も休まないの？／日曜休む？
　　c 分かりますか。／わかりますかな。／わかりますかね。

さらに，機能という観点から考える。機能上で命令や疑問であるかどうかは，言語とメタ発話の二段階に分けて考える。

機能による命令表現は，命令を持つ表現であっても，形式の上では平叙文や疑問文，さらに「不完全な文」になる場合もある。相手に働きかける強制的な度合いに違いがあるが，命令という機能は要求に近い性質を持つ。本研究は，命令の機能を持つものは，命題レベルや推意レベルに【行為要求】の性質を持っているものであると考える[99]。

（91）a 早く片付けてくれない？
　　b 早く片付けてほしい。
　　c 早く片付けてほしいんですが。
（92）ちょっと頼みがある。／ちょっと頼みがあるけど。

例えば，（91）で，形式上 a は疑問文で，b は平叙文で，c は「不完全な文」であるが，

[98] 「未分化な文」は「本来的に、文の要件を満たさない、未分化な表現」で，「不完全な文」は「潜在的には文であるが、文の要素が欠落しているもの」（加藤 2006：12）である。
[99] 正確に言うと，【行為要求】は下位分類できる。命令の機能を持つ表現は，【行為要求】の下位分類の一つとして位置づけられる。本研究では，【行為要求】についての下位分類を考察していない。詳しい検討はこれからの課題にする。

命題レベルや推意レベルで相手に行為を要求しているので，命令の機能を持つと考えられる。さらに，言語のレベルのみならず，命令という機能はメタ発話になる場合もある。例えば，（92）である。

また，言語レベルで，命令文は疑問の機能を持つと考えにくいが，平叙文や「不完全な文」は疑問の機能を持つ場合がある。

（93）a 明日一緒に食事するのはどうかなと思います。
　　b 明日一緒に食事するのはどうかなと思って。
（94）a 行くかどうか答えろよ。
　　b 行くかどうかを答えてほしいです。
　　c 行くかどうかを教えてほしいんですが。

例えば，（93a）は平叙文で，（93b）は「不完全な文」であるが，両方疑問の機能を持っている。そして，メタレベルで，平叙文や「不完全な文」のみならず，命令文も疑問の機能を持つことが可能である。例えば，（94a）は命令文で，（94b）は平叙文で，（94c）は「不完全な文」であるが，三つとも疑問の機能を持つ。

7.4.3.3　各完結文における TRP

句の後は弱い TRP で，相手のあいづちが可能であり，節の後は自由な TRP で，相手のあいづちのみならず話者交替も自由であり，文の後は強い TRP で，話者交替が基本である。ただし，一言で文の後と言っても，文はタイプによって性質も違い，TRP の強さも異なり，それに伴う話者を交替する要求の強さもそれぞれである。そこで，7.4.3.2 で完結文のタイプをまず確認した。そして，それぞれのタイプにおける TRP の強さは次のように考えられる。

結論から言えば，命令文・疑問文・平叙文における TRP の強弱変化は図 2 のように理解できる。

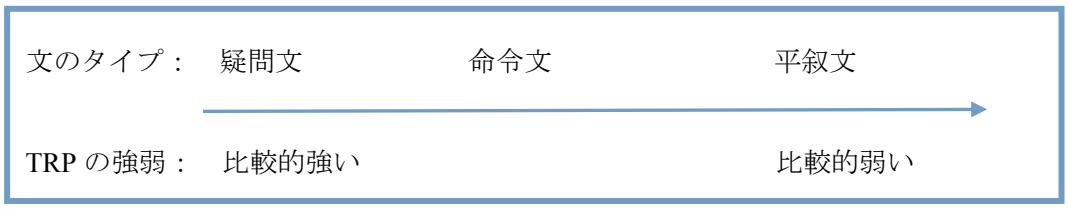


図 2　文のタイプと TRP の強弱

疑問文は他者選択の手段として話者交替が義務で，平叙文は話者交替が強制的な義務ではないので，平叙文より疑問文の TRP が強いということに問題はない。しかし，命令文は

相手に命令や要求をしているので，二次元に分けてその要求性を考える必要がある。命令文において，まず一段階目で，メタ的なレベルで発話権における話者交替の要求があり，そして二段階目で，相手への具体的な行動要求がある。その二つのレベルにおける要求性について，加藤（2015b）はそれぞれ「発話的な力」（＝言語的な要求）と「発話内的な力」（＝非言語的な要求）と定義している。平叙文や疑問文の TRP と比較する際に，一段階目の話者交替，言語的な要求のみが対象になる。言語的な要求に関しては，命令文より，疑問文のほうが強いと考えられる。疑問文は必ず相手の応答を要求するのに対して，命令文は相手への非言語的な要求が強いが，言語的な要求は比較的に弱い。なぜかというと，当事者は命令文を受け，発話を行なわずに直接に行動を取ることも考えられるからである。この点から言うと，命令文は相手に対する言語的な要求が必ずしもあるわけではない。そこで，命令文における TRP より，疑問文のほうがより強いと言える。

7.5　話者交替における未完結文

7.5.1　未完結文の疑似義務性

7.4 では，句や完結文と比較しながら，一種の統語形式としての未完結文に現れる TRP の特徴を分析した。次に，実際の日本語の会話の話者交替において，未完結文は運用上どのような特徴を持つかを考える。

結論から言えば，7.4 で未完結文は統語形式上未完結であるので，聞き手の反応は理論上自由であると分析した。しかし，実際に，従属節で終わる未完結文は，明確な反応機会場であり，聞き手にあいづちという最小限の反応をするという疑似義務[100]が付加されている。

（86）24 上田「お昼とかはずっとやっていらっしゃるの？」
25 石川「基本は。たまに人事休みも一週間一回はあるんだけど，それ以外は…」
26 上田　「いや，それはそうだよね。一週間一回も休まないとねえ。」
27 石川「はい。」
『おしゃれイズム　石川佳純×上田晋也×森泉 2014/09/21』

例えば，（86）の 25 の石川の発話と 26 の上田の発話に注目したい。石川の「それ以外は」からの部分は上田の 26 の部分と重なっている。その理由は，石川の前半の「たまに人事休みも一週間一回はあるんだけど」の後に，聞き手に反応の権利と義務が付与されているにもかかわらず，話し手が聞き手に十分な時間を与えていないためだと考えられる。

反応機会場としての未完結文においては，聞き手の反応が基本的には疑似義務として考えられる。ただし，聞き手の反応は必ずしも言語として現れない場合もある。さらに，こ

[100] ここでの疑似義務は，義務よりも強制度が低いことを表す。聞き手の反応は様々な条件によって抑制される場合がしばしば見られるので，義務より疑似義務のほうが適切であろう。

の反応の義務性は様々な条件によって抑制される場合もしばしば見られる。例えば，聞き手が話し手より上位にある場合である。聞き手が上位にある場合は，話し手に対する疑問に答えなかったり，会話における聞き手が果たす義務が全て抑制されたりする可能性があるので，反応をすることも抑制される可能性も十分にある。また，話し手が未完結文の後にポーズを入れずに，聞き手に反応の時間を与えない場合もある。聞き手の反応が抑制される場合が数多く存在することは,未完結文に対する聞き手の反応が完全な義務ではなく，義務に近い性質を持つ疑似義務であることの現れとして考えられるだろう。

もし，聞き手の反応が義務として要求される場所で，聞き手が反応しなければ，話し手は会話との本筋と一旦ずれるような有標な形式を使って聞き手の注意を引き付ける。

（95）【相沢教授は増岡助教授[101]に実験の進行を確認した後】

1 増岡「あのう，スー，これあの，先生にあの，ご意見するつもりは毛頭ないんですけれども，この実験はとても地味というか。」

2 相沢「地味？」

3 増岡「いいや，そういうんじゃなくって…えーとですね，何だっけ。（物を探している）あああ，ありました，ありました。あの，これです。これです。あの，3 万人に 1 人の特殊な体質を持つ人が特別な薬品を体内に入れた場合の危険性の話ですよね。いや，先生のような大発見をなさった方がやる研究じゃない，そんな気がしまして。」

長い沈黙

4 増岡「先生。」

5 相沢「実験を続けましょう。」

6 増岡「はい。」

NHKBS『タイムスパイラル』第 5 話

（95）で，話し手は増岡で，聞き手は相沢である。3 の発話で，話し手は物を探しながら，聞き手に自分の意見を述べている。話し手は相手の反応を確認するために，「そんな気がしまして」という「て」で終わる未完結文を使っているが，聞き手は反応を示していない。それに対して，話し手は聞き手より下位にありながら，反応の疑似義務性に基づき，「先生？」という会話の本筋の内容とずれる呼び声で聞き手の反応を強制的に要求した。

（87）【上田は佐藤が綾野剛と友達であることを知った後】

1 上田「共演してからすごく仲良くなったの？」

2 佐藤「いや，実は共演したことはあるんですけど，」

3 上田「ん。」

[101] 助教授という肩書きはドラマによるものである。

4 佐藤「その前にこうなんか突然来て，僕のほうに突然来て，」
5 上田「お。」

『おしゃれイズム　佐藤健×上田晋也×森泉 2014/07/20』

また，上の（87）で，話し手は佐藤で，聞き手は上田である。話し手は 4 の発話で，まず「なんか突然来て」という「て」で終わる未完結文を使っているが，それに対して，聞き手は反応を示していない。聞き手の無反応に対して，話し手は前の内容を「僕のほうに突然来て」のように詳細化して重複し，それを通して聞き手の反応をもう一回要求した。そして，聞き手の「お」という反応を受けて初めて話し手は次の話に進めた。

このように，（86）の 7-19 の石川の発話ごとに，（87）の佐藤の発話ごとに，聞き手のあいづちが見られるのは，反応機会場としての未完結文の疑似義務性によると言える。

7.5.2　未完結文の予測性と柔軟性

未完結文の後は自由な TRP であるので，聞き手はあいづちで反応しても発話権を取ってもよく，あるいは反応しないことも可能である。そのため，未完結文は聞き手にとって便利な存在であると言える。また，未完結であることは，様々な可能性を潜在していることを意味し，話し手がその後の展開を予測しながら柔軟に対応することも可能である。つまり，未完結文は聞き手にとっても話し手にとっても柔軟な存在である。

（96）UA（U）：理工系研究科 M2 回生、BL（B）：社会科学系学部 2 回生
3　U｛コップを再び近づけて｝自己紹か、介から/ということで、
4　B　　/あ、そうですね。
5　U　ま、俺は、あのう、ま、J 君と同じ研究室の M のシステムの、M2 の U、です。
6　U　えー、ま、クラブは、俺は―（1）あのう、G（注：スポーツ名）部で、/キャプテンやってて

三牧（2013：202）【会話例 8-5】

（96）で，U は 6 で「キャプテンやってて」という未完結文を使っている。6 の後に，話し手には「発話権を保持し，続けてしゃべること」と「発話権を B に委譲し，黙ること」の二つの選択肢がある。予測できる聞き手の結果として次の三つがある。

①相手 B の反応はなし。
②相手 B はあいづちで反応する。
③相手 B は発話権を取り，新しいターンを始める。

6 の終わりの段階で，会話参加者の U と B がそれぞれしゃべりたいかどうかはお互いに

わからない。U も B も発話権における自分のフェイスを優先することもできれば，相手のフェイスを優先することもできる。以下ではそれぞれの場合に分けて（96）に可能な展開を考察する。

最初は，U も B も自分のフェイスを優先する場合を考える。

B がもし発話権を取りたいと思うなら，③が最も効率の高い選択肢である。B がもし発話権を取りたくないと思うなら，①か②を選択すればよい。

では，B が①や②，③のいずれかを選択するかわからない U にとって，自分のフェイスを優先するために，次の対応が考えられる。

まず, U がもうしゃべりたくない, 相手の B に発話権を委譲したいという設定で考える。もし，B が③を選択したら，U にとって一番望ましく，U は発話権を放棄すればよい。もし B が①を選択したら, U は疑問文などの他者選択の手段を通して相手の B に強制的に発話権を委譲するように命令することが可能である。ただし，その場合に，U のネガティブフェイスと B のネガティブフェイスが侵害されることになる。もし B が②を選択するなら，B のあいづちという反応に対して，U も（96）’のようにあいづちで反応をすることを通して，B に自分がしゃべりたくないというメッセージを明確に送ることができる。

（96）’U「えー、ま、クラブは、俺は―（1）あのう、G（注：スポーツ名）部で、/キャプテンやってて」
B「ああ」
U「うん」

次に，U が続きをしゃべりたい，相手の B に発話権を委譲したくないという設定で考える。U にとっては，B より早くしゃべり出すことが最も効率の高い選択肢である。それは B が①を選択するのと同じような効果がある。つまり，もし B が①を選択すれば，U は発話権を保持すればよい。もし B が②を選択するなら，U は（96）”のように B のあいづちの後に発話権を取ることが可能である。もし B が③を選択するなら，U は相手から再び発話権を取り戻さなければならないことになる。そうすると，二人はお互いのポジティブフェイスを侵害し，発話権を奪い合う緊張関係になる可能性がある。

（96）” U「えー、ま、クラブは、俺は―（1）あのう、G（注：スポーツ名）部で、/キャプテンやってて」
B「ああ」
U「ちょうど明日ね、試合あるんですよ。」

最後に，U も B も相手のフェイスを優先する場合を考える。U と B は互いに発話権を取りたいかどうかがわからないので，U は B のフェイスを侵害しないために，何もしゃべらずに B の反応を待つことが最も無難な選択肢である。なぜならば，U が反応しないなら，

B にとって①②③は全て使用可能な選択肢であるからである。そして，B は U のフェイスを侵害しないために，選択肢②を使ってあいづちで反応するのが最も無難である。なぜならば，上で分析したように，B が①を選択したら，U のネガティブフェイスを侵害する可能性があり，B が③を選択したら，U のポジティブフェイスを侵害する可能性があるからである。

以上より，（96）の後には，話し手の U も聞き手の B も共に様々な手段を用いて自分のフェイスを守ることができる。だが，お互いのフェイス侵害を回避し，良好な会話を作るには，話し手の U が発話権を一旦放棄し，聞き手の B が②のようにあいづちで反応するのが最も無難である。つまり，未完結文の後にはあいづちで反応することが無標であると言える。

7.6　ストラテジーとしての未完結文

7.6.1　ネガティブポライトネスとしての未完結文

7.6.1.1　疑問文による話者交替

話者交替の規則において，疑問文は他者選択の一つの手段である。疑問文は相手向けの質問であるので，相手に発話権を取るように明確に要求する強い TRP であり，話者交替を行なうことが無標である。そこで，相手の疑問文に対して答えず，話者交替を行なわないなら，相手のポジティブフェイスをあからさまに侵害することになり，インポライトネスが発生する。そのときに，疑問文を発話したほうはメタ発話などの更なる強制的な手段で相手に話者交替を要求する権利がある。一方，相手の疑問文による話者交替の要求に対する拒否は，沈黙やメタ発話など様々な手段がある。

（97）【朝尾はアルバ・トレーディングという会社の CEO で，青石は帝江物産の社員で，朝尾の会社で二人きりの場面】

朝尾「あの彼とはうまく行ってんの？」

青石（沈黙）

朝尾「無視はないでしょう。」

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 2 話

（98）【青石が会社の植物に水を入れながら，二人きりの場面】

田野倉「結婚したら，会社やめちゃうんですか。」

青石「え？」

田野倉「みんなが言ってましたよ。年内には寿退社じゃないかって。」

青石「その話はやめて。」

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 1 話

例えば，（97）で，朝尾は明確な聞き手向けの疑問文で青石に発話権を取るように要求しているが，青石は沈黙という行動で相手の要求を明確に拒否した。その後，朝尾は「無視はないでしょう」というメタ発話を通して，相手の言語行動を非難すると同時に，相手にもう一度話者の交替を要求している。さらに，（97）の沈黙という拒否手段に対して，（98）で，青石は「その話はやめて」というメタ発話で相手の田野倉の話者交替の要求を拒否している。（98）は青石が言語を使って答えているという点を考えると，ある意味で話者交替を行なっているとも理解できる。その意味で，（98）は（97）より相手のポジティブフェイスを侵害する程度が比較的弱い。とはいえ，いずれも相手の話者交替の要求を拒否しているところが同じなので，明確なインポライトネスである。

相手の質問に対して拒否することが，相手のポジティブフェイスを侵害することになるのは事実である。しかし，場合によって相手の疑問文に対して，話者交替を拒否することが可能のみならず，許容されることもある。それは疑問文を出すこと自体が相手のネガティブフェイスを侵害する行為になるからである。さらに，その許容度は，発話内容による相手へのフェイス侵害とも関係がある。発話内容による相手へのフェイス侵害が大きくなればなるほど，許容度が上がる。（97）と（98）はそのような例である[102]。

さらに疑問文を使用することは発話権の委譲を明確にしている分，相手の自由をあからさまに侵害する行動でもある。そのため，話者交替において，疑問文の使用には「共通基盤がある」という条件が必要となる。そのような共通基盤が構築されたら，FTA になりにくくなる。つまり，話し手は疑問文を使う際に，聞き手とその疑問が許容されるような共通基盤にいなければならない。その共通基盤は，単に人間の上下や親密関係のみならず，質問の内容なども総合的に関与する。

（99）店員「いらっしゃいませ。1 名様ですか。」

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 1 話

例えば，（99）は店員から客に向けられた質問である。店員と客は初対面であり，店員の質問が許容されるのは，質問内容が客として受け入れるために必要なものであり，店員と客の間にそのような質問をしてもよいという共通基盤があるからである。逆に（97）と（98）で，話し手と聞き手が知り合いや同僚であるという間柄でありながら，質問が許容されないのは，話し手と聞き手の間に（97）と（98）にある質問内容をしてもよいような共通基盤がないからである。

よって，良好な会話を作るには，話し手は聞き手に質問をする前に，挨拶で共通基盤を作ったり，メタ発話で共通基盤の確認をしたりする。例えば，初対面の人が必ず挨拶から始まるのはその共通基盤を構築するためである。（99）の「1 名様ですか」という質問の

[102] 具体的に，（97）で，相手の質問に対する青石の沈黙という反応が許容されるのは，「二人の関係が親しくないこと」と「質問の内容は青石のプライベートに関わること」の二点があるからである。（98）で，話し手の青石の「その話はやめて」という応答拒否の行動が許容されるのも，（97）と同じである。

前にある「いらっしゃいませ！」という挨拶言葉も共通基盤を構築するための手段である。同様に，（100）の「ちょっと聞いてもいい」というメタ発話は共通基盤の確認である。

（100）【青石は瞳の同じ会社の先輩で，二人が昼食をしている間に】
青石「瞳ちゃん，ちょっと聞いてもいい？」
瞳「なんですか。」
日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 4 話

更に，未完結文も共通基盤を構築するために有効な方法である。例えば，（101）である。

（101）【朝尾はアルバ・トレーディングという会社の CEO で，青石は帝江物産の社員である。青石は，資料の届けを部長に頼まれて，アルバ・トレーディング会社の受付に来た】
青石「帝江物産のものですが，朝尾さんに資料をお届けするように言われて来たのですが。」
受付「こちらへどうぞ。」
日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 2 話

（101）で，話し手は青石で，聞き手は受付である。（101）は，話し手が朝尾に会うのが目的で，主節は疑問文のみならず，平叙文でも命令文でも可能であるが，行為を要求している共通点がある。（101）は聞き手に行為を要求するための理由の説明である。疑問文であれ，行為要求の命令表現であれ，（101）の未完結文はそのような要求を容易に発話できるような共通基盤を構築して，最終的により効率よく目的を達成できる効果を持つ[103]。

7.6.1.2　疑問文における要求性の弱化

疑問文を出すことは相手のネガティブフェイスを侵害し，相手がその質問に答えることを拒否するなら，話し手のポジティブフェイスを侵害することになる。そこで，疑問文は話者交替において明確である分，危険性も高い。その一方，未完結文はその危険性を回避し，聞き手のネガティブフェイスを侵害する度合いを弱められるネガティブポライトネスのストラテジーの一つである。

未完結文は共通基盤を作る手段となるのみならず，疑問の機能を持つ場合もあるので，疑問文の代わりに使用することも可能である。例えば，（102）である。

（102）【母は友達と旅行へ行こうとするが，お金はない。娘は母にお金がないことをよ

[103] 話し手が直接に疑問文で聞くなら，相手が状況がわからないと，疑問文で返事をする可能性もあるからである。

く知っており，過去に母に何度もお金を貸してあげたことがある。話し手である母が，聞き手である娘にお金を借りようとする場面】

a　母「友達から急に旅行に誘われちゃって。ちょっとお金貸してくんないかなと思って。」

a’ *母「友達から急に旅行に誘われちゃって。ちょっとお金貸してくんない？」*

フジテレビ『ディア・シスター』第 1 話

（102）で，話し手は母で，聞き手は娘である。（102）は母が娘にお金を貸してほしいという意図を持っての発話である。（102a）の未完結文より，（102a’）の疑問文のほうが意図をもっと明確に伝達できる。しかしその分，（102a’）は相手のフェイスへの侵害が大きい。それに対して，（102a）の未完結文は，要求性の弱化によって，その侵害を弱める機能がある。（102a）による要求性の弱化は，言語行為による要求の弱化と言語内容による FTA の弱化，すなわち，メタポライトネスとポライトネスの二段階に分けて考える必要がある[104]。

まず，言語行為というメタポライトネスの段階について分析する。発話権を取るかどうかということに対して，強い話者交替の性質を持つ疑問文の言語レベルにおける要求性によって，（102a’）の疑問文は，聞き手に選択する余地を与えず，即座な応答を要求している。それに対して，（102a）の未完結文は，未完結であるという形を通して，聞き手に選択する権利を与え，（102a’）より話者交替における要求性が弱いと言える。

次に，言語内容におけるポライトネスの段階について分析する。

第一，談話標識[105]の「ちょっと」は相手に負担をかける行為を行うことを予言する機能があり，「貸してくれる」における助動詞の「くれる」は相手からの恩恵を表わし，終助詞「かな」は独話的な性質によって相手への返事要求を弱める機能がある。それらの表現によって，お金の貸出という行為要求が弱まると考えられる。

第二，（102）は機能レベルで相手に「お金を貸す」という命令（＝要求）の性質があり，相手に与えるインパクトが強い。そうすると，聞き手の娘が拒否する可能性が高い。その点に関して，話し手の母は予測できるはずである。聞き手の娘は拒否すると，話し手の母は次の展開に困る状況になる。そのような背景で，（102a）の未完結文は，要求することを断言せず，聞き手に考える時間を与えながら，聞き手の反応に対して話し手が柔軟に対応することができる。聞き手への要求を断言せず，要求内容を調整することが可能であるという点から言うと，（102a’）より要求性が弱いと理解できるだろう。

また，疑問文による相手のネガティブフェイス侵害の補償する方法として，疑問文の後に未完結文を追加することによって，疑問文の話者交替の要求性を保持しながら，その強さを弱めることもできる。例えば，（103）の例である。

104　（102）の「と思って」は，「と思う」という形式を回避するために付加されているとも考えられる。その点から考えると，「と思って」という慣習化された形式の使用も（102）の要求性を弱める理由の一つとして考えられる。「と思って」の機能効果については，10.4.5.2 で詳しく分析する。

105　談話標識の定義については，11.1 で詳しく議論する。

（103）【晴樹は家庭教師になることについて，先生に聞いている場面】
晴樹「もしかして，嫌だった？うち東京からちょっと遠いし。」
NHK ドラマ『聖女』第 1 話

（103）で，話し手は晴樹で，聞き手は晴樹の家庭教師である。話し手はまず「もしかして，嫌だった」という質問を出した。それに対して，聞き手に発話権を取って答えることが要求される。もし，聞き手が「嫌」で答えるなら，話し手の発話権委譲の要求に応じているので，話し手のメタレベルのポジティブフェイスを侵害せずに済む。しかし，「嫌」で評価することは逆に話し手の「よく思われたい」というポジティブフェイスを侵害することになる。もし，聞き手が「嫌じゃない」で答えるなら，聞き手の本心に違反する可能性がある。つまり，話し手の質問は相手を答えにくいという窮地に導いている。そのことについて，話し手の晴樹には予測できているはずである。そこで，話し手は自分の質問にある話者交替の強さを弱めながら，聞き手が「嫌」という答えを出しやすくするために，嫌になる一つの理由として未完結文を追加した。そうすると，聞き手は前の質問による話者交替の要求に応じてもいいし，聞き手の追加した未完結文のみに対して反応してもいいということになる。つまり，（103）では，未完結文の追加によって，聞き手の反応の自由度が拡張され，ネガティブフェイスが確保され，全体のポライトネスが上昇することになる。

7.6.2　ポジティブポライトネスとしての未完結文

7.6.2.1　話者交替における平叙文

平叙文は発話の完結点で，強い TRP である。しかし，疑問文は明確に発話権の委譲を要求しているのに対して，平叙文は話者交替の強制がない。話者交替のルールに従うと，平叙文の後に，聞き手は自己選択の規則を選択して発話権を取る可能性もあれば，自己選択の規則を選択せず発話権を取らないことで，話し手が発話権を保持する可能性もある。そうすると，「聞き手が発話権を取るという選択」と「話し手が発話権を放棄したいとき」が一致する場合，または「聞き手が発話権を取らないという選択」と「話し手が発話を続けたいとき」が一致する場合は，ポライトネスに関わる問題はない。だが，逆のケースになると，お互いのフェイスを侵害することになる。よって，話者交替において，平叙文は，疑問文のような強制性はないが，話し手と聞き手を，発話権を取るか取らないかという曖昧で緊張した関係に導きやすい。

さらに，先行研究における話者交替の考察は，単に発話者の交替という形式的な面に注目して行なわれてきた。会話のやりとりにおける意味内容的な面ではどのようになっているか，つまり，発話権を委譲する場合の会話の意味内容はどのような特徴があるかという問題を考察していない。それを解決するには，加藤（2009d）の「セッション」という考え

が参考になる[106]。中井（2003）のターンという単位は，会話のやり取りにおける形式的な面が出発点であるのに対して，加藤（2009d）の「セッション」という単位は，会話のやり取りにおける意味内容的な面が出発点である。

> セッションとは，「やりとりの開始から終了まで言語行動の全体」であり，最初の発話開始点をもって始まり，最後の発話終了点を持って完了する。セッションが開始してから，話題が転換するなど，一連の発話を内容と一貫性と統合性などの観点からより小さい単位に区分することも可能であり，セッションの内部におけるより小さい単位をパラグラフ（paragraph）と呼ぶ。1 セッションは 1 つ以上のパラグラフから成る。
>
> 加藤（2009d：206）[107]

ターンとセッションは同じ概念ではないので，話者交替を行なうターンの切り替え目は，必ずしも新たなセッションの開始点ではない。例えば，同一話者は「では，次の話に入ります」などを通して，発話権を委譲せず，同一ターンで新たなセッションを始める場合もあれば，二人の会話参加者が共同で一つのセッションを完成する場合もある。それにもかかわらず，会話参加者が発話権を取って新たなターンを始めるところは，意味がある程度完結しているので，新たなセッションの開始点である場合が多いと言える。

会話を終了させるには，平叙文が無標な手段であるように，平叙文の完結性によって，平叙文はセッションを終結させるという機能を持つ。

（104）【飲み会の後，青石は家に帰ろうとしているが，瞳は聞きたいことがあるから，帰らせたくない場面】

1　瞳　「あの人のこと白状するまで，今日は帰しませんからね。」
2　青石「いや，だってこの後予定が…」
3　瞳　「だめです。二人とも今日は帰しませんよ。」

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 1 話

例えば，（104）の 1 と 3 は同じく「今日は帰しません」という意味であるが，未完結文である 1 に比べ，完結している 3 の平叙文はセッションを終結させる機能が強い。そこで，平叙文による話者交替において，もし聞き手が発話権を取るなら，聞き手に話題の変換，従来のセッションを終結させ，新たなセッションを始めるという二次的な軽い要求があると推測できる。無論，平叙文の後に話し手も聞き手も発話権を取らないなら，会話の終了になる。しかし，実際には，話し手が平叙文を使用する段階でも，聞き手がまだ同一セッションや会話を終結させたくないという可能性もある。そのため，もし話し手は，聞き手

---

[106] セッションとパラグラフの違いについて，加藤（2009d）では議論していないが，パラグラフの境界部には「ところで」などの談話標識が現れることが多いと加藤（2009d）は述べている。
[107] 加藤（2009d）は発話者の交替ではなく，会話の流れにおける意味内容に注目してセッションの単位を定義していると考えられる。

のために，従来のセッションに続く発話権委譲の機会を作らずに，直接に平叙文を使用するなら，セッションや会話の終結に関する聞き手の意見を無視し，聞き手のしゃべりたいというポジティブフェイスを侵害する危険があると考えられる。

7.6.2.2　平叙文における要求性の弱化

前節で述べたような平叙文の使用によって発生する話し手と聞き手の発話権に関する曖昧で緊張した関係や，平叙文のセッションや会話の終了機能による聞き手のポジティブフェイスの侵害を回避するために，未完結文の使用が考えられる。未完結文は，聞き手に反応機会を与えることによって，平叙文における緊張関係とフェイス侵害を回避することができる。聞き手に反応機能を与えることは，聞き手の「しゃべりたい」という発話権におけるポジティブフェイスを尊重することになるので，平叙文の代わりに使用される未完結文は，ポジティブポライトネスのストラテジーの一つとして位置づけられる。

ポジティブポライトネスとしての未完結文は，要求性を持たない場合と要求性を持つ（=命令の機能を持つ）場合に分けて考えられる。

まず，要求性を持たない場合について述べる。

要求性を持たない場合の未完結文は，平叙文とは異なり，相手の疑問に対する応答として，相手に発話権を取る機会を作ることによって，聞き手のポジティブフェイスの侵害や，セッション及び会話の独自な終結を回避し，セッションの終結権を聞き手に渡すことができる。さらに，聞き手に反応機会を与えることによって，話し手は要求を示さずに，聞き手に自発的に行為を起こさせるように誘導することも可能である。例えば，（105）である。

（105）【大城と青石は同僚である】

大城「なあ，青石，この後暇？」

a　青石「ちょっと映画見に行こうと思ってて。」

a’ *青石「ちょっと映画見に行こうと思っているんだ。」*

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 1 話

（105）で，話し手は大城で，聞き手は青石である。聞き手の質問に対して，話し手は自分に予定があるという内容を伝達した。（105a’）も同じよう内容を伝達することができる。それにもかかわらず，話し手が（105a）の未完結文を選択したのは，自分でセッションの終結を回避し，聞き手にセッションの終結権利を与えるためであると考えられる。世界知識によって，聞き手からの時間に関する質問は，本当の意図ではなく，本当の意図を尋ねるための前提条件であることがわかる。つまり，聞き手はセッションの終結を望んでおらず，発話権を取って本当の意図を伝達する意欲があるはずである。それについて，話し手が予測できた。よって，聞き手の「しゃべりたい」というポジティブフェイスを侵害することを回避するできるために，（105a’）の平叙文より，（105a）の未完結文が選択

されたと考えられる。さらに，（105a）の未完結文は，聞き手に反応機会を与えることによって，話し手が「どうしたの」などの回答要求を明示しなくても，聞き手が自動的に意図を説明するように誘導することも可能である。

（106）【瞳は青石の同じ会社の後輩で，二人が会社にいる場面】

瞳　「元気ないですね。また寝不足ですか。」

a　青石「うん。<u>なんか寝付けなくてね。</u>」

a’　*青石「うん。なんか寝付けなかったんだ。」*

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 2 話

（105）は話し手の青石が聞き手の大城のしゃべりたいという気持ちを予測できたので，平叙文を回避し未完結文を選択したが，（106）は，話し手の青石にとって，聞き手の瞳がセッションや会話を続けてしゃべりたいかどうかを，明確に予測しにくいケースである。相手の気持ちを予測しにくい段階で，独自にセッションや会話を終わらせる危険がある（106a’）の平叙文より，（106a）の未完結文は無難な選択肢であると言える[108]。

次に，要求性を持つ場合について述べる。

要求性を持つ場合は，未完結文の相手へのフェイス侵害に対する補償は二つのレベルで考えられる。メタポライトネスのレベルでは，聞き手に発話権を取る機会を与えることで，聞き手の「しゃべりたい」というポジティブフェイスの侵害を回避することができる。それと同時に，ポライトネスのレベルで，聞き手に発話権を渡して反応機会を与えることによって，話し手からの要求を断る機会も聞き手に与えることができる。つまり，メタポライトネスのレベルで，聞き手の「しゃべりたい」というポジティブフェイスの侵害を回避できると同時に，ポライトネスのレベルで，聞き手の「邪魔されたくない」というネガティブフェイスの侵害を弱めることもできる。

（107）【大城と青石は同僚で，二人が会社にいる場面】

大城「青石，ちょっとお願いしていい？」

青石「はい。」

a　大城「<u>うちで取り扱ってるジャムの資料を朝尾さんに届けておいてほしいんだけど</u>。」

a’　*大城「うちで取り扱ってるジャムの資料を朝尾さんに届けておいてほしいんだ。」*

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 2 話

例えば，（107）で，話し手は大城で，聞き手は青石である。まず，メタポライトネスのレベルにおいて，（107a’）より，（107a）は聞き手の「しゃべりたい」というポジティ

---

[108] （106）について，未完結文「て」の選択には，話者交替におけるフェイス侵害を回避するためのみならず，「内容の背景化」という付加による言いさし文の効果を狙うという動機も考えられる。詳しくは，10.4.4.3 で議論する。

ブフェイスの侵害を回避できる。（107a）と（107a’）は，話し手が聞き手に行為を要求しているという機能が同じである。（107a’）は話し手が独自でセッションを終結している。それに対して，（107a）は「けど」の未完結性によって，聞き手に反応機会が与えられている。その反応機会によって，聞き手がセッションを終結させ，話し手の要求に応じてもよいが，発話権を取ってさらに話し手の要求を拒否するための新たなセッションを始めることも可能である。そして，ポライトネスのレベルにおいて，（107a’）より，（107a）は聞き手の「邪魔されたくない」というネガティブフェイスの侵害を回避できる。（107）は聞き手に行為を要求しているので,聞き手のネガティブフェイスを侵害することになる。（107a）は未完結の形式を通して，行為要求の断言を回避できる。さらに，聞き手の反応を見てから話し手が要求内容を調整することも可能である。以上より，話し手にとって，（107a’）より，（107a）の未完結文は，聞き手のフェイス侵害を回避できるのみならず,自分の発話内容を容易に調整できる手段でもあるとわかる。

7.7　本章のまとめ

本章では，会話のやり取りで未完結文が多用される動機を明らかにするために，まず会話における未完結文の後に，聞き手の反応がよく見られるという現象に着目した。その上で，メタポライトネスという観点から，未完結文が話者交替における良好な人間関係を作るための有効なストラテジーであることを明らかにしてきた。具体的には，まず，話者交替におけるポライトネスを従来のポライトネスと区別するために，これをメタポライトネスと定義した。そして，話者交替は統語形式と関係があることを確認した後に，「句→節→平叙文→命令文→疑問文」の順序で TRP が強くなることを明らかにした。その上で，話者交替における未完結文は，聞き手にあいづちという最小限の反応を要求しているという疑似義務性を持つことと，予測性及び柔軟性を持つことを確認した。最後に，ポライトネスをポジティブポライトネスとネガティブポライトネスに分けた上で，ストラテジーとしての未完結文を分析した。本章で，メタポライトネスという概念を論じたが，話者交替という言語行動以外に，メタポライトネスは「メタ発話で行なうポライトネス」や「ポライトネスに対するポライトネス」とも理解できるので，今後メタポライトネスについて更に検討していく必要がある。また，平叙文との比較で，セッションの終結との関係で未完結文の効果を議論したが，未完結文を平叙文に置き換える際に，平叙文は「のだ」文にしないと不自然であるという現象が見られる。そこで，未完結文への選好は，第 6 章の情報伝達や第 7 章の話者交替以外に，「のだ」の回避という動機も考えられるのではないかという予測がある。それを今後の課題とする。

以上のように，第Ⅲ部では，未完結文の使用場面などにおける制約と未完結文の選好される動機を考察した。次の第Ⅳ部では，意味機能の完結している未完結文に限定し，それらが「言いさし文」という新たな構文としての形成と特徴を考察する。

第 8 章では，まず「言いさし文」の定義と種類について考察する。

第Ⅳ部

「未完結文の選好による文法論への影響」

第 8 章　構文としての言いさし文

先行研究でも述べたように，語用論は文法論の動機付けであり，文構造を変化させる原動力である。選好によって多用される未完結文は，使用頻度の増加とともに，従属節という構造が変化し，主節としての性質が付与されるようになっている。本章では，形式上は未完結で，意味機能は完結しているような未完結文に限定し，それらを「言いさし文」と呼び，「言いさし文」の定義と種類を明確にしておく。

8.1　言いさし文の定義と形成要因による分類

2.2.1 の未完結文の定義に関する先行研究でも考察したように，従属節のみで終わっている発話に関するこれまでの先行研究は，研究者によって用語もそれぞれ異なる。

その中に，接続助詞などの本来の意味の拡張ではなく，未完結文を新たな構文として捉えているような研究に限定して考察すると，大きく「日本語のみを対象とするもの」と「通言語的な観点からのもの」に分類できる。日本語限定の場合は「言いさし文」や「中途終了発話」[109]，「中断節」などの名称があり，通言語的な場合は“insubordination”や「非従属化」，「従属節の主節化」などの用語がある。

本稿の考察対象は日本語に限定されている。また，日本語に限定して従属節で終わる発話を考察すると，その動機が，伝達における経済性であれ，ポライトネスなどによる完結や断言の回避であれ，従属節のみで成り立ち得るのは，その根本的なところに，途中で中止して言いさすという力が存在しているからである。以上の二点を考慮し，選好が文法論に与える影響として，未完結の文を新たな構文として考察するためには，言いさすことによる「言いさし文」という言葉が最も適切な用語であると考えられる。

よって，本稿は，形式上は未完結であるが，意味機能上は完結しているような未完結文を，新たな構文として位置づけ，「言いさし文」という用語を使用する。「言いさし文」を「形式上は未完結でありながら，意味機能が完結しているような従属節のみで終わる発話」と定義する。

未完結文の基本形を倣って，言いさし文の基本形を「AX，B」と仮定する。未完結文と同じく，「A」は言語形式に現れている「未完結文のマーカー X」以外の部分を指し，「B」は，文法と文脈によって，追加可能な主節を指す。そして，2.3.1 で，「X」を「未完結文のマーカー」という名称を付けたが，言いさし文における「X」は，より限定的な意味を

---

[109] 「中途終了発話」は「中途終了文」と呼ばれることも多い。また，韓国語との対照研究が多いところ考えると，通言語的な場合に入るのではないかということが疑問に思われるかもしれないが，韓国語との比較が日本語の特徴に基づいた上で行われたものが多いので，その点を考慮した上で，本研究は，それを通言語的な観点の範囲に入れないことにした。

持っている。言いさし文は，未完結文と違い，意味機能上の完結性を持っている。それを考慮して，未完結文における「X」と言いさし文における「X」を区別するために，本稿は，意味機能の完結している未完結文，即ち言いさし文における「X」を「言いさし文のマーカー」というより限定的な意味を持つ用語を使用する。

言いさし文を新たな構文として考えるときに，その形成する理由によって，少なくとも二種類に分けて考えることが可能である。Evans（2007）は，従属節が主節になる過程を，「従属節→主節の省略→省略の習慣化→主節としての再分析」という四つのプロセスに分けて説明している。Evans（2007）の省略によるという考えに対して，Kato（2014）は「additional insubordination」という付加的なパターンもあると提言したことを本稿で述べた。

「AX，B」という基本形を持つ言いさし文は，言語形式上「AX」の形で現れる。形式上未完結の「AX」を完結するには，①「B」の追加；②「X」[110]の削除―という二つの方法が考えられる。それを逆方向で考えるなら，「AX」という形式に，未完結という性質を付与させたのは，「B」の欠如あるいは「X」の追加という二つの力であると考えられる。つまり，言いさし文の形成理由は，大きく省略と付加の二種類に分けて考えられる。例えば，（108a）は「覚えないとだめだ」などの省略によって形成されたもので，（108b）は「って」の付加によって形成されたものである。

（108）a【晴樹の母と晴樹の彼女が，二人で台所で食事を作っている場面】
母　「いつも悪いわね，手伝ってもらっちゃって。」
彼女「いいえ。晴樹さんの好きなメニューもっともっと覚えておかないと。」
NHK ドラマ『聖女』第 1 話
b【倉田と編集長は，クラブで隣の席にいる人が知り合いだとわかった後に，編集長がその人の写真を盗撮しているところを見て】
倉田「ちょっと，勝手に撮っちゃまずいですって。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 6 話

8.2　省略と付加の相違点

ここで確認しておきたいところは二点ある。

一つ目は，同一の「X」という形式で終わる言いさし文であっても，その形成が省略による場合もあれば，付加による場合もあるということである。つまり，マーカーの「X」のみで，省略なのか付加なのかは判断し切れない。

（109）a【夕方に，部活が終わって，部員たちが一緒に歩いている。生活に困っている亀沢は，考え事をしていて，みんなの後について歩いている場面】

[110] 従属節としての「A」はある程度完結性を持っているからである。ただし，「X」を単純に削除する場合もあれば，「X」を削除した後に，「A」の述語を調整する必要がある場合もある。

部員「亀沢，これからみんなでラーメン食べに行くけど。」

亀沢「今日は辞めとく。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話

b【珪子は友達とおしゃべりをしている。珪子が自分の新婚旅行が熱海だったと言った後に，友達が笑いながら発言している場面】

友達「うちでさえ網走なのに。」

珪子「近いからいいよなって。鈍行の普通席。でも，干物おいしかったけどね。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話

例えば，（109a）と（109b） は両方とも「けど」というマーカーで終わっている言いさし文であるが，（109a）は「一緒にどう」などの省略によって形成されたもので，（109b）は「けど」の付加によって形成されたものである[111]。

二つ目は，省略によるか付加によるかを判断する基準に，普遍的な基準が存在することである。省略か付加かを明確に判断するには，「X」の違いによってそれぞれ具体的な判断基準も異なる。だが，形式ごとに変わる複数の判断基準には，次のような共通点を持っている普遍的な基準が存在することが推測できる。つまり，「AX」を形式上完結している「AX’」[112]にした後に，その変形後の「AX’」の伝達する内容が，「AX」と同じであるかどうかである。もし，同じであるなら，付加によるパターンだと判断できるが，逆に内容が異なるなら，省略によるパターンだと区分できる[113]。

「AX」と「AX’」の伝達した内容における相違点を考察する前に，まず「AX」を完結文の「AX’」にする具体的な方法を確認しておく。

第 6 章の 6.2.3 で，未完結文の選好される正の動機を考察した際に，未完結文を完結文にするための二種類の完結文を述べた。具体的に，接続助詞などを削除する方法で完成した完結文を A 類完結文と，主節を追加することで完成した完結文を B 類完結文とそれぞれ定義した。「AX」を形式上の完結文の「AX’」にするというのは，即ち，未完結文「AX」を A 類完結文にすることである。言い換えれば，「AX’」は A 類完結文のことを指す。

未完結文を A 類完結文にするには，具体的に二つの方法がある。

一つは，「X」を簡単に削除する方法である。「X」は用言の終止形につく「強境界」[114]や「特強境界」にあるものなら，「X」を削除するという簡単な方法が適応する。例えば，

---

111 詳しくは 10.2 で議論する。

112 「AX’」は「AX」から変形された後の完結の形を持っている文である。

113 同じ文脈で完全な情報内容を伝達するには，省略によって形成された言いさし文は主節の追加が必要であるのに対して，付加によって形成されたものは「AX」に対して文末の調整を行うのみで可能である。言いさし文は無論形式上未完結の文である。その点から言うと，違う要因によって形成された未完結文は，意味機能における完結度も違うと理解できる。つまり，省略によって形成されたものより，付加によって形成されたもののほうがより高い完結度を持っていると考えられる。本稿の 4.4 で，語用論の観点から未完結文の境界性を考察した際に，単に要求性という角度からの分析を行った。それについては，以上で述べた形成要因（省略か付加か）による完結度の相違は，要求性とは違う語用論的な観点として，未完結文の境界性を分析することが可能である。それについての詳しい考察は，今後の課題にする。

114 形容動詞に付くなら，「強境界」にある表現は単なる「X」の削除のみならず，残された表現を調整する必要もある。

「から」や「けど」などで終わる言いさし文である。

もう一つは，「X」を削除した後に，「X」を含む従属節の述語の部分を終止形にする方法である。用言の連用形に付く「て」や「たら」などの「弱境界」にある表現なら，「X」を削除し，さらに残された表現を調整する必要がある。例えば，（110）の「調べてみたら」で終わるものに対して，まず「たら」を削除し，そして「調べてみる」という終止形に調整する必要がある。

（110）【家で，母は 10 万円が入ってるはずの封筒に 5 万円しかないと分かった後】
娘「お母さんがうっかり使ったんじゃないの。」
母「5 万もうっかり使えないわよ。」
父「ちゃんと調べてみたら。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 3 話

以上の二つの言いさし文「AX」を A 類完結文「AX’」に直す方法に基づき，省略と付加を判断する普遍的な基準を考察する。「AX」と「AX’」の伝達された内容は，同じであるなら，付加であり，異なるなら，省略である。

（111）【編集長は健太の友達である。健太がストーカーから家族を守るために，怪我をして入院した。退院した日に，編集長は迎えに来た場面である。】
編集長「いや，しかし，倉田ちゃん，さみしいじゃないか。ええ，命懸けで頑張ったのに家族誰も来てないじゃん。」
健太 a 「まあ。でも，もう元気になりましたし，いい大人なんで。」
→ a’ *「?まあ。でも，もう元気になりましたし，いい大人です。」*

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話

（112）【両姉妹の父は，若者の恋愛相談に乗る夜のラジオ番組のアナウンサーである。姉は父との関係が悪い。父のラジオの時間になった時間に，妹は姉に番組の聴取を勧めている場面。】
妹 「聞きたいんだ。悩みがあるから。」
姉 a 「聞きたくないし。」
→ a’ *「聞きたくない。」*

読売テレビドラマ『恋愛時代』第 6 話

例えば，（111）は省略によるもので，（112）は付加によるものである。（111a）の「いい大人なんで」という言いさし文を A 類完結文「AX’」にするには，「ので」を削除し，「な」を「です」に調整する必要がある。その結果，（111a’）「いい大人です」のようになる。聞き手の編集長の「さびしいかどうか」という質問に対して，「いい大人です」という応答が不十分で，会話の流れが不自然であると感じるように，（111a）の言いさし

文は，付加ではなく，「大丈夫です」などの主節の省略によるものであると判断できる。それに対して，（112a）の「聞きたくないし」という言いさし文を A 類完結文「AX’」にするには，「し」を削除するのみで可能である。その結果，（112a’）の「聞きたくない」のようになる。（112）の「聞きたくないし」を「聞きたくない」にしても，伝達内容に関しては，特に変化することがないので，付加によるものであると判断できる。

以上では，言いさし文のマーカーである「X」のみで，省略と付加の種類を判断できないことと，省略と付加を判断する普遍的な基準が存在するという二点から，省略と付加の関係を検討した。

主節の省略によって形成された言いさし文は，省略の性質によって種類も違うので，次節では，省略の具体的な種類について考察する。

8.3　省略による言いさし文の下位分類

2.3.2.2 で述べたように，Grice（1975）は「推意」（What is IMPLICATED） を「慣習推意」（What is COVENTIONALLY implicated）と「会話推意」（What is COVERSATIONALLY implicated」に分けて説明している。省略によって形成された言いさし文は，その省略部分の性質の違いによって，意味論的な省略と語用論的な省略の二種類に分けて考えられる。Grice（1975）の分類に従うと，意味論的な省略は，慣習推意に，語用論的な省略は，会話推意に当てはまる。

意味論的な省略と語用論的な省略は主に次の二点で性質が異なる。

一つ目は，省略された「B」の形式が固定しているかどうかである。

意味論的な省略は，文脈との関係がそれほど強くなく，省略している部分の形式が決まっている。また，定型表現が多いので，言いさし文という新たな文を形成するまでの過程に，文法化や「非節化」（加藤 2011）が重要なプロセスである。最も典型的なのは，「なければ（ならない／いけない）」という形式における省略であるが，それ以外に，「たら／ば（どう）」や「たら／ば（よかった／いいのに）」「ないと（いけない／だめだ）」「たり（する）」「て（ください）」「って／と（言った／聞いた））」などの形式が考えられる。

それに対して，語用論的な省略は，省略された部分の形式は決まっていないが，意味内容は決まっている。その分，文脈との関係が緊密である。

（113）【白尾は野球部の部員で，記者は野球部の取材の担当者である】

記者「ねえ，よかったら，話を…」

白尾「練習中なんで。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話

例えば，（113）の言いさし文は，その後に「今戻らなければならない」や「今話ができ

ない」，「先に失礼する」などの様々な形式が考えられるので，省略された形式が決まっていないが，どの形式も相手からの行為を拒否する意を表すところに変わりはない。つまり，（113）の省略された主節の「B」は，意味内容が決まっている語用論的な省略である。

二つ目は，省略された「B」の部分が取り消し可能性を持っているかどうかである。

会話の協調原理に違反しない限りに，省略による言いさし文は，主節が省略されたにもかかわらず，文脈などによって省略された主節「B」が復元できるのが普通である。そのことから，省略による言いさし文に対して，聞き手にはある種の予測が存在するはずであると推測できる。しかし，実際の結果としての発話から見れば，聞き手のその予測は，結果と異なる可能性もある。言いさし文は，ある時点において形式が非完結であるが，会話の展開とともに，発話者によって完結される可能性も無論ある。実際に話し手が未完結である文を，述べているうちに自分で完結したと仮定しよう。その際に，話し手による未完結の「AX」に後接した部分は，果たして聞き手の予測と同じであるか。結論から言えば，可能性としては勿論二つある。言いさし文の発話時点で，聞き手が予測したもの（「B」）は，話し手自身が補完した部分と，同じようになる場合もあれば，違う場合もある。

但し，「AX」と省略された部分の関係性によって，聞き手による予測と話し手による実際の発話とのずれの確率が異なる。この確率はまさに Grice（1975）が述べた推意の取り消し可能性として理解可能である[115]。意味論的な省略は，定型表現によるものなので，基本は取り消し不可能であるのに対して，語用論的な省略は，取り消し可能である。言い換えれば，意味論的な省略による言いさし文は，聞き手の予測と話し手による実際の発話がずれることがほとんどない。語用論的な省略による言いさし文は，そのずれが可能である。

（114）【家で，家族がおしゃべりをしているところに，出勤時間になったのに気づき，父は発言をする場面。】

a　父「仕方ないよ。あっ，行かなくちゃ。」

a’　父「*行かなくちゃいいよね」

a”　父「*いかなくちゃどう。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 2 話

（114）【家族みんなが母の陶芸の先生の写真を見て，恰好いいとほめた後】

b　娘「お母さんもさ，ずっと主婦で家に引きこもってたんだから，遅咲きのアバンチュール楽しんじゃえば。」

b’　娘「??遅咲きのアバンチュール楽しんじゃえばだめだね。」

b”　娘「遅咲きのアバンチュール楽しんじゃえばいい。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 3 話

（114）【白尾は野球部の部員で，記者は野球部の取材の担当者である。】

---

[115] ただし，第 2 章でも述べたように，Grice（1975）は，「慣習推意」と「会話推意」を分別できるものと考えているが，本研究で述べられた「慣習推意」と「会話推意」は，加藤（2015a）の考えに従い，連続性を持つものと捉える。

c　記者「ねえ，よかったら，話を…」
　白尾「練習中なんで。」
c’白尾*「練習中なんで，話は短くお願いします。」*
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話（再掲）

例えば，（114a）→（114b）→（114c）の順序で，予測される「B」の取り消し可能性が高くなっている。（114a）は，「行かなくちゃいけない」と予測できるが，それを反対意味の（114a’）にしても，（114a”）の疑問文にしても非文になる。（114b）は，「楽しんじゃえばどうですか」と予測できるが，それを反対意味の（114b’）にすると，発話者自身がしゃべっているうちに自分の考えを変更したのではないかぎり，自然な文にならないが，（114b”）の平叙文にすることが可能である。それらに対して，（114c）は，相手の要求を拒否する内容と予測できるが，それを反対意味の（114c’）にしても，自然な発話である。つまり，（114a）は，予測と反対意味を持つ表現も違う文型も後接することができない。（114b）は，予測と反対意味を持つ表現が後接できないが，違う文型の後接が可能である。（114c）は，予測と反対意味を持つ表現でも後接できる。よって，（114a）→（114b）→（114c）の順序で，推意の取り消し性が高くなっていると判断できる。結果的に言うと，（114a）と（114b）は意味論的な省略によるものであるのに対して，（114c）は語用論的な省略によるものである。

最後に，意味論的な省略と語用論的な省略は，対立するものではなく，連続的な関係にある。（114a）～（114c）で，言いさし文における推意の取り消し可能性の強弱の連続性からわかるように，「慣習推意」と「会話推意」は完全に分別できるものではないので，意味論的な省略と語用論的な省略は，連続的な関係にある。

意味論的な省略と語用論的な省略における連続性は，省略された主節「B」の取り消し可能性の強弱によってわかるもののみならず，「AX」という部分の性質の違いからも伺える。

意味論的な省略か語用論的な省略かは，普通，主節「B」が定型表現に復元できるかどうかによって判断できる。意味論的な省略であれ，語用論的な省略であれ，「AX」の部分は，決まっていないはずである。しかし，主節の「B」を定型表現に復元できないが，「AX」の全体又は一部分が定型表現になっているケースも観察できる。そのようなケースでは，文の一部が定型表現になるところが，意味論的な省略に近い性質を持っており，主節の「B」が定型表現ではなく，同じ意味機能の表現に復元できるところが，語用論的な省略に近い性質を持っていると言える。例えば，（115）～（117）の例である。

（115）【夕飯の時間に，家族全員食卓の前に座って，母はすしケーキを持ち出しながら発話している場面】
母「さっ，食べましょ。」
父「あの，食べてきたからビールだけでいいや。」

母「やだ。メールくれればよかったのに。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 2 話

（116）【早勢が彼女と家で食事しているところに，友達が訪ねてきて話が終わった後に，早勢は彼女から逃げようとして，友達を送る提案をする場面】

早勢「俺送るよ。下まで。」

梅江田「いいよ。いいよ。お前そんなことしたことないだろ。」

早勢「いいから。」

読売テレビドラマ『恋愛時代』第 6 話

（117）【安堂と蓮は恋人で，蓮と仁菜子は同級生である。蓮が仁菜子のストラップを壊してしまい，お詫びするために，恋人の安堂と一緒に新しいのを買った。休憩時間でお菓子を食べてながら，安堂は仁菜子のストラップを見て，蓮に聞く場面。】

安堂「もしかして蓮がストラップ壊しちゃった子って仁菜子ちゃん。」

蓮「うん，そうだよ。」

安堂「それ買うときね，結構迷ったみたいで。渡す前にこれ変じゃないって聞いたりして。ねえ。」

蓮「いいって。あんまり言わなくて。」

映画『ストロボ・エッジ』

（115）は定型表現「～ばよかったのに」，（116）は定型表現「いいから」，（117）は定型表現「たりして」で終わる言いさし文である。（115）～（117）にある言いさし文は，欠如された「B」の形式は決まっていないが，意味内容は決まっている。（115）はメールをくれなかった事実に対する話し手の不満であり，（116）は反論や質問などをやめて発話者の言った通りに行動を取ることであり，（117）は，発話内容に対して軽快の口調の付与である。その意味で，（115）も（116）も（117）も語用論的な省略の性質を持っている[116]。しかし，それらの「B」の部分の形式が決まっていないにもかかわらず，「AX」の部分の形式（「～ばよかったのに」，「いいから」，「たりして」）はある程度慣習化されている。そのため，（115）～（117）は意味論的な省略に近い性質[117]を持っているとも考えられる。では，（115）～（117）の性質を持つ言いさし文は，どのタイプに分類することが適切であるかという課題が現れてくる。結論から言うと，「AX」が定型表現になっている言いさし文は，総括的に同じタイプに分類することが適切ではない。具体的に表現によって，個別に議論する必要がある。結果を述べると，（115）を意味論的な省略に分類し，10.1 の「のに」で終わる言いさし文で分析する。（116）を意味論的な省略として捉え，10.3 の「から」で終わる言いさし文で分析する。（117）を付加として捉え，10.4 の「て」で終わる言いさし文で分析する。

---

[116] 正確に言うと，（117）は語用論的な省略ではなく，付加と考えたほうが適切である。

[117] 意味論的な省略は，省略している「B」が定型であるという前提であるが，もし（115）～（117）を意味論的な省略にするなら，意味論的な省略の意味範囲を拡大する必要がある。

以上は，省略された「B」の性質に基づきながら，意味論的な省略と語用論的な省略の相違点と連続性を考察した。

8.4　本章のまとめ

本章は,意味機能の完結している未完結文を言いさし文という新たな構文として定義し，未完結文から言いさし文への形成過程を考察しながら，形成要因によって，言いさし文を，「意味論的な省略による言いさし文」「語用論的な省略による言いさし文」「付加による言いさし文」の三つに分類した。具体的には，まず先行研究にある用語を整理し，「言いさし文」という名称の使用を決定した。そして，言いさし文の形成要因によって，言いさし文を省略と付加の二種類に大別し，さらに省略の性質によって省略を意味論的な省略と語用論的な省略に分けた。最後に，各種類の特徴を述べながら，「省略⇔付加」と「意味論的な省略⇔語用論的な省略」との関係性について検討を行った。

本来，「意味論的な省略による言いさし文」「語用論的な省略による言いさし文」「付加による言いさし文」の順番通りで議論したほうが理想的であるが，語用論的な省略による言いさし文と付加による言いさし文は，言いさし文のマーカー「X」との関係が緊密で，形式ごとに議論したほうがわかりやすいという事情がある。その点を考慮した上で，「語用論的な省略による言いさし文」「付加による言いさし文」を形式ごとに分析することにする。以上より，第 9 章では「意味論的な省略による言いさし文」を，第 10 章では各形式に分けて，「語用論的な省略による言いさし文と付加による言いさし文」を合併して考察する。

まず，第 9 章で意味論的な省略による言いさし文を考察する。

第 9 章　意味論的な省略による言いさし文

本章では，意味論的な省略によって形成された言いさし文に限定し，その形成過程と特徴を考察する。意味論的な省略による言いさし文は，表現の慣習化や文法化によって生まれたものが多いので，典型的な定型表現の例として，「なければならない／なくてはならない」の省略による「なきゃ／なくちゃ」言いさし文，「ないとならない／いけない／だめだ／困る」の省略による「ないと」言いさし文，「たら／ばどう」・「たらどうしよう」・「たら／ばよかった／いいのに」の省略による「たら／ば」言いさし文，「って言った／聞いた」の省略による「って」言いさし文を詳しく考察する。

9.1　「なきゃ」／「なくちゃ」／「ないと」言いさし文

9.1.1　形式の整理

（118）【娘がアナウンサーの四次面接まで行っているという話を聞いた後の母の発言】
母「ねえ，七菜がアナウンサーになったら，お母さんもっとおしゃれしなくちゃね。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 2 話

（119）【二人の同僚がしゃべっているところで，明日香が自分の席に戻った後の発言】
明日香「さあ，たまった仕事片付けなきゃ。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 5 話

（120）【同僚との食事の後，女は時計を見てから発言する。】
女「私，そろそろ行かないと。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 2 話

（118）にある「おしゃれしなくちゃ」，（119）にある「片付けなきゃ」，（120）にある「行かないと」で終わる言いさし文は，全部意味論的な省略で，「A」の部分の形式も「B」の部分の形式も決まっている。即ち，「A」の述語は否定形であり，「B」は「ならない／だめだ／いけない」などの否定の評価表現である。この節では，「なきゃ」，「なくちゃ」，「ないと」というマーカーで終わる言いさし文の形成を考察する。

まず，「なきゃ」と「なくちゃ」は両方とも縮約形であるので，それらの基本形を明確にする。

堀口（1989 :113）は日本語の話し言葉における縮約形をまとめたときに，「助動詞の『ナイ』または形容詞に『バ』が付いた『～ケレバ』は」，話しことばでは，「『～ケリャ』または『～キャ』の形で使われることがある」，また「『～クテハ』は，話しことばでは

『～クチャ』の形で使われることがある」と述べた。したがって，「なきゃ」は「なければ」，「なくちゃ」は「なくては」の縮約形であり，「なきゃ」と「なくちゃ」の基本形は，「なければならない」「なければいけない」「なくてはいけない」「なくてはならない」であることがわかる。そこで，縮約形を含めて，「なきゃ」と「なくちゃ」に関わる基本形と言いさし文における形式は，図 3 のようになる。

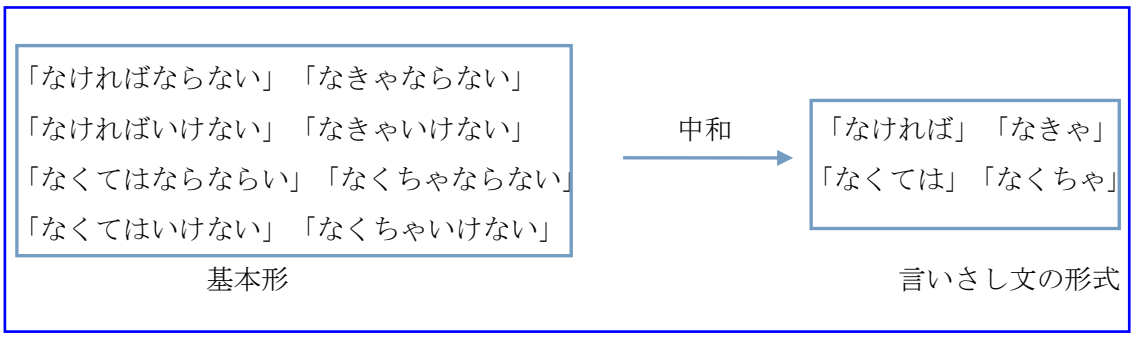


図 3　「なきゃ」と「なくちゃ」の形式整理

そして，「なきゃ」／「なくちゃ」／「ないと」言いさし文は，「A」の述語が否定形であるのは同じであるが，前接する要素の性質の違いによって，「ない」の性質も異なる。

（121）a 走らなければなら。／走らなくてはならない。／走らないとならない。
b 美しくなければならない。／美しくなくてはならない。／美しくないとならない。
c クーラーがなければならない。／クーラーがなくてはならない。／クーラーがないとならない。

（121）の a～c に示しているように，「走る」という動詞に付く「ない」は助動詞で，「美しい」という形容詞に付く「ない」は補助形容詞で，「クーラー」という名詞に付く「ない」は自立的形容詞である。

9.1.2　言いさし文の形成

本節では，「なきゃ」／「なくちゃ」／「ないと」という三つの言いさし文の形成について考察する。

「なきゃ」／「なくちゃ」／「ないと」は同じく二重否定の文を形成するが，「ないと」より，「なきゃ」と「なくちゃ」の類似度が多く，文法化の程度も進んでいると言える。そこで，次は「なきゃ」／「なくちゃ」と「ないと」に大まかに分けて考察する。

まず，「テハ文」と「バ文」について，蓮沼（1987：5）は「前件が否定形である場合は、どちらも＜必要性・義務＞といった共通の伝達的意味を持つようになり、その差異を失う傾向がある」と述べた。本稿は，基本形の「なければならない」「なければいけない」「な

くてはならない」「なくてはいけない」の意味機能の細かい違いを明確にするものではないので，それらの間に差があると認めた上で，「なければならない」を代表として議論を進める。

（122）行かなければ　ならない。

（122）を例として説明すると，「なければならない」は本来「行かなければ」は従属節で，「ならない」は主節である。しかし，「なければならない」は使用頻度によって文法化され，義務を表す一つのまとまりになったという論説が多数の先行研究で窺える。前田（2009：52）は，「しなければならない」を「評価のモダリティを表現する複合的な文末表現」と位置づけ，加藤（2011）は，「なければならない」の文法化の度合いが高く，助動詞相当の機能単位となっていると述べ，花薗（1999）は，「しなければならない」「しなければいけない」「するといい」「したらいい」「すればいい」を対象に，7 つのテストを通して，「しなければならない」と「しなければいけない」の一語化の度合いが最も高く，「条件形複合用言形式（条件用言）」と位置づけた。以上の点から，「なければならない」は言いさし文として成り立つ前に，文法化して助動詞になるプロセスがあったと言えるだろう。2.1.2.1 で述べたように，その変化を加藤（2011）は「非節化」と名づけた。

そして，「しなければならない」以外に，前田（2009：52）は，「しないとならない／いけない」も「評価のモダリティを表現する複合的な文末表現」と位置づけている。つまり，「ないとならない／いけない／だめだ／困る」も一つの定型表現と見られる[118]。

そこで，文法化の程度に違いがあるが，「なきゃ」「なくちゃ」「ないと」言いさし文の形成について，「文法化」→「非節化」→「省略」→「言いさし文」というプロセスが考えられると言える。

9.1.3　言いさし文における機能

実際の使用上では，主節の「ならない」などが省略され，「なきゃ」「なくちゃ」「ないと」という言いさし文になった後に，形式や意味機能の制限が現れてきたかどうかを確認する。

（123）a 私が頑張らなきゃ。／私が頑張らなくちゃ。／私が頑張らないと。
　　b あなたが頑張らなきゃ。／あなたが頑張らなくちゃ。／あなたが頑張らないと。
　　c 彼が頑張らなきゃ。／彼が頑張らなくちゃ。／彼が頑張らないと。
（124）a 何かの必然性がなきゃ。／何かの必然性がなくちゃ。／何かの必然性がないと。

[118] ただし，「なければならない」は文法化がかなり進んでいるので，助動詞と考えられるが，「ないとならない／いけない／だめだ」は「なければならない」より文法化の度合いが低いので，助動詞と考えられるかどうか検討する余地がある。

b 速くなきゃ。／速くなくちゃ。／速くないと。

c 自分も幸せじゃなきゃ。／自分も幸せじゃなくちゃ。／自分も幸せじゃないと。

（125）a 今日頑張らなきゃ。／今日頑張らなくちゃ。／今日頑張らないと。

b*昨日頑張らなきゃ。／*昨日頑張らなくちゃ。／*昨日頑張らなかったと。

（126）洗濯しなきゃだな。／洗濯しなくちゃだな。／洗濯しないとだな。

「なきゃ」「なくちゃ」「ないと」言いさし文は，（123）に示しているように，人称における制限はない。また，（124）にあるように，「なきゃ」「なくちゃ」「ないと」の前には，動詞のみならず，名詞（124a），形容詞（124b），形容動詞（124c）も使用可能である。そして，（125）から，言いさし文はテンスが中和され，過去には使用しにくいことがわかる。したがって，「なければ／なくては／ないとならない」の定型化された程度が高いことによって，「なきゃ／なくちゃ／ないと」言いさし文は，形式における使用制限が少なく，過去以外に，全部使用可能であると言える。更に，（126）に示しているように，「なきゃ」「なくちゃ」「ないと」にコピュラ「だ」の後接も可能になり，「なきゃ」「なくちゃ」「ないと」という表現自体の自立性が高まって，義務のモダリティとしての性質が現れると考えられる。

そして，「なきゃ」「なくちゃ」「ないと」言いさし文は義務を表すのが基本機能であるが，「A」に現れる述語の性質と主語の違いによって発話の性質も異なる。

（127）a 美しくなきゃ／美しくなくちゃ。／美しくないと。

→【受容要求】／【要求性なし】

b クーラーはなきゃ。／クーラーはなくちゃ。／クーラーはないと。

→【受容要求】／【要求性なし】

（128）a 私そろそろ行かなくちゃ。／私そろそろ行かなくちゃ。／私そろそろ行かないと。

→【受容要求】／【要求性なし】

b あなたそろそろ行かなきゃ。／あなたそろそろ行かなくちゃ。／あなたそろそろ行かないと。 →【行為要求】

c 彼たまった仕事片付けなきゃ。／彼たまった仕事片付けなくちゃ。／彼たまった仕事片付けないと。 →【受容要求】／【要求性なし】

（127）のように述語が形容詞や名詞である場合には，聞き手への行為要求性はなく，【要求性なし】か【受容要求】の性質を持っている[119]。（127a）は述語が形容詞で，（127b）は述語が名詞である場合の例である。そして，述語が動詞である場合で，主語が話し手や第三者であるならば，【要求性なし】か【受容要求】の性質を持っているが，主語が聞き手であるならば，【行為要求】になる。（128a）は主語が話し手で，（128b）は主語が聞

[119] ただし，推意レベルで聞き手に行為を要求する場合もありうる。

き手，（128c）は主語が第三者である。

9.2 「たら／ば」言いさし文

9.2.1 形式の整理

（129）a【赤岩と白尾は野球部の部員で，柚子は野球部のマネージャーである。試験前でも白尾が野球ばかりをやっている。それについて】
赤岩「白尾，お前本当に一切勉強しない気か。」
白尾「しない」
柚子「試験前ぐらいは勉強したら。」
→*柚子「試験前ぐらいは勉強すれば。」*
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話（再掲）

b【新しく開発された薬を山田という患者に使うかどうかについて，部下は教授に意見を伺う場面】
部下「この患者で試すということですか。」
教授「病院にとって，患者は二種類。絶対死なせてはならない患者とそれ以外の患者だ。」
部下　「でも，万が一副作用が起きたら」
→*部下　「?でも，万が一副作用が起きれば」*
TBS 系列『アリスの棘』第 4 話（再掲）

c もうちょっと早く教えてくれたらな。／もうちょっと早く教えてくれればな。

（129a）～（129c）にある「たら」で終わる発話の主節は，それぞれ「勉強したらどう」，「起きたらどうしよう／まずい／困る」，「くれたらよかったのに」のように復元できる。したがって，「たら」「ば」で現れる言いさし文は，一つの定型表現ではなく，三つのケースに分けて考える必要があり，それらの基本形は図 4 のように考えられる。

「たらどうしよう」[120]	*「ばどうしよう」
「たらどう」	「ばどう」
「たらよかったのに／たらいいのに」	「ばよかったのに／ばいいのに」

図 4　「たら」「ば」言いさし文の基本形

次に，「たら／ば」の基本形の違いによって，「たら／ば」言いさし文を分けて形式上

[120] もちろん，「たらどうしよう」以外に，「たらまずい」や「たら困る」の形式も考えられるが，本稿は「たらどうしよう」という形式を基本形として議論を進める。

の制限と意味機能を考察する。

9.2.2 「たら（どうしよう）」言いさし文

まず，主節の「どうしよう」が後接する言いさし文は，「たら」のみで，「ば」は存在しない。白川（2009）は，レバ節とタラ節の違いを考察したときに，意味機能の面から，レバ節が「タラ節と異なるのは、危惧の意味で使った用例がまったく見当たらないことである」（白川 2009：76）という同じ趣旨の指摘をしている。

（130）a　今行かないと，後で雨が降ったら。
　　a’そんなに自信満々に言っちゃまずいでしょ。明日雨降らなかったら。
　　b　今急いで買わなくてもいいでしょ。向こうのほうがもっと安かったら。
　　b’今買わないと，向こうが安くなかったら。
　　c　彼のデザインがもっときれいだったら。
　　c’彼のデザインきれいじゃなかったら。
　　d　日曜空けとかないとまずいでしょ。試験日が日曜だったら。
　　d’君日曜しか空いてないじゃん。友達の結婚式が日曜じゃなかったら。
　　e　あのコンサートすごい人気なんだよ。どうしよう。私／あなた／彼女チケット買えなかったら。

「たらどうしよう」という基本形をもとに，「たら」言いさし文の形式上の使用制限は，（130）のように考察することができる。言いさし文「たら（どうしよう）」は，述語における形式上の使用制限はなく，動詞・形容詞・形容動詞・名詞の肯定・否定がすべて使用可能であり，人称における制限もないということがわかった。

さらに，言いさし文「たら（どうしよう）」は，イントネーションが上昇調にならず，主節が「どうしよう」以外に，「まずい／困る」などの否定的な評価を含む表現にも復元できる。3.6.1.1.2 の（27）を通して考察したように，言いさし文「たら（どうしよう）」は，聞き手に知識の提供を要求し，二次レベルで事態に対する話し手の評価や判断を提示するという機能がある。

9.2.3 「たら／ば（どう）」言いさし文

まず，「たら（どうしよう）」を基にする言いさし文と「たら／ば（どう）」を基にする言いさし文には，イントネーションの違いが見られる。3.6.1.1.1 で述べたように，言いさし文「たら（どうしよう）」は，イントネーションが上昇調にならないのに対して，「たら／ば（どう）」は，イントネーションが上昇調になるのが普通である。

そして，「たら／ば（どう）」に関する先行研究は多数見られるが，それらの説明は形

式に関するものと意味に関するものに分けて考えられる。

形式に関しては，「たら（どうしよう）」を基にする「たら」言いさし文の主節は，「どうしよう」という疑問文のみならず，「まずい」や「困る」などの表現にも復元できるが，言いさし文「たら／ば（どう）」の主節は，疑問文に限定されると Kato（2014）は述べている。更に，白川（2009：75）は「①タラ節の主語が聞き手であり、かつ、②タラ節の述語が意志的動作であることが必要である」と述べ，島（1993：22）は「形態上では否定的内容を＜助言＞する際」，「『ない形』接続の『～しなければ？』『～しなかったら？』の形式ではなく『～するのをやめたら？』という形式がもっぱら使用されている」と述べた。

意味に関しては，相手に対する提案や勧誘，助言を表すと述べた研究が多数であり（白川 2009，Kato 2014，島 1993），その「聞き手に対する純粋な＜助言＞を表すものから，聞き手に対して「勝手にしろ」と示唆するものまで幅広い使われ方をしている」（島 1993：15）という指摘も見られる。助言であれ，提案であれ，命令であれ，それらは単に聞き手に対する要求の度合いの違いだと本稿は考えている。したがって，言いさし文「たら／ば（どう）」の意味機能は，聞き手の行為実施を要求していると理解できる。

以上より，言いさし文「たら／ば（どう）」に関して，「A」の部分の形式に，①主語が聞き手で，②述語が意志的動詞，③述語の否定形が不可―という三つの制限があることと，聞き手の行為を要求するという意味機能を持っていることがわかる。

9.2.4 「たら／ば（よかった／いいのに）」言いさし文

Kato（2014）が述べたように，言いさし文の「たら／ば（よかった／いいのに）」は，二回にわたって言いさすことにより生まれたものである。具体的に言うと，例えば，（131）に示しているように，完結文→「のに」言いさし文→「ば」言いさし文というプロセスが見られる。

（131）完結文[121]　「メールくれればよかったのに，なんでくれなかったのよ。」

↓

「のに」言いさし文「メールくれればよかったのに。」

↓

「ば」言いさし文　「メールくれればね。」

形式上，言いさし文「たら／ば（よかった／いいのに）」は述語における使用制限はないと言える。まず，動詞・形容詞・形容動詞・名詞の肯定・否定の使用が全部可能である。

[121] 「のに」言いさし文は，語用論的な省略によるものだと本研究は考えているので，（131）の完結文の主節は，形式が決まっておらず，「なんでくれなかったのよ」以外に，別の表現ももちろん考えられる。しかし，主節にあるものは，「A」の部分と反対の関係にある事実に対する話し手の不満を表すという共通点がある。

また, 過去の事態のみならず, 現在や未来の現実に反する仮定も使用可能である（加藤 2006, ウェスリー 2011）。ただし，（132a）がやや不自然であるように，言いさし文「たら／ば（よかった／いいのに）」が自然になるには，（132b）のように発話末の終助詞「ね」，語気の強めなどの調整が必要である。

（132）a? 早めに電話くれれば。
　　b 早めに電話くれればね。／早めに電話くれれば！

意味上[122]，従来の研究では，「たら／ば（よかった／いいのに）」が反事実条件文と位置づけられているように，言いさし文「たら／ば（よかった／いいのに）」は，「のに」の性質によって，事実に反する事態を述べる機能を持っている。ただし，その事態の生じる時間の違いや聞き手との関わり方の違いによって，派生的な意味を持つ場合も考えられる。

（133）a【時間をかけていっぱいご飯を作った妻が，外食で満腹になった夫に向かって】
妻「メールくれればね。」
b【一人で家事をやっている妻が，テレビを見ている夫に向かって】
妻「一緒にやってくれればね。」
c【明日友達とキャンプへ行く約束があるアは，本当は行きたくなくて】
ア「明日雨でも降ればね。」

具体的に言うと，過去（133a）と現在（133b）にある事実に反する事態を提示する場合には，話者の不満を表す。現在（133b）と未来（133c）にある事実に反する事態を提示する場合には，話者の願望を表す。更に，その事態は聞き手が制御可能なら，聞き手に対するマイナスの評価（133a）と（133b）や行為の要求（133b）[123]という意味機能も現れてくる。

9.3 「って（言った／聞いた）」言いさし文

「って」は引用を表す表現「と」の口語である。話し言葉で，引用の用法として，「って」以外に，「ってば」の形式も見られる。それらの形式は意味機能が完全に一致しているわけではないので，本章では区別しながらそれらの形式や意味機能を考察する。

[122] 「たら／ば（よかった／いいのに）」の省略による「たら／ば」言いさし文の意味機能についての考察は，10.1 の「のに」言いさし文を通して詳細に議論する。
[123] （133a）は，夫のこれからの行為を示唆するという点から考えれば，【行為要求】の性質を持っているとも考えられる。

9.3.1 「って」の先行研究と問題点

これまでにも，「と」や「って」を中心とする引用表現に関する先行研究は多数見られる。文末に現れる「って」に重点を置く代表的な研究は岩男（2003）がある。岩男（2003）は「引用文の元話者が（「聞き手・話し手自身・第三者」のうち）誰であるか」という点によって，「～ッテ。」の用法を分類した。元話者が聞き手である場合の「～ッテ。」を，「＜知識未定着用法＞」と呼び，元話者が話し手自身である場合に，「＜押し付け用法＞」と「＜表出的用法＞」があると述べ，元話者が特定の第三者である場合を，「＜伝聞的用法＞」と名づけた。そして，「＜押し付け用法＞」と元話者が不特定の「＜伝聞的用法＞」は引用表現の性質を失いつつあり，「ッテ」は「文末形式相当の表現として定着しつつある」（岩男 2003：160）と指摘し，「＜知識未定着用法＞」と元話者が特定の第三者である「＜伝聞的用法＞」は引用表現の性質を保持しており，「引用構文の言いさしに相当するものと捉えたい」（岩男 2003：160－161）と論じている。

岩男（2003）は文末の「って」を体系的にまとめているが，再検討を要するところが三つある。一つ目は，論述の一貫性の問題である。岩男（2003）の「文末形式相当の表現」と「引用構文の言いさし」は，それぞれ本稿で定義している「付加による言いさし文」と「省略による言いさし文」に類似している。岩男（2003）の分析では，同じく「伝聞的用法」は，「文末形式相当の表現」になる場合もあれば，「引用構文の言いさし」になる場合もある。論述の一貫性から考えると再検討する余地があると思われる。二つ目は，引用内容が不特定の第三者による場合に，すべてを「文末形式相当の表現」として扱う妥当性である。岩男（2003）の説明に従うと，引用内容が不特定の第三者による場合の「って」は，「話し手が自分の所有する情報を発する表現となってしまっている」（岩男 2003：159）ので，「引用表現としての性質を失った」（岩男 2003：159）としている。しかし，ここでの「元話者が不特定」の定義を明確にしない限り，そう言い切れるかどうかは疑問に思われる。三つ目は，不特定の第三者が情報源になるときと話し手が情報源になるときの違いが，わからなくなるという問題点である。例えば，（134）は「元話者が不特定の＜伝聞的用法＞」として捉えられているが，元話者が話し手である「＜押し付け用法＞」とも考えられるのではないかという疑問がある。

（134）夏の風邪はしつこいッテ。[124]

9.3.2 用法の分類

まず，「って」で終わる言いさし文に統語的制約があるかどうかを確認する。

加藤（2012b）は，「語か句か文かを問わず言及された表現が 1 まとまりの被引用表現とみなされれば，その本来の品詞性に関係なく，引用表現全体が名詞と見なされる」（加藤

[124] （134）は岩男（2003）の（26）の前半による引用である。

2012b：62）という「引用による名詞化」（加藤 2012b：62）の考えを述べている。「って」に後続される命題は引用化されるものになり，引用化されたものは全体で名詞としての性質を付与されるので，「って」に接続されるものは形式上の制約がないと言える。

さて，「って」の用法種類について考察する。

加藤（2009d）は人間の記憶領域を「処理記憶」「談話記憶」「知識記憶」の三つに分け，「処理記憶から談話記憶へ，談話記憶から知識記憶へ情報が送られる」（加藤 2009d：212）と述べた。また，「処理記憶」「談話記憶」「知識記憶」の特徴を表 18 のようにまとめている。

	保持時間	文脈種	容量	処理後	共有
処理記憶	有期 おおむね数秒を限界	文脈化以前の状態（言語音から解釈処理終了まで）	限界あり。 容量小。	処理後の情報は保持しなくてよい。	せず
談話記憶	有期 おおむね数時間	形式文脈・状況文脈	限界あり。 容量大。		する
知識記憶	永続的	世界知識・言語知識	限界なし。	常に更新状態	部分的にする

表 18　加藤（2009d：212）「記憶領域」のまとめ

9.3.1 の問題点をもって，本稿は加藤（2009d）の考えを参考にし，「って」の引用用法を次のように区分する[125]。その際，分類の基準を発話時の聞き手の知識状態にする。ここで述べている聞き手の知識状態は，話し手が想定したものである。発話時の聞き手の知識状態によって，「って」の使用状況は次の三つとなる。

①引用の内容が聞き手の談話記憶にも知識記憶にもない場合。
②引用の内容が聞き手の談話記憶にある場合。
③引用の内容が聞き手の知識記憶にある場合。

次に，具体的な例を通して，以上の三つの場合について考察する。

まず，①の場合について述べる。

（135）【倉田は友達としゃべりをしている場面で，自分が最近仕事がなく，暇であると言った後】

[125] 本研究では，話し手の考えを述べる「～って思った」の用法を除外する。

友達「あれ？高栄館の表紙は？」
倉田「あの，別のデザイナーに頼むって。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 1 話

（135）で，話し手は倉田で，聞き手は友達である。（135）に，本来倉田に頼まれた高栄館の表紙のデザインがキャンセルになったという知識文脈がある。（135）の聞き手の質問から，聞き手が「高栄館の表紙のデザインが倉田に依頼された」は知っているが，「キャンセルになった」は知らなかったと推測できる。つまり，話し手の発話時に，「高栄館の表紙のデザインが別のデザイナーに依頼される」という引用内容が，聞き手の談話記憶にも知識記憶にもないと判断できる。

次に，②の場合について述べる。

②は具体的に話題提起用法の「って」と引用節の「って」の二つのケースに分けて考えることが必要である。話題提起用法の「って」というのは，「〜ってどういう意味／こと」の省略によるもので，「って」の前接するものが，発話時より以前の聞き手の発話形式にある内容であり，本稿はそれを対象外とする。引用節の「って」というのは，「って言ったでしょ」の省略によるものであり，「って」の前接するものが，発話時より以前の話し手[126]の発話にある内容であり，③と連続的な関係にある[127]。本稿の考察対象に入る。

（136）a【看護師と明日美は同僚である。看護師は悠馬に好意を持っている。】
看護師「あのさ，明日美って，悠馬先生のことどう思ってるの。」
明日美「えっ？」
看護師「昨日二人が話してるとこ見たら，なんかいい感じだったから，どうなのかなと思って。」
明日美「どうって。」
TBS 系列『アリスの棘』第 4 話

b【健太はストーカーに刺されて，入院している。友達の明日香は病院でお見舞いをしている。健太の家はストーカーで被害にあっていた。その犯人は万里江だとわかった後に，明日香は健太に事件の真相を説明している場面】
健太「それより，万里江さんのこと教えてもらえませんか。」
明日香「自分のことを刺した人を，さん付けだなんてどこまでお人よしなんですか。」
健太「すみません。」
…（省略）
明日香「ちなみに，このとき七菜ちゃんの古い携帯も盗んだと万里江は供述しています。」
健太「それも万里江さんですか。」

126 ここでは会話参加者が二人のみの場合に限定される議論である。二人のみの会話なら，ここでは話し手のみを指すが，三人以上の会話なら，話し手や発話時における明確な聞き手以外の人を指すことになる。
127 ②の引用節用法と③の連続性は，下にある（138）の例を通して議論する。

明日香「だから，さん付けしなくていいんですって。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話

（136a）は話題提起用法の「って」の例で，（136b）は引用節の「って」の例である。（136a）で，話し手は明日美で，聞き手は看護師である。話し手の発話にある「って」の前接した「どう」という内容は，聞き手の発話の形式文脈にあるものである。聞き手が言い終わったばかりのものは，聞き手の談話記憶にあると判断できる。聞き手の発話内容を引用した（136a）の「って」は，「ってどういう意味ですか」のように復元できる。即ち，「って」は，主題を提示する「は」の機能を持っていると考えられる。「って」は従属節ではなく，格助詞に近い性質を持っているので，対象外とする。それに対して，（136b）の「って」が前接しているものは，聞き手の発話にある内容ではなく，話し手自身の発話による内容である。（136b）で，話し手は明日香で，聞き手は健太である。話し手の「って」で終わる発話より以前の時間に，話し手は「自分のことを刺した人を，さん付けだなんてどこまでお人よしなんですか」を通して，聞き手に向けて「さんを付けなくてもいい」という推意の発話をした。よって，「って」の前接している「さんを付けなくてもいい」という引用内容は，近い過去にある話し手の発話による内容で，聞き手の談話記憶にもあるはずであると判断できる。（136b）の主節を「私は言ったでしょ」[128]のように簡単に復元できる。

最後に，③について述べる。

③は，「って」の前接する内容は，聞き手の談話記憶にはないが，聞き手の知識記憶にあるものである。即ち，「って」の前接する内容は，世界知識として理解可能である。

（137）【倉田と編集長は，クラブで隣の席にいる人が知り合いだとわかった後に，編集長がその人の写真を盗撮しているところを見て】

倉田「ちょっと，勝手に撮っちゃまずいですって。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 6 話（再掲）

例えば，（137）で，話し手は倉田で，聞き手は編集長である。会話の流れから，「勝手に取っちゃまずい」という発言は，発話時点より以前の時間に現れなかったとわかる。よって，「って」の前接した内容は，聞き手の談話記憶にあるものではないと判断できる。それにもかかわらず，「って」の使用が許容されるのは，「勝手に撮っちゃまずい」という内容が，普通の社会人なら誰でも頭に収蔵済みの常識である。即ち，世界知識になっているからである。そのため，（137）は，③の場合であると判断できる。

---

128 「さん付けしなくていいんですって」という言いさし文は，「のだ」の形式によって，「って（言ったでしょ）」の省略より，「って」が付加されているという考えも可能であるが，「さん付けしなくていいんです」という部分が世界知識より，談話記憶にある内容としての性質が強いことを考慮した上で，本研究では意味論的な省略による②のケースに分類した。「のだ」文と「って」の関係については，今後の課題にする。

以上は，具体例を通して，①②③を詳しく考察した。次に，②と③の連続性について確認する。

談話記憶と知識記憶は，時間の長さで区別されている。時間が連続的なものであるので，②の引用節用法は，③と連続的な関係にある。どれぐらい長くなれば談話記憶が知識記憶に変わるかを明確に断言できないと同じように，②と③に明確な境界線を引くことができない。発話より以前の時点に現れていない明確な世界知識の性質を持っている内容なら，③になると判断できるが，次の（138）のような曖昧な境界線上にあるケースも存在する。

（138）【はるは元旦那を指で指しながらしゃべる癖がある。それについて，元旦那はもう既に何度も指摘してきた。】
元旦那「いや，先端恐怖症。はる，何度も言わせんなって。」
はる「下の名前で呼び捨てしないで。」

読売テレビドラマ『恋愛時代』第 2 話

（138）で，話し手は元旦那で，聞き手ははるである。（138）には，話し手が聞き手に既に何度も「指で指すな」という注意をしたという知識文脈がある。そのことについて，既に聞き手の世界知識になっているはずである。しかし，（138）の発話より数分前や数十分前にその話が一度現れたと仮定しよう。その場合に，（138）は②なのか③なのか明確に断言できない。以上より，②と③の連続性がわかる。

以上は①②③について詳しく議論したが，では，それぞれが言いさし文として考えるときに，どのタイプになるかを考察する。

結論から言うと，本研究は，①②を意味論的な省略による言いさし文と位置づけ，③を付加による言いさし文と分類する[129]。

次に，意味論的な省略と付加に分けてそれぞれを詳しく考察する。

9.3.3　意味論的な省略による場合

意味論的な省略による「って」言いさし文は，「①引用の内容が聞き手の談話記憶にも知識記憶にもない場合」と「②発話内容が聞き手の談話記憶にある場合」である。

まず，①の場合における言いさし文について述べる。

聞き手の談話記憶にも知識記憶にもないというのは，引用内容が聞き手にとって未知の内容である場合[130]と考えられる。①は「って」のいわゆる「伝聞用法」であり，「って言った／聞いた」という定型表現からの省略と考えられる。①の「伝聞用法」として，「って」以外に，「（ん）だって」と「（ん）ですって」の形式もよく見られる。

---

[129] ②と③が連続的な関係にあると同じように，ここで言う意味論的な省略による言いさし文と付加による言いさし文も連続的な関係にある。
[130] 無論，ここでの未知と言うのは，話し手の推測に基づくものである。引用内容が，実際に聞き手にとって未知であるかどうかは，本研究は考慮しない。

「って」，「（ん）だって」と「（ん）ですって」の違いについて，山崎（1996）は「って」の「引用」と「伝聞」の用法を分け，引用は「って」の形として表れ，伝聞は「って」以外に，「（ん）だって」と「（ん）ですって」の形もあると述べた。しかし，山崎（1996）は「引用」と「伝聞」の違いを論じておらず，また，伝聞の「って」が，「述語を省略した引用の『って』との区別が難しい場合がある」（山崎 1996：4）とも述べているので，本稿ではそれらの違いを特には議論せず，同じく「って言った／聞いた」の省略として捉える。

そして，②の場合における言いさし文について述べる。

9.3.2 でも述べたように，「って」に前接される内容が聞き手の発話にある場合なら，対象外とするので，ここで言う②の場合は，「って」に前接される内容が話し手の発話にある場合のみを指す。よって，②における「って」は「って私は言った」や「って私は言ったでしょう」の省略によるものである。「って」以外に，「ってば」の使用も可能である。

②の場合における「って」は，聞き手の談話記憶にあるはずの発話内容を聞き手に思い出させる機能がある。会話参加者が会話を成功するように協力するべきだという点から考えれば，話し手の発言内容に対して，聞き手は自分の談話記憶に収蔵する義務がある。しかし，話し手が同じ会話において，同じ内容を再び発話するというのは，聞き手がその内容を談話記憶に収蔵する義務を果たさなかったか，話し手の発話を受容できなかったかの二つの可能性がある。前者なら，会話の成功に協力することを違反しているとも理解できる。そのため，②の場合における「って」は，場合によって，二次レベルで，話し手から聞き手への批判やマイナスの評価を聞き手に受けてもらおうとする【受容要求】があると考えられる。

（139）【健太はストーカーに刺されて，入院している。友達の明日香は病院でお見舞いをしている。健太の家はストーカーで被害にあっていた。その犯人は万里江だとわかった後に，明日香は健太に事件の真相を説明している場面】

明日香「ちなみに，このとき七菜ちゃんの古い携帯も盗んだと万里江は供述しています。」

健太「それも万里江さんですか？」

明日香「だから，さん付けしなくていいんですって。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話（再掲）

例えば，（139）で，話し手は明日香で，聞き手は健太である。「さん付けしなくていいんですって」という言いさし文は，「万里江にさんをつける」という聞き手の二回目以上の行動に対するマイナスの評価を下している。同時に，聞き手が自分の発話を談話記憶に入れなかったことや，自分の言った通りに行動しなかったことに対する話し手の不満を含んでいる。それは，「だから」という談話標識からも判断できる。

以上より，「って」で終わる発話は，引用の内容が聞き手の談話記憶にも知識記憶にもない①の場合なら，「って言った／聞いた」という定型表現の慣習化による意味論的な省

略であり，聞き手にとって未知である第三者の情報を引用する機能を持っている。引用内容が聞き手の談話記憶にある②の場合なら，「って言ったでしょ」という定型表現の慣習化による意味論的な省略であり，発話者自身の言い終わった発話内容を聞き手に思い出させる機能があり，さらに二次レベルで，聞き手に対するマイナスの評価を下すことができるとわかる。

9.3.4　付加による場合

「って」は，「③発話内容が聞き手の知識記憶にある場合」に，付加による言いさし文とする。「って」以外に，（140）で示しているように「ってば」の形式もよく観察できる。

（140）【健太は自分の部屋で明日香と話をしている際に，事故でたまたま一緒にベッドで倒れた。その場面は，部屋に入ろうとする母に見られた。母の誤解して慌てて逃げた姿に向かって発言している場面】
健太「違うんだってば。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 5 話

③の場合の付加による「って」言いさし文は，「って」に前接される内容が，聞き手の談話記憶にないものである。言い換えれば，当会話で，話し手が始めて言ったものである。よって，「って」の有無と関係なく，伝達内容が同じである。それにもかかわず，「って」が付加されたのは，「って」の引用という性質によって，聞き手の常識知らずや常識の無視に対する話し手からの批判などの感情が客観化され，聞き手のポジティブフェイスの侵害を回避することができるからであると考えられる。つまり，「って」は，ポジティブポライトネスのストラテジーとしての機能がある。一方，「って」に前接される発話内容が一回目ではなく，二回目以上である[131]と明示的に述べることによって，聞き手の行動に対する話し手の批判の感情や気持を強めることもできる。

（141）【安堂と蓮は恋人で，蓮と仁菜子は同級生である。蓮が仁菜子のストラップを壊してしまい，お詫びするために，恋人の安堂と一緒に新しいのを買った。休憩時間でお菓子を食べながら，安堂は仁菜子のストラップを見て，蓮に聞く場面】
安堂「もしかして蓮がストラップ壊しちゃった子って仁菜子ちゃん。」
蓮「うん，そうだよ。」
安堂「それ買うときね，結構迷ったみたいで。渡す前にこれ変じゃないって聞いたりして。ねえ。」
蓮「いいって。あんまり言わなくて。」
映画『ストロボ・エッジ』（再掲）

131 引用の「って」は，その引用内容が誰かによって先に発話されたという前提がある。言い換えれば，引用内容の出現は，一回目ではなく，二回目以上であるのが普通である。

例えば，（141）で，話し手は蓮で，聞き手は安堂である。（141）の会話の話題は，蓮が仁菜子に買ってあげたストラップである。聞き手は，話し手がストラップを買ったときの状況を述べた。話し手の「いいって」という言いさし文は，聞き手の発言に対する反応である。「いいって」にある「いい」は，多義語であるが，（141）においては，「そんな恥ずかしいことを言わなくてもいい」の省略によるもので，聞き手の発言を中止させようとする機能を持っている。会話の流れから，話し手のストラップを買ったときの状況が披露されたのは，初めてであるとわかる。その初めての発話内容に対して，話し手はそれを中止させようとする行動も初めてである。よって，（141）の「って」を削除し，「いいって」を「いい」にしても，聞き手の発言を中止させるという意図の伝達が同じである。つまり，（141）の「って」は付加であると判断できる。それにもかかわらず，「いい」より，「いいって」が選好されたのは，「って」の付加によって，話し手の批判の感情や気持を客観化することができるからである。「いい」のみなら，単刀直入に聞き手の発言行動を批判することになる。「いいって」なら，まるで話し手本人の発話ではなく，単独の第三者や複数の第三者の引用になる。その意味で言うと，「いいって」は，「いい」という発話内容を客観化し，聞き手の行動への批判という直接的な感情露出を回避することができる。一方，「いいって」によって，「いい」という発話内容が二回目以上であるという推意によって，聞き手の発話を中止させようとする話し手の気持をより強く主張できる効果もある。

以上より，発話内容が聞き手の知識記憶にある場合に，「って」言いさし文は，付加によるものであり，「って」の削除が可能であるが，「って」の付加によって，発話内容を客観化し，話し手の感情を強める効果があるとわかった。

最後に，この付加による「って」言いさし文は，「て」の前接する内容の性質の違いによって，具体的に二種類に分けて考えられる[132]。二種類とも聞き手の知識文脈にあるものであるが，その内容は，話し手と聞き手しか共有していないような世界知識もあれば，話し手と聞き手のみならず，大多数の人が共通に持っている世界知識もある。前者の場合は，「って」の「②発話内容が聞き手の談話記憶にある場合」と近い性質を持っている。例えば，（142）は，発話内容を話し手と聞き手しか共有しない場合で，（143）は大多数の人が共通に持っているいわゆる常識の場合である。

（142）【はるは元旦那を指で指しながらしゃべる癖がある。それについて，元旦那はもう既に何度も指摘してきた。】
元旦那「いや，先端恐怖症。はる，何度も言わせんなって。」
はる「下の名前で呼び捨てしないで」
読売テレビドラマ『恋愛時代』第 2 話（再掲）

[132] 本稿は，この二種類の違いを無標の世界知識と有標の世界知識と区別する。10.3.2.2 の因果関係の考察では詳細に議論する。

（143）【倉田と編集長は，クラブで隣の席にいる人が知り合いだとわかった後に，編集長がその人の写真を盗撮しているところを見て】

倉田「ちょっと，勝手に撮っちゃまずいですって。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 6 話（再掲）

9.4　本章のまとめ

本章は，意味論的な省略によって形成された言いさし文に限定し，「なければならない／なくてはならない」の省略による「なきゃ／なくちゃ」言いさし文，「ないとならない／いけない／だめだ／困る」の省略による「ないと」言いさし文，「たら／ばどう」・「たらどうしよう」・「たら／ばよかった／いいのに」の省略による「たら／ば」言いさし文，「って言った／聞いた」の省略による「って」言いさし文を代表的な例として，言いさし文の構成過程と特徴を考察した。その結果，意味論的な省略によって形成された言いさし文は，定型表現の慣習化や文法化が大きく関与していることがわかった。

次章は，語用論的な省略と付加によって形成された言いさし文を考察し，言いさし文の全体像を明確にする。

第 10 章　語用論的な省略と付加による言いさし文

本章では，語用論的な省略と付加によって形成された言いさし文について考察を行う。具体的には，「のに」と「けど」で終わる言いさし文を逆接関係の例として，「から」で終わる言いさし文を因果関係の例として，「て」で終わる言いさし文を並列関係の例として，それぞれにおける特徴を考察する。

10.1　「のに」で終わる言いさし文

10.1.1　「のに」に関する先行研究

まず，文末の「のに」に関する研究に限定せず，「のに」のすべての用法を対象とする研究を考察する。

前田（2009：206）は「のに」の基本的な意味を「①原因と結果との食い違い」，「②二つの事態の肯否の食い違い」，「③予想と現実との食い違い」，「④ある状況から期待される事態と現実との食い違い」の四点にまとめている。

それに対して，中溝（2002：20）は，意味的にはすべての「ノニ」が「（後続節の事態が生じている）状況」という副詞的意味を持つことを主張し，それによって，「ノニ」の順接用法とケドより意外や不満の程度が強い理由が説明可能になるとまとめている。

さらに，「のに」に関する先行研究で，坂原（1985）をはじめ，「のに」の論理構造に関する分析が数多く見られる。渡辺（1995）は推論的逆接を説明する際に，「P から Q が予想／期待される｛ノニ／ケド｝、実際には R である。但し、実際の発話では Q は発話されることは少ない」（渡辺 1995：559－560）と述べた。家田（2005）も，同じように「ノニ」の用法を「推論の根拠」「推論の結果」「認識されている事態」の三つの要素から説明し，「A ノニ。」の意味・機能についての仮説と仮説の補足を述べた。

次に，文末用法の「のに」についての先行研究を考察する。

文末の「のに」について，主節が省略されたかどうかによって二分類したという考えを示している先行研究がある。家田（2005）は，文末にある「ノニ」について，「A ノニ B」の後件である B が，省略されて復元することが可能な場合もあれば，後件を省略したものとは言えない場合もあると述べ，前田（2009）は「のに」の非従属的な用法を二種類に分けた。一つは，後件が「省略されて別の文へ短絡的に結び付けられてしまう」（前田 2009：208）という「意外感の表出」用法であり，もう一つは後件が省略された終助詞的な用法である。

10.1.2　「のに」言いさし文のパターン

8.1 で，言いさし文の基本形を「AX，B」のように定義した。「のに」の意味制約によ

って，「のに」言いさし文は，「A」と「B」の部分がより限定されていると考えられる。本稿は，先行研究で述べられた「のに」に関する論理的な構造を参考にした上で，「のに」言いさし文の基本形を次の図 5 ように想定する。

「のに」言いさし文の基本形：「p なら q のに。（r）」
p は推論の根拠を表す。
q は推論の結果を表す。
r[133]は現実世界にある事実を表す。
q と r は相反の関係にある。
（r）は，実際に言語形式上に現れておらず，復元可能な主節を表す。

図 5　「のに」言いさし文の基本形

「p なら q のに。（r）」という基本形に基づき，「のに」言いさし文は，実際に①「p のに。」；②「q のに。」；③「p なら q のに。」[134]の三パターンで表れることが可能である。

次に，具体的な例を通して三つのパターンを考察する。

まず，（144）は「p のに。」の形で現れている「のに」言いさし文である。

（144）【柚子と一緒に帰る約束をしたが，放課後，赤岩は柚子から逃げるために，柚子に見られないように隠れた。柚子は同級生の白尾に向かって赤岩の居場所を確認しようとする場面。】
柚子「赤岩君，どこ行ったんだろう。<u>もう一緒に帰ろうって約束したのに</u>。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 4 話

（144）’ p（一緒に帰ろうって約束した）→q（一緒に帰るべき）
r（一緒に帰らなかった／一人で先に帰った。）
⟹ 基本形：「一緒に帰ろうって約束したなら，一緒に帰るべきなのに，赤岩君は一人で先に帰った。」

（144）に，話し手の柚子は赤岩と放課後に一緒に帰る約束をしたという知識文脈がある。それにもかかわらず，赤岩が一人で先に帰ったという事実がある。（144）は話し手がその事実が認識できた後の発話である。「のに」は，事実が話し手の叙想と違うことを表す。（144）の論理構造は（144）’のように考えられる。主節は，様々な形式で復元されるこ

133 「のに」は現実と想定（願望）のずれを表すのが基本であるので，「r」は事実を表すのが多いが，非事実の場合も可能である。
134 「P なら q のに。」において，「なら」が必ずしも形式上に現れることはない。

とが可能であるが，「赤岩君が一人で帰った」や「赤岩が柚子と一緒に帰らなかった」という事実を表すところで意味が同じである。

そして，（145）は「q のに。」の形で現れている「のに」言いさし文である。

（145）【アはずっと前から ipad を買おうと思って，ちょっと時間が経ったら安くなるかもしれないと迷いながら，一年が経った。しかし，円安のせいで，ipad の値段が一年後に逆に一年前より高くなった。その値段を見ながら，友達に向かって】

ア 「安い値段で買えたのに。」

（145）’ p（一年前に ipad を買ったなら）→q（安い値段で買えた）

r（今はその安い値段で買えない。）

⟹ 基本形：「一年前に ipad を買ったなら，安い値段で買えたのに，今はその安い値段で買えない。」

（145）に，円安によって ipad の値段が一年前より高くなっているという知識文脈がある。それによって，話し手は一年前なら，安い値段で ipad を買うことができるが，今なら，その安い値段で買えず，より高い値段で買うしかないという事実があると推論できる。そのため，（145）の論理構造は，（145）’のように考えられる。主節は，「今はその安い値段で買えない」や「今は高くなっている」などのように復元できる。

最後に，（146）は「p，q のに。」の形で現れている「のに」言いさし文である。

（146）【記者のことが好きな牛丸は，赤岩を取材するために一緒に歩いている記者と赤岩の後姿を見ながら，隣にいる柚子に向かって】

牛丸「試験さえなければ，いくらでも俺に密着させてあげるのに」。

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 4 話

（146）’ p（試験さえなければ）→q（いくらでも俺に密着させてあげる）

r：（試験があるから，俺に密着させてあげられない。）

⟹ 基本形：「試験さえなければ，いくらでも俺に密着あせてあげるのに，試験があるから，俺に密着させてあげられない。」

（146）で，「牛丸が記者に好意を持っている」という知識文脈と「記者は取材のために野球部の部員に密着する仕事がある」という知識文脈がある。その好意によって，話し手の牛丸は，記者の密着対象になることを希望している。それにもかかわらず，試験があることによって，牛丸が記者の密着対象になれないというのが事実である。つまり，話し手の希望は事実と相反の関係にある。よって，（146）は（146）’のような基本形を想定でき，主節が「試験があって，俺に密着させてあげられない」などのように復元できる。

以上は，主節が省略されているという観点のみから，「のに」言いさし文を考察してきた。ここに一つの疑問点が残っている。即ち，「のに」には，付加による言いさし文が存

在しないのか。次節では，それについて考える。

10.1.3　付加による「のに」言いさし文は存在するのか

結論から言うと，本稿は，「のに」言いさし文に，付加によって形成されたものはなく，語用論的な省略によって形成されたのがほとんどであると考える。

文末の「のに」について議論する際に，家田（2005）と前田（2009）は，それぞれ例を通して主節の省略とは考えにくい場合もあることを述べている。本稿は，それらの例を再検討することを通して，それらを語用論的な省略として捉えることが可能であるという結論を以って，付加による言いさし文の存在しないことを説明する。

まず，家田（2005）の例を再検討する。

（147）そんな時間あるんだったら春菜ちゃんと旅行にでも行けばいいのに。
＜復元される後件：？＞　（恋ノチカラ）
家田（2005）の（7）の引用

家田（2005：212）では，「ノニ節：p（時間がある）→q（春菜ちゃんと旅行に行けばいい）」のように分析したが，「～ばいい」が一種の主張や考えであるので，本稿は，「そんな時間あるんだったら春菜ちゃんと旅行にでも行けばいい」という全体を「p」とする。つまり，（147）は，「p のに。」という形で現れている「のに」言いさし文であると判断できる。

そうすると，（147）の言いさし文における p はわかったが，q が何かという質問が残っている。「～ばいいのに」という形式は過去でも未来の話題にも使える。（147）の文脈が不完全であるので，形式のみから，（147）は過去か未来かを判断するのが難しい。よって，（147）における q は，「春菜ちゃんと旅行に行くべきだった」という過去と，「春菜ちゃんと旅行に行くべきだ」という未来の二つの可能性がある。それに従って，（147）における「のに」言いさし文の基本形は，（147）’の過去と（147）”の非過去の二通りが考えられる。

（147）’ p（そんな時間あるんだったら春菜ちゃんと旅行にでも行けばいい）→q（春菜ちゃんと旅行に行くべきだった）
r：（春菜ちゃんと旅行に行かなかった。）
⟹ 基本形：「そんな時間あるんだったら春菜ちゃんと旅行にでも行けばいいなら，春菜ちゃんと旅行に行くべきだったのに，春菜ちゃんと旅行に行かなかった。」
（147）” p（そんな時間あるんだったら春菜ちゃんと旅行にでも行けばいい）→q（春菜ちゃんと旅行に行くべきだ）

r：（春菜ちゃんと旅行に行こうと考えていない。）

⟹ 基本形：「そんな時間あるんだったら春菜ちゃんと旅行にでも行けばいいなら，春菜ちゃんと旅行に行くべきなのに，春菜ちゃんと旅行に行こうと考えていない。」

「のに」言いさし文は，（147）’の場合なら，過去にあった事実と話し手の想定とのずれを表し，主節が「春菜ちゃんと旅行に行かなかった。」のように復元できる。（147）”の場合なら，発話時点における聞き手の脳の中にある考えという事実が，話し手の希望とのずれを表し，主節が「春菜ちゃんと旅行に行こうと考えていない」のように復元できる。（147）’にしても（147）”にしても，（147）の「のに」言いさし文は，主節が復元できる語用論的な省略によるものであると判断できる。よって，家田（2005）の主節の復元を想定しにくい「のに」節も存在するという考えは，再検討する余地があると言える。

次に，前田（2009）の例を再検討する。前田（2009）は省略として考えにくい例を二つ挙げているので，それぞれに分けて議論する。

（148）「太郎さんの他に、あたしと結婚してくれる、ちゃんとした男性があれば苦労はないのよ。あの人、やっと、あたしが口説き落とした唯一の標的なのに……」（午後の恋人）
前田（2009）の 100）による引用

（148）は，前田（2009）で挙げられた省略として考えにくい一つの例である。「のに」の基本意味は，事実が叙想と反対関係にあることを表す。「のに」のその基本意味と，（148）の形式文脈にある「口説き落とした」や「結婚してくれる」の言語形式と総合的に考えれば，（148）には，「成功できなかった」や「結婚してくれなかった」，「自分の思った通りにさせられなかった」という事実があると判断できる。よって，（148）の「のに」言いさし文の基本形は，（148）’のように考えられる。

（148）’p（あの人，やっと，あたしが口説き落とした唯一の標的である）→q（その唯一の標的を自分の思った通りにさせる）

r：（その唯一の標的を自分の思った通りにさせられなかった。）

⟹ 基本形：「あの人，やっと，あたしが口説き落とした唯一の標的であるなら，その唯一の標的を自分の思った通りにさせるのに，自分の思った通りにさせられなかった。」

（148）’から，（148）の「のに」言いさし文は，主節を「成功できなかった／自分の思った通りにさせられなかった／あの標的はいなくなった」のように復元できる語用論的な省略によるものであるとわかる。

（149）「若いって、羨ましいわね」いそいそと駅へ向かう二人の後ろ姿を見送って思わず、明子は呟いた。「あたし達も、あんな日があったのに……」　　（午後の恋人）
前田（2009）の 99）による引用

（149）は，前田（2009）で挙げられた省略として考えにくいもう一つの例である。（149）は，「あたし達もあんな日があった」を p と考えるなら，具体的な文脈が十分に提示されていないので，q に当たる内容を想定しにくい。そうと言っても，それで（149）が主節を復元できないものであると結論を下すのは，適切ではない。なぜかというと，（149）の言語形式に（150）のような具体的な文脈を与えるのみで，主節を復元きる語用論的な省略による言いさし文としてと捉えられるからである。

（150）【いろんなことでもめた後に，夫とやっと離婚ができた。二人が最後の別れの挨拶をしているときに，近いところにいる若い夫婦がラブラブな場面を見ながら】
妻「あたし達も、あんな日があったのに。」

（150）の説明から，（150）には，話し手である妻と聞き手である元旦那が，お互いのラブラブの気持から悪い関係に変わり，結果的に離婚という羽目になったという知識文脈があることがわかる。さらに，（150）に，妻が若い夫婦のラブラブなところを見ているという状況文脈がある。この知識文脈と状況文脈によって，（150）の「のに」言いさし文における q は，「私たちも関係のいい夫婦なはずである」ということに限定できる。以上より，（150）における「のに」言いさし文の基本形を（150）’のように考えられ，（150）の主節を「今は離婚の羽目にもなったぐらい関係が悪い」などような主節に復元できる。

（150）’ p（あたし達もあんな日があった）→q（私たちも関係のいい夫婦なはずである）
r：（私たちが関係のいい夫婦じゃない。）
⟹ 基本形：「あたし達もあんな日があったなら，私たちも関係のいい夫婦なはずであるのに，今は離婚する羽目にもなったぐらい関係が悪い。」

つまり，文脈を明確にすれば，前田（2009）で省略として考えにくい（150）の例も，主節を復元できる語用論的な省略による「のに」言いさし文であると判断できる。

以上では，具体的な分析を通して，家田（2005）と前田（2009）で提示された省略と考えにくい例も，結局主節を復元できる語用論的な省略によるものであると議論した。以上をもって，本節の問題を解決することになり，「のに」言いさし文には，付加によるパターンは存在しないことを明確にした。

次節で，「のに」言いさし文の具体的な機能と発話効果を考える。

10.1.4　「のに」言いさし文の機能と発話効果

3.6.1.2 で議論したように，「のに」言いさし文は二つの機能を持っていると考えられる。「のに」は，事態が話し手の希望や期待・予測・予期と異なることを述べるのが本来の機能である。そこから，非難・悔恨といった感情的な解釈を推意として引き出すことができる。但し，話し手の不満を招く理由の違いによって，「のに」言いさし文は，単に事実と叙想のずれに対する話し手の不満の気持を表す場合もあれば，事実と叙想のずれに対する不満を通して，事実と関わる第三者や聞き手への不満，さらに聞き手への働きかけを表すという推意が含まれる場合もある。前者は，発話内容が聞き手と無関係な場合に現れるもので，後者は，発話内容が第三者や聞き手と関係があるような場合に現れるものである。

（151）ア「もうすぐ試験だってのに。」

例えば，（151）という言語形式は，違う場面において，「のに」言いさし文に違う発話機能と発話効果を含むことが可能である。

まず，単に事実と自分の希望との背反に対する話し手の悔しさや不満という感情を表す（152）の場合を考察する。

（152）【アは受験生である。受験のために長い時間をかけて作った大事なノートを油断して JR で落としてしまい，忘れ物センターに問い合わせたが，結局見つからなかったという結果を聞いた場面】
ア「もうすぐ試験だってのに。」

（152）’ p（もうすぐ試験だという）→q（大事なノートを使って受験準備をしなければならない）
r（その大事なノートを失くして，受験準備ができない。）
⟹ 基本形：「もうすぐ試験だというなら，大事なノートを使って受験準備をしなければならないのに，その大事なノートを失くしてしまった。」

（152）に，話し手のアが受験用のノートを失くしたという事実がある。受験用のノートと試験との関係という世界知識と，「のに」の基本的な意味によって，（152）の「のに」言いさし文の基本形を（152）’のように考えられ，主節を「その大事なノートを失くしてしまった」や「試験の準備をうまくできない」などのように復元できる。ノートを失くしたのは，話し手自身であるので，（152）における話し手の不満を招いたのは，話し手自身以外の関係者はいない[135]。よって，（152）のような場面なら，（151）の「のに」言いさ

[135] （152）のような場面において，話し手が自分自身に対して不満を持つことも想定することが可能なら，（152）の「のに」言いさし文は，同時に話し手自身に対する不満も表す。さらに，JR で担当者が忘れ物に対して責任を持っているなら，（152）の「のに」言いさし文は，その担当者である第三者に対する不満を表す可能性もある。しかし，いずれも比較的弱い推意であると言える。

し文は，単に事実に対する話し手の不満の気持を表す。

そして，事実が自分の希望と違うことを通して，第三者に対する評価を表すのは，（153）の場合である。

（153）【アは野球部の部員である。監督の命令で，雨の中で野球部の部員達がみんな慌てて干している洗濯物を部屋へ取り込んでいる場面で，アは一緒に作業をしている部員の友達に向かって】

ア「もうすぐ試験だってのに。」

（153）’ p（もうすぐ試験だという）→q（受験勉強しなければならない）

r（受験勉強ができない。）

⟹ 基本形：「もうすぐ試験だというなら，受験勉強しなければならないのに，野球部にいて雑用をやっている。」

（153）には，事実として，話し手のアが洗濯物を部屋へ取り込むという雑用をやっているという状況文脈がある。「のに」の意味によって，その事実として存在している状況は，話し手の希望と相反することがわかる。よって，（153）の「のに」言いさし文は，基本形が（153）’のように考えられ，主節を「受験勉強ができない」や「野球部にいてこんな雑用をやっている」のように復元できる。また，話し手が雑用をしているのは，監督の命令に応じるためである。発話時に話し手の周りに，監督は聞き手として存在していないので，第三者と考えられる。つまり，話し手を希望と相反する状況に導かせたのは，第三者の監督である。よって，（153）の「のに」言いさし文は，「のに」言いさし文は，事実に対する不満を表すと同時に，第三者である監督に対する評価を下していると言える。

最後に，事実に対する不満のみならず，聞き手に対する評価や働きかけの推意も考えられるのは，（154）の場面である。

（154）【息子は受験生である。試験が近づいたにも関わらず，毎日家でゲームばかりやっている。そして，今ゲームをやっている最中の息子に対して，母のアが発話している場面】

ア「もうすぐ試験だってのに。」

（154）’ p（もうすぐ試験だという）→q（ゲームをやるのではなく，勉強すべきである）

r（勉強していない。）

⟹ 基本形：「もうすぐ試験だというなら，ゲームをやるのではなく，勉強すべきであるのに，ゲームをやっている。」

（154）で，話し手は母のアで，聞き手は息子である。（154）に，息子がゲームをしているという状況文脈と，息子が受験生であるという知識文脈がある。世界知識によって，受験生は，ゲームをやるべきではなく，受験勉強をすべきであることが推論できる。よっ

て，（154）の「のに」言いさし文は，基本形を（154）’のように考えられ，主節を「ゲームをやっている」や「勉強をしていない」のように復元できる。「のに」言いさし文の基本的な意味によって，（154）の発話は，まず息子がゲームをやっているという事実に対する話し手の不満を表す。そして，その不満を招いたのは，聞き手としての息子であるので，（154）は，同時に聞き手に対する不満というマイナスの評価を下している。さらに，話し手の不満を解消するには，聞き手のゲームをやめ，勉強をするという行動が想定できる。しかも，その行動は，聞き手の意志によって簡単に実現できるものである。よって，（154）は，同時に「ゲームをやめて，勉強をする」という行為を聞き手に求めようとする【行為要求】の性質がある。つまり，（154）の「のに」言いさし文は，事実に対する話し手の不満のみならず，聞き手への評価や聞き手への働きかけという推意もあると言える。

以上より，「のに」言いさし文は，事実に対する話し手の不満を表すのが基本的な意味であり，違う場面においては，第三者に対する評価や聞き手に対する評価及び働きかけという推意もあることがわかった。

10.1.5 「～ばよかったのに」言いさし文の位置づけ

「～ばよかったのに」[136]という「のに」言いさし文は，主節「B」にあたる部分が定型表現ではないにも関わらず，「AX」という言語形式上に現れている未完結の部分から言えば，決まっている形式を持っている。本稿は，①「AX」という部分は定型表現になっている；②欠如された主節「B」は事実に対する話し手の不満を表すという意味機能が決まっている―という二点を根拠に，「～ばよかったのに」という形式で現れている「のに」言いさし文を意味論的な省略によるものと位置づける。

「～ばよかったのに」という形式で現れる言いさし文は，過去でも未来の話題でも使用可能であると 10.1.3 で述べた。その動作に関わる時点が過去にあるとしても，未来にあるとしても，「のに」言いさし文の基本形にある「推論の結果」の「q」が，一律に「～すべきだ／すべきだった」になり，「のに」言いさし文の主節が「あなたは考えていなかった」や「あなたは考えていない」のように復元できる。もし，述語に関わる動作主が聞き手であるなら，「～ばよかったのに」言いさし文は，聞き手に対する評価を表す機能がある。その中に，述語の表す動作が未来にある未実現のものなら，聞き手への働きかけという推意が強まり，【行為要求】の性質を持つことになる。

例えば，（155）は，述語の動作が過去にある例で，（156）は，述語の動作が未来にある例である。

（155）【夕飯の時間に，家族全員食卓の前に座って，母はすしケーキを持ち出しながら

[136] 第 9 章の意味論的な省略による言いさし文を考察した際に，9.2.4 では，「たら／ば（よかった／いいのに）」を「たら／ば」言いさし文の一種類として議論した。「～ばよかったのに」以外に，「～たらいいのに」や「～ばよかったのに」，「～ばいいのに」という形式として現れる可能性がもある。それらの違いは本稿では基本的に議論しない。便宜上，「～ばよかったのに」という形式を利用して議論する。

発話している場面】

母「さっ，食べましょ。」

父「あの。食べてきたからビールだけでいいや。」

母「やだ。メールくれればよかったのに。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 2 話（再掲）

（155）’ p（メールくれればよかった）→q（メールくれるべきだった）

r：（メールをくれなかった。）

⟹ 基本形：「メールくれればよかったなら，メールくれるべきだったのに，メールをくれなかった。」

（155）で，話し手は母で，聞き手は父である。夕飯の時間に，食卓の前という状況文脈から，話し手の発話にある「メールをくれる」が過去の時点における動作を指すとわかる。よって，（155）の「のに」言いさし文の基本形は，（155）’のように考えられ，主節を「メールをくれなかった」や「メールを送ろうとしなかった」などに復元できる。「メールをくれる」は既に過去の時点における動作で，過去にあるものを変えれないので，（155）は，聞き手への不満というマイナスの評価の推意しかない[137]と言える。

（156）【早勢は友達とおしゃべりをしている場面で，はると離婚した後でも，はるのことを心配していると言った後】

早勢の友達「お前のそういうところをさ，はるちゃんにちゃんと伝えればいいのに。」

読売テレビドラマ『恋愛時代』第 2 話

（156）’ p（お前のそういうところをさ，はるちゃんにちゃんと伝えればいい）→q（はるちゃんに伝えるべきだ）

r：（あなたははるちゃんに伝えようとしない。）

⟹ 基本形：「お前のそういうところをさ，はるちゃんにちゃんと伝えればいいなら，はるちゃんに伝えるべきなのに，あなたは伝えることを考えていない。」

（155）の過去にある動作に対して，（156）は未来の時点における動作の例である。（156）で，話し手は早勢の友達で，聞き手は早勢である。（156）にある「伝える」という動作が未実現で，未来にあるものである。動作が未来にあるときに，未実現のものが話し手の想定と相反にあることを考えにくい。それにもかかわらず，「のに」の事実が話し手の想定と相反にあるという基本的な意味から考えれば，動作が未来にあるときに，聞き手の考えを事実として捉えれば，その事実が話し手の想定と相反にあるということを理解しやすくなる。よって，（156）の「のに」言いさし文の基本形は，（156）’のように考えられ，主節を「あなたは伝えることを考えていない」のように復元できる。既に事実である動作

[137] 無論，（155）には，聞き手にこれから同じようなことをしないという推意もあると考えれば，聞き手への働きかけの性質もあるが，その推意は比較的弱いものである。

を変えれないが，人間の考えを変えることが可能である。そのため，（156）は，主節を「ちゃんと伝えなさい」のようにも復元でき，聞き手の考えに対する不満を表すと同時に，聞き手に「伝える」という行為を要求する機能も読み取れる。つまり，「〜ばよかったのに」言いさし文は，述語と関係のある動作が未来にあるものなら，聞き手の考えに対して不満を表すとともに，聞き手にその行為の実施を求めるという【行為要求】の機能も持っている。

以上より，「〜ばよかったのに」言いさし文は，過去の動作なら，聞き手への評価を表し，未来の動作なら，聞き手への評価の表明と【行為要求】の機能があることがわかった。

10.1.6　まとめ

10.1.1〜10.1.5 では，「のに」で終わる言いさし文について考察した。具体的には，10.1.1 で「のに」に関する先行研究を検討し，10.1.2 で「p なら q のに。（r）」という基本形に基づき，「のに」言いさし文を①「p のに。」；②「q のに。」；「p，q のに。」という三つのパターンに分けた。10.1.3 で，先行研究の具体例の再検討を通して，「のに」言いさし文には，付加によるものはなく，語用論的な省略によるものが大多数であるという結論をした。10.1.4 で，様々な場面を通して，語用論的な省略による「のに」言いさし文の機能や発話効果を考察した。その結果，「のに」言いさし文には，事実に対する話し手の不満以外に，第三者や聞き手に対する評価と聞き手への働きかけという推意もあることを確認した。最後の 10.1.5 で，「〜ばよかったのに」の形で現れるものを意味論的な省略による言いさし文と位置づけ，過去と未来に分けて，それぞれの機能と特徴を考察した。

10.2　「けど」で終わる言いさし文

10.2.1　二種類の「けど」言いさし文

（157）【夕方に，部活が終わって，部員たちが一緒に歩いている。生活に困っている亀沢は，考え事をしていて，みんなの後について歩いている場面】
部員「亀沢，これからみんなでラーメン食べに行くけど。」
亀沢「今日は辞めとく。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話（再掲）

（158）【スウェーデン語の言語研究がまだあるかどうかについて】
ア「今もあります。」
イ「もうないんですけど。」
『BTSJ 初対面同性同士雑談 1』（再掲）

白川（2009）は，「けど」で終わる発話をすべて「言い尽くし」と位置づけ，主節を復

元しない立場を取っている。しかし，直感からもわかるように，（157）と（158）は，同じく「けど」で終わる発話であっても，完結度が違う。結論から言うと，本稿は，（157）を語用論的な省略による言いさし文と位置づけ，（158）を付加による言いさし文とする。

文末に現れる「けど」について，従来その機能を重点として議論されてきた（内田 2001，白川 2009）[138]が，本稿は，形成要因に基づき，文法形式の違いを確認した上で，「けど」の言いさし文の構文特徴を考察する。

10.2.2 「けど」[139]の意味用法の整理

10.2.2.1 先行研究によるまとめ

先行研究（永田・大浜 2001，森田 1989，岩澤 1985）を総括して考えると，「けど」の用法は次のようにまとめられる[140]。

①逆接用法：雨が降ったけど運動会は行なわれた。
②対比用法：兄は背が高いけど弟は背が低い。
③並列・累加用法：去年も優勝できなかったけれども，今年もまただめだった。
④前置き用法：悪いけどお金貸してくれない？
⑤提題用法：明日の天気ですけど，雪が降るそうです。
⑥挿入用法：この前貸した本を明日，もし無理だったら明後日でもいいんだけど，返してくれる？
⑦終助詞用法：すみません，道をうかがいたいんですけど。

10.2.2.2 「けど」に関わる二つの問題点

10.2.2.2.1 各意味の関連性問題

永田・大浜（2001）は，「けど」の用法を「逆接と対比用法」と「前置き，提題，挿入，終助詞用法」の二つに大別した。「ケドは発話を解釈することによって聞き手に顕在化すると思われる想定を『否定』する機能を持つ」（永田・大浜 2001：70）という共通点があるが，それぞれの呼び出される想定が異なっているという。「逆接と対比用法」は，後件が前件から顕在化する想定を棄却したものであるが，「前置き，提題，挿入，終助詞用法」は，前件が後件から顕在化する想定を抑制したものであると述べている。

---

138 文末に現れる「けど」に関する先行研究は多数ある。内田（2001）と白川（2009）は代表的なものである。
139 言いさし文になる場合に，「けど」や「けどれも」，「が」は文体における違いがあると考えられるが，それを今後の課題にする。本稿ではそれらの形式による違いを議論しない。
140 ①②④⑥⑦は永田・大浜（2001）によるもので，③は森田（1989）によるものである。③の下線と⑤の例は筆者によるものである。

永田・大浜（2001）は，「けど」の用法を連続的に捉えようとするところが新たな試みであると言えるが，二つの点を再考察する必要がある。一つは，「抑制」も「棄却」と同じように「否定」として扱うことの妥当性である。もう一つは，「けど」による想定を具体的にどのように確定するかを明確にする必要がある。

10.2.2.2.2 「逆接」と「対比」

「逆接」と「対比」については，その定義と相違について議論する研究が少ない。従来の研究で，「対比」は「逆接」の下位概念か（石黒 2008，渡辺 1995，岩澤 1985），「逆接」と同じレベルの概念（森田 1989，永田・大浜 2001）として扱われてきた。

それに対して，加藤（2001）は「逆接」と「転換」を「対比」の一種類と扱い，逆接を「前件にかかわる判断（常識的に成立する推論を含む）が後件によって成立しなくなる」（加藤 2001：67）ような接続と定義した。「対比」の種類については明確に述べていないが，「前件と後件をそのまま《対比》するような関係」もあれば，「前件と後件が単独で《対比》と解釈できないようなものでも，文脈想定を介して《対比》の関係は成立している」ものもある（加藤 2001：71）と述べた。

先行研究の「対比」に対する見解が一致していない状況の中で，本稿は，加藤（2001）に倣って，「対比」を広義の意味として使用する。

10.2.2.3 対比に基づく「けど」の意味用法の整理

本稿は，「けど」の基本用法を「対比」とし，すべての用法が「対比」によって繋がることを明らかにする。広義の「対比」は正確に定義することが難しいため，「対比」になれない場合を考える。加藤（2001）は，前件と後件が全く同じような場合に，尾谷（2003）は，前件と後件が無関係である場合に，対比になれないと述べた。本稿では，対比となれるものは，前件と後件が完全に同じではなく，何らかの関連性があるものと考える。つまり，前件と後件に，関係性を読み取ることができれば，「けど」が使えるが，読み取れなければ，使用不可能である。典型的な「対比」は相反の関係にあると考えられるので，「対比」は図 6 のように前件と後件の関係によって連続的に捉えられる。



図 6　「対比」になれる前件と後件の関係の連続性

そして，「対比」は「文法的対比」「意味論的対比」「語用論的対比」[141]に分類できる。

[141] 「文法的対比」「意味論的対比」「語用論的対比」は排他的な関係ではなく，一つの文が同時に 2 種

「文法的対比」と「意味論的対比」は両方とも推論を行わずに，形式文脈のみによって判断できるが，「文法的対比」は前件と後件の言語形式に現れる関係性で，「意味論的対比」は前件と後件の形式の意味による関係性である。「語用論的対比」は形式文脈のみならず，言語形式からの推論による前件と後件の関係を指す。

次に，「相反の関係」と「何かの関連性がある」という図 6 と対応し，具体例を通して，この三種類の「対比」を考察する。

（159） 昨日は雨が降ったけど，今日は降らなかった。
（160） 去年はりんごが多かったけど，今年はさくらんぼが多い。
（161） 教えてくれたけど，忘れた。

まず，「相反の関係」と「何かの関連性がある」という図 6 と対応し，「文法的対比」を考えると，「相反の関係」は「前件の述語と後件の述語は肯定形と否定形の関係にある」場合を指し，「何かの関連性がある」は，「前件と後件は重複している部分がある」と考えられる。また，形式上に重複していないが，後件の話題や主語が前件と同じであるなら，省略されている場合もあるので，その場合も「何かの関連性がある」として考えられる。以上より，「文法的対比」は「①前件の述語と後件の述語は肯定形と否定形の関係にある」→「②前件と後件は重複している形式がある」→「③前件と後件は重複している形式はないが，後件の省略されている話題や主語が前件と同じである」のように連続的に捉えられる。例えば，（159）は①の例で，「降った」と「降らなかった」が反対の関係にある。（160）は②の例で，前件と後件に「多い」という重複の表現がある。（161）は③の例で，前件と後件で「あのことは」などの同一話題が省略されていると考えられる。

（162） 兄は背が高いけど，弟は背が低い。
（163） 疲れたけど，楽しい一日でした。
（164） 授業は 3 時に終わるけど，何時に迎えに来てくれるかわからない。
（165） 昨日彼は絶対来ると思ったけど，来なかった。
（166） 日本中を旅行したけど，北海道が一番好きです。

そして，「意味論的対比」は語彙レベルと文レベルに分けて考える[142]。語彙レベルとして現れる「相反の関係」は「前件と後件の述語が反義語になる」場合であり，例えば，（162）である。一方，文レベルで現れる「相反の関係」は，「マイナス意味の話⇔プラス意味の

類以上の対比関係を持つことが可能である。

142 文レベルで現れる「何かの関連性がある」は，従来の「提題用法」や「話題転換」の用法が考えられるが，前件がメタ情報である点から考えれば，「意味論的対比」より「語用論的対比」と考えたほうが適切であろう。

話」「確定の話⇔不確定の話」「話し手の認識と事実のずれ」の三種類[143]が考えられる。例えば,(163)で,前件はマイナス意味の話であるが,後件はプラス意味の話である。(164)で,前件は確定の話であるが,後件は不確定の話である。(165)で,前件にある話し手の認識と後件にある事実はずれている。語彙レベルとして現れる「何かの関連性がある」は,「前件にある語彙は後件の語彙と同じカテゴリーにある」場合を指すと考えられる。例えば,(166)の後件にある「北海道」は,前件にある「日本中」の下位概念である。

最後に,「語用論的対比」は「A」と「B」が同じレベルの内容であるかどうかによって,「同レベルにおける語用論的対比」(「語用論的対比 1」と呼ぶ)と「メタレベルにおける語用論的対比」(「語用論的対比 2」と呼ぶ)に分類できる。10.1 .1 でも紹介したように,渡辺(1995)は推論的逆接を説明する際に,「P から Q が予想/期待される{ノニ/ケド}、実際には R である。但し、実際の発話では Q は発話されることは少ない」(渡辺 1995:559−560)[144]と述べている。この二種類の「語用論的対比」は,「Q」が想定できるかどうかで異なる。

(167) 雨が降ったけど,運動会は行なわれた。
(168) 明日の天気ですけど,雪が降るそうです。

「語用論的対比 1」は「Q」が想定できる。「世界知識と事実のずれ」にまとめられる。その「対比」の連続性は,辿りついた推論にかける労力として現れる。例えば,(167)の「雨が降った」という前件から,「運動会は行なわれなかった」ことが推論できるが,後件にある事実はその推論と相反する関係にある。

「語用論的対比 2」は「Q」は想定できず,「A」はメタ情報である。従来「提題用法」や「話題転換」,「前置き用法」として議論されることが多い。例えば,(167)は前件の「雨が降った」と後件の「運動会は行われた」が両方とも命題内容であるが,(168)では,前件の「明日の天気」は話題を導入するメタ情報で,後件はそれに関する命題内容である。

この 2 種類の「語用論的対比」は連続的に捉えることができる。前件にある命題から後件に辿りつく推論にかける労力が多くなればなるほど,その対比性が弱くなり,「語用論的対比 2」としての性質が現れてくる。

(169) 悪いけど,お金貸してくれない?

例えば,(169)は前件がメタ情報なので,「語用論的対比 2」になるが,前件の「悪い」から,「言うべきではない内容である」という想定「Q」が考えられ,「言うべきではな

[143] 三種類とは,すべてを総括するものではない。この三種類以外にほかのものの存在を否定しない。
[144] 坂原(1985)は渡辺(1995)より早い段階で,逆接の接続詞「しかし」について,「"p,しかし,q"とは,"p のときは,普通〜q であるが,意外なことにも,q である"を意味している」(坂原 1985:144−145)という類似の考えを述べている。

い⇔言った」という対比性があるので，「語用論的対比 1」としても説明可能である。そこで，（169）は両方の性質を持つ例と言える。

10.2.3　語用論的な省略による場合

本稿は，「A けど，B」を基本形とするものが，「A けど。」の形として現れる場合に，語用論的な省略による「けど」の言いさし文と呼ぶ。具体的には，省略されている後件「B」が確定的な内容であるかどうかによって，二種類に分けられる。

まず，「B」が確定的な内容である場合は，「B」が事実で，「A」が予想や判断などの叙想的な内容であり，「けど」は前件の認識内容と後件の事実の対比を表す。事実である「B」の省略は，情報の経済性によるものである。例えば，（170）の例である。

（170）【楓と晴は友達で，公康は晴の息子である。公康が家を出たことについて】
楓「公康君まだ帰ってこないの。」
晴「そうなんだよ。野球部には戻って来たっていうから，その勢いでこっちにも戻ってくると思ったんだけど。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話

（170）で，話し手は晴で，聞き手は楓である。（170）には，話し手の息子が家出しているという状況文脈がある。「戻ってくると思った」という過去形から「まだ戻っていない」という事実を推論でき，主節を「まだ帰っていないのよ」のように復元できる。よって，「けど」は，話し手の判断・認識と事実のずれを表す。

以上より，「B」が確定的な事実である場合に，「けど」の言いさし文は，図 7 のように表示できる。

形式：「A けど，（B）。」
説明：「A」は叙想的な認識内容で，「B」は事実である。
意味機能：「A」と事実のずれを表す。

図 7　語用論的な省略による「けど」の言いさし文 I

そして，「B」が不確定的な内容である場合は，話し手にとって，「A」が確定的な内容で，「B」が不確定的な内容である。つまり，「けど」の対比性は，内容の確実性による。「B」が不確定であるにも関わらず，話し手が「A けど」という形式を聞き手に持っていくのは，「B」の不確定性が聞き手によって解消できるからである。そこで，「B」が「どうすればいい」や「どう」などの疑問表現に復元することが多く，話し手が確定できない

部分の情報を聞き手に補ってもらうという要求性を持っている。さらに，聞き手がその不確定性を解消し，要求に応じるには，情報を提供するという言語行為のみで可能な場合もあれば，二次レベルで具体的な行動を行なわなければならない場合もある。例えば，（171）は単に聞き手に情報の提供を要求する場合であるが，（172）は聞き手に行為の提供まで要求する場合である。

（171）【朝尾はアルバ・トレーディングという会社の CEO で，青石は帝江物産の社員である。青石は，資料の届けを部長に頼まれて，アルバ・トレーディング会社 の受付に来た】

青石「帝江物産のものですが，朝尾さんに資料をお届けするように言われて来たのですが。」

受付「こちらへどうぞ。」

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 2 話（再掲）

（172）【夕方に，部活が終わって，部員たちが一緒に歩いている。生活に困っている亀沢は，考え事をしていて，みんなの後について歩いている場面】

部員「亀沢，これからみんなでラーメン食べに行くけど。」

亀沢「今日は辞めとく。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 6 話（再掲）

（171）は，主節を「朝尾さんはどこにいますか／どうすればいいですか」のように様々な形式に復元でき，「話し手にわからないことがあり，それを聞き手に教えてほしい」という意味機能が同じである。話し手によって投げられた不確定性を解消するには，聞き手は応答を通して情報を提供するだけで十分である。それに対して，（172）は，主節を「あなたはどう／一緒に行かない」のように復元でき，「一緒に行けばいいんですけど，聞き手の亀沢がラーメンを食べに行くかどうかはわからない」という意味機能が同じである。聞き手がその不確定性を解消するには，まず応答するという行為が必要とされる。さらに，聞き手が肯定の応答をするなら，二次レベルで「ラーメンを食べる」という行為も同時に要求される。

以上より，「B」が不確定的な内容である場合に，「けど」の言いさし文は，図 8 のように表示できる。

形式：「A けど，（B）。」
説明：「A」は話し手が確定できるような内容である。「B」は話し手が確定できない内容で，「どうすればいい」や「どう」などの形式に復元できる。
意味機能：一次レベルで，聞き手に情報の提供を要求し，二次レベルで，聞き手の行動を要求する。

図 8　語用論的な省略による「けど」の言いさし文Ⅱ

10.2.4　付加による場合

本稿では，「A けど，B」を基本形とするものが，「（A），B けど。」と「『（A）』『B けど』」[145]の形として現れる場合に，付加による言いさし文であると主張する。

「（A），B けど。」の場合は倒置と連続的な関係を持っているが，「B けど，A。」にすると，意味機能が異なることになるので，本稿は，それを倒置として捉えない。

（173）【珪子は友達とおしゃべりをしている。珪子が自分の新婚旅行が熱海だったと言った後に，友達が笑いながら発言している場面】
友達「うちでさえ網走なのに。」
珪子「近いからいいよなって。鈍行の普通席。でも，干物おいしかったけどね。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話（再掲）

例えば，（173）で，「近いからいいよなって。鈍行の普通席」は「A」で，「でも，干物おいしかった」は「B」である。もし，（173）を倒置として扱い，「B けど，A。」にすると，「でも，干物おいしかったけど，近いからいいよなって彼が言って，鈍行の普通席だった」のようになる。会話の流れが不自然と感じるように，（173）を倒置として捉えないほうが適切であると言える。

次に，10.2.3 でまとめている「けど」の用法を参照しながら，それらが「A，B けど。」と「『A』『B けど』」の形として表現可能かどうかを検討する。

（174）　昨日は雨が降った，今日は降らなかったけど。
（175）　兄は背が高い，弟は背が低いけど。
（176）　雨が降った，運動会は行なわれたけど。
（177）？悪い，お金貸してほしいけど。
（178）？明日の天気です，雪が降るそうですけど。

まず，「A，B けど。」の形として現れるものは，（174）～（178）である。（174）の「文法的対比」，（175）の「意味的対比」，（176）の「語用論的対比 1」は，「A，B けど。」の形として現れるのが可能であるが，（177）の対比性が潜在的になる場合や，（178）の「語用論的対比 2」は「A，B けど。」の形として現れる言いさし文の許容度が低い。

（179）　ア「昨日雨すごい降ってたよね。」

[145] 「（A），B けど。」は，「A」も「B」も話し手自身の発話にある場合を指すが，「『（A）』『B けど』」は，「A」は聞き手の発話に，「B」は話し手の発話にある場合を指す。（　）というのは，「A」の部分が言語形式上に現れる可能性もあれば，現れない可能性もあることを指す。

イ「今日全然降らなかったけどね。」

（180） ア「倉田家のお坊ちゃん背が高いね。」

イ「妹は全然低いけどね。」

（181） ア「昨日雨ひどかったね。」

イ「運動会無事に行なわれたけどね。」

（182） ア「悪い。」

イ「*お金貸してほしいけど。」

（183） ア「明日の天気です。」

イ「*雪が降るそうですけど。」

そして，「『A』『B けど』」の形として現れるものは，（179）～（183）である。（174）～（178）と対応しているように，（179）の「文法的対比」，（180）の「意味論的対比」で，（181）の「語用論的対比 1」は「『A』『B けど』」の形として現れるのが可能であるが，その対比関係が潜在的になる場合の（182）と，「語用論的対比 2」である（183）は，発話として成立しなくなる。

ここまでは理論的に考えたが，次は実際の例を考察してみる。

（184）【母と札幌で一人暮らしをしている娘との電話】

母「今日も雪だったの。」

娘「いや，全然降らなかったよ。昨日はすごい降ってたけど。」

（185）【珪子は友達とおしゃべりをしている。珪子が自分の新婚旅行が熱海だったと言った後に，友達が笑いながら発言している場面】

友達「うちでさえ網走なのに。」

珪子「近いからいいよなって。鈍行の普通席。でも，干物おいしかったけどね。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話（再掲）

（186）【記者である明日香と健太は友達である。健太の家はストーカー被害に遭っていた。犯人が捕まえられた後に，明日香はそれをもとに記事にした。その原稿を健太に渡した後】

健太「えっ，何ですか，これ。」

明日香「これまでの事件の概要，捜査状況について私なりにまとめた記事です。まだ下書きですけど。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話

まず，「A，B けど。」の形式を考える。「文法的対比」の関係にあるものは（184）[146]

[146] 「文法的対比」の関係にある「A，B けど。」の形式で現れる言いさし文は，（184）の作例のように，理論上は存在可能である。

である。「意味論的対比」の関係にあるものは（185）である。（185）の「A」と「B」[147]は「マイナス意味の話⇔プラス意味の話」という対比関係がある。「語用論的対比 1」は（186）である。（186）の「まだ下書き」という「B」は，「完成した記事である」という推論と対比関係にある。

（187）【スウェーデン語の言語研究がまだあるかどうかについて】
ア「今もあります。」
イ「もうないんですけど。」
『BTSJ 初対面同性同士雑談 1』（再掲）

（188）【航太は医師で，昇は航太の後輩である。二人は山に登って患者さんの家を訪ねている途中で休憩をしている場面】
昇「こういう素晴らしい景色が見られるのも離島医療ならではですからね。」
航太「まあ，でも，歩いてくんの疲れるけどな。」
日本テレビ系列『海の上の診療所』第 4 話

（189）【健太は 30 代の男である。友達の明日香は健太が遭った事件を元に「倉田少年の事件簿」という原稿を書いた。明日香がその事件簿を健太に渡した後に，健太は「倉田少年の事件簿」という名前を指しながら発言する】
健太「これ，何とかなりませんか。」
明日香「ええ？面白いと思ったんですけど。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話

そして，「『A』『B けど』」の形式を考察する。（187）は「文法的対比」で，（188）は「意味論的対比」で，（189）は「語用論的対比 1」の例である。（187）で，聞き手のアの「今もあります」は「A」に，話し手のイの「もうないんです」は「B」に相当する。それらは「文法的対比」の関係にある。（188）で，聞き手の昇の発話は「A」に，話し手の航太の発話は「B」に相当し，それらは「プラス意味の話⇔マイナス意味の話」の対比関係にある。（189）で，聞き手の健太の発話は「A」に，話し手の明日香の発話は「B」に相当する。「B」は「A」にある「その名前が面白くない，不愉快に感じる」という推論と対比関係にある。

以上はすべて「A」が言語形式上に現れる場合の例であるが，「（A），B けど。」の形と「『（A）』『B けど』」の形として現れる言いさし文は，「A」に相当する部分は言語形式上に現れていない（その場合に，文脈によって想定可能である）可能性もある。つま

[147] （185）という会話における「B」は，「でも，干物おいしかった」という部分を指すのが問題はないが，「A」は「近いからいいよなって。鈍行の普通席」という話し手の発話を指すという考えも可能であれば，「うちでさえ網走なのに」という聞き手の発話を指すという考えも可能である。両方の可能性を議論するには，言いさし文のスコープという問題を解決する必要があると予測できる。それについては，今後の課題にする。（185）に限って言えば，いずれにしても，「けど」は「マイナス意味の話⇔プラス意味の話」という対比関係を表わすところが同じである。

り，「B けど。」の形として現れる。例えば，（190）は「（A），B けど。」の例で，（191）は「『（A）』『B けど』」の例である。

（190）【食事中，母は銀行にいたころに，父と八木さんと 3 人一緒だったと言った後】
娘「じゃあ，そこでどろっどろの三角関係が？」
母「どろどろってほどでもなかったけどね。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 9 話

（191）【楓と晴は友達で，公康は晴の息子である。公康が家を出たことについて】
楓「公康君まだ帰ってこないの。」
晴「そうなんだよ。野球部には戻って来たっていうから，その勢いでこっちにも戻ってくると思ったんだけど。」
楓「まあ，そりゃ野球部は関係ないけど。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 2 話（再掲）

（190）で，話し手は母で，聞き手は娘である。聞き手の質問に対して，話し手の「けど」の発話に，「三角関係であった」という「A」に当たる部分があると想定できる。つまり，（190）の話し手の発話は「三角関係であった。でも，どろどろってほどでもなかったけどね」のように考えられる。それに対して，（191）で，話し手は楓で，聞き手は晴である。「A」に当たる部分は，聞き手の発話にある「公康が家に戻るかどうかは，野球部に戻るかどうかと関係する」という推意になる。（191）の話し手の発話はその推意と対比する。

以上より，付加による「けど」の言いさし文は，図 9 ように表示できる。

形式Ⅰ：「（A），B けど。」
意味機能Ⅰ：話し手自身の発話や考えに関する修正と補足を表す。
形式Ⅱ：「『（A）』『B けど』」
意味機能Ⅱ：聞き手の発話や考えの不備を指摘し，その不備を修正し補足する。

図 9　付加による「けど」の言いさし文

10.2.5　まとめ

10.2.1～10.2.4 では，文法形式に基づき，「けど」で終わる言いさし文の形成と特徴を考察した。「けど」の言いさし文に関する従来の研究は，発話機能を中心として議論されているが，本稿は様々な「けど」の言いさし文の文法形式の違いを明確した上で，それぞれの特徴を考察した。具体的には，まず，先行研究を検討した上で，「対比」によって，「けど」全体の意味用法を「文法的対比」「意味論的対比」「語用論的対比」の三種類に分けて連続的に捉えた。そして，語用論的な省略と付加に分けて，「けど」で終わる言いさし

文の形式と特徴を考察した。その結果，「けど」言いさし文は，語用論的な省略による場合は，「A けど，（B）。」という形式で，付加による場合は，「（A），B けど。」と「『（A）』『B けど』」という二つの形式として現れることがわかった。

10.3 「から」で終わる言いさし文

「から」で終わる言いさし文は，意味論的な省略によるもの，語用論的な省略によるもの，付加によるものの三種類がある。語用論的な省略と付加は緊密な関係にあり，具体的な文脈が強く関与しており，連続的に捉える必要がある。「から」言いさし文は，因果関係における理由としての性質が強くなればなるほど，語用論的な省略として捉えられやすくなる。逆に，そのような因果関係を想定しにくいなら，付加によるものになりやすい。

10.3.1 「から」の意味用法に関する先行研究

10.3.1.1 「から」の意味用法の種類

研究者によって，「から」の意味用法の分類がそれぞれ異なる。「から」の用法について，姫野（1995）[148]のように三種類に分ける研究もあれば，角田（2012）[149]のように五種類に分ける研究もある。

そして，代表的な研究として，前田（2009）は，先行研究を考察した上で，原因・理由文を次の表 19 のように 3 種類に分けた。そして，区別の基準について，「後節に現れる表現形式、即ち、モダリティのタイプによって、それぞれが現れる場合が異なる」が，「それだけでは区別することはできず、前件と後件の意味的な関係が重要になる」（前田 2009：125）と述べた。

	［前件］が表す内容
原因・理由	どうして［後件］を実行するのか
判断根拠	どうして［後件］だと判断するのか
可能条件提示	どうして［後件］が実行可能なのか・できるのか

表 19　前田（2009：124）の 57）による引用

[148] 姫野（1995）は演述型の場合に限定し，「から」の三つの用法を考察した。しかし，日本語には「から 3」の用法はないと述べた。

[149] 角田（2012）は節連接によって，副詞節を「レベルⅠ：主節：現象描写」「レベルⅡ：主節：判断」「レベルⅢ：主節：働きかけ」「レベルⅣ：副詞節：判断の根拠」「レベルⅤ：　副詞節：発話行為の前提」の五段階に分け，「から」に五段階の用法が全部あると述べた。

10.3.1.2　理由を表すか

「から」は，原因理由の典型的な接続助詞として，白川（1991）をはじめ，理由を表すかどうかについての議論が数多く見られる。

白川（1991）は主節の復元が可能な場合と倒置の場合を除外し，「から」で終わる発話を考察した。具体的には，排他的な関係ではない「意志を告知する」「新情報を告知する」「反応ををうながす」という三種類に分けて説明した。それぞれの機能について最終的な名前ではなく，もう少し検討する必要があるとも述べた。「から」のこの終助詞的な用法は，接続助詞の「から」の「背景の説明」という用法の変種であると考えている。ただし，「背景の説明」という用法を確定するには，従来の接続助詞の「から」の原因理由という用法を見直す必要があると指摘した。白川（1991）はまだ不完全なところがあるが，「から」に「理由を表さない」場合もあるということを指摘することには意味がある。

白川（1991）の考えを発展させ，永田（2000）は「理由を表す」カラと「理由を表さない」カラの 2 つの用法の関係を考察した。その結果，「両者は『条件文的知識の実現』という過程が含まれているという点では共通している」（永田 2000：42），「『理由を表す』カラとしての解釈の場合には『条件文的知識の実現』が直接，認知的効果と結びつくのに対して，『理由を表さない』カラの解釈の場合には，そのような『条件文的知識の実現』はその後の聞き手の行為に関わるような新たな認知的効果を生み出す働きをしているのである」（永田 2000：42）と述べた。

しかし，「から」を「理由を表す」ものと「理由を表さない」ものに分けるという立場に対して，鈴木（2000）は先行研究で議論された「理由を表さないカラ」を考察し，それらも「通常の原因，理由を表すカラと異なるものではない」（鈴木 2000：325）という異なる結論を述べた。具体的には，「理由を表さないカラ」を，「聞き手の行為実行の理由」を表すものと「行為成立の原因」を表すものの二用法に分けた。白川（1995）の「条件提示」「お膳立て」「段取り」に当てながら，「聞き手の行為実行の理由を表すカラ」は「『条件提示の用法』にほぼそのままあてはまるものであ」（鈴木 2000：314）り，「『お膳立て』『段取り』は，本節の『行為の原因を表すカラ』の用法の範囲の中に入るものである」（鈴木 2000：320）と述べた。

以上の考察からわかるように，理由を表さない「から」が存在するかどうかは，研究者によって主張が異なる。理由を表す「から」と理由を表さない「から」を，明確に区別できるような基準を立てにくいということと，同じく「から」という言語形式であることの二点を考慮した上で，本稿は理由を表さない「から」も存在するという立場を取らない。「から」で繋げられた前件と後件は，同じく因果関係にあると捉える。ただし，その因果関係は強弱を持つ連続的なもので，典型的な因果関係もあれば，典型から離れる因果関係もあると主張する。つまり，理由を表さない「から」は，前件と後件の因果関係が典型的ではないものに過ぎないと考える。

10.3.2　因果関係に基づく「から」の意味用法

10.3.2.1　「から」の使用範囲

「から」は，統語論と意味論の使用範囲から見れば，使用制限が少なく，ある程度自由であるが，語用論と会話管理[150]における制約がある。

（192）a　明日は氷点下までさがるから，水が必ず凍るわ。
a’氷点下まで下がったから，水が凍った。
a”氷点下まで下がりましたから，水が凍りました。
b　天気が暑いから，外出するときに熱中症に注意しなきゃ。
b’昨日天気が暑かったから，外出するときに熱中症になっちゃった。
b”天気が暑いですから,外出するときに熱中症に注意しなければならなりません。
c　あまりにもきれいだから，つい買いたくなる。
c’あまりにもきれいだったから，つい買っちゃった。
c”あまりにもきれいですから，つい買いたくなりますね。
d　今日は暇だから，庭の掃除をするわ。
d’今日は暇だったから，庭の掃除をした。
d”今日は暇ですから，庭の掃除をしたいと思います。

まず，統語論における「から」の使用範囲を考察する。「から」は接続助詞なので，終助詞などの要素に後接できないが[151]，（192）に示しているように，「から」は用言の基本形［（192）の a，b，c］に，名詞にコピュラ「ダ」の付く形式［（192）の d］に後接することができるのみならず，過去形［（192）の a’，b’，c’，d’］や丁寧形［（192）の a”，b”，c”，d”］にも接続することが可能である。以上より，接続助詞としての「から」は，後接できる言語形式において，比較的自由であると言える。

次に，「から」で繋ぐ前件と後件には意味論的な制約があるかどうかを考察する。

まず，本稿は，「事実」という概念の定義を試みる。事実というのは，現実世界に基づき，真であることを前提とするものである。非事実というのは，現実世界ではなく，人間の想定された世界にあるものであり,反事実的なものと不確定的なものの二種類からなる。反事実というのは，現実世界に基づき，偽であることを前提とするものであり，不確定というのは，現実世界に基づき，その真偽が不明なものである。

因果関係を定義することが難しいが，その元から考える。因果関係というのは，前件の発生によって，後件の発生が起こったという事実に基づくものである。そのため，典型的

---

150 ここでの会話管理とは，話し手の伝達しようとする意図に対して，聞き手が解釈できたかどうかを指す。

151 「?明日雨が降ると思うから，運動会は中止だと思う」は不自然と感じるように，「から」は，「思う」ような話者の主観的な考えを示す表現を前接できない。

な因果関係は，前件と後件が既に現実にある事実であり，しかも事態発生の時間軸において，前件が先に起こり，後件は後で起こるという前後関係がある。但し，同じような連鎖にある事態の繰り返しによって，前件と後件が実際に起こった事実でなくても，その連鎖の類似性と経験に基づき，人間は前件から，因果関係にある後件を自動的に予測することができる。

（193）a 熱があったから，昨日早めに寝た。
b 夕べ自転車が盗まれたから，昨日の朝にかぎをかけるのを絶対忘れた。
c 雨が降ってきたから，飲み会に行かない。
d 明日 6 時の JR に乗るから，今日の飲み会に行かなかった。
e 友達がプレゼントをくれるから，お返しに私もプレゼントを買いに行く。

よって，（193a）の「先に起こった事実＋後で起こった事実」であれ，（193b）の「後で起こった事実＋先に起こった事実」であれ，（193c）の「事実＋非事実」であれ，（193d）の「非事実＋事実」であれ，（193e）の「非事実＋非事実」であれ，「から」の使用は全部可能である。つまり，「から」は，意味論における使用もある程度自由であると言える。

以上から，「から」は，統語論と意味論における使用がある程度自由であることがわかる。次に，「から」の語用論と会話管理における制約を考察する。

まず，「から」の語用論における制約について述べる。

（194）a? 氷点下まで下がったから，水は凍らなかった。
a’氷点下までさがった，そして水は凍らなかった。
a”氷点下までさがった。水は凍らなかった。

（194a）の不成立は，「氷点下になると，水は凍る」という人間の世界知識に違反しているからである。（194）を（194a’）と（194a”）のように関連性の弱い二つの文にすると，成立になる。つまり，（194a）は語用論的に不成立であるが，統語論と意味論の観点から見れば，成立が可能である。言い換えれば，「から」の使用には，世界知識に違反してはいけないという語用論的な制約があると言える。

そして，「から」の会話管理における制約について述べる。

（195）【辰巳は時間を無視して過去と未来に自由に往来できる人間である。奈月は普通の人間である。奈月は，辰巳が 15 年前に同じ様子で自分の前に現れたことに気づき，なぜという疑問を聞いた】
辰巳「君は子供のころも聞いてた。どうしてって。」
奈月「知りたいんです。」
辰巳「ゼロから作り直すことができなかったからさ。」

奈月「どういう意味ですか。」

NHKBS『タイムスパイラル』第 3 話

（195）で，辰巳の「ゼロから作り直すことができなかったからさ」という発話に対する奈月の「どういう意味ですか」という応答からわかるように，聞き手が話し手の望んだ通りに会話を解釈するには，「から」の使用に制約があると予測できる。本稿は，それを会話管理における制約と呼ぶ。

会話の管理において，「から」の使用は話者間の共有知識に制限される。「から」で繋ぐ前件と後件は，ある種の因果関係を形成する。聞き手が話し手の望んだ通りに解釈するには，「から」で形成されたその因果関係を，会話参加者が同時に理解できる必要がある。つまり，「から」の使用される会話において，聞き手[152]が話し手と同じように，前件と後件の因果関係を読み取れるなら，「から」の意味伝達が成功になり，会話の流れもスムーズになる。逆に，共有知識の欠如で，聞き手が話し手と同じように読み取れない場合に，「から」の意味伝達が不成功になり，会話の流れも遮られる。よって，会話の流れを順調に進めるには，話者間の共通理解が必要である。その共有知識は，具体的な文脈に現れる形式文脈や状況文脈，聞き手の知識文脈に関与される。例えば，（196）の例である。

（196）【アとイは友達で，道端でたまたま出会った場面】

ア「どこへ行くの。」

イ「妹が来るから，パチンコへ行く。」

（196）で，話し手はイで，聞き手はアである。大多数の人間が持っている世界知識[153]によって，話し手の発話における「妹が来る」と「パチンコへ行く」の因果関係を読み取りにくい。しかし，「イはいつもパチンコでお金を稼いでいる」と「妹が来るたびに，イはパチンコでお金を稼ぐ必要がある」という知識文脈があれば，「妹が来る」と「パチンコへ行く」における因果関係が成立することになる。更に，話し手の発話を理解するには，聞き手のアも話し手と同じような知識文脈を持っている必要がある。つまり，（196）において，アとイが二人とも，「イはいつもパチンコでお金を稼いでいる」と「妹が来るたびに，イはパチンコでお金を稼ぐ必要がある」という共有知識を持っていれば，聞き手が話し手の伝達しようとする意味を解釈でき，会話の流れも順調になる。

以上より，「から」には，「世界知識に違反してはいけない」という語用論的な制約と「前後件の因果関係は会話参加者の共有知識に基づくものである」という会話管理の制約があるとわかる。

---

[152] 話し手は基本自分の理解できないような発話をしないので，ここでは主に聞き手のことを指すことになる。

[153] これは，10.3.2.2 で定義する無標の世界知識を指す。

10.3.2.2　因果関係の強弱

先行研究で理由を表さない「から」の存否についての議論もあるように，因果関係というのは，同性質的なものではなく，強弱における相違がある。

因果関係における強弱を考察するには，便宜上，世界知識を無標の世界知識と有標の世界知識に分けて考える[154]。無標の世界知識とは，大多数の人が共通的に持っている世界知識である。例えば，地球が丸いものであるような常識である。有標の世界知識とは，ある特定のグループや個人しか持っていないような世界知識である。例えば，毎日 11 時に太郎は薬を飲む習慣があることによって，形成された「11 時」と「薬を飲む」の関係である。

因果関係の強弱というのは，前後件が因果関係として理解するための容易度とも考えられる。因果関係の強弱を判断するには，処理コストの高低が基準になる。処理コストの高低に関与する要素は二つ考えられる。一つは，命題内容が事実であるかどうかである。前件と後件の命題内容はともに事実であれば，因果関係として捉えられやすくなり，処理コストも低くなり，因果関係が強くなる。もう一つは，前件と後件における関連性である。前件と後件の関連性が希薄になればなるほど，処理コストが高くなり，因果関係として理解しにくくなり，因果関係も弱くなる。以上の考えを図 10 のように示すことができる。



図 10　因果関係の強弱

次に，具体例を通して，因果関係の強弱を検討する。

まず，命題内容が事実であるかどうかと前後件の関連性という二つの要素に分けて処理コストの違いを考察する。

（197a）と（197b）は命題内容が事実であるかどうかという観点からの比較である。（197a）は前後件の命題内容がともに事実である例で，（197b）は前後件の命題内容がともに不明確な非事実の例である。

（197）a 大雨が降ったから，遅刻した。
　　b 大雨が降るから，遅刻する。

[154] 加藤（2009d：209）では，「世界知識とは（すべてが共有されているわけではないという意味で）個人的なものであ」り，連続性を持つと述べられているが，本研究はその連続性を認めた上で，その個人が持っている世界知識にばらつきがあるという点に注目し，無標の世界知識と有標の世界知識を区別して考える。ここでの無標の世界知識と有標の世界知識は，因果関係の強弱を説明する手段で，便宜上の区分にすぎなく，明確な境界線や判断基準を持っていない。正確に言うと，より無標の世界知識に近いものとより有標の世界知識に近いものである。

（197a）は，前件の「大雨が降った」という命題内容が事実であり，後件の「遅刻した」も事実である。「大雨が降った」と「遅刻した」を因果関係として捉えるには，無標の世界知識によって，「大雨が降った→交通止めになった→遅刻した」などの推論が必要であるが，因果関係として比較的容易に捉えられる。それに対して，（197b）の「大雨が降る」と「遅刻する」は両方もと不確定な非事実である。大雨が降ると必ずしも遅刻するとは限らないので，因果関係として捉えられにくい。だが，「大雨が降る日に，話題主が乗るバスはいつも遅れる」という過去の経験に基づくなら，「大雨の日に，バスはいつも遅れる→大雨が降る→バスが遅れる→話題主が遅刻する」という連鎖によって，（197b）も因果関係として捉えることが可能である。ただし，前件と後件を因果関係として捉えるには，（197a）は，社会人なら，誰でも持っている「大雨」と「交通」の関係という無標の世界知識のみによって簡単に推論できるのに対して，（197b）は，「大雨」と「交通」の関係という無標の世界知識のみならず，「大雨」と「特定のバス」における有標の世界知識の利用も必要である。以上より，（197a）の事実と比較すると，（197b）の非事実である命題内容における因果関係は，処理コストが高く，因果関係が弱いと言える。

（198a）と（198b）は，前件と後件の関連性という観点からの比較である。（198a）は，関連性が比較的強いもので，（198b）は，関連性が比較的弱いものである。

（198）【太郎は大学生である。】

a　太郎「明日授業がないから，私は学校へ行かない。」

b　太郎「明日授業がないから，私は朝ごはんを食べない。」

（198a）と（198b）は，前後件の命題内容がともに未確定な非事実である。（198a）は，話し手が学生であるので，「授業がない日に，学生は学校へ行かなくてもいい」という無標の世界知識によって，前件と後件を簡単に原因と結果として関連付けられる。それに対して，人間の無標の世界知識に，授業の有無と朝ごはんとは直接な関係を持っていないので，（198b）における前件と後件を直接に因果関係として関連付けにくい。だが，「太郎は授業のない日に，いつも朝ごはんを食べずにお昼まで寝る」という太郎に関わる有標の世界知識がわかれば，「太郎は授業のない日にお昼まで寝る→授業がない→朝ごはんの時間に起きない→朝ごはんを食べる必要はない」という推論によって，（198b）の前後件も因果関係として捉えられる。「授業の有無と登校の関係」という無標の世界知識と，「授業の有無と朝ごはんの欲求の関係」という有標の世界知識の違いによって，（198a）は前後件の因果関係を直接に捉えられるが，（198b）はより高い処理コストが必要である。言い換えれば，（198a）より，（198b）における因果関係が強い。

10.3.3　語用論的な省略による場合

語用論的な省略による「から」言いさし文は，主節の「B」を復元することにかかる処理コストが低く，「AX」と省略された「B」と比較的強い因果関係にあると考えられる。主節を復元する際の根拠によって，主に三種類に分けられる。一つ目は，主節が聞き手の形式文脈によって簡単に復元できる場合である。二つ目は，主節が状況文脈にある事実によって簡単に復元できる場合である。三つ目は，主節が聞き手の発話から想定された条件節によって復元できる場合である。

次に，この三つの場合に分けて語用論的な省略による「から」言いさし文を考察する。

10.3.3.1　形式文脈による場合

「から」で終わる発話は，聞き手の形式文脈によって主節を簡単に復元できるなら，前件と後件を因果関係として関連付けるための処理コストが低く，前後件が強い因果関係にあると捉えられるので，語用論的な省略による言いさし文であると考える。この場合には，情報の経済性によって主節が省略されており，倒置[155]と連続的に捉えることが可能である。例えば，（199）の例である。

（199）【夕飯のテーブルで，息子は帰り道にストーカーに追いかけられたと言った後】
母「あれ，自転車は？」
息子「いや。朝雨が降ってたから。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 2 話

（199）で，話し手は息子で，聞き手は母である。聞き手の発話は未完結であるが，「自転車はどうしたの／自転車は乗らなかったの／自転車はなんで乗らなかったの」のように補完できる。よって，その質問の応答である話し手の「から」で終わっている発話は，主節を「自転車は乗らなかった」のように復元できる。つまり，（199）の主節は，聞き手の言語形式によって簡単に復元できるので，省略されたと考えられる。以上より，（199）の「から」言いさし文は，聞き手の発話との因果関係を簡単に読み取ることができ，結果である主節が聞き手の形式文脈によって簡単に復元でき，語用論的な省略による言いさし文であると言える。

10.3.3.2　状況文脈に基づく場合

「から」で終わる発話は，主節を復元する際に，聞き手の形式文脈のみならず，発話時の状況文脈にある事実も大きく関与している場合がある。その場合に，状況文脈にある事

[155] ここでの倒置は，「B」の部分は，話し手の「A から」の前にある場合を指す。

実によって主節が比較的に簡単に復元できる。「A から。」と省略された主節の「B」は，因果関係として捉えるための処理コストが低く，両者が比較的強い因果関係にある。よって，「から」言いさし文は，語用論的な省略によると考えられる。

具体的に，二種類に分けて考察する。

第一に，省略された主節の「B」が状況文脈にある事実自体に復元できる場合である。

（200）【仁菜子は同級生の蓮と二人でおしゃべりをしている場面である。仁菜子は，元彼と昔甘いものを食べるときのラブラブな場面を思い出しながらしゃべっている途中に，蓮の変な顔に気づき，質問をした。麻由香は蓮の彼女である。】

仁菜子「ごめん，引いちゃった？」

蓮「いや，楽しそう。麻由香の前では甘いもの食べないようにしてるからさ。」

映画『ストロボ・エッジ』

例えば，（200）で，話し手は蓮で，聞き手は仁菜子である。（200）に，聞き手が質問する前に，話し手の変な顔を見ていたという状況文脈がある。その状況文脈から，聞き手の発話を「あなたが変な顔をしているのは，引いちゃったからなの？」のように補完できる。それに対して，話し手はまず「いや」を通して，否定の応答をした。その後に，「から」で終わる発話を通して，自分の変な顔をした理由を説明した。よって，理由の「から」言いさし文は，省略された結果の主節を「変な顔をしたんだ」という事実に簡単に復元できる。以上より，（200）の「から」言いさし文は，状況文脈にある「変な顔をした」という事実と強い因果関係を形成しており，主節をその事実に簡単に復元できると語用論的な省略によるものであると判断できる。

第二に，「から」言いさし文自体が事実であり，省略された主節の「B」が行為に復元できる場合である。（201）は，主節の「B」が話し手の行為である例で，（202）は聞き手の行為の場合の例である[156]。

（201）【はるは仕事中に，元旦那である早勢に外へ呼ばれた。早瀬の悩みを聞き終わった後，はるは自分の職場に戻ろうとしがら】

はる「じゃ，仕事あるから。」

読売テレビドラマ『恋愛時代』第 2 話

（201）で，話し手ははるで，聞き手は元旦那である。（201）には，聞き手に外へ呼ばれたことによって，話し手が仕事場から一旦離れたが，発話時点において，聞き手の会話の要件が済んだという状況文脈がある。その状況文脈を背景に，話し手は，「仕事がある」

156 主節が話し手の行為である場合は，語用論的な省略による言いさし文と考えるが，主節が聞き手の行為である場合は，語用論的な省略と付加の両方が可能であると考える。

という事実[157]である予定の提示を通して，会話の場所から離れようとしている。以上の状況文脈によって，「仕事がある」という理由の帰結として，（201）の主節を「これで失礼する／仕事に戻る」などの話し手の行為に簡単に復元できる。

（202）【息子の健太の退院祝いのパーティーで，テーブルにある食べ物を指しながら】
母「健太の好きなものばっかり作ったんだから。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話

（202）で，話し手は母で，聞き手は息子である。（202）には，会話参加者が食事のテーブルの前にいて，これから食事の時間であるという状況文脈がある。「好きなものがあるなら→食べたくなる」という世界知識によって，話し手は，聞き手の気付いていないかもしれないような事実を通して，聞き手に「食べる」という行為を勧誘しているとわかる。そのため，（202）の理由である言いさし文の帰結として，主節は，「たくさん食べてね」のように復元できる。（202）は，言いさし文と省略された主節が比較的強い因果関係にあり，語用論的な省略による言いさし文であると言える。

主節が聞き手の行為である場合は，文脈との関係が緊密で，聞き手にどこまで関与しているか，聞き手にどこまで要求しているかによって，語用論的な省略と付加に分けて連続的に捉えられる。結論から言うと，聞き手の「外部活動のカテゴリー」[158]に関与し，聞き手の行為を要求するような文脈であれば，語用論的な省略による言いさし文であるが，単に聞き手の考えという「内部活動のカテゴリー」[159]に関与するような文脈であれば，付加による言いさし文になる。以上の（202）は，聞き手の「外部活動のカテゴリー」に関与し，語用論的な省略によるものである。ただし，この場合における語用論的な省略と付加は，連続的な関係にあり，同じ言語形式ありながら，違う文脈では異なるタイプの言いさし文として現れる可能性もある。例えば，（203）の例である。

（203）【部長の部屋で，部長は詐欺事件について何名かの検事や事務官たちに内容を説明している】
部長「実はこの被疑者は関西でも同じことをやっていたんだ。」
宇野検事「健康器具詐欺ですね。」
部長「そっちの方は京都地検が捜査を進めている。今日来るから。」
フジテレビ系列『HERO 2』第 4 話

（203）は，共有の事務室で，話し手の部長が多人の検事や事務官を聞き手にする発話で

[157] （201）の発話時が話し手の勤務時間であるという点から，「仕事がある」という命題内容が事実であると判断できる。
[158] 第 3 章で「外部活動のカテゴリー」を「外側から観察可能な人間の状態の集合である」と定義した。
[159] 第 3 章で「内部活動のカテゴリー」を「外側から観察不可能な人間の心や脳の中の動きである」のように定義した。

ある。「今日来るから」という発話は，「京都地検の担当検事が今日来るから」のように補完できる。その担当検事の到来は，聞き手にどこまで関与しているかによって，言いさし文のタイプが異なる。自分と直接な関わりのない聞き手なら，「今日来るから」は，単に聞き手の「内部活動のカテゴリー」に関与している新情報であるので，付加による言いさし文である。それに対して，自分の個人用の事務室を一緒に使わせてあげたり同じ部屋で仕事をするという立場の聞き手なら，「今日来るから」は，聞き手の「外部活動のカテゴリー」に関与することになる。主節が「よろしく」や「対応してくれ」などのように復元できるが，それぞれの具体的な場面で，「一緒に事務室を使わせてあげてください」や「仕事を一緒にやりなさい」などのように復元でき，語用論的な省略による言いさし文になる。以上より，主節が聞き手の行為である場合に，同じ言語形式であっても，具体的な文脈によって言いさし文の種類が異なる可能性もあるとわかる。

10.3.3.3　想定された条件節による場合

「から」で終わる言いさし文は，因果関係に基づいて主節を復元する際に，「X なら，Y」という条件節の前提を設定する必要がある場合もある。具体的には，「X なら，Y」という前提である条件節は，聞き手の発話の形式文脈に現れる場合もあれば，形式文脈による推意として現れる場合もある。

「X なら，Y」という前提において，言いさし文は，「X から。」という形式で現れるなら，語用論的な省略によるものであるとするが，「Y から。」あるいは「X，Y から。」の形式で現れるなら，付加によるものであると考える[160]。「X なら，Y」という条件節に基づいて形成される言いさし文は，語用論的な省略であれ，付加であれ，聞き手の発言に対して反論するという機能が同じである。そのため，語用論的な省略による「X から。」という形式で現れる言いさし文は，反論の理由であり，結果である主節が「Y」の否定の形として復元できる。この節では，まず語用論的な省略による場合を考察する。

（204）【平日の昼食の時間に，うどん屋さんが込んでいるので，初対面の朝尾と青石が相席をしている場面。二人の会社は同じビルにある。青石の照れくさそうな顔を見ながら】

朝尾「あなたにそっくりな人知ってるんですよ。真面目を絵に描いたような経理担当だったんですけど。住宅ローンの返済に困って何百万って金横領してて，その人も眼鏡かけてマニキュアしてなかったんですよね。」

青石「私，実家暮らしですし，ローンの返済も終わってますから。」

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 1 話

（205）【健太郎と奈月は幼馴染である】

健太郎「この前は悪かったな。奈月のこと責めて。」

[160] 付加による場合は，10.3.4.2 で議論する。

奈月「ううん。私もちゃんと説明できなかったから。」

NHKBS『タイムスパイラル』第 3 話

例えば，（204）と（205）は両方とも「X から。」の形式で，語用論的な省略の場合である。ただし，前提にある条件節「X なら，Y」の現れ方が異なる。（204）は，聞き手の形式文脈にある場合で，（205）は聞き手の発話の推意にある場合である。

（204）では，話し手は青石で，聞き手は朝尾である。聞き手の発話によって，「真面目で眼鏡かけてマニキュアしてなくて，住宅のローンの返済に困っているなら，お金を横領するかもしれない」という論理関係を持つ条件節が想定できる。それに対して，話し手は「実家暮らしですし，ローンの返済も終わってます」を通して，条件節の前件にある「住宅のローンの返済に困っている」という理由や根拠の「X」を否定し，聞き手の発話に対して反論をしている。そのため，（204）の主節は，「私はお金を横領なんかしない」という結果の「Y」を否定する形式に復元できる。

（205）では，話し手は奈月で，聞き手は健太郎である。聞き手の発話から，推意として，「奈月には責任はないなら，奈月は悪くない，奈月を責める健太郎のほうは悪い」という条件節を想定できる。それに対して，話し手は「私もちゃんと説明できなかった」を通して，条件節の前件にある「奈月には責任はない」を否定し，聞き手の発話に対して反論を行っている。よって，（205）の主節は，「私も悪かった／私のほうが悪かった」という「Y」を否定する形式に復元できる。

（204）は，論理関係を持つ聞き手の発話に対して，話し手は聞き手の形式文脈を引用して，直接にその理由や根拠を否定している。そうすると，話し手にとっては，予測される主節を取り消しにくく，聞き手にとっては，省略された主節を復元するための処理コストが低い。そのため，「から」言いさし文と主節の因果関係が強く，語用論的な省略の性質も強いと言える。それと同時に，反論の明らかさによって，聞き手のポジティブフェイスに対する侵害が大きい。それに対して，（205）は，聞き手の発話にある推意を否定しているので，話し手にとっては，予測される主節を取り消しやすく，聞き手にとっては，省略された主節を復元するための処理コストが高い。処理コストが高いことによって，「から」節と主節の因果関係が弱くなり，「から」言いさし文は，語用論的な省略の性質が弱くなり，付加に近い性質が現れてくる。それと同時に，反論の明確さが弱くなるので，聞き手のポジティブフェイスへの侵害も小さくなる。

10.3.4　付加による場合

「から」で終わる発話を理由として捉える際に，その結果を想定しにくい場合，即ち因果関係が弱い場合なら，「から」言いさし文は，付加によるものである。10.3.3.2 と 10.3.3.3 でも指摘したように，具体的に二種類が考えられる。一つは，新たな情報の提供を通して，聞き手の考えを更新し，最終的に聞き手の行為まで働きかけようとする場合である。もう

一つは，聞き手の発話を反論する場合である。この二つの場合は，聞き手の「内部活動のカテゴリー」に関与するという共通点がある。

次に，二つの場合に分けて考察する。

10.3.4.1　聞き手の考えと行為へ働きかける場合

「から」言いさし文は，聞き手の「内部活動のカテゴリー」に関与し，最終的に聞き手の「外部活動のカテゴリー」まで関与しようとする場合に，10.3.3.2 で述べた，「主節が聞き手の行為に復元できる語用論的な省略による言いさし文」と連続的な関係にある。その相違点は，聞き手の「外部活動のカテゴリー」に関与する明確さである。語用論的な省略による場合なら，聞き手の「外部活動のカテゴリー」に直接に関与し，聞き手に具体的な行為を求め，主節を具体的な行為内容に復元できる。それに対して，付加による場合なら，「外部活動のカテゴリー」より，聞き手の「内部活動のカテゴリー」への関与が明確であり，主節を「そのように考えてください」のような意味希薄なものに復元できるが，主節が省略されたより，「から」が付加されたと考えたほうが適切である。

（206）【赤岩は家を出て，同級生の亀沢の家で泊まろうとする場面】

亀沢「泊めるのは今晩だけだからな。」

赤岩「わかったって，しつこいな。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話（再掲）

例えば，（206）で，話し手は亀沢で，聞き手は赤岩である。（206）の「から」言いさし文には，「明日からうちを出る」という行為を聞き手に要求しているという推意がある。そこから見れば，聞き手の「外部活動のカテゴリー」まで関与していると理解可能であるが，その行為の実施は会話時からある程度離れているという点を考慮すれば，（206）は，聞き手に行為の実施を要求しているより，聞き手の認識を更新する効果がより顕著的であると言える。そのため，（206）は，省略ではなく，「から」の付加によるものであると考えたほうが適切であろう。

（207）【瞳が朝尾に告白して，断られた後の発話】

瞳「でも，今彼女いないんですよね。」

朝尾「久しぶりに興味を持てる女性が現れてね。」

瞳「望むところです。その人に絶対勝って見せますから。」

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 2 話

更に，この場合における「から」言いさし文は，例（207）のように，前件の「A」が話し手自身の未来にある行動の宣言として現れる場合が多い。（207）で，話し手は瞳で，聞

き手は朝尾である。話し手の「その人に絶対勝って見せますから」という発話は，単に自分の未来にある行動を宣言しており，聞き手の考えを更新しようとしている。よって，(207)は付加によるタイプと言える。

10.3.4.2　聞き手への反論の場合

10.3.3.3 でも述べたように，聞き手の発話によって，「X なら，Y」という条件節が想定できる場合に，「から」言いさし文は，「Y から。」あるいは「X，Y から。」の形式で現れるなら，付加によるものであると位置づける。例えば，（208a）は「Y から。」の形式で，（208b）は「X，Y から。」の形式で現れる言いさし文である。

（208）a【健太郎は幼馴染である奈月に好意を持っている。二人には夜に食事するという約束がある】
奈月「どう。研究員生活。忙しい？」
健太郎「もう今朝 5 時まで。」
奈月「大変だね。」
健太郎「あっ，でも夜は大丈夫だから。」
NHKBS『タイムスパイラル』第 1 話（再掲）

b【退院して家に着いたばかりの兄のために，家族がサプライズパーティを用意していた】
妹「すごいでしょ。お母さんちゃんと秘密にできたんだよ。」
母「お母さんだってやるときはやるんだから。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話

（208a）では，話し手は健太郎で，聞き手は奈月である。（208a）には，話し手と聞き手が一緒に夕飯を食べるという知識文脈がある。聞き手の「大変だね」という発話から，「昨日睡眠ちゃんと取れず，研究員生活が大変であるなら，今夜早めに寝て，一緒に食事できないかもしれない」という「X なら，Y」の条件節を想定することが可能である。それに対して，話し手は「夜は大丈夫だ」を通して，後件の「Y」を直接に否定し，聞き手に存在するかもしれない考えを反論した。

（208b）では，話し手は母で，聞き手は娘である。聞き手の発話から，「お母さんなら，物事を秘密にすることができない」という「X なら，Y」の条件節が想定できる。それに対して，話し手の「お母さんだってやるときはやるんだから」という発話は，直接にその条件節を否定していないが，「お母さんでも秘密にしなければならないときに，ちゃんと秘密にすることができる」という推意がある。そのため，話し手の言いさし文は，間接的に「X なら，Y」という条件節全体を否定し，聞き手に反論をしていると言える。

さらに，「から」言いさし文は，聞き手の発話を反論する用法が拡大し，「X なら，Y」

という条件節はなくても，聞き手の言語形式をそのまま引用し，「から」を後接させて反論を行う場合もある。（209）は聞き手の言語形式を否定して反論する場合の例である。

（209）【斉藤と奈月は同僚である。二人は，一緒に歩きながら，奈月の幼馴染である健太郎について話題をしている。】
斉藤「幼馴染が初恋の人になって，そしてそのまま旦那さん？」
奈月「やめてよ。それに，健太郎は私の初恋じゃないから。」
NHKBS『タイムスパイラル』第 1 話（再掲）

（209）で，話し手は奈月で，聞き手は斉藤である。まず，会話の流れから，聞き手の発話にある「幼馴染」は健太郎を指すことがわかる。「健太郎が初恋の人である」という聞き手の発話に対して，話し手は「健太郎は私の初恋じゃない」を通して，聞き手の発話にある形式を直接引用して否定し，反論を行った。「から」のこの用法は，聞き手のフェイスをあからさまに侵害するとも考えられる。そのため，喧嘩や口論などのポライトネスへの配慮が弱まる場面で，数多く観察できる。例えば，（210）である。

（210）【二人は事務室から出て外出しようとするところに，検事が事務官が 10 年前にヤンキーだったのを知った直後に，そのことをからかっている場面】
検事「ほら。行くぞ，元ヤン。」
事務官「その呼び方はやめてください。携帯忘れた。」
検事「何やってんだよ。ほら，行くぞ。ヤンキー事務官，レッツゴー。」
事務官「だから，ヤンキーやってたのは 10 年前ですから。」
フジテレビ系列『HERO 2』第 4 話（再掲）

10.3.5　意味論な省略による場合

「（もう）いいから」という定型表現は，「から」の相手の発話の不適切を指摘し，相手の発話を反論する機能の延長線にあるものである。自分の発話に対する聞き手からの反論や，相手の発話を中止させようとする場面で，多用される。このような「いいから」は，「ので」に置き換えることができない。つまり，「いいから」は形式も機能も固定されており，意味論的な省略と考えたほうが適切である。

「いいから」は，因果関係を表す「から」があるが，形式のみから，理由と結果を想定しにくく，因果関係として捉えにくい。しかし，「あなたが問題にしようとすることは別に問題にする必要はない，そんなことはもう話さなくていい」のように補完すれば，省略の慣習化によるものであり，主節を「やめてください」や「私の言った通りにしなさい」などのように復元できると考えられる。

具体的には，「いいから」はメタレベルで，話題変換を促進する機能や相手に行動の実

施を促す機能が見られる。例えば，（211）は話題変換を促進する例であり，（212）は聞き手に動作の実施を促がす例である。

（211）【息子は，帰り道でストーカーに追いかけられたと言った後】
母「あれ，自転車は？」
息子「いや。朝雨が降ってたから。」
母「ああ，自転車だったらね。あれ電動だし。」
妹「電動とか乗ってるから足腰弱って足つるんだよ。」
父「いや。もういいから。で，どうなった。」
フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 2 話

（212）【早勢が彼女と家で食事しているところに，友達が訪ねてきて話が終わった後に，早勢は彼女から逃げようとして，友達を送る提案をする場面】
早勢「俺送るよ。下まで。」
友達「いいよ。いいよ。お前そんなことしたことないだろ。」
早勢「いいから。」
読売テレビドラマ『恋愛時代』第 6 話（再掲）

（211）の会話は，息子が帰り道で，ストーカーに追いかけられたという話題から始まったが，途中で母と娘の話によって，話題が自転車と身体の健康状況に変わった。それに気付いた話し手の父は，自転車と身体の健康状況という話題を中止させ，話題をストーカーに戻すために，「いいから」を使用した。そのため，この状況文脈から，（211）の主節を，「話題を変える」という意味の含まれる表現に復元できるとわかる。

それに対して，（212）で，話し手は早勢で，聞き手は友達である。話し手はまず「家から出て，階段を降りて，家の下まで友達を送る」という行為を提案した。その提案に対して，聞き手は拒否の意を示した。自分の提案に対する聞き手の反論に対して，話し手は「いいから」を使用した。以上の文脈から，（212）の主節は，「話し手の提案した行動を大人しく従う」ことが要求される表現に復元できるとわかる。

以上より，「（もう）いいから」は，「A」の形式が固定しており，しかも主節「B」の形式がまだ固定されていないにもかかわらず，意味機能がかなり固着していることがわかる。よって，「いいから」は意味論的な省略に近い性質を持っていると考えられる。

10.3.6 まとめ

本節は，「から」で終わる発話に限定し，言いさし文としての種類と特徴を考察した。具体的には，まず，先行研究を検討した上で，「から」の使用範囲を考察し，因果関係に関与する要素を考察しながら，因果関係の強弱によって，「から」言いさし文を捉える立場を確認した。そして，因果関係が強いものを語用論的な省略による言いさし文とし，因

果関係が弱いものを付加による言いさし文とし，二つのタイプにおける言いさし文の特徴を考察した。最後に，「いいから」という定型表現を意味論的な省略による言いさし文と位置づけ，その特徴を考察した。

10.4 「て」で終わる言いさし文

10.4.1 「て」に関する先行研究

10.4.1.1 接続助詞としての「て」

「『テ』形は、もともと完了の助動詞『つ』の連用形からきたとされている」と甲田（2000：108）は述べ，また，「て」は「情的な表現、幼児的な表現、話しことば的表現となりやすい。『て』によって示される展開は、論理性に乏し」いと森田（1989：752）は指摘した。以上の二つの特徴によって，「から」や「けど」などの接続助詞と異なり，「て」自体の意味的な特性は明確ではない。「て」の意味機能は，連結している前後件の時間や論理関係によって決められる。

「て」のそのような性質の元で，研究者によって，「て」の用法のまとめもばらばらである。森田（1989）は「並列」「対比」「同時進行」「順序」「原因・理由」「手段・方法」「逆接」「結果」の 8 種類に，仁田（2005）は＜様態＞＜手段・方法＞＜継起＞＜起因＞＜並列＞の 5 種類にまとめた。南（1974）の従属節の従属度に関する研究で，「テ」を「テ$_1$」「テ$_2$」「テ$_3$」「テ$_4$」に分けて以来，多少名称の違いはあるが，「て」を「付帯用法」「継起用法」「因果用法」「並列用法」の 4 種類に分けるのが典型的である（益岡 2014，内丸 2006，吉永 2012）[161]。ここでは，吉永（2012）の用法のまとめを引用する。

（213）太郎はカバンを抱えて走った。（付帯用法）
（214）次郎は書籍部に行って教科書を買った。（継起用法）
（215）花子は体調を崩して仕事を一カ月休んだ。（因果用法）
（216）雅子がピアノを弾いて明子が歌を歌った。（並列用法）

吉永（2012：113）の（1）～（4）の引用

そして，「て」の意味用法の違いによって，従属節の従属度が異なり，前後件の統語的な構造もそれぞれ違う。各用法における従属節の使用可能な要素について，様々な研究が見られるが，ここでは南（1974）と吉永（2012）を検討する。

南（1974）は従属句を A 類，B 類，C 類に分け，A 類→B 類→C 類の順序で従属度が低くなると述べたが，「て」は，A 類の「テ$_1$」，B 類の「テ$_2$」及び「テ$_3$」，C 類の「テ$_4$」という 3 種類の用法に渡っている。述語的部分の要素に限定してみると，「テ$_2$」・「テ$_3$」・

[161] 内丸（2006）は「て」の用法を「付帯状況」「継起用法」「原因・理由用法」「並列用法」のように，益岡（2004）は「並列・時間（継起）・論理（広義因果）・様態」のように分けている。

「テ 4」の使用範囲が同様で，「テ 1」のみが異なる。「テ 1」は，「丁寧の形」と「打ち消しの形」に付けないのに対して，「テ 2」・「テ 3」・「テ 4」は使用可能である。

吉永（2012）は「テ形節」の意味用法を「付帯用法」「継起用法」「因果用法」「並列用法」に分類し，従属節の述語に注目し，それぞれの用法に現れる「て」の述語の特徴をまとめた。それらの記述を整理してまとめると，次の表 20 のようになる。

用法	選択されやすい	選択されにくい	補足
付帯用法	結果持続か動作持続のどちらかの持続を表わす動詞[162]	状態的な無アスペクト動詞，客体変化動詞	前後節の主語や時間が一致，テ形節が削除可能である[163]。前後節の入れ替えは成立しない。
継起用法	動作的・意志的な動詞	無意志動詞，形容詞などの状態性述語、無アスペクト動詞，前後節ともに心理動詞や心理形容詞などの開始・終了がはっきりしない性質を持つ心理表現[164]	同一主語による連続動作が最も自然であるので異主語の場合は少ない[165]。前後節の入れ替えは成立しない。
因果用法	無意志動詞，心理・感覚的な事態[166]，前後節を問わず文中に心理・感覚動詞や心理・感覚形容詞などの心身の状態や変化に関する表現[167]		前後節の入れ替えは成立しない
並列用法			前後節を入れ替えても文の意味に変化が生じない。主従節の組み合わせが自由である。状態性述語や異主語の文も多く見られる。[168]

表 20　吉永（2012）における「テ形節」各用法の統語的特徴のまとめ

[162] 吉永（2012）では，「（6）太郎は歩いて学校に行く。」という例を示した。
[163] 吉永（2012）では，「太郎は座って本を読んだ」という例を示した。
[164] 吉永（2012）では，「（13）その俳優は映画の出演が決まって有名になった。」という例を示した。
[165] 吉永（2012）では，「（10）ジャガイモの皮を剥いて柔らかくなるまで茹でます。」の例を示した。
[166] 吉永（2012）では，「（18）子供たちは喜んで、走り回った。」という例を示した。
[167] 吉永（2012）では，「（22）この部屋は涼しくて気持がいい。」という例を示した。
[168] 吉永（2012）では，「（27）遠足で三年生は奈良に行って、五年生は京都に行った。」の例を示した。

また，用法間の関係について，吉永（2012）は「付帯」と「並列」を「並立タイプ」，「因果」と「継起」を「先後タイプ」にそれぞれ分類し，「継起用法」が最も典型的なものであるが，「因果用法と連続関係にあり両義的な文も多く、前後の文脈などによって解釈が揺れる事は確かに多」く，「テ形節や主節が無意志動詞や心理表現、状態性述語などの場合には、因果関係が強くなる」（吉永 2012：115）と述べた。

10.4.1.2　文末に現れる「て」に関する先行研究

白川（2009）でも指摘しているように，「から」や「けど」などの接続助詞と異なり，「て」節で終わる発話に関する先行研究は少ない。

三枝（2006：25）は，発話末に用いられるテ形は，「『とか言って』『ちゃって』など、モーダルな要素を持つ表現が多く、ぼやかしたあいまいな言い方、あるいは、具体的な感情を起因とする結果を表現せず、聞き手に推測させることで、表現効果を高めるのに利用されている」と述べた。

白川（2009）は，「て」で終わるものに「①事情の説明、②感嘆、③陳謝、④感謝、⑤非難」の五つの意味があると述べ，すべてを関係付けのタイプと位置づけた。

「て」のすべての用法が言いさし文として使用可能か，そうでなければ，具体的にどのような用法が使えるのか、あるいは使えないのかを検討する余地がある。そのため，本研究は，「て」の典型的な「付帯用法」「継起用法」「因果用法」「並列用法」の四つの意味用法と関連させながら，「て」で終わる言いさし文の構文特徴を考察する。

10.4.2　言いさし文の種類を判断する基準

10.4.2.1　各用法の確認

「て」の各意味用法と言いさし文の関係を考察する前に，まず二点を確認しておきたい。

第一に，「付帯用法」を対象外とすることである。南（1974）で述べた「付帯状況」として使用される「テ$_1$」は従属度が最も高く，「て」の部分が主節の述語を修飾する。また，吉永（2012）と同じく，内丸（2006：8）は，テ形節の意味・用法を「付帯状況」「継起用法」「原因・理由用法」「並列用法」に分類し，「しか―ない」テスト，「さえ」焦点化テストと擬似分裂文テストを通して，「付帯状況」のテ形節を付加構造と，「継起」，「原因・理由」，「並列」のテ形節を等位構造とした。以上より，「付帯状況」としての「て」は，ほかの 3 種類と違う位置にあるとわかる。「付帯用法」の「て」形は，自立性を持たないので，従属節ではなく，句として位置づける。つまり，「付帯用法」を本稿の言いさし文の考察から除外する。

第二に，「継起用法」を狭義の意味で使用することである。因果関係というのは，通常原因は前にあって，結果は後にあるので，広い意味で言うと，継起用法の一種類である。

ここでの「因果用法」と「継起用法」を区別するために，次のように定義する。「因果用法」というのは，前件と後件に因果関係を持っているような広い意味での継起用法である。「継起用法」というのは，前件と後件に因果関係を持たなく，単なる前後の時間関係しか持たないような継起用法である。

次に，残った「継起用法」「因果用法」「並列用法」は，言いさし文として利用可能かどうかを検討する。

10.4.2.2　言いさし文の二種類

言いさし文の形成要因は，第 8 章で，大きく省略と付加の二種類があると述べた。「て」言いさし文は，省略によるものか付加によるものかを区別するために，本稿は消去法で考える。つまり，省略によるものではなければ，付加によるものと考える。

それらを区別するために，まず省略によるものとはどのようなものであるかを考える。

「継起用法」「因果用法」「並列用法」の三用法を出発点として，「て」の言いさし文を考えるなら，形成要因が省略によるパターンに限定される考察になる。その理由は次のように考えられる。「継起用法」「因果用法」「並列用法」というのは，そもそも前後件の関係から定義されたものである。後件がなければ，「継起用法」「因果用法」「並列用法」の言い方も存在しない。よって，「継起用法」「因果用法」「並列用法」を出発点として考えるなら，付加は議論できる対象になれず，省略によるものしか対象にならない。また，「て」で終わる発話において，主節「B」が定型表現になるものが考えにくいので，「継起用法」「因果用法」「並列用法」を出発点としての「て」言いさし文の考察は，さらに語用論的な省略によるものであるかどうかに関する考察に限定されることになる。

以上より，「継起用法」「因果用法」「並列用法」に基づくことで，省略による言いさし文を判断でき，それ以外のものなら，付加による言いさし文と位置づけられるとわかる。

そのため，具体的な認定手順としては，まず「継起用法」「因果用法」「並列用法」の各用法において，省略による言いさし文の使用が可能かどうかを考察する。

10.4.2.3　各用法と省略による言いさし文

10.4.2.3.1　前後件における論理関係の緊密度

省略による言いさし文の形成は倒置文と緊密な関係にあり，倒置文に置き換えることができないような用法なら，言いさし文として使用されることからまず除外できる。そのため，「て」の各用法が言いさし文として使用可能かどうかを明確にするには，まず各用法が倒置として使用できるかどうかを検査する。（214）’～（216）’で示しているように，

「て」のこの 3 種類の用法は，すべて倒置文にすることが可能[169]で，言いさし文として使用される前提条件を持っていると言える。

（214）’次郎は教科書を買った，書籍部に行って。（継起用法）
（215）’花子は仕事を一カ月休んだ，体調を崩して。（因果用法）
（216）’明子が歌を歌った，雅子がピアノを弾いて。（並列用法）

次に，前後件の意味関係から，各用法の言いさし文として使用される可能性を考える。

10.4.2.2 では，「継起用法」「因果用法」「並列用法」を出発点として考えるなら，語用論的な省略によるものしか対象にならないと述べた。言い換えれば，「継起用法」「因果用法」「並列用法」の「て」は，後件「B」が省略できるなら，言いさし文として成立可能であるが，省略できないなら，言いさし文として使用不可能であると結論できる。その後件「B」が省略できるかどうかを判断するには，本稿は次のように考える。

「て」自体は明確な意味を持たないので，前件の「A」のみから後件の「B」を限定するには，「A」と「B」の間には緊密な論理関係が必要になると予想できる。つまり，前件「A」と後件「B」は前提・根拠と帰結の関係にあり，「B」は「A」からの論理的な帰結である。「A」と「B」のその論理関係が強ければ強いほど，「B」が省略されやすくなり，言いさし文が形成しやすくなる。「継起用法」「因果用法」「並列用法」における論理関係の緊密度を判断するには，写像性の有無と因果関係という二つの尺度を設ける必要がある。

写像性というのは，現実世界を言葉に写し取ることである。「因果用法」は，現実世界で因果関係と時間関係を持っているものを写し取るので，当然写像性と因果関係を両方持っている。「継起用法」は，因果関係を持っていないが，現実世界にある出来事の時間順序を写し取るので，写像性を持っている。「並列用法」は，自立する二つの事態を並べるのみなので，写像性もなく因果関係も持っていない。

因果関係が強ければ，論理関係も強めることが簡単に考えられる。写像性は，現実世界の関係性を写し取るところから見れば，論理要素の一つとして位置づけられる。その意味で言うと，写像性のない発話は，一つの論理要素を無視しているので，写像性ありの発話より論理関係が弱いと理解できる。

以上の分析を表 21 のように示すことができる。

用法別	因果関係の有無	写像性の有無	論理関係の緊密度
「因果用法」	＋	＋	↕ 強
「継起用法」	－	＋	
「並列用法」	－	－	↕ 弱

表 21　各意味用法における論理関係の緊密度

[169] 倒置文にした「て」の 3 種類の用法は，自然な発話にするには，終助詞の追加などが必要であるが，非文ではない。

表 21 からわかるように，「因果用法→継起用法→並列用法」の順序で論理関係が弱くなる。さらに，因果関係も広い意味での継起用法の一種類であるので，因果関係から捉えられた論理関係が連続性を持っている。言い換えれば，「因果用法→継起用法→並列用法」における論理関係の強さが連続的に変化している。

上で述べたように，論理関係が強ければ強いほど，主節が省略されやすくなり，言いさしの成立も容易になる。論理関係の強さを，「て」言いさし文の成立する尺度として設けるなら，次の図 11 のような関係性が推測できる。

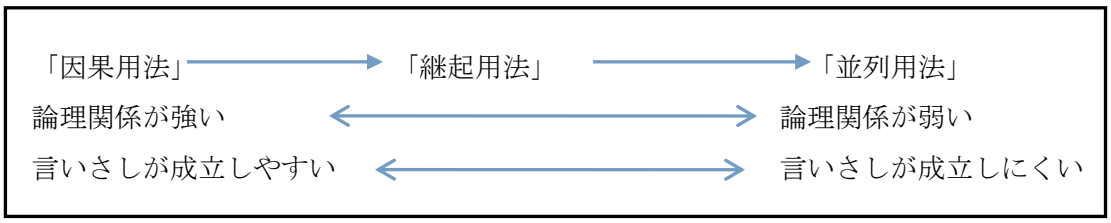


図 11　「て」の各用法における論理関係の緊密度と言いさし文の成立容易度

図 11 から，「因果用法」は，前後件における論理関係が最も強く，「て」で終わる発話が省略による言いさし文として最も成立しやすいことがわかる。

これまでの言いさし文に関する研究では，「から」や「けど」などの接続助詞で終わる発話が多く議論されている。「から」は因果関係の典型的な例で，「けど」は，対比関係の典型的な例である。「から」と「けど」は，両方とも表現自体にある種の論理関係を明確に持っている。言い換えれば，「から」と「けど」が言いさし文になりやすいのは，その明確な論理関係を持っているからである。それは，本稿で考えている図 11 の正しさを支持する間接的な証拠にもなる。

10.4.2.3.2　各用法の省略による言いさし文の成立容易度

では，実際の発話場面を設定し，（214）～（216）を言いさし文にした後の（214）”～（216）”の容認度を考察する。（214）”は，「継起用法」の例で，（215）”は「因果用法」の例で，（216）”は「並列用法」の例である。

（214）”【次郎の机にある教科書を指しながら】
太郎「あれ，この間俺の教科書借りたんだよね。次郎って教科書持ってたんだ。知らなかった。」
次郎「??書籍部に行ってね。（教科書を買った）」
（215）”【花子と靖子は一カ月ぶりに会社でたまたま会った場面】

靖子「お久しぶり。先月経済部に行ったけど，花子ちゃんいなかったね。会いたかったのに。」
花子「ごめんね。この前がんばりすぎて，体調を崩しちゃって。（仕事を一カ月休んだ）」
靖子「そうなんだ。」

（216）”【夕べの歓迎会で，同僚たちが様々な出し物をした。しかし，佐藤は残業で行けなかった。雅子と明子は佐藤の親友である。】
佐藤「昨日の歓迎会，すごい面白かったそうだね。私も行きたかったのに。雅子と明子も出し物したようだね。ああ，見たかったのに。すごい残念。」
山下「??雅子がピアノを弾いてね。（明子が歌を歌った）」

（214）”は，「教科書を買った」が省略されているという前提で作られたものである。話し手は次郎で，聞き手は太郎である。話し手の「書籍部に行ってね」という発話は，「話し手が一体自分の教科書を持っているかどうか」という聞き手の疑問に対する応答である。「書籍部」及び「行く」という形式文脈と（214）”の状況文脈によって，必ず「買った」という述語を復元できるとは断言できない。さらに，「書籍部に行ってね」の後に，何かが欠落していると思われるように，文が途中で切れている。よって，（214）”の「書籍部に行ってね」を意味の完結している言いさし文として捉えにくい。（215）”は，会社という状況文脈と，聞き手の靖子の発話にある「先月」及び「いなかった」という形式文脈によって，話し手の花子が先月会社にいなかったことを推論できる。そして，「体調を崩すと，仕事ができない」という世界知識によって，（215）”の「体調を崩しちゃって」の後に，「仕事を（一カ月）休んだ」と簡単に復元できる。よって，（215）”の「て」は言いさし文として捉えることが可能である。（216）”は，並列関係にある「明子が歌を歌った」が省略されたという前提であるが，「雅子がピアノを弾くこと」と「明子が歌を歌うこと」の間に修飾関係がない限り，（216）”の想定が成立しにくい。よって，（216）”における「て」で終わる発話を省略による言いさし文と考えにくい[170]。

以上より，「て」の「継起用法」「並列用法」は前件から後件を推論しにくいため，語用論的な省略による言いさし文として成立しにくい。「因果用法」は，前後件の強い論理関係によって，語用論的な省略による言いさし文として成立しやすいと判断できる。

10.4.2.4　言いさし文の種類と統語形式の関係

10.4.2.3 では，「て」と後件は因果関係にあるなら，「て」は，語用論的な省略による言いさし文になる可能性が最も高いと考察した。吉永（2012）は「因果用法」にある「て」の統語的な特徴を考察した。もし吉永（2012）の述べた統語的な特徴が，省略による「て」言いさし文の特徴と一致するなら，省略による「て」言いさし文は，完全に「て」の統語

[170] ここでは，省略による言いさし文に限定された考察であるが，並列用法における「て」は，従属節の独立性によって，付加による言いさし文として捉えられやすい。

特徴から判断できるということになる。では，「て」の「因果用法」における統語的な特徴が，省略による言いさし文を判断する基準になれるかどうかを検討する。

（217）【明日美は医師で，友達が少ない。看護師はそれを見て，明日美を日曜日のバーベキューパーティへ誘おうとしている場面】
看護師「だから，一緒に行かない？」
明日美「すみません，私ちょっとこの日予定があって。」
TBS 系列『アリスの棘』第 4 話

（218）【西門は記者である。西崎は 15 年前の手術について裏の情報を持っている。その手術について，西門は西崎を呼び出した後の場面】
西崎「何のご用でしょう。」
西門「お聞きしたいことがありまして。15 年前の腹腔鏡手術について。」
TBS 系列『アリスの棘』第 4 話

（217）と（218）は，両方とも「～がある」という文型である。「ある」は無意志動詞になるので，吉永（2012）の考えに従うと，「付帯状況」と「継起用法」として選択されず，「因果用法」と「並列用法」として選択されやい。（217）で，話し手は明日美で，聞き手は看護師である。（217）の「予定がある」は，聞き手の誘いに対する応答である。聞き手の「行くかどうか」に答えるには，その応答が不十分であると簡単に判断できる。そのため，（217）の言いさし文は，「行けない」などの主節が省略されていると考えられる。それに対して，聞き手の質問に対する応答として，（218）は「て」のみで，十分である。（218）で，話し手は西門で，聞き手は西崎である。まず，話し手の発話が倒置文になっているので，それを「15 年前の腹腔鏡手術についてお聞きしたいことがありまして」のように無標の語順に置き換えることができる。（218）の話し手の発話は，聞き手の質問に対する応答であり，しかも聞き手の疑問を解ける十分な情報が与えられている。そのため，（218）は主節が省略されていると考えるより，完結している発話に「て」の追加をして，未完結にした，即ち，付加による言いさし文と考えたほうが適切であろう。

以上の考察からわかるように，（217）と（218）の「て」は，同じような統語的な特徴を持っているが，両方とも同じく省略による言いさし文であると断言できない。そのため，省略による言いさし文と付加による言いさし文を見分けるには，統語的な特徴のみを基準にすることが妥当ではないとわかる。よって，別の判断基準を考える必要がある。

10.4.2.5 「て」言いさし文の種類を区別する基準

「て」が「なぜ～」という文の応答になれるかどうかは，「て」で終わる発話が語用論的な省略による言いさし文か付加による言いさし文かを区別する基準になる。つまり，「て」で終わる言いさし文において，文脈による「なぜ～」という前提が想定できるなら，語用

論的な省略による言いさし文となり，逆にそのような前提が想定できないなら，付加による言いさし文と判断できる。

10.4.2.3 では，「因果用法」の「て」が語用論的な省略になれることを，10.4.2.4 では，「て」の統語的な特徴が言いさし文の種類を判断する基準になれないことを述べた。「て」の統語特徴のみから，言いさし文の種類を判断できないにもかかわらず，「て」が主節と因果関係にある場合に，語用論的な省略による言いさし文になれると断言できる。

そのため，「て」で終わる発話は，それが理由となる結果を想定できれば，語用論的な省略による言いさし文であると判断できる。理由と結果という論理関係を判断する方法は，「なぜ～」というテストが考えられる。以上の判断基準をもって，10.4.2.4 にある（217）と（218）を再考察する。

（217）は，聞き手の看護師の誘いに対して，話し手の明日美は理由の提示を通して拒否する意を示した。話し手の発話にある「私ちょっとこの日予定があって」が理由であり，その主節を「行きません」などのような形式に復元できる。話し手は，自分が「行きません」と拒否するなら，聞き手が理由を尋ねるだろうと予測できたはずなので，「すみません」と謝った後で，行かない理由を提示した。つまり，（217）の「て」で終わる発話は，「なぜ行かないの」という質問に対する応答である。話し手の「私ちょっとこの日予定があって」という理由を前提に，「なので，行けない」という結果としての帰結が考えられる。そのため，因果関係が想定できる（217）の「て」言いさし文は，語用論的な省略によるものであると言える。それに対して，（218）は，聞き手の西崎の質問が「何のご用」という内容に対する尋問の文である。（218）にある話し手の西門の「お聞きしたいことがありまして」という発話は，「なぜ」という理由尋問に対する理由提示というより，「何」という内容尋問に対する内容提供である。つまり，（218）の「て」は，（218）の文脈において，因果関係という論理関係を想定しにくい。（218）は語用論的な省略ではなく，付加による言いさし文と判断できる。

以上の「なぜ～」という判断基準をもって，次は，「て」で終わる言いさしを省略と付加に分けて考察する。

10.4.3　語用論的な省略による場合

10.4.3.1　「なぜ～」に基づく二種類

「て」で終わる発話は，「なぜ～」という質問に対する応答として考えられる場合に，語用論的な省略による言いさし文であると述べた。その「なぜ～」という質問文の現れ方によって，具体的には 2 種類に分けて考えられる。一つは，「なぜ～」という質問が，発話時点における聞き手の発話に現れる場合である。具体的に，聞き手の発話の言語文脈にそのまま現れているか，聞き手の発話にある表意[171]として復元できるかの二つのパターン

[171] 本稿での表意は，Sperber & Wilson（1986）の関連性理論での定義に従う。つまり，「表意とは、言語

がある。この場合は，「て」は，聞き手の質問に対する応答として現れる場合がほとんどである。もう一つは，「なぜ～」という質問が，発話時点における聞き手の発話として現れているのではなく，話し手が聞き手に「なぜ～」を質問されるだろうと予測できた場合である。

まず，一つ目の発話時点における聞き手の発話に現れる場合を見る。(219) は，「なぜ～」という質問が聞き手の発話の形式文脈に現れている場合である。（220）は，「なぜ～」が聞き手の発話にある表意として現れている場合である。

（219）【深沢は公務員の仕事をやめて，小さいごろからの夢であるデザイナーの仕事をしようと思って，デザイン関係の会社へ面接を受けに来た。面接官は履歴書を見ながら】
面接官「区役所おやめになったのね。」
深沢「はい。」
面接官「何で，また。」
深沢「一度きりの人生なので，やりたいことをやってみようと思いまして。」
フジテレビ『ディア・シスター』第 8 話

（219）で，話し手は深沢で，聞き手は面接官である。状況文脈によって，聞き手の発話は「何で，またそんなことをしたの」のように補完できる。つまり，話し手の「て」で終わる発話は，発話時点における聞き手の発話に現れている「なぜ～」という質問に対する応答である。話し手の「て」という理由である前提によって，結果の帰結として「区役所をやめた」という主節を復元できる。

一方，「て」に対する「なぜ～」という質問は，命題内容より，「なぜそのようなことを聞いたのか」というメタレベルで聞き手の発話の妥当性を求める形として現れる場合もある。この場合は，「話し手が質問を出す→話し手の質問を受容できないために聞き手が質問で返す→話し手が説明する」という連鎖で発生することが多い。

（220）【香山の家族は，みんな仏画師関係の仕事をしている。香山は漫画家である。】
萌絵「やっぱり，漫画家になられたのはご実家の影響なんですか。」
香山「えっ？」
萌絵「おじい様の風菜さんもお父様も代々仏画師をやっているんですよね。それで同じ道を選ばれたのかなと思って。」
萌絵「むしろまったく正反対の道ですよ。」
フジテレビ系列『すべてが F になる』第 3 話

的にコード化される概念的特徴と文脈上推論される概念的特徴の結合体である」(内田など訳 1993 :221)。

例えば，（220）で，話し手は萌絵で，聞き手は香山である。話し手はまず「漫画家になられたのはご実家の影響なんですか」という発話を通して，聞き手の応答を求めている。しかし，聞き手は直接応答しているのではなく，「えっ」という反応を示している。その状況文脈から，聞き手が話し手の質問を受容できていないと判断できる。そのため，聞き手の「えっ」は，「なぜそのような質問をしたのか」というメタレベルで話し手の質問を受容できないという意図を伝達した。つまり，（220）の聞き手の発話は，「えっ？なぜそのような質問をしたのか」という表意に復元できる。そして，「えっ」を応答している話し手の「て」で終わる発話は，聞き手の「なぜそのような質問をしたのか」というメタレベルの質問に応答していると言える。以上より，（220）の「て」が理由であり，その帰結として，「なので，今の質問を聞いたのです」という主節を復元できるとわかる。（220）のような連鎖は，「て」で終わる発話には，数多く見られる。

そして，二つ目の「なぜ～」が予測として現れる場合を考察する。例えば，（221）は，聞き手からの発話はない状態で，状況文脈と世界知識による予測の場合である。

（221）【かすみと早勢は，知人の紹介で一回お見合いをしたことがある。二人の関係は，まだ知人の程度である。早勢は仕事の休みで，家でゆっくりしている。かすみが連絡もせず，早勢の家の前に来て，チャイムを押した後に，早勢はドアを開けてびっくりした顔をしている場面】

かすみ「こんにちは。今日お休みだっておっしゃってたから，いらっしゃるかなと思って。」

早勢「いましたけど。」

読売テレビドラマ『恋愛時代』第 2 話

（221）で，話し手はかすみで，聞き手は早勢である。（221）には，話し手と聞き手が約束せずに，聞き手が話し手の家を訪ねてきたという状況文脈がある。その状況文脈と，あまり知らない人の家を訪ねるには，理由が必要であるという世界知識によって，話し手は，「なぜうちに来たのですか」という質問を聞き手に聞かれるだろうと予測できた。話し手の「て」は，その質問に対する応答であり，自分が訪ねてきた理由を説明している。そのため，（221）の理由である「て」の帰結として，「なので，訪ねてきたのです」という主節を復元できる。

10.4.3.2　成立条件

10.3.2.1 で，「から」の使用に「前後件の因果関係は会話参加者の共有知識に基づくものである」という会話管理における制約があると述べた。「て」自体の意味が希薄であるので，「て」で終わる発話が，語用論的な省略による言いさし文として成立するには，「なぜ～」に対する話者間の共有知識がより重要である。発話時点で，聞き手にも話し手と同じく「なぜ～」という想定ができていないなら，「て」を理由である前提として扱うこと

ができないので，「て」における前提と帰結という因果関係も当然成立しない。もし話者間にそのような想定が共通しておらず，話し手の意味が聞き手に伝達できないなら，話し手は，自分の意図を伝えるために，表現を変えたり新たな情報を与えたりすることが必要とされる。

（222）【バーで，馬場検事は，同棲していた女性に DV をした容疑者の案件を説明しながら，久利生検事にその仕事を依頼しようとする場面】
馬場「うん，被害者は実家に逃げ帰っちゃったんで，在宅で取り調べてるんだけど，女性に暴力振るうなんて最低野郎だわ。私ちょっと時間かけたい案件があってさ。」
久利生「あああ，気持ちはわかります。」
馬場「それ…」
久利生「あ，いいっすよ。全然。OK っすよ。」

フジテレビ系列『HERO 2』第 7 話

例えば，（222）で，話し手は馬場で，聞き手は久利生である。まず，会話の全体から，（222）の「て」には，話し手が聞き手に仕事の受け取りを求めているという要求があることがわかる。つまり，話し手の「て」の基盤には，「なぜ仕事を久利生に頼むか」という質問が想定でき，「て」がその理由である。同じような質問が聞き手にも想定できれば，聞き手は，自動的に話し手の「て」の帰結として，「なので，その案件を受け取ってくれない？」という主節を復元でき，受け取るかどうかについての応答をするはずである。しかし，（222）の聞き手の「あああ，気持ちはわかります」という答えからわかるように，聞き手は同じような質問を想定しておらず[172]，話し手の発話にある「時間をかけたい案件があるので，DV の案件をお願いします」という因果関係を読み取れていない。そのため，話し手の望む答えを出していない。つまり，会話は，話し手が意図した通りに成功しなかった。自分の意図を明確に伝えるために，話し手は「それ」という指示詞を通して，もう一回聞き手が推論できるように有効な情報を提示した。その後，聞き手はようやく話し手の望んでいる返事をした。

10.4.3.3　発話内行為の明確性

因果関係を基盤にする語用論的な省略による「て」言いさし文は，その因果関係の慣習化によって，実際に使用される文脈との関係が希薄になり，言語形式のみによってその因果関係を想定できる場合も考えられる。この場合は，帰結となる省略の主節が習慣的に復元できる。この慣習化された因果関係は，感謝や謝罪の場合に多く見られる。

[172] 無論，聞き手は同じような質問を想定できたが，要求を受け取りたくないという気持によって，故意に想定できていないというふりをする可能性もある。しかし，最終的に，聞き手が要求を受け取ったという事実から考えれば，その可能性は低いと考えられる。

（223）いつも手伝ってくれて。

例えば,恩恵を表わす授受動詞などの形で現れる(223)ようなものが典型的である。(223)は，具体的な文脈がなくても，「ありがとうございます」や「すみません」などの感謝を表す主節を復元できる。

白川（2009）は，「て」で終わる発話の「②感嘆、③陳謝、④感謝、⑤非難」の用法が終助詞的な用法であるかどうかを検討した後，終助詞的な用法ではないと結論し，関係付けのタイプと位置づけた。つまり，「②感嘆、③陳謝、④感謝、⑤非難」として現れる「て」は，文脈によって主節が復元できると考えられ，本稿の定義に従うと，語用論的な省略による言いさし文である。

白川（2009）は，文法論の観点から言いさし文を捉えようとしているので，「感嘆」や「陳謝」，「感謝」，「非難」などの表現が命題レベルにおけるものであると推測できる。第 3 章でも述べたように，「感謝」や「非難」などの発話機能は，必ずしも命題と一致しないと多くの先行研究で指摘されてきた。単なる命題レベルではなく，「感謝」や「非難」を発話機能として捉えることによって，発話行為と言いさし文形成の関係性を明確にすることが可能である。よって，本研究は，語用論的な視点を入れて，白川（2009）で述べた「て」で終わる発話の「感謝」などの用法を再検討する。

語用論において，「感謝」などに関する代表的な研究は Searle（1969）がある。Searle（1969）は Austin（1962）の考えを継承して発展させたものである。Austin（1962）は，発話を「発話行為」，「発話内行為」，「発話媒介行為」の三つに分け[173]，そして「発話内行為」の具体的な種類を明確にするために，遂行動詞（performative verb）の種類に基づく分類を試みた。Searle（1969）はその考えを放棄し，発話の目的から発話内行為を五種類に分けた[174]。

特定のある種の発話内行為は，明確性における段階を設けることができる。それは，少なくとも次の二点からわかる。第一に，発話内行為の種類は，命題（＝形式文脈）のみから判断できる場合もあれば，命題のみから簡単に判断できない場合もある。命題は，人間の目や耳で見える形として現れるものである。その意味で言うと，命題のみから判断できないものより，命題のみから判断できるような発話内行為は明確的であると言える。第二に，具体的な表現とは直接な関係はないが，同じくある特定の一種類の行為と呼ぶ様々なものには，特定の共通点を持ってはいるが，個別的に見れば，その行為の典型的な形とし

173 「発話行為」や「発話内行為」，「発話媒介行為」の訳語については，「発語」を使用する研究も多いが，本研究は，Searle（1969）の「utterance act」の訳語と区別するために，加藤（2004）の訳語を使用する。「発話行為」とは，「ことばを発するという行為を行うことの形式的な面」のことであり，「発話内行為」とは，「発話が内在的に持つ実質的な機能の面」のことであり，「発話媒介行為」とは，「発話を行うことによって生じる効果」（加藤 2004：38）のことである。

174 この五種類について，3.2 の先行研究で紹介したように，「断定・断言型（assertives）」「行為拘束型（commissives）」「行為指示型（directives）」「感情表現・表明型（expressives）」「宣言型（declaratives）」を含む。

て現れるものもあれば，典型的な行為から離れるものもある。例えば，「感謝」という範囲について，「ありがとうございます」のように命題レベルの言葉で表すのが最も典型的であるが，それ以外に，恩返しのために取る様々な行動も考えられる。以上の二点から，発話内行為は，明確性における段階があるとわかる。

因果関係の慣習性は，発話内行為の明確性という観点からも捉えることが可能である。発話内行為が明確であればあるほど，聞き手が話し手の意図を解釈しやすくなり，主節も省略されやすくなり，語用論的な省略による「て」言いさし文の形成もより簡単になり，慣習化されやすい。

命題と必ずしも一致しないという理由を含め，発話内行為の具体的な種類をすべて網羅してまとめることは難しい。本研究は，依頼と謝罪を例として，発話内行為の明確性と「て」言いさし文の形成における関係を考察する。

まず，作例を通して，命題内容が，依頼という発話内行為の明確性への関与について述べる。

（224）【母は友達と旅行へ行こうとするが，お金はない。娘は母にお金がないことをよく知っており，過去に母に何度もお金を貸してあげたことがある。話し手である母が，聞き手である娘にお金を借りようとする場面】

a 母「友達から急に旅行に誘われちゃって。ちょっとお金貸してくんないかなと思って。」
b 母「友達から急に旅行に誘われちゃって。今手元にお金はなくて。」
c 母「友達から急に旅行に誘われちゃって。金額聞いたら，ちょっと高くて。」
d 母「友達から急に旅行に誘われちゃって。とっても行きたくて。」

フジテレビ『ディア・シスター』第 1 話（再掲）

（224）は依頼という発話内行為を元に作った例である。a→b→c→d の順序で，依頼の明確性が低くなり，語用論的な省略による言いさし文として捉えにくくなると考えられる。（224）は，話し手の母が，聞き手の娘にお金の貸出を依頼しようとする場面である。（224a）は，「お金を貸してくれる」という依頼内容が形式文脈として現れているので，命題レベルから依頼という発話内行為を簡単に判断できる。（224b）は，「貸してくれる」という具体的な行為を言及していないところが（224a）より明確性が弱いが，「お金はない」という形式文脈によって，「お金を貸してほしい」という依頼内容を比較的簡単に復元できる。（224c）は，話し手の財産状況を言及していないところから見れば，（224b）より明確性がさらに一段落下がっているが，形式文脈にある「（旅行代の）金額」が「お金」と関係するものである。聞き手は，それを「話し手にお金はないことや過去にお金を借りたことがある」という状況文脈と関連し，「お金の貸出」という依頼内容を復元するための処理コストがそれほど高くない。（224d）は，「とっても行きたくて」という命題は，お金と関係はない点から見れば，（224c）より明確性がさらに下がっている。「とっても行きたくて」という形式文脈に，依頼内容と直接に関連する有効な情報はないので，聞き

手は，依頼意図を解釈するための処理コストが高い。以上の分析から，（224）は，a→b→c→d に従って，依頼という発話内行為の明確性が低くなり，主節の復元するためのコストが高くなり，語用論的な省略による言いさし文としての性質も低くなる。

次に，実例を通して，命題内容と状況文脈が，謝罪という発話内行為への関与について述べる。

（225）a【宗一郎は前夜葉月の家に訪ねたときに，封筒を家に忘れた。それに気づき，そのことを伝えるために，次の朝に葉月が宗一郎に電話している場面】
葉月「あのう，実はですね，区役所の封筒をうちにお忘れになってて。」
宗一郎「ああ，申し訳ない。」
葉月「いいえ，あのう，すぐに連絡すればよかったんですけど，気づいたのがちょっと遅くて。」

フジテレビ系列『ディア・シスター』第 2 話

b【伊勢田がボールの落下地点にいながら，ボールを取らなかった後】
伊勢田「どうも，ボールが来ると焦ってしまって。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第 3 話

c【しばらく会っていない二人はたまたま店で会う場面】
悠斗「元気だった？」
ひろ乃「元気に決まってるじゃないですか。最近全然お店に来ないからどうしたのかなあと思って心配してたんですよ。」
悠斗「いろいろと忙しくてさ。」

日本テレビ系列『きょうは会社休みます』第 2 話

結論から言うと，謝罪という発話内行為の明確性は，命題内容における明確性によって，（225a）は（225b）と（225c）より明確的であり，さらに状況文脈における明確性によって，（225b）は（225c）より明確的である。つまり，（225）は，a→b→c の順序で，謝罪という発話内行為の明確性が低くなり，語用論的な省略による言いさし文としての性質が低くなる。

（225a）で，話し手は葉月で，聞き手は宗一郎である。「気づいたのが遅くて」という形式文脈を，「あなたの封筒がうちに忘れたことに気づいたのがちょっと遅くて」のように対象を補足すれば，話し手に責任があるという命題内容のみから謝罪の意を読み取ることが可能である。その意味で言うと，（225a）における謝罪の発話内行為が明確的である。それに対して，（225b）と（225c）は，命題内容のみから謝罪の意味を読み取りにくい。（225b）は，野球部の部員達や監督を聞き手として，話し手の伊勢田がボールを取れなかった理由を述べた。（225c）は，友達であるひろ乃を聞き手として，話し手の悠斗がお店に来なかった理由を述べた。（225b）と（225c）は，自分の行動の理由を通して，行動による相手への影響を謝罪するところが同じである。しかし，状況文脈における謝罪の必要

性という観点から見れば，（225b）における謝罪がより明確的である。なぜならば，（225b）は，野球という集団活動において，話し手個人のミスが，全チームへ顕著な影響を与える可能性が高いからである。それに対して，（225c）は，話し手の行動による聞き手への影響は目に見えない心理的な変化である。つまり，「集団である相手と個人である相手」及び「顕著な影響と不顕著な心理的な変化」の違いによって，（225b）は，（225c）より，謝罪の発話内行為が明確的であると言える。

以上，具体例を通して，発話内行為における明確性が「て」言いさし文の成立に関与することを考察した。その結果，「て」で終わる発話は，発話内行為の性質が明確であればあるほど，主節の復元コストが低くなるため，語用論的な省略による言いさし文として用いられやすくなり，前後件における因果関係が固定され，慣習化されやすいことがわかった。

10.4.4　付加による場合

10.4.4.1　二種類の発話効果

10.4.2.5 で議論したように，「て」で終わる発話は，発話時点の文脈によって「なぜ～」という質問の想定ができない場合に，付加による「て」言いさし文として扱う。付加による場合は，「て」が現れるところで発話を完結文にしてもよいが，話し手が「て」の便利性と「て」による効果によって完結文を「て」にしたと考えられる。

まず，自然な発話を終結すると同時に，時制や終助詞などのモーダルな要素が付随することが多い。「て」形は，時制や終助詞などのモダリティに後接できないので，時制とモダリティにおける言葉の選択を回避できる便利な終結方法であると言える。

また，話し手の具体的な動機は，第 6 章と第 7 章で「未完結文」全体の使用における動機として,情報の経済性と発話の終結や話者交替によるポライトネスの観点から考察した。「て」で終わる発話の多用には，未完結の形を通して，聞き手に反応する機会を与え，聞き手に発話に関与させようとする動機が強い。付加によって形成された「て」のみに注目すると，「て」を通して発話の終結を回避することによって，「て」には―①感情の曖昧化；②発話内容の背景化―の二種類の発話効果が生まれることがわかる。その発話効果を狙い，「て」が多用されているとも理解できる。そこで，次に，それぞれの発話効果に分けて付加による「て」言いさし文を考察する。

10.4.4.2　感情の曖昧化

白川（2009）は，「話者は、テ形節で描写されたコトの生起自体に、強く感ずるところがあって発話しているのだが、その感情を分析することはせずに、ただ感じ入っている状態にいることを表現している」（白川 2009：148）と説明し，そして「感情の表現が未分

化である」と述べた。「て」は，時制やモダリティを前接することができないので，時制とモダリティにおける言葉の選択を回避できる便利な終結方法である。

モダリティについて，益岡（2007）は「文の意味的構成構造に、事態を表す領域と話し手の態度を表す領域という 2 つの領域が見出される」（益岡 2007 : 16）と述べ，さらに前者を「命題」，後者を「モダリティ」と名づけた。モダリティについての研究は数多くあり，研究者によって定義と分類も異なるが，命題と対応して話し手の態度を表すという基本なところが一致する。モダリティは，形式による概念ではないので，さまざまな文法形式として現れることが可能であるが，日本語の構造上の特徴によって，助動詞や終助詞などの形式を通して文末に現れることが多い。話し手の態度を表示するのが基本的な機能なので，その意味で言うと，モダリティを使用すると，話し手の感情を明確に表示することになる。

「て」で終わる発話は，モダリティなどによって明確に感情を表出しない代わりに，感情が曖昧化されるのである。感情が曖昧化されるということは，感情の表現がもっと自由で豊富になることを意味する。具体的な文脈によって，必要とされないような感情露出を回避し，必要とされる感情を付加するように，自動的に人間は解釈できるのである。具体例で示すと，（226）のようなものである。

（226）【息子の健太が何者かに刺されて，病院に運ばれ，病院で同僚の明日香に状況を確認する場面】
健太の父「何があったんですか。」
明日香「私は差し入れを持ってお邪魔しようとしたんですけど，行ったときには健太さんが倒れていて。」

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 7 話

（226）で，話し手は健太の父で，聞き手は明日香である。まず，（226）の文脈において，話し手の「て」言いさし文は，「なぜ～」という質問に対する応答として考えにくい。それは，話し手の発話が，聞き手の「何があったんですか」という質問に対する応答であることからもわかる。そのため，（226）の「て」は，付加による言いさし文であると判断できる。話し手の「て」のみでも，聞き手の質問に答えるには十分である。「行ったときには健太さんが倒れていて」の時点で，「行ったときには健太さんが倒れていました」という完結文で発話することが十分可能である。それにもかかわらず，「て」が選択されたのは，「て」で終わることに，「倒れていたんです」などの終結による冷たさの回避と，未完結による感情の余剰という雰囲気の作り出しという二つの効果があるからである。

（226）の例からわかるように，人間の感情は未分化なもので，未完結で意味希薄の「て」がその感情の未分化を上手に伝える手段であると言える。

ただし，感情の曖昧化に基づく付加の「て」言いさし文は，因果関係という論理関係に基づく語用論的な省略によるものと連続的な関係にある。「前後節を問わず文中に心理・

感覚動詞や心理・感覚形容詞などの心身の状態や変化に関する表現があると、因果解釈に傾き易い」と吉永（2012：116）でも述べているように，「て」は，後件が感情を表わす表現であるなら，因果関係を形成しやすい。言い換えれば，欠如している主節が感情を表わす表現であるなら，「て」は語用論な省略によるものになる傾向が見られる。人間の感情は複雑なものなので，主節に現れる感情は，（223）の「ありがとう」や「すみません」などの言語形式に現れることが可能な場合もあれば，（226）のような未分化で言葉で表現しにくいものもある。それに従って，本稿は，（223）のようなものを語用論的な省略によるものと，（226）を付加によるものと位置づけたが，感情を明確に分類できないと同じように，それらは連続的に捉える必要がある。

10.4.4.3　内容の背景化

繰り返し述べてきたように，「て」自体は実質的な意味や機能を持たない。聞き手にとって理解不可能な発話をするのは，会話の協調原理に違反するので，因果関係を形成しない「て」は，完結的な意味機能を持っているはずであると理解できる。言い換えれば，「て」は，付加されたものであり，「て」で終わるところが完結文の終結点にもなれる場所である。それにもかかわらず，「て」が選択されたのは，「て」によって発話の内容を背景化する効果があるからである。

その背景化は具体的に二点からわかる。まず，統語的な観点から見れば，完結文で終わる内容を「て」で終わらせるのは，主節を従属節にする過程である。主節は主要部で，焦点が当てられる部分であるのに対して，従属節は焦点が当てられない非主要部である。その統語的構造における重要度の変化という角度から見れば，「て」の前接する内容が背景化されていると理解できる。そして，自然な発話を終了するには，発話末に時制や終助詞を含むモダリティなどの表明が必要であり，それに対して，「て」は，時制の選択や発話者の感情の表明を回避することができると述べた。それをメタレベルから考えれば，明確な感情を曖昧な感情にするというのは，発話内容に有標な特徴（ある文脈にしかないアドホックな特徴）を与えることを回避し，発話内容を均一化することである。有標性を回避して無標にすることは，大衆化とも理解できる。つまり，これを一種の背景化として理解できる。

次に，具体例を通して，内容の背景化という「て」言いさし文の効果を考察する。

（227）【田野倉は男で，青石は女である。田野倉は青石に好意を持っている。二人が食事の後に，お会計するところで，田野倉がお金を出そうとするが，財布が見つからない場面】
田野倉「あれ？」
青石「どうかした。」
田野倉「いや…財布がなくて。」

（227）で，話し手は田野倉で，聞き手は青石である。まず，話し手の「財布がなくて」という「て」は，「なぜ～」ではなく，聞き手の「どうかした」という質問文に対する応答なので，（227）の「て」は，付加による言いさし文であると判断できる。（227）には，聞き手の女に好感を持っている話し手の男が，食事後に積極的に会計をしようとする状況文脈がある。聞き手の「どうかした」という質問に答えるには，「財布がないんです」や「財布がないんですよ」のような完結文でも十分可能である。それにもかかわらず，「て」にしたのは，「のだ」や「よ」などのモダリティを回避することによって，まず「財布がない」という事態を背景化する効果があるからである。また，完結文の形を未完結の形にすることによって，自分の発話の断言を回避しながら，聞き手の反応を求め，聞き手に助けを求めようとする話し手の動機があることも考えられる。

10.4.5 「て」言いさし文の慣習化

10.4.5.1 慣習化された表現

本節では，「て」の慣習化された表現を考察する前に，まず慣習化とは何かについて考えてみる。

加藤（2015a）は，推意の特徴を説明した際に，「慣習」の意味について，「解釈が一義的に確定し，それによって得られた解釈が推意とは言えない固着的意味であることを指していると考えればよい」（加藤 2015a：266）と述べた。さらに，Grice（1975）の「慣習推意」と「会話推意」という区分について議論した際に，「慣習的か非慣習的かに明確に二値的に分けられるわけでなく，慣習性が強いか弱いかに段階性があると考えるのが妥当なのである。従って，取り消しやすいかどうかについても連続的に考えるべきで，《失効容易度》と構文推意の語用論的分析いう尺度で捉えるのが望ましい。慣用表現は，表現の慣用度が高いほど，推意の固着が進み，失効しにくくなる。加えて，文脈的情報を意味の計算に利用する必要性はなくなるので，解釈の計算はより自動化され，容易で負担の小さいものになる」（加藤 2015a：269－270）と指摘した。

加藤（2015a）の基本的な考えに基づき，言いさし文における慣習化とは何かを考える。言いさし文における慣習化は大きく二種類に分けて考えられる。一つは，言いさし文（＝従属節）と欠如された主節の文法化によるものである。すなわち，本研究で定義された意味論的な省略によって形成された場合である。主節の復元は，文脈に関与されず，言いさし文という言語コードのみに頼るところから言えば，表現が慣習化されていると言える。もう一つは，言いさし文の一部の形式（主に文末の述部）が文脈に関与されず，決まっている意味機能を持っている場合である。例えば，8.3 で指摘した「ばよかったのに」「いいから」「たりして」で終わる言いさし文の例である。「ばよかったのに」「いいから」「た

りして」は，意味機能が文脈によって変化せず，コードに固着されたところから見れば，慣習化されていると言える。以上より，本研究では，言いさし文における慣習化を「言いさし文は，文脈に関与されず，決まっている主節が復元できる場合，あるいは，従属節の形式が固着された意味を持っている場合に，慣習化されている」[175]と定義する。

そして，「て」における言いさし文の慣習化された表現は，主に従属節の形式が固着された意味を持つ場合である。

第 7 章では，ポライトネスという観点から，未完結文を反応機会場と位置づけ，話者交替における未完結文の柔軟性と予測性を述べた。「て」で終わる発話は，形式上未完結であるので，勿論反応機会場としての性質も持っている。

「て」言いさし文は，聞き手に反応機会を与えることを通して，聞き手に会話のやりとりに関与させる機能があると言える。さらに，話し手は，自分の発話を終結させない形で聞き手の反応を待って，聞き手の反応に応じて自分の発話を柔軟に終結できる。未完結文としてのこの基本的な性質によって，「て」言いさし文には，「感情の曖昧化」や「発話内容の背景化」の発話効果が現れたとも考えられる。この基本的な特徴と発話効果によって，「て」で終わる言いさし文の使用は日本語において選好されている。

一方，「て」言いさし文が選好されることによって，使用頻度が高くなる。そして，使用しているうちに，「て」の前接する表現との組み合わせが固着し，定型表現としてある種の特殊な発話効果が現れる。その特殊な発話効果によって，さらに発話者に好まれ，それに従って，使用頻度もさらに増加する。このような循環によって，「て」言いさし文に，決まった形式で現れ，固着した意味を持つ慣習化された定型表現が現れてきた。

具体的に，どのような定型表現があるかについては，三枝（2006）の調査が参考になる。

三枝（2006）は現代日本語研究会『女性のことば・職場編』（1997）と『男性のことば・職場編』（2002）をデータとして，発話中と発話末の「テ形」を対象として，「テ形」が付く動作性用言の種類と出現頻度を，表 22 のようにまとめた。

	発話中	発話末
動作性用言総数	999	388
やりもらい	51	22
ちゃって／てしまって	38	44
と思って類	36	30
とか言って類	18	33
と言って類	21	7
とか思って類	0	5
たりして	5	9

表 22　三枝（2006）の「表 4　高頻度の動作性用言」からの引用

[175] 加藤（2015a）に倣って，言いさし文における慣用化も段階性を持っていると考える。

表 22 にある「発話末」に注目すると，出現頻度が 1 位にあるのは，「ちゃって／てしまって」であり，2 位は「とか言って類」，3 位は「と思って類」であることがわかる。

この調査に加え，本研究で集めた例文による結果は次のようである。

ドラマの台詞を中心として，本研究で集めた 66 例の「て」で終わる発話の中で，最も多いのは，「～くて」[176]という形式で終わるもので，24 例がある。二番目に多いのは，「と思って」の形で終わるもので，15 例がある。三番目は「ちゃって／てしまって」で，6 例がある。

以上のデータの結果を参考にし，慣習化された「て」言いさし文の形成や特徴を明確にするために，出現頻度の高い「と思って」を具体的な例として分析する[177]。また，以上のデータで出現頻度がそれほど高くないが，慣習化された程度が比較的高い（言語形式が比較的固着度が高く，独自の発話効果を持つ）という特徴に注目し，「たりして」についても分析する。

よって以下では，「と思って」と「たりして」に分けて，「て」で終わる慣習化された言いさし文について考察する。

10.4.5.2 「と思って」

10.4.5.2.1 文末の「と思う」

「と思って」で終わる言いさし文の形成や特徴を明確にするために，まず文末の「と思う」の機能について確認する。

文末の「と思う」については，従来モダリティとして位置づけ，モダリティとの関係から議論する先行研究（仁田 2001，宮崎 1999）が多い。

また，文末の「と思う」の意味用法については，森山（1992）の分類が基本的である。森山（1992）は，文末の「と思う」の基本的意味は「個人情報の表示」であり，それは「不確実表示用法」と「主観明示用法」に分類できることを述べた。「不確実表示用法」は，（228）のような「『と思う』が聞き手にも共有させるべき情報に共起した場合」（森山 1992：113）のものであり，「主観明示用法」は（229）のような「情報内容が本来的に個人的な意見など主観的なものであり、情報として共有されていくことを目指さない場合」（森山 1992：113）のものである。さらに，「不確実表示用法」と「主観明示用法」は，それぞれ客観的な情報と主観的な意見などの情報との違いも関係することも指摘した。

（228）「あいつ、大学、来てるかな。」

---

[176] 具体的に，「なくて」や助動詞「らしい」の連用形，形容詞の連用形に付くものが大多数である。

[177] 一番多い「～くて」は音声によるまとめであり，本研究は表現の意味内容を考慮したうえで，二番目に多い「と思って」を具体的な分析対象とする。

「はあ、来てると思います。」

森山（1992）の（4）の引用

（229） 日本の今の医療制度は間違っていると思う。

森山（1992）の（23）の引用

そして,「と思う」の機能について, 文末の位置に注目し, 文法論の観点からの森山（1992）と語用論の観点からの小野（2001）の考察が見られる。

森山（1992：106）は，「一人称主体の『と思う』が文末におかれた場合、単に動作としての思考を表すというのではなく、話し手のとらえ方を表示するという特異な機能を有していると言う必要がある。いわば、助動詞的なものへと変質した使用のされ方をしている」と強調した。

小野（2001）は，聞き手への働きかけという観点から，発話における「ト思う」のコミュニケーション機能を考察し，「話し手の個人的思考内容を述べる場合に，たとえ主観的であっても，聞き手の知識に働きかけ，聞き手の判断を求める場合には，『ト思う』を用いて聞き手に配慮を示す必要がある。この原理が聞き手の領域に言及する場合にも働き，話し手以上に聞き手の方がより詳細な情報を所有していると考える話し手の判断表明で，聞き手への配慮となる。一方，話し手しかその情報内容を持っていない場合や，あるいは聞き手がその内容について判断できない場合には，『ト思う』を用いると聞き手に明確に伝えないために，聞き手に過度の負担をかけてしまい，不自然になるわけである」（小野2001：29）という結論付けた。

つまり，話し手の思考を表す「思う」は，本来実質的な意味を持っている動詞であるが，使用しているうちに，ほかの表現と複合表現を形成し，「思う」の意味が希薄なり，文法化する現象も見られる。「と思う」は，「助動詞的なものへと変質した」と森山（2006）が述べたように，文法化された複合表現の一つとして位置づけられる。

次に，この助動詞的な性質を持つ「と思う」が，「と思って」に変化する過程を考察する。

10.4.5.2.2 「と思って」言いさし文

まず，「と思う」と「と思って」の相違点を考える。

第一に，森山（1992）によれば，文末の「と思う」には「不確実表示用法」と「主観明示用法」の 2 種類の用法があるが，「と思って」で終わる言いさし文は，話し手の考えであることを明示的に表す「主観明示用法」しかない。そして，同じく「主観明示用法」でありながら，「と思う」は，終止形という完結の用法であるのに対して，「と思って」は未完結である。完結と未完結の違いから言うと，「と思って」は，「と思う」より，明示された話し手の考えをより容易に修正できるという特徴を持っていると言える。

第二に，10.4.5.2.1 で示したように，小野（2001）は，聞き手の判断が必要である場合に「と思う」が使用され，一方，聞き手の判断する余地のないような情報なら，「と思う」が使用されないことを指摘した。つまり，「と思う」には，話し手の考えであることを明示するとともに，聞き手の判断も伺うという基本的な特徴があるのである。「と思って」にもその基本的な特徴が継承されている。

そこで，「と思う」のみでも，話し手の考えを示しながら聞き手の判断を伺うことができるにもかかわらず，「と思って」はなぜ現れ，多用されているかを考える。結論から言えば，「と思って」は，未完結文の話者交替における性質によって，「と思う」より，聞き手の判断を伺うという特徴をより顕著に表現できる手段であると言える。未完結文は，話者交替において，聞き手に反応機会を与えるという反応機会場としての性質を持っている。よって，相手への配慮という観点から言えば，「と思う」は単に聞き手に判断する余地を与えるというレベルのものであるのに対して，「と思って」は，聞き手に判断する余地ではなく，判断する機会を積極的に提供していると言える。

以上の「と思う」との比較を通して，「と思って」は，あくまで自分の考えであることを明確した上で，聞き手の判断も伺いたいという含意があり，さらに，未完結の形を通して，自分では最終的な判断を行わず，聞き手に反応する機会を与え，最終的な判断を聞き手と同時に行うという機能があるとわかった。

次に，実例を通して，「と思って」のこの機能と発話効果を考察する。

「と思って」は様々な場面で使用されているが，典型的なケースとして，①単に話し手の考えの明示を弱める場合；②聞き手に【行為要求】を求める場合に分けて考察する。

まず，①の単に話し手の考えの明示を弱める場合について述べる。例えば，（230）の例である。

（230）【木下は同級生の蓮に好意を持っている。二人は，JR を待ちながら，一緒にベンチに座ってチョコレートを食べている。木下は蓮がチョコレートを食べているところを見てから発言する。】

蓮「なに？」

a　木下「なんか甘いもの食べてる男の人っていいなあって思って。」

a’　*木下「なんか甘いもの食べてる男の人っていいなあって思う。」*

a”　*木下「なんか甘いもの食べてる男の人っていいなあ。」*

映画『ストロボ・エッジ』

（230）で，話し手は木下で，聞き手は蓮である。まず，（230）では，聞き手の「なに」を発話する前に，話し手が聞き手の顔をじっと見ているという状況文脈がある。よって，聞き手の発話は，「なにを見ているの」という表意に復元できる。その質問に対して，話し手は「って思って」を通して「甘いもの食べてる男の人っていい」という考えを示した。話し手のその発話時点において，聞き手は男であり，しかも甘いものを食べている。その

ため，話し手の発話には，「蓮という人がいい」という推意があると推論できる。言い換えれば，話し手の発話は，聞き手を評価している。（230a’）と（230a”）も（230a）と同じように，話し手の考えを示すことができるが，（230a）はより好まれる形式である。

まず，「と思う」の追加は，あくまでもそれが自分の考えであることを明示的に表示し，聞き手にも判断する余地があるという含意を含むことができるので，「と思う」のない（230a”）より，「と思う」のある（230a’）はより好まれると言える。そして，（230a’）の「と思う」という形より，（230a）の「と思って」は，自分の考えの断言を回避しながら，聞き手の判断を待つというメリットがあると言える。特に，（230）で，話し手の考えは，聞き手に関する評価であるため，その内容を考えると，話し手の断言を回避し，聞き手に判断機会を与えることは，より重要であると考えられる。よって，（230a’）より，（230a）はさらに好まれる。以上の比較を通して，（230a’）及び（230a”）より，（230a）は選好されることがわかる。

次に，②聞き手に【行為要求】を求める場合について述べる。（231）は，聞き手の具体的な行為を求める例である。

（231）【男性は所長の部下である。二人は，喫茶店でおしゃべりをしている。男性は結婚すると発話した後】

所長「それはよかったじゃないの。おめでとう。」

a　男性「ありがとうございます。式には所長にも出席していただきたいと思ってまして。」

a’*男性「式には所長にも出席していただきたいと思ってます。」*

a”*男性「式には所長にも出席していただきたいです。」*

所長「もちろん，行きますよ。」

NHK ドラマ『聖女』第 1 話

（231）で，話し手は男性で，聞き手は所長である。（231）の形式文脈から，（231）に，話し手が聞き手に結婚式に出席することを求めようとする【行為要求】の性質を持っている。（231a’）と（231a”）もその【行為要求】を伝達することができる。しかし，（231a”）より聞き手に判断する余地を与えるメリットと，（231a’）より断言回避と聞き手に反応機会を与えるメリットによって，（231a）がより好まれると言える。つまり，（231a）の「と思って」言いさし文は，聞き手に結婚式に出席してほしいという話し手の希望を述べながら，同時に断言せず，聞き手の意見を伺うという発話機能がある。

以上，具体例を通して，「と思って」言いさし文の慣習化について考察した。

10.4.5.3　「たりして」

付加による言いさし文の「感情の曖昧化」と「内容の背景化」の二つの効果を狙い，使用頻度によって，「て」における形式がある程度定着化され，その形式特有の機能や効果

を持つようなものも見られる。さらに，その特有の機能や効果によって，同じ文脈において，「て」の代わりに完結文の使用ができなくなったという状況も観察できる。例えば，「たりして」がその典型的な例と考えられる。

「たりして」の基本形は「たりする」である。「たりする」は本来並列を表わすもので，「～たり～たりする」などのように二個以上を列挙するのが基本である。ただし，使用しているうちに，用法が拡大されて例示が一個でも許容されることになり，さらに断言回避などの非並列用法も現れてきた。そのため，「たりして」という言いさし文は，まず「たりする」が並列用法から非並列用法に変化し，そして言いさすことによって形成されたというプロセスがあると考えられる。

「たり」は，本来並列を表わす接続助詞として，同じような内容や状況の提示を通して，本来既に内容や事態を背景化する機能を持っていると考えられる。その上，完結の「する」を「て」形にすることによって，内容の背景化の効果が強化され，軽快な雰囲気作りや特殊の感情も添付される。例えば，（232）の例である。

（232）【七菜は娘である。明日香は七菜の兄の好きな人である。七菜の家で，母と明日香の三人でおしゃべりをしている場面で，七菜はアナウンサーの四次面接を通ったと話した後】

母「明日香ちゃんもジャーナリスト目指してるし。七菜と一緒に仕事することがあるかもしれない。」

明日香「そうですね。」

a　七菜「事件現場で会っちゃったりして。」

a’ *七菜「? 事件現場で会っちゃったりする。」*

フジテレビ系列『ようこそ、わが家へ』第 5 話

（232）で，話し手は七菜で，聞き手は母と明日香の二人である。（232）には，話し手の七菜は，アナウンサーを目指して多数のテレビ局で面接を受けており，聞き手の明日香は，ジャーナリストを目指して町内の雑誌作りの仕事をしているという知識文脈がある。さらに，母は明日香が息子の嫁になると望んでいるという知識文脈もある。話し手の七菜が四次面接を通ったという話を聞いた母は，自分の娘が未来の嫁と一緒に仕事ができるかもしれないと楽しく想像している。それに対して，聞き手の明日香は，まず「そうですね」を通して母の話に乗った。そして，話題の主人公である話し手の七菜も，母の作った想定の話に乗り，その想定世界にある具体的な場面として，「事件現場で自分と明日香が会う」を言い出した。まだ面接に合格できていないので，勝手に自分がアナウンサーになった想像の話をするのは，主人公の話し手にとって，照れる話である。その勝手な想像による恥ずかしさを表明しながら，聞き手の二人の話に乗り，軽快な会話場を作り出すために，「たりして」が選択されたと考えられる。同じ状況で，（232a’）の完結文の使用は不自然である。よって，「たりして」には，非現実の内容を表すという固有の効果があると考えら

れる。

以上，「たりして」を例として，「て」の効果による定型表現を考察した。

10.4.6　まとめ

本節では，「て」で終わる言いさし文に限定し，その特徴と発話効果を考察した。具体的には，まず先行研究を検討した上で，「て」を「継起用法」「因果用法」「並列用法」の三種類にまとめた。そして，各用法と言いさし文の関係を論じながら，「なぜ～」という質問の想定を基準に，「て」言いさし文を省略によるものと付加によるものに分けた。具体的に，省略によるものについては，二種類のタイプや「なぜ～」という質問が成立する条件，語用論的な省略と発話内行為の明確性との関係を検討し，付加によるものについては，「感情の曖昧化」と「内容の背景化」という二つの発話効果に分けて実例を考察した。最後に，「と思って」と「たりして」を通して，定型表現の「て」言いさし文の形成への関与について考察した。

本節の考察から，「て」言いさし文の形成には，少なくとも「論理関係の緊密度」，「発話内行為の明確性」，「定型表現」という三つの要素が関与していることがわかる。本節では，「論理関係の緊密度」を中心として考察を行ったが，「発話内行為の明確性」と「定型表現」については詳細な分析ができなかった。また，本節は，「て」言いさし文に限定して行われた考察であるが，「て」言いさし文のみならず，「論理関係の緊密度」，「発話内行為の明確性」，「定型表現」という三つの要素は，言いさし文全体の形成に関与しているとも考えられる。それについてのさらなる研究を今後の課題にする。

10.5　本章のまとめ

本章では，「のに」，「けど」，「から」，「て」で終わる発話を例として，語用論的な省略と付加に分けて，それぞれの言いさし文としての特徴を考察した。

10.1 では，反事実の典型である「のに」言いさし文を考察した。具体的には，「p なら q なのに，（～r）」という基本形に基づき，「のに」言いさし文を①「p のに。」；②「q のに。」；③「p，q のに。」という三種類に分けて分析した後に，「のに」言いさし文が付加によるものはなく，語用論的な省略によるものが大多数であるという結論をした。

10.2 では，逆接の典型ある「けど」言いさし文を考察した。「対比」によって，「けど」全体の意味用法を「文法的対比」「意味論的対比」「語用論的対比」の三種類に分けて分析した後に，「けど」言いさし文は，「A けど，（B）。」という形式で現れるなら，語用論的な省略によるもので，「（A），B けど。」と「『（A）』『B けど』」という二つの形式で現れるなら，付加によるものであると結論した。

10.3 では，因果関係の典型である「から」言いさし文を考察した。その結果，「から」言いさし文の種類は，因果関係の強弱と連動しており，因果関係が強くなればなるほど，

語用論的な省略による言いさし文としての性質が強くなり，逆に因果関係が弱ければ弱いほど付加による言いさし文としての性質が強くなることがわかった。

10.4 では，並列関係の典型である「て」言いさし文を考察した。具体的に，「て」を「継起用法」「因果用法」「並列用法」の三種類にまとめた後に，「なぜ～」という質問の想定を基準に，「て」言いさし文を省略によるものと付加によるものに分けた。その結果，語用論的な省略による「て」言いさし文は，前後件に因果関係の想定が必要であるとわかり，さらに，「て」言いさし文の形成には，少なくとも「論理関係の緊密度」，「発話内行為の明確性」，「定型表現」という三つの要素が関与していることがわかった。

10.1～10.4 の考察を通して，語用論的な省略によって形成された言いさし文は，従属節の「AX」と欠如された主節の「B」が強い論理関係にあることが，基盤となる。逆に，文脈によって，そのような論理関係を想定にしくいなら，言いさし文のマーカーが付加されている傾向があるとわかった。

第 11 章　言いさし文のマーカーから談話標識への変化

本章では，先行研究をまとめながら，談話標識に関する基本的な考え方を確認した上で，形式上は未完結でありながら，意味機能上は完結している言いさし文の成立と使用頻度の増加とともに，「言いさし文のマーカー」が自立性が強くなり，発話解釈における手続き的な意味を担う談話標識への変化過程を考察する。具体的には，連体修飾節と連用修飾節に分けて，「みたいな」を連体修飾節の例として，「というか」を連用修飾節の例として，考察を行う。

11.1　談話標識

談話標識は英語の discourse marker の訳語で，従来の研究は定義や分類より機能に重点があるという特徴が見られる。Schiffrin（1987）をはじめ，80 年代から盛んに研究されてきた。Schiffrin（1987）は接続詞や間投詞の oh，well，and，but，so，because，now，then，y’know，I mean を例として，談話標識の機能を分析した。それに倣って，日本語における談話標識の研究も「しかし」や「でも」などの接続詞を対象とする研究が多く見られる（谷崎 1994，西野 1993，加藤 2001，メイナード 2004，陳 2011）。それ以外に，加藤（2004）は談話標識を伝達上の目印とし，「たぶん」などの副詞や「でも」などの接続詞のみならず，「らしい」などのような助動詞や「あのう」などのフィラーも含め，幅広い範囲のものを捉えている。

11.1.1　談話標識の定義と種類

談話標識は研究者によって定義や範囲が異なるが，本稿は，発話上のマーカーであるという特質に基づき，談話標識を広義のものとして捉え，加藤（2004）の「<<メタ談話情報>>を提示する要素」（加藤 2004：223）という定義に従う。

言いさし文のマーカーは，前接する内容が未完結であるが，意味機能が完結しているという談話上の情報を提示する観点から言うと，談話標識の一種として位置づけられる。

以上の談話標識の定義を基準として，「自立性を持つかどうか」と品詞別によって，談話標識を表 23 のようにまとめられる[178]。

[178] 接続詞と接続助詞の整理は加藤（2006）を参照したものである。

自立性の有無	品詞	言語表現
自立的なもの	接続詞	「だから」「それで」「したがって」「ゆえに」「それなら」「さらば」「だとしたら」「しかし」「けれども」「だが」「ところが」「だとしても」「そこで」「すると」「だとすると」「したがって」「ゆえに」「ところが」「でも」「そのくせ」「にもかかわらず」「と」「で」「及び」「並びに」「また」「かつ」「そして」「次いで」「それから」「更に」「それとも」「あるいは」「もしくは」「または」「つまり」「すなわち」「例えば」「要するに」「なぜなら」「というのは」「但し」「尤も」「さて」「ところで」「では」
	副詞	「たしかに」「おそらく」「たしか」「やっぱり」「せっかく」「まあ」「まったく」「だいぶ」「ほとんど」「なんか」「けっこう」「おそらく」「たしか」「大体」「大抵」「だいぶ」「たぶん」「ちょっと」「一応」「とりあえず」「なんとなく」「なんか」
	形式名詞	「ほう」「あたり」「感じ」「風」「系」
	複合形式	「じゃないか」
非自立的なもの	接尾辞	「的」「ぽい」
	助詞	「とか」「から」「ほう」「かしら」「かな」「かね」「か」「など」「と」「なんて」「くらい」「ころ」「ほど」「よ」「ね」
	接続助詞	「ば」「と」「ものの」「ながら」「つつ」「なり」「たり」「ても」
	助動詞	「ようだ」「そうだ」
	複合形式	「思う」「気がする」「という」「せいで」
両方の性質をもつもの	接続助詞	「から」「ので」「けど」「が」「のに」「ところが」「て」「たら」「なら」
	助動詞	「みたい」「らしい」「かもしれない」「だろう」
	複合形式	「というか」「おかげで」
	助詞	「だって」「ね」

表 23　自立性と品詞による談話標識の分類

表 23 から，談話標識に次のような特徴があることがわかる。

まず，形式上の特徴について述べる。談話標識は，長音や促音，撥音の付いた違う形式を持っているフィラーと比べ，語彙性をある程度持っていると考えられる。

そして，自立性と品詞との関係について述べる。接続詞，副詞，形式名詞は本来自立的なもので，接尾辞と助詞[179]は非自立的なものなので，談話標識としてもそれぞれ自立と非自立のものである。それらに対して，本来非自立的である接続助詞と助動詞の一部は自立的に使用できるような場合も現れてきた。

表 23 の自立と非自立両方の性質を持つ言葉に注目すると，それらの言葉には自立と非自立的に現れるときに言語形式が同じであるようなケースもあれば，言語形式が異なるようなケースもある。「けど」「が」「ところが」「なら」「みたい」「らしい」「かもしれない」「だろう」「というか」「おかげで」「だって」[180]「ね」は自立と非自立の時に形式が同じであるが，「から」「ので」「のに」「て」「たら」はそれぞれ「だから」「なので」「なのに」「で」「だったら」のように異なる形式として現れる。例えば，（233）～（237）の例である。

（233）a　彼はがんばりすぎたから，病気になった。
　　a’彼はがんばりすぎた。だから，病気になった。
（234）a　あそこに嫌な人がいるので，行きたくない。
　　a’あそこに嫌な人がいる。なので，行きたくない。
（235）a　みんなは働いているのに，その人だけ遊んでいる。
　　a’みんなは働いている。なのに，その人だけ遊んでいる。
（236）a　今朝，ちゃんとかけた目覚ましが鳴らなくて，遅刻しちゃった。
　　a’今朝，ちゃんとかけた目覚ましが鳴らなかった。で，遅刻しちゃった。
（237）a　わからないことがあったら，いつでも聞いてください。
　　a’わからないことがある。だったら，いつでも聞いてください。

以上より，談話標識は接続詞や副詞のような自立的なものが多く，本来接続助詞や助動詞のような非自立的なものも自立的な性質を持つようになっているという傾向が見られるとわかる。よって，典型的な談話標識は自立性を持つようなものであるが，本来非自立性を持っているような表現でも使用頻度によって，自立性が高くなり，典型的な談話標識になるプロセスがあると言える。

11.1.2　談話標識の機能について

加藤（2004）では「談話標識は、発話のメタ情報を表わすタグの内容の一部を言語的に明示する機能を果たすのです」（加藤 2004：220）と述べ，さらに談話標識の機能を以下の八項目にまとめた。

---

[179] 副助詞「だって」は副詞として自立的に使われるような場合があり，終助詞はあいづちとして自立的に使われる場合がある。
[180] 「だって」は種類がやや違い，自立と非自立のときに意味が変わる。

①情報と情報のつなぎ方（論理的な関係）を示すもの
②提示する情報に関する話者の確信の度合いを示すもの
③情報の取得に関するメタ情報を示すもの
④判断のプロセスなど情報の管理状態に関するメタ情報を示すもの
⑤発話する情報についての話者自信の伝達上の態度を示すもの
⑥相手の発話の受容のあり方に関する情報を示すもの
⑦発話の事前状況についての話者の認識を示すもの
⑧会話を物理的に円滑に進める上で必要な機能を持つもの

加藤（2004：227-228）

以上の機能に従って考えると，言いさし文のマーカーの基本機能は①であるが，加藤（2014）でも述べたように，以上の列挙された機能は排他的な関係ではなく，同じ形式を持つ談話標識は，同じ会話において，同時に一種類以上の機能を持つ可能性もある。

言いさし文のマーカーから談話標識への変化を考察するために，本稿は「みたいな」と「というか」という二つの表現を具体例として分析する。典型的な談話標識は自立的な要素として，形式的に固定しており，発話の中で比較的自由に用いられる。「みたいな」は，特殊の談話機能を持っており，談話上の目印であるという観点から見れば，談話標識の一つとして考えられるが，まだ完全な自立性を持っていないところから見れば，典型的な談話標識にまだ変化しておらず，言いさし文のマーカーから談話標識への変化途中にあると言える。それに対して，近年若年層を中心として多用されている「というか」は，自立性を持っており，言いさし文のマーカーから談話標識に変化したと言える。

次に，11.2 と 11.3 に分けて「みたい」と「というか」の特徴を詳しく考察する。

11.2　言いさし文のマーカー「みたいな」

「みたいな」は助動詞「みたいだ」の連用形であり，「A みたいな B」のように「A みたいな」の部分は「B」という名詞を修飾する機能がある。80 年代の後半から日常会話で，「B」の部分が欠如し，「A みたいな」という言いさし文が多用されてきた。松本（2010）は「みたいな」の源が芸能界にあり，「みたいな」が軽快な会話を作る笑いの「起爆装置」であると述べている。そのため，「みたいな」は改まった場面での使用が少ない。本来若者言葉として使用される「みたいな」は，近年若者のみならず，上の世代まで使用が拡大している。さらに，その使用頻度によって，「みたいな」は談話上における特殊の発話効果が現れ，談話上の目印としての性質も強くなっている。以上の背景を以って，本節では，主節欠如の文末「みたいな」について，言いさし文のマーカーとしての性質を確認したのちに，文末の用法を整理し，その使用動機を解明し，談話標識としての機能を明確にする。

11.2.1　先行研究と問題点

「みたいな」の文末用法について最初に指摘したのは，管見の限りでは佐竹（1995，1997）である。その後，前田（2004），メイナード（2004），加藤（2005），星野（2009），大場（2009），福原（2013）の研究が見られる。

「みたいな」の若者言葉としての性質に注目した佐竹（1995，1997）と前田（2004）は、「みたいな」の機能に簡単に触れた。メイナード（2004）は，「みたいな」の引用表現としての機能に注目し，「みたいな」を類似引用のマーカーとして位置づけ，その表現技法を詳しく分析した。星野（2009）は引用部分の内容が話し手・聞き手･第三者の誰に属するかを指標にして「みたいな」のコミュニケーション機能を論じた。

以上は「みたいな」の一側面に注目した研究であるが，文末に現れる「みたいな」の全体像の解明を目指し，福原（2013）は発話内容における「話し手と聞き手との関係」と「聞き手にかける処理労力」に基づき，フェイス･ワークの観点から「みたいな」の機能を分析した。だが，聞き手にかける処理労力の判断には，科学的な基準の設置が困難なこともあるので，再検討する余地がある。加藤（2005）は「ミタイナ」を「X は Y みたいな感じだ」の中途終了の形式として捉え，「先行文脈上の概念の，状態・程度性の叙述」を基本機能とした。用例数が少ないという理由によって，「Y で言語表現化される X は，談話上に実質的に存在しないメタ的な概念である」（加藤 2005 : 48）ものを「Y ミタイナ」の「亜種」とみなした。だが，大場（2009）は「亜種」ではなく，独立の用法として考えたほうが妥当だと述べた。よって，加藤（2005）の分析も再考察する必要があると言える。

11.2.2　言いさし文としての位置づけ

11.2.2.1　「みたいな」の統語的特徴

「みたいな」は助動詞「みたいだ」の連体形なので，「みたいな」の基本形式は「A みたいな B」と判断できる。「A みたいな」は連体修飾節で，修飾される「B」は主節の構成部分である。メイナード（2004）をはじめ，様々な先行研究で「みたいな」の引用マーカーとしての性質が指摘された。9.3.2 で加藤（2012b）の「引用による名詞化」という考えを紹介した。よって，「A みたいなØ」という文末用法における「A」は，統語的制約はなく，引用内容全体が名詞の性質を持つと言える[181]。例えば，（238）の「こっちも忙しいんだよ」は全体として名詞の性質を持つ。

（238）こっちも忙しいんだよみたいな。

[181] 本研究では，「みたいな」の文末用法に限定するが，「妹みたいな」のような A の部分が名詞で終わるものを対象外とする。

そして，修飾される「B」が名詞であることは断言できるが，日本語では主名詞の主節における位置と機能が限定されていないので，「B」に後接する内容が自由である。例えば，（239a）のように「みたいな」の後に単文が，（239b）のように複文が，更に（239c）のように主名詞の後に様々な格助詞が後接することが可能である[182]。そこで，「A みたいな B」における主名詞 B も統語的制約はないと言える。

（239）a 花子は妹みたいな人だ。
b 妹みたいな人が来ると言いました。
c 花子は明日来ないみたいな発言をした。

11.2.2.2 引用に基づく言いさし文

従属節で終わり，主節が欠如している「みたいな」は一種の言いさし文であり，一般言語学的には非従属化にあたるものとして考えられる。しかし，典型的な言いさし文は「から」や「けど」などの接続助詞で終わる連用修飾節であり，連体修飾節である「A みたいなØ[183]」は典型的な言いさし文から逸脱しているため，言いさし文としての妥当性を考える必要がある。本稿は次の 2 点を根拠に「A みたいなØ」で現れる連体修飾節を引用に基づく言いさし文の一種と位置づけ，「引用に基づく言いさし文」とみなす。

（240）a「私も行きたいんだけど。」
b「私も行きたいんだみたいな。」

まず，「みたいな」は「けど」などの接続助詞と同じように言いさし文のマーカーとして考えられる。（240a）と（240b）に示しているように，「けど」で終わる連用修飾節は「みたいな」で終わる連体修飾節と文法構造上類似しており，文末に現れる「みたいな」は「けど」などの接続助詞と同じように言いさし文のマーカーとして考えられる。

（241）[184]a あれ，でも，昨日もうご褒美があったような。
b 作った事ない人は是非私のような失敗をしないでね的な。
c こっちが興味示してないですよ感。
d 今日はおもしろい事がつぎつぎと起こってます。腹かかえちゃったよ系 。
e どこまでしつこいんだ，風。

また，「みたいな」以外に，「～ような」や「～的な」にも同じような現象が見られる。

---

182 ここでは具体例を列挙していないが，「A みたいな B＋主名詞」の後はあらゆる格助詞が可能であると考えられる。
183 本研究では，∅は形式上現れないことを指す。
184 （241）は twitter からの引用である。

（241a）～（241e）はそれぞれ助動詞「ようだ」の連体形「ような」で，接尾辞「的だ」の連体形「的な」，接尾辞「感」・「系」・「風」で発話を終えている。文が完結しておらず，「ような」「的な」「感」「系」「風」が引用のマーカーとして考えられる点は「みたいな」と同じである。つまり，文末の「ような」「的な」「感」「系」「風」によって，前接の発話が引用の性質が付与され，名詞化されている。そこで，本稿は「みたいな」という連体修飾節で終わる現象を「引用に基づく言いさし文」とみなす。

（242）a* 何やってんだよけど。
　　a’何やってんだよみたいな。

引用に基づく言いさし文は，従来の連用修飾節で終わる典型的な言いさし文と次の二点で異なる。第一に，「引用に基づく言いさし文」は「みたいな」などの前に「よ」や「ね」などの伝達モダリティが使用可能であるが，典型的な言いさし文は不可能である。例えば（242）で，（242a）の「*何やってんだよけど」は使用できないが，（242a’）の「何やってんだよみたいな」は許容される。第二に，文を完結する方法について，典型的な場合は，主節の追加と言いさし文のマーカー（接続助詞）の削除があるが，「引用に基づく言いさし文」は主節の追加は可能であるものの，マーカーの削除は不可能である。例えば，（242a）を完結するには，「けど」を削除して「私も行きたいんだ」にすることもできれば，「一緒に行きましょう」などの主節を補足することもできる。それに対して，（242b）を完結するには，「私も行きたいんだみたいな感じだ」という主節を補足することが可能であるが，「みたいな」を削除したらもとの意味と違う可能性もあるので，簡単に削除すことはできない[185]。その代わりに，「みたいな」を「みたいだ」にするなど，連体形を終止形に変えても成立する。

引用によって形成された言いさし文は，「みたいな」などの言いさし文のマーカーの前接する内容が名詞化されるので，形式における制限はないと考えられる。また，言いさし文のマーカーの追加で，発話された内容は，その場の生々しい発言という性質から，違う場における客観的な引用内容という性質に変わる。そのため，場合によって，引用に基づく言いさし文は，相手のフェイスへの侵害やFTAを弱める機能を持つと考えられる。例えば，「ばかやろう」という発話は，嘲罵表現として，相手のポジティブフェイスへの侵害が大きい。その発話に対して，「ばかやろうみたいな／的な…」のように引用のマーカーを付けると，「ばかやろう」は単なる引用内容に変わり，嘲罵表現としての生々しさが減衰する。さらに，「みたいな」や「的な」などの類似性を表わすという性質によって，相手のポジティブフェイスへの侵害も弱くなる。

185 「みたいな」を簡単に削除できないという議論は，あくまで「みたいな」の基本用法に基づく話である。「みたいな」の使用頻度の増加とともに，「みたいな」が単に付加されている場合も現れてきた。その場合に，「みたいな」が削除されても元の発話と意味内容が同じである。例えば，（246）の例である。

11.2.2.3　言いさし文の二種類

第 8 章で述べたように, 言いさし文は省略によるものと付加によるものの二種類がある。「みたいな」で終わる言いさし文は，基本は省略によって形成されたものである。ただし，使用頻度の増加によって，「みたいな」の自立性が高くなり，付加の性質も現れてきた。

まず，省略による場合について述べる。省略によって形成された「みたいな」言いさし文は，主節が「感じだ」などの形式に復元できることが多いが，過去や非過去のみならず，疑問にも使用可能である。つまり，「みたいな」言いさし文には，テンスと文型における制限はないといえる。

（243）【四年生である二人が 1 年から 3 年までの春と夏の合宿の場所を思い出しながら言った後】

F02「で、4 春は、どこでしょう、みたいな。」

『BTSJ 親しい女性友人の雑談 1』

（244）【まだ 10 代である武井の 10 代らしいことは何かという相談に対して，松本と二宮は自分の経験を話している】

二宮「10 代のときに，トガれるだけトガっておいたほうがいいんです。」

松本「本当にガラスの 10 代，トガってましたね。」

武井「エー。」

二宮「トガってた。」

松本「バラエティとかも全然しゃべらんないみたいな。」

『ひみつの嵐ちゃん シェアハウス 武井咲×二宮×松本×武井咲 2012.11.29』

（245）【F12 はある先生が入院した話をした後】

F11「次、後期からは、復帰？」

F12「こ、じゃない、多分。」

F12「でもね、2 年はね、「人名 2」の授業ないんだ。」

F11「あ、そうなんだ。」

F12「他の先生やってるから。」

F11「じゃあ、一年やって、一年間空いて、」

F12「そう、うん。」

F11「で、ゼミで入るかもしれないみたいな。」

『BTSJ 親しい女性友人の雑談 5』

例えば，（243）は主節が非過去の文，（244）は主節が過去文，（245）は主節が疑問に復元できる例である。（243）で，4 春は未来にある大学四年生の春合宿のことであるので，F02 の発話を「4 春はどこでしょうみたいな感じだね」のように復元できる。それに対して，（244）の「バラエティとかも全然しゃべらんない」発話は過去にあるので，主節を「バ

ラエティとかも全然しゃべらんないみたいな感じでした」のように補完できる。（245）で，先生の入院した話を導入したのが F12 であることと，F11 の「後期からは、復帰？」及び「あ、そうなんだ」という二つの発話から，F11 より F12 はより多くの情報量を持っているとわかる。そこで，（245）の F11 の発話は「ゼミで入るかもしれないみたいな感じですかね」のように相手の確認を求める疑問文になる。

次に，付加による場合について述べる。

（246）【長谷川が不登校になったので，前の学校に追い出された責任感の足りない先生は長谷川の家を訪ねてきた。長谷川は部屋の中で，先生は同級生の馬場と一緒に部屋の外にいる場面】

先生「長谷川，いるんだろ？クラスのみんなも心配してるぞ。この輝かしい時はな，二度と戻って来ないんだ。青春をしっかり捕まえろ…みたいな。」

日本テレビ系列『35 歳の高校生』第 1 話

例えば，（246）で話し手は先生で，聞き手は長谷川である。「捕まえろ」という命令形からもわかるように，話し手が聞き手に行為を求めている。主節を「みたいな感じだ」のように復元すると，意味機能が違う。そこで，（246）は，主節の省略より，完結文に「みたいな」という未完結のマーカーが付加されたと考えたほうが適切であろう。

11.2.3　文末用法の分類

「A みたいな」言いさし文の実際の使用では，「A」が誰かのセリフとして考えられるかどうかによって，その用法が二分類できる。誰かのセリフとして考えられる場合は「引用」に，セリフとして考えられない場合は「先行発話の補足」にする[186]。

11.2.3.1　「引用」の用法

「引用」として発話の性質を考えるときに，「発話者」（発話者は誰か）と「発話対象」（誰に向かう発話であるか）という二つの指標が有効である。「みたいな」の引用用法において，引用内容の「A」は発話者も発話対象も問わずあらゆるタイプのセリフとして使用可能である。つまり，引用内容として，「発話者」と「発話対象」が話し手であれ，聞き手であれ，第三者であれ，すべて使用可能である。

砂川（1988）は引用文に「引用文そのものが発言される場と引用文によって再現されている発言の場」（砂川 1988：17）という「場の二重性」の特徴があると述べた。つまり，

[186] 「みたいな」の原形である「みたいだ」は比較されている二つのものの関係によって，「比況比喩」「例示」「推量」の用法があると指摘する研究が多く見られる（森山 1995）。しかし，「みたいな」で終わる発話には，比較する対象が現れていない以上，「比況」「類似」「推量」によって「みたいな」の用法を分類することが有効だとは考えがたい。

引用というのは，「発話時の場」と「引用の場」が異なり，引用内容が過去の時点において実際に存在した発話であるのが普通である。しかし，「みたいな」は，典型的な引用用法と違う性質が見られる。

まず，「みたいな」は（246）のように「引用の場」と「発話の場」が重なるときもある。（246）で，引用内容の「発話者」は話し手の先生で，「発話対象」は聞き手の長谷川である。引用内容自体は，過去にある発話ではなく，「発話時の場」にある発話である。つまり，「発話時の場」と「引用の場」が重なっている。

そして，典型的な引用用法における引用内容は，過去の現実のセリフであるのに対して，「みたいな」は実際のセリフのみならず，架空の（＝実在しない）セリフの場合もある。

（247）【武井は趣味などがないので，バラエティに出て質問されるのが怖いと言った後】
武井「こうはまっていることとか，あと趣味とか，特技とか特にないんですよね。」
二宮「だから，もうなんか 30 にはまってます。」
みんなのお笑い
二宮「最近じゃん，だって。はまっているのが最近。なんかあれっ？武井ちゃん変わったなんか…みたいな。」

『ひみつの嵐ちゃん 二宮×松本×武井咲 2012.11.29』

（248）【上戸が高校時代に松本に恋愛の相談をしたことについて，本人の上戸は記憶がなく，その詳しい状況を松本に確認している】
上戸「現状どうだったの？」
松本「私好きだけど」
上戸「うそでしょう。」
松本「彼は好きじゃないかもみたいな。」

『ひみつの嵐ちゃん　二宮×松本×上戸　2012.4.26』

（249）【F13 と F14 の同級生が使えない人だという評価があると語り合った後】
F14「オリエンの時にー、あんたしき、あなたが仕切ってるって聞いたからー、ちょっと連絡すんだけどー、締め切りはいつなのって言って、あ、もうかじ、各人でやってもらってますとかいきなり言ってんの。」
F13「え、何を。」
F14「オリエンの、その、申し込み、とか。」
F13「あ、ほんと。」
F14「うん。」
F14「だから僕は分かりませんみたいな。」

『BTSJ 親しい女性友人の雑談 6』

具体的には，「引用の場」が未来にあるなら，引用内容は必ず架空になる。例えば，（247）の例である。「引用の場」が過去にあるなら，実際のセリフの場合もあれば，架空の場合

もある。例えば，（248）の引用内容は過去にある実際の発言であるのに対して，（249）は話し手の想像に基づく架空の言葉である。

11.2.3.2 「先行発話の補足」の用法

「みたいな」の「先行発話の補足」の用法は，「A」が誰かのセリフではなく，先行する発話についての説明を行うものである。具体的には，説明対象となる内容は，先行発話の形式文脈にある場合もあれば，推意された内容の場合もある。

例えば（244）で，話し手は松本で，聞き手は二宮である。話し手の「みたいな」の前にある「バラエティとかも全然しゃべらんない」という部分は，話し手の先行発話にある「ガラスの 10 代トガってました」という形式文脈を説明するために提出された一つの例である。

（250）【F18 の過去にあった集まりについて，その中に初対面の人もいれば，知り合っている人もいる】

F18「そんなに、交えては盛り上がらんくてー。」

F17「いいじゃん、2 人ずつで盛り上がれば。」

F18「え、ていうか、うちらはもう完全にー、なんか、内輪で盛り上がりー、向こうはー、向こうで盛り上がりー、みたいな。」

F17「だめじゃーん。」

『BTSJ 親しい女性友人の雑談 8』

それに対して，（250）は，補足的に説明される対象が先行発話の形式文脈にない例である。（250）で，F18 は話し手で，F17 は聞き手である。（250）で，聞き手の「いいじゃん、2 人ずつで盛り上がれば」の発話には，「その集まりで 2 人ずつ盛り上がった」という推意がある。話し手の「ていうか」は聞き手の発話にある推意を否定する機能を持つので，話し手は「その集まりで 2 人ずつ盛り上がった」ことを否定している。つまり，「みたいな」の前にある「うちらはもう完全にー、なんか、内輪で盛り上がりー、向こうはー、向こうで盛り上がりー」という部分は，聞き手の発話にある推意を否定するための具体的な説明である。言い換えれば，「その集まりで 2 人ずつ盛り上がったのではない」ということに対する補足的な説明であると言える。

11.2.4 使用動機と談話機能

11.2.4.1 「みたいな」の使用における正の動機

「みたいな」には「表現を多様化する」という正の動機がある。「みたいな」によって，

前接の内容には引用の性質が付与され，種々の発話効果を持つ。

まず，引用内容の統語的制約がないので，使用者にかかる形式上の負担が小さい。それは次の三点からわかる。一つ目は，11.2.2.3 で考察したように，「A みたいなØ」はテンスと文型における制限がない点である。二つ目は，11.2.2.2 で述べたように，「みたいな」の前に伝達モダリティも許容される点である。「よ」や「ね」などの伝達モダリティは基本的に従属節に使用されにくい。しかし，「みたいな」によって，前接の内容に名詞の性質が付与されるので，「ね」や「よ」も許容される。日本人の日常会話で「よ」や「ね」は不可欠な存在である。「みたいな」の前に伝達モダリティが許容されることは言葉の使用者にとって好ましいことである。三つ目は，「みたいな」の前にあるセリフには制限がない点である。11.2.3.1 で議論したように，「みたいな」の引用用法は典型的な引用とは異なるところがあるので，セリフとして現れる A には発話者と発話対象における制限はない。

また，引用のメタ的性質によって，使用者は架空のセリフを含む「A みたいなØ」の一文で，二つの場及び二つのキャラクターを同時に表現できる。話し手は「A」の部分で違う人物像を演じてどれほど極端なセリフを言っても，「みたいな」の付加で無標の引用状態に戻れる。更に，セリフ「A」についての話し手と聞き手の共通認識を通じて会話者間の共感も同時に深められる。例えば，（251）の例である。

（251）【京女性は京都から北京に着たばかりの人で，熊本クンは北京へ転勤中の熊本県出身の男性である。北京生活の経験者としての熊本クンは，アパートの契約時に用意してほしい家具をきっちりと要求しておくべきだと京女性に教えた】
京女性「ヘルスメーターがないと困るんです，みたいな？」
熊本クン「そうそう。体脂肪率も計れるのでないと意味ないし，みないな。」
京女性「天蓋付きベッドでないと、あたし住めないんです，みたいな。」
熊本クン「ついでに車も一台付けてもらえませんか，みたいな。」
『「お笑い」日本語革命』p68

（251）の四つの「A みたいなØ」は全部「みたいな」の引用用法で，「A」の部分がセリフである。四つのセリフには次の共通点がある。一つは，「引用の場」における「発話対象」は第三者の大家さんで，「発話者」は京女性である。もう一つは，「引用の場」は京女性が大家さんと契約するという未来にある場面で，セリフが架空なものである。

一つ目の発話で，熊本クンの発話にある用意してほしい家具に注目し，ヘルスメーターが家具にはならないという常識を知りながら，京女性はあえてヘルスメーターという極端な例を出した。そこに京女性の二つの意図があると推測できる。一つは，極端なことを通して，熊本クンの発話から感じた不思議な印象を表現することである。もう一つは，会話を軽快にし，相手との親近感を求めることである。「ヘルスメーターが家具である」という馬鹿な考えを通して，京女性は自分のユーモアを示そうとすると同時に，相手に親近感を示し，お互いの距離を縮めようとしている。それに対して，熊本クンは，京女性の発話

にある推意を読み取り，相手に出された話に乗ることで，京女性が作り出した場面に入っている。その想像された場面で自分を相手と一体化し，相手の立場になって，「体脂肪率も計れるのでないと意味ないし」という更に極端な例で相手の共感に応じながら，新たな共感要求を出している。二つ目の発話の後に，京女性と熊本クンの会話の共通基盤が固定され，その作り出された基盤の上で、二人は更なる極端な例を通して，相手を笑わせ共感を深めている。（251）の常識で考えられないようなセリフが許可されるのは，「みたいな」によって無標な状態に戻れるからである。

11.2.4.2 「みたいな」の使用における負の動機

「みたいだ」が類似性の性質を持つので，「A みたいなØ」の使用には断言回避という負の動機が考えられる[187]。「みたいな」の断言回避は，聞き手や第三者に関する評価や，聞き手と異なる意見を提示する場合がよく使用される。

（252）【F17 から F18 へのメールにある「はいはい」について，二人が違う理解を示している場面】

F18「多分あたしはー、『はいはい』で、『はいはい』他人の話しを受け流すときの言葉を使うのがー、多いんやろうね、きっと。」

F17「うちはー、手を 1 回叩いて『あー、はいはい』強く共感するときの言葉みたいな。」

『BTSJ 親しい女性友人の雑談 8』

例えば，（252）で，話し手の F17 が発話する前，聞き手の F18 は「はいはい」について自分の考えを示している。話し手はそれと異なる意見を提示した。相手との考えの相違を示すというのは，相手が間違っているという前提がある。つまり，相手の間違いを指摘するのは聞き手のフェイスを侵害することになる。そこで，聞き手は「みたいな」を追加して自分の発言の断言を回避した。

言いさし文として，「A みたいなØ」の使用動機には，第 7 章で述べた話者交替の緊張感の回避という負の動機も顕著である。「みたいな」言いさし文は，未完結であるので，話者交替において，自由な TRP であり，反応機会場としての性質を持っている。つまり，明確な TRP としての完結文の文末に比べ，言いさし文は，話し手と聞き手が発話権を争うという緊張関係を回避することができる。特に，典型的な言いさし文と違い，「みたいな」で終わる言いさし文は，「な」を「だ」にすることで簡単に完結できる。それにも関わらず，使用者が「みたいな」を選択するのは，「みたいだ」には強い話者交替の要求があるのに対して，「みたいな」は発話権交替の自由度が高いからであると考えられる。

[187]「みたいな」の断言回避の機能は従来の研究でよく論じられている。

11.2.5　まとめ

本節は，まず典型的な言いさし文との比較を通して「みたいな」の引用による言いさし文の位置づけと特徴を確認した。そして，「A」の性質の違いによって，「A みたいなØ」を「引用」と「先行発話の補足」の二つの用法に分類した。最後に，「A みたいなØ」の使用には，「表現を多様化する」という正の動機と「断言回避」「話者交替の緊張感の回避」という負の動機があることを述べた。

11.3　談話標識としての「というか」

「というか」は，本来「と」「いう」「か」の三つの部分からなる複合要素であり，引用を表わす助詞「と」の特性によって，本来従属節の後に付く非自立的な表現である。しかし，近年「というか」は自立的に文頭に使われ，実質的な意味が希薄になり，談話標識としての語用論的特質が確立されている。本節では，本来言いさし文のマーカーである「というか」について，統語形式の特性を分析整理したのちに，語用論的な機能に関する分析を加え，談話標識としての語用論的特質がどのように確立されたかを明確にする。

11.3.1　先行研究と問題点

「というか」についてはこれまで多数の先行研究が見られる（梅澤 1999，沖 1999，寺井 2000，李 2001，若松 2003，メイナード 2004，加藤 2009a，趙 2007）。

「というか」の機能に注目して行われた研究は次のようである。梅澤（1999）は「て」の用法と「か」の用法を考察した上で，中学生の会話で多用される「というか」の使用には友人を傷つけまいという心理と一人になることを恐れる心理があると述べた。李（2001）は 10 代から 30 代までを対象とし，「というか」の各用法の年代差に注目してアンケート調査を行った。沖（1999）は相手への配慮と自分の気持ちの主張という観点から，「副詞化」した「というか」の経緯を考察した。加藤（2009）は「というか」の文頭に使われる断言回避の機能に，若松（2003）は「というか」の修復機能に注目して分析した。メイナード（2004）と趙（2007）は形式上の特徴を考慮せず「というか」の各機能を考察した[188]。以上の先行研究は基本的に「というか」の一部の特徴に注目して行われたもので，「というか」の形式との関係性や談話標識としての妥当性の議論が見られない。

そして，形式と関連させながら「というか」の機能を考察した研究は寺井（2000）がある。寺井（2000）は「というか」の「現れる形式と談話類型」を次のように分類している。

（1）’「P トイウカ Q」

（2）’「P トイウカ P'トイウカ Q」

188　メイナード（2004）では文頭，文中，文末のように分けているが，文頭で現れる例は話題転換と相手の発話を修正する例という異質のものが混ざっている。

（3）’［独話］「P。トイウカ Q」
（4）’［対話］A（聞き手）：「P」
　　B（話し手）：「トイウカ」

寺井（2000：176）

寺井（2000）の分類には二つの問題点がある。一つは，「P」と「Q」が形式上に現れない場合が含まれていないことである。もう一つは，分類の基準が不明確なことである。例えば，寺井（2000）の分析で，（253）は（1）’のタイプに，（254）は（4）’のタイプにそれぞれ入っているが，その違いは不明確である。

（253）A「最近の若い子は格好が大人っぽいよね」
　　B 「大人っぽいというか（*トイッタライイカ），老けているという感じかな」

寺井（2000）の（10）の引用

（254）草剪「～苦手だね，しゃべるのは。すごい苦手」
　　中居「苦手っていうかね，苦手と思い込んじゃったんじゃないかと思うんだよね」

寺井（2000）の（16）’の引用

以上の問題点を含め，本稿は「というか」の言いさし文のマーカーである接続形式から談話標識への確立を確認し，統語形式の特徴を整理した上で，語用論的な機能を考察する。

11.3.2　接続形式から談話標識への脱文法化

「というか」[189]は引用の助詞「と」・動詞の「いう」・疑問の終助詞「か」の三つの要素が複合して形成される接続形式である。接続形式としての「というか」は，引用格の「と」の非自立的であるという特徴を受け継ぎ，本来従属節に後続する非自立的な要素である。

まず，「というか」の接続制約を確認する。

「と」に後続される命題は引用化されるものになり，引用化されるものは全体で名詞としての性質が付与されるので，「というか」に接続されるものは形式上の制約がないと言える。しかし，「というか」は断言回避の表現として，機能上の制約がある。

（255） a*太郎は上司とけんかをして，もう会社を辞めた{らしい/そうだ/みたい}というか，首になったようだ。
　　b*もうやりたくないんだというか，ほかの事に挑戦してみたいなあ。

[189] 実際の使用では，「というか」の「という」の部分がに音韻的な変化が起こり，「ていうか」「っていうか」「てゆうか」「てか」「つうか」「つか」「ちゅうか」「ちゅか」などの異形態も見られるが，「というか」が原形なので，本研究は基本的に「というか」の形を使って分析する。

「というか」は，（255a）で「らしい」「そうだ」「みたい」の認識助動詞類に，（255b）で「のだ」という断定表現に後続しているが，両方とも非文である。「らしい/そうだ/みたい」は認識モダリティとして，命題内容の根拠性を示す話し手の判断を表し，「のだ」は命題に対する話し手の強い断定を表わす。つまり，（255a）と（255b）の従属節の節末に両方とも命題に対する話し手の断定が含まれていることになる。その後に断定できないことを表わす「というか」を同時に付けると，同じ命題に対して断定できると断定できないという矛盾が起こる。しかし，（255a）の「らしい/そうだ/みたい」と「というか」の間に，（255b）の「んだ」と「というか」の間に，それぞれポーズを入れ，「というか」を切り離させると，両方とも自然な発話になる。そこで，（255）の非文は「というか」の機能上の制約によるものであると言える。

次は，接続形式としての「というか」の基本用法を確認する。

「というか」は基本的に話し手が発話をするときに，表現の適切さに疑問を持ち，適切な表現に迷っているという列挙の用法を表わす。基本用法として使われる「というか」は，独話に近い性質を持ち，一回のみならず，表現を列挙しながら，重複して使用されることも可能である。

（256）【神木は自分の部屋にある絵のビデオを取りながら】
神木「これが，えいと，僕がいっつも絵を描く道具っていうか，グッズっていうか，まあ，そんな感じの道具です。」

『おしゃれイズム』2005/07/31

例えば，（256）は，話し手の神木が一人でビデオを撮る場面であり，独話に近い性質を持つと言える。（256）で，話し手は撮られている対象の名前を明確に言えないので，迷いながら「というか」でその適切な表現を探している。

（257）ア「明日の飲み会に山本君も誘おうか。」
イ「誘ってもいいけど，あいつ行くなら，おれ行かないから。」
ア「山本君嫌いなの？」
イ「嫌いじゃないけど，物事にいちいちうるさいというか。」
（258）ていうか，佐藤君，遅刻なんじゃないの？[190]

しかし，実際の使用で，「というか」は，（256）のような話し手の迷いを表わすような接続形式としての列挙用法のみならず，（257）のような言いさし文のマーカーとしてや，（258）のように接続詞や副詞として自立的に使用される談話標識としての用法も見られる。では，接続形式の「というか」はどのように言いさしのマーカーを経由し，談話標識にな

[190] （258）は加藤（2009a）の（97）からの引用である。

ったかを考える。

Norde（2009）は脱文法化に degrammation（文法性喪失）[191]，deinflectionalization（非屈折化），debonding（脱結合）の三つのタイプがあると述べ，debonding の例として，日本語の「だから」と「が」を利用しながら説明した。また，加藤（2013）は日本語には「すべての接続詞が何らかの語彙化や脱文法化によって生じたものである」（加藤 2013：7）と述べている。本稿では，次の二つの根拠を持って，「というか」の非自立的な接続形式から自立的な談話標識への確立過程を脱結合による脱文法化として捉える。

一つは，「という」が全体的に文法的な要素として捉えられることである。脱文法化は非語彙的な要素から語彙的な要素になるのが典型であり，複合形式の「というか」は「言う」という語彙的な要素が含まれるので，典型的な脱文法化と断言できないという疑問がある。しかし，「言う」は実質的な意味を持つ語彙的な要素であるにもかかわらず，「言う」の実質的な意味が失われ，「と」と結びつける機能語へと変化していると砂川（2006）で述べた。そこで，「というか」は接続形式から談話標識へ脱文法化する前に，「という」が文法化していることを考える必要がある。つまり，まず「と」と「いう」が複合し文法化され，次に非語彙的な要素の「という」と「か」が複合し，全体的に脱文法化し，語彙的な要素になっている。

（259）a ていうか，授業へ行きます？
　　b ていうか，授業へ行く？

もう一つは，「というか」は文体の対立がなく，中和されていることである。（259）に示すように，「いう」の文体差がなくなり，「というか」は敬体でも常体でも使用されるようになっている。つまり，「というか」は固定されていると言える。

以上の二点を以って，接続形式から談話標識への変化は脱文法化であると言える。

（260）[192]a 絵に描いたようなといいますか映画にでてくるようなといいますか。うまーくサッカーボウルと青年が飛び出してきた。
　　b 今週の出演者は皆強者と申しますか，必ず道後温泉の旅を盛り上げ楽しませてくれる出演者たちですので皆さんご遠慮なしにどうぞご来場くださいませ。

ただし，（260）に示すように，「というか」は「といいますか」「と申しますか」の形式も見られ，形式が完全に固定されていないので，「というか」は完全に脱文法化されたものではなく，脱文法化の途上にあるものとして捉えたほうが適切であろう。

[191] 日本語訳は加藤（2013）による。
[192] （260a）と（260b）は Twitter からの引用である。

11.3.3　前後の言語形式による機能分類

「というか」で繋げられる文には様々な形式が見られ，「というか」を連結形式として整理することができる。本稿では，「A というか B」を「というか」の基本形とする。A と B は言語形式上に現れる性質の近いものである。A と B が入れ替え可能な場合もあれば，B が A に対する修正である場合もある。A と B の部分は言語形式上に現れない場合もあるので，理論上から考えれば，「というか」の連結形式は，「A というか B，A というかØ，Øというか B，ØというかØ」の 4 種類が考えられる。更に，言語形式上に現れている A に相当する部分と B に相当する部分は，違う発話者によって言い出される可能性がある。「A というか B，A というかØ，Øというか B，ØというかØ」の 4 種類の分類は更に細かく分類できる。「というか」の言語形式を発する側を話し手とし，A に相当する部分と B に相当する部分については，話し手の発話にある場合を S と，聞き手の発話にある場合を H と表記する。そうすると，「というか」の連結形式は，表 24 のように分類できる。

大分類	小分類	説明	例
「A というか B」	「S というか S」	A も B も話し手の発話にある。	(261) [193]
	「S というか」「H」	A は話し手の発話に，B は聞き手の発話にある。	(262)
	「H」「というか S」	A は聞き手の発話に，B は話し手の発話にある。	(263)
	「H」「というか」「H」	A も B も聞き手の発話にある。	×
「A というかØ」	「S というか」Ø	A は話し手の発話にあるが，B は言語形式上に存在しない。	(264)
	「H」「というか」Ø	A は聞き手の発話にある。B は言語形式上に存在しない。	(265)
「Øというか B」	Ø「というか S」	A は言語形式上に存在しない。B は話し手の発話にある。	(266)
	Ø「というか」「H」	A は言語形式上に存在しない。B は聞き手の発話にある。	×
「Øというかø」		A も B も言語形式上に存在しない。	×

表 24　「というか」の連結形式の分類

(261) a「なんかでもね、生徒の話とか聞いたら、なんか、だから、その SARS の時とか、寮から、寮っていうか、学校の敷地内から、出れないから」

[193] 「S というか S」のタイプには（261b）のように「S というか S」が重複される場合も含まれる。

『BTSJ 初対面同性同士雑談 7』

b【神木は自分の部屋にある絵のビデオを取りながら】

神木「これが，えいと，僕がいっつも絵を描く道具っていうか，グッズっていうか，まあ，そんな感じの道具です。」

『おしゃれイズム』2005/07/31（再掲）

（262）ア「あじゃあ、中国語は、発音も大事なんですけど、それよりもやっぱこう、上がり下がりっていうか」

イ「そう、声調でしょ。」

ア「そう、声調が、あれは、すごい大事ですね。」

『BTSJ 初対面同性同士雑談 16』

（263）藤木「（写真を）取るのがすきなの？」

神木「まあ，すきっていうか，景色がきれい。」

『おしゃれイズム』2005/07/31

（264）【上田と 12 歳の神木との会話である】

神木「なんか本当に，ちょっと，飽きちゃったっていうか。」

上田「焼肉飽きたの？」

『おしゃれイズム』2005/07/31

（265）【椿と京汰は恋人で，二人は水族館で白熊を見ている場面】

椿「小学校のときにね，「しろくまの一生」って映画を見たんだけど，オスはなかなか出会えないメスを探して，氷の上を何日も歩いて旅するの，ロマンチックだと思わない？」

京汰「そういうのロマンチックていうか。」

映画『今日、恋をはじめます』

（266）[194]【消しゴムを隣の席に座る友達に借りるとき。】

ア「ていうか消しゴム貸してくれない。」

イ「いいよ。」

表 24 より，「というか」は基本的に「S というか S」・『「S というか」「H」』・『「H」「というか S」』・『「S というか」Ø』・『「H」「というか」Ø』・『Ø「というか S」』の六種類にまとめられる。

そして，談話標識としての「というか」の敬体「といいますか」と「と申しますか」の使用は『Ø「というか S」』のタイプ以外で，基本的に使用可能である。

11.3.4　談話上の機能と語用論的分析

本稿では，「というか」に「共感形成」「断言回避」「修復」「話題転換」の四つの機

[194] （266）は梅澤（1999）の E からの引用である。

能があると考える。その中でも，「修復」は自己発話向けの訂正と他者発話向けの修正の二つの形で用いられる。

次に，「というか」の連結形式を関連させながら，「というか」の基本用法から，言いさし文を経由し，談話標識としての各種の機能への派生を考察する。

11.3.4.1 「S というか S」から『「S というか」「H」』へ

11.3.2 で，「というか」の適切な表現に迷っている列挙という基本用法を確認した。基本用法で，「というか」の前後の言語表現は基本的に話し手自身によるものなので，それを連結形式で表示するなら，「S というか S」になる。

しかし，実際の会話で，話し手が適切な表現を列挙しながら迷っているときに，聞き手は発話に入り，話し手を助けて適切な表現を提供する場合もある。即ち，「というか」の後の B の部分は聞き手によって補完される。連結形式で表示するなら，『「S というか」「H」』になる。一つの文が話し手と聞き手が協調して完成したところから見れば，「というか」に「共感形成」の機能があると言える。

（267）ア「あじゃあ、中国語は、発音も大事なんですけど、それよりもやっぱこう、上がり下がりっていうか」
イ「そう、声調でしょ。」
ア「そう、声調が、あれは、すごい大事ですね。」
『BTSJ 初対面同性同士雑談 16』（再掲）

例えば，（267）で，アは話し手で，イは聞き手である。「A というか B」の基本形を基準で考えるなら，話し手のアの発話にある「上がり下がり」は A に相当し，聞き手のイの発話にある「声調」は B に相当する。つまり，「A というか B」という完全な文は，話し手と聞き手の協調によって完成されている。

11.3.4.2 「S というか S」における修復機能

「S というか S」という形式における「というか」は，単なる列挙用法のみならず，「というか」の後ろの部分（＝B）は，前の部分（＝A）に対する訂正である場合もある。つまり，「というか」の自己発話向けの訂正という「修復」機能である。

話し手が自分の発話にある不適切なところを訂正するときに，その訂正する理由によって場合を分けて考えることが可能である。

（268）a「なんかでもね、生徒の話とか聞いたら、なんか、だから、その SARS の時とか、寮から、寮っていうか、学校の敷地内から、出れないから」

『BTSJ 初対面同性同士雑談 7』（再掲）

b【イはアに録音に来た経緯を説明している場面】

ア「それでお手伝いですか?」

イ「いや、私なんか、友達の紹介っていうか、この間、たまたま教室に行って、どうで、やってもらえますかって頼まれて、あ、いいですよとか言って、まだ今日 2 回目なんです、会った。」

『BTSJ 初対面同性同士雑談 7』

（268a）と（268b）は両方とも「S というか S」の形式で，話し手が自分の発話にある不適切さを指摘し訂正を行う例である。話し手の訂正を導く理由が，両方とも表現自体の不正確である。（268a）では，話し手は自分の「寮」という表現に間違いがあると気づき，「というか」でその問題を指摘し，正確な表現を補足した。（268b）では，話し手は「というか」で「友達の紹介」という発話に対して，具体的な説明を行った。

（268a）と（268b）に対して，（269）では，話し手の訂正を導く理由は，ポライトネスによると考えられる。

（269）【知り合いの人についての話】

ア「なんかね、一回殴りあいの、けんかっていうか、言い争いがあったらしくて。」

イ「なんでー。」

『BTSJ 親しい男性友人の雑談 1』

（269）で，話し手のアの「らしい」を通して，話し手のアが聞き手のイに第三者に関する情報を提供していることがわかる。第三者のフェイス侵害の度合いを軽減するために，話し手は「というか」を通して，「けんか」という意味の強い表現を「言い争い」という相対的に弱い表現に置き換えた。

11.3.4.3 「S というか S」から『「S というか」Ø』へ

11.3.4.2 では，話し手が「というか」を通して，自己発話の不適切さを訂正するという「修復」機能を考察した。実際の使用では，話し手が自分の不適切なところを指摘するところまで止まり，訂正を行わない場合もある。即ち，『「S というか」Ø』の形式である。「S というかØ」における「というか」は，話し手が訂正を行わず，自分の発話の不適切を指摘するところに止まっているので，「S というか S」の言いさしによる「断言回避」の機能として考えられる。

（270）【髪を切るという修二からの好意の提案に対して，小谷は自分の髪型と似ている宝物の人形を持ちながら】

小谷「この子を置いて私だけ変われないっていうか。」
修二「そっか。おぅ。わかった。」
日本テレビ系列『野ブタ。をプロデュース』第2話

（270）は「S というかØ」の形式である。話し手は小谷で，聞き手は修二である。自分の利益になる提案であるにもかかわらず，話し手は聞き手に対して，拒否する意を示した。断りが聞き手のポジティブフェイスを侵害することになるので，話し手の拒否は，聞き手のフェイスを侵害することになる。フェイス侵害ということ自体に変わりはないが，「というか」の追加で，言い切ることが言い切らないことになり，主張変化の可能性もあるという推意が含まれるようになる。そこで，（270）の「というか」は言いさしによる断言回避の機能であると言える。

11.3.4.4 「S というか S」から『「H」「というか S」』へ

11.3.4.2 では，「S というか S」の自己発話向けの訂正という修復機能を確認したが，実際の使用では，「というか」は自己発話向けの訂正のみならず，他者発話向けの修正になる場合もある。つまり，「というか」の訂正対象，即ち，「というか」の前の部分（＝A）が，聞き手の発話に現れる場合である。連結形式で示すなら，『「H」「というか S」』の形式になる。

聞き手の発話内容を修正する場合は，その修正対象の性質の違いによって細かく分類できる。まず，聞き手の発話と認識に大きく分けられる。そして，聞き手の認識を修正する場合に，聞き手の不適切さはメタ言語的否定の対象となる意味論的なものもあれば，文脈による語用論的なものもある。（271）は聞き手の発話を修正する場合で，（272）と（273）は聞き手の認識を修正する場合であるが，（272）は意味論的なもので，（273）は語用論的なものである。

（271）ア「お父さんの仕事ですか。」
イ「仕事っていうか、あっちで、あの、日本料理の、お店をやってて。」
『BTSJ 初対面雑談 6』

（272）[195] 林「ファッションが平均化されてつまらなくなったということですか。」
小西「っていうかねえ。ああいうのはファッションじゃない。単なる衣料だよ。ファッションというのは、一人ひとりの個性をどうやって引き出して、その人らしくするかということであってね。」
（186 林真理子×ドン小西『週刊朝日』 2003．10．10）

（273）[196]【持っている鞄を友達に預ける意識を持ってアが発話した場面である。】

[195] （272）は趙（2007）からの引用である。
[196] （273）は梅澤（1999）の B からの引用である。

ア「私、ちょっとトイレに行ってくる。」
イ「ていうか私も行く。」

（271）では，話し手のイは，聞き手のアの一般疑問文に対して，「はい／いいえ」の言葉で正確に答えられないので，「仕事っていうか」によって，聞き手の質問に現れる言葉が不適切であると予言し，その後に具体的な説明で修復を行った。

（272）では，聞き手の林の一般疑問文に対して，話し手の小西はすぐ答えを出したのではなく，「というか」で聞き手の質問に不適切があると予言し，その後，「ファッション」という表現に対するメタ的な否定を通して，聞き手の不適切なところを修復した。つまり，話し手は「というか」を通して，聞き手の発話を修正しているのではなく，聞き手の認識を修正していると言える。

（273）の「というか」は（272）と同じように，聞き手の認識を修正している例であるが，（272）の聞き手の不適切性は意味論的なものであるのに対し，（273）は語用論的なものである。（273）で，話し手はイで，聞き手はアである。聞き手の動作という状況文脈と「私、ちょっとトイレに行ってくる」という形式文脈によって，聞き手の発話に「トイレへ行きたいのはアだけであり，イが行きたくない」という推意[197]が考えられる。話し手は，聞き手の発話にある推意に不適切があると意識し，「というか」によってその不適切を予言し，聞き手の間違っている認識を修復した。

また，実際の使用では，話し手は聞き手の不適切さを指摘するところに止まり，訂正を行わない，すなわち，『「H」「というかS」』が言いさしす場合である。連結形式で示すなら，『「H」「というか」Ø』になる。この場合，修正を行っていないので，修復機能より，『「H」「というかS」』の言いさしによる断言回避と考えたほうが適切であろう。

（274）【椿と京汰は恋人で，二人は水族館で白熊を見ている場面】
椿「小学校のときにね，「しろくまの一生」って映画を見たんだけど，オスはなかなか出会えないメスを探して，氷の上を何日も歩いて旅するの，ロマンチックだと思わない？」
京汰「そういうのロマンチックていうか。」
映画『今日、恋をはじめます』（再掲）

例えば，（274）で，話し手の京汰は聞き手の椿の発話にある「ロマンチック」という言語形式に疑問を持ち，「というか」を通して，その疑問にあるところを提示するのみで，言いさしによって問題があることの断言を回避している。

11.3.4.5 『「H」「というかS」』から『Ø「というかS」』へ

11.3.4.4 では，「というか」の聞き手発話の不適切さを指摘し修正する修復機能（『「H」

[197] （273）の文脈でのみ成立する推意なので，厳密に言うと，PCI（会話推意）である。

「というかS」』）を考察した。「というか」の実際の使用では，Aの部分が現れない用法，所謂「というか」の接続詞や副詞としての自立的な用法もある。それを連結形式で表示するなら，『Ø「というかS」』[198]になる。この用法は話題転換と論じられることが多いが，本稿では話題転換を他者発話向けの修正と連続的に捉えることを主張する。

聞き手の間違いを修復することは聞き手のフェイスを侵害するので，聞き手発話向けの修正を表わす『「H」「というかS」』において，「というか」の後の内容は基本的に聞き手にとって望ましくない内容であると言える。そこで，『「H」「というかS」』の「というか」は，聞き手の発話を修復する機能のみならず，後の内容が聞き手のフェイスを侵害することや聞き手にとって望ましくない内容になることを予言する談話機能もあると言える。そして，実際の使用では，Aの部分がなくても，『「H」「というかS」』における「というか」の予言機能が継承され，聞き手のフェイス侵害する行為を行うことを予言する『Ø「というかS」』の形式も現れた。

（275）【消しゴムを隣の席に座る友達に借りるとき。】
ア「ていうか消しゴム貸してくれない？」
イ「いいよ。」

（再掲）

（276）【会話録画中】
ア「てか何分から始めたのか。」
イ「私も覚えてないや。」

『BTSJ 初対面雑談 11』

（275）では，話し手はアで，聞き手はイである。（275）の会話時点より以前に発話が見られなく，聞き手への呼びかけとして，「というか」が使用されている。しかし，（275）の「というか」は単なる呼びかけより，後の発話内容が聞き手のフェイスを侵害するかもしれないという性質を予言していると考えたほうが適切である。聞き手のフェイスを侵害することになること自体に変化がないにもかかわらず，自分の発話内容が聞き手のフェイスを侵害することになるのを話し手が自覚している点で，（275）の「というか」は聞き手への話し手の配慮が入っていると言える。

そして，（275）は「というか」の前に発話がない呼びかけの場合であるが，（276）のように会話の途中に「というか」が現れる場合は，「話題転換」になる。

以上より，本稿は，「というか」の「話題転換」の機能を他者発話向けの修正という「修復機能」の延長線にあるものと位置づけ，「他者発話向けの修正」「フェイス侵害内容の予言」「話題転換」を連続的に捉える。

---

198 『Ø「というかS」』における「というか」は，発話時点で話者交替も同時に行われている。「というか」が接続形式から談話標識へ変化した根拠には，11.3.2 で述べた「というか」の脱文法化（＝自立化）以外に，話者交替の挿入が可能であるということも重要な一点として考えられる。それについての詳しい分析は今後の課題にする。

11.3.4.6 「というか」の談話機能のまとめ

11.3.4.1～11.3.4.5 の考察の結果，「というか」には「共感形成」「修復」「断言回避」「話題転換」の四つの談話機能があると確認され，形式との対応関係は表 25 のようになる。

形式	機能
「S というか」「H」	共感形成の機能
「S というか S」	自己発話向けの訂正という修復機能
「H」「というか S」	他者発話向けの修正という修復機能
「S というか」Ø	「S というか S」の言いさしによる断言回避
「H」「というか」Ø	『「H」「というか S」』の言いさしによる断言回避
Ø「というか S」	話題転換

表 25　「というか」の連結形式と機能

11.3.5 まとめ

本節では，本来非自立的な接続形式である「というか」の統語的特徴を確認した上で，「というか」が言いさし文のマーカーを経由し，脱文法化途上にある談話標識としての性質を明確にした。具体的には，まず前後発話の有無と発話内容の話者によって，「というか」の連結形式を「S というか S」・『「S というか」「H」』・『「H」「というか S」』・『「S というか」Ø』・『「H」「というか」Ø』・『Ø「というか S」』の六種類にまとめ，そして，連結形式ごとに「というか」の「共感形成」「修復」「断言回避」「話題転換」の四つの機能を考察した。

11.4 本章のまとめ

本章は，使用頻度によって，言いさし文のマーカーの自立性が高くなり，談話標識への変化過程を考察した。具体的に，三つの内容に分けて分析した。

11.1 では，言いさし文のマーカーと関連しながら，談話標識に関する先行研究をまとめ，談話標識の具体的な定義や特徴，機能を確認した。11.2 では，言いさし文のマーカーの性質が残っており，典型的な談話標識への変化途中にある例として，連体修飾節に付く「みたいな」について考察した。具体的に，「みたいな」で終わる発話を，引用の特質から由来した言いさし文と位置づけ，「みたいな」の用法と発話機能及び多用される動機を分析した。言いさし文のマーカーから談話標識への変化途中にある「みたいな」に対して，11.3 では，談話標識としての性質が固定されている連用修飾節に付く「というか」について考察した。具体的に，「というか」の接続形式から，言いさし文のマーカーとしての機能を

経由し，最終的に自立性を持つ談話標識に変化する過程を脱文法化の一種と位置づけ，「というか」の各連結形式と関連しながら，談話標識としての機能を考察した。

本章は，本来接続形式である未完結文のマーカーが，使用頻度によって，意味完結の言いさし文のマーカーになり，さらに自立性の強化とともに，談話標識に変化するという傾向についての考察を通して，選好が文法論への影響を検討した。

第Ⅴ部

「まとめと今後の課題」

第 12 章　全体のまとめと今後の課題

本章は，本研究の全体内容についてのまとめと今後の課題である。まず，12.1 で全体のの内容をまとめた後，12.2 で残された課題について述べる。

12.1　全体のまとめ

本研究は，「未完結文における語用論的選好に関する研究」というテーマのもとに，日本語で選好されている従属節で終わる未完結文を取り上げ，語用論の考えを利用し，未完結文の全体像を明確にすることを目標として設定している。その大きな目標をもって，本研究は，静的な観点，動的な観点，選好が文法論への影響という三つの角度に分けて，未完結文の特徴と文法論での位置づけを考察した。

本研究は，五つの部分に分けて展開してきた。第Ⅰ部は，「第 1 章」と「第 2 章」からなり，第Ⅱ部は，「第 3 章」と「第 4 章」からなり，第Ⅲ部は，「第 5 章」「第 6 章」「第 7 章」の三章からなり，第Ⅳ部は，「第 8 章」「第 9 章」「第 10 章」「第 11 章」の四章からなり，第Ⅴ部は，第 12 章である。各部の概要は，次の通りである。

第Ⅰ部：先行研究で残された課題を確認し，本研究の研究対象と研究目的，及び研究方法を明確にした。

第Ⅱ部：要求性に基づき，未完結文の種類を分類し，同時に統語論の観点を踏まえた上で，未完結文の境界性におけるバリエーションを明確にし，静的な観点から未完結文の特徴を考察した。

第Ⅲ部：未完結文の使用できる語用論的な条件を確認した上で，動的な視点を入れ，未完結文の選好される動機を分析した。

第Ⅳ部：意味機能の完結している未完結文を「言いさし文」という新たな構文と位置づけ，「言いさし文」の形成過程と特徴の分析を通して，使用頻度の増加によって，選好が文法論への影響を考察した。

第Ⅴ部：全体のまとめと今後の課題についての内容である。

次に，各部に分けて考察した内容についてまとめる。

まず，第Ⅰ部（第 1 章・第 2 章）の内容について述べる。第 2 章では，次の二点をめぐって考察を行った。

［1］　先行研究のまとめと今までの研究成果及び問題点の確認。

［2］　先行研究を踏まえ，本研究の研究方法の確立。

［1］に関しては，主に語用論的選好と未完結文の二つの部分に分けて先行研究をまとめた。語用論的選好については，通言語的な観点からの基本的な考えをまとめた上で，日本語における先行研究を紹介した。未完結文については，名称と定義のばらつきがあるという現状に対して，まず主な研究ごとに使用されている名称と定義をまとめた上で，文法論・語用論・会話分析・認知言語学・日本語教育という五つの観点に分けてそれぞれの分野における先行研究を整理した。整理した結果，未完結文の名称の不統一や研究の偏り，体系的な研究の不足などの問題点を確認した。

［2］に関しては，主に本研究における未完結文の定義，理論的な枠組み，分析資料について述べた。未完結文の定義については，結果として現れる未完結文のタイプをまとめた上で，「発話者の積極的な意思によって，主節が発話者の発話の前後の形式文脈に現れていない従属節のみで終わる発話」という未完結文の定義を下した。理論的な枠組みについては，本研究の分析に渡り，基礎となる語用論の基本的な理論や考えを提示し，文脈によって，主節を復元する上での研究方法を確認した。分析資料については，実際の生活上における場面を最大にし，比較的日常会話に近いという趣旨のもとで，テレビドラマや映画の台詞，参考程度でテレビ番組の台詞とコーパスを分析資料とすることを述べた後に，本研究の参考した分析資料をまとめ，主に「ば」「たら」「と」「から」「ので／んで」「て」「って」「のに」「し」「けど／が」の 10 種類の表現を扱うことを確認した。

以上の第Ⅰ部の論説を踏まえ，第Ⅱ部（第 3 章・第 4 章）の内容について述べる。

第Ⅱ部では，発話の時間軸にある静止的な時点を抽出し，静的な観点から未完結文を考察した。

第 3 章では，未完結文の種類を明確にするために，次の二点に分けて考察を行った。

［3］　すべての発話における要求性の種類。

［4］　要求性に基づき，未完結文の種類を確認した上で，完結文と比べた，未完結文における要求性の特徴。

［3］に関しては，主に要求性の仮説と仮説の修正の二つの部分に分けて展開をした。まず，先行研究における未完結文の分類の問題点を指摘した。そして，未完結文は形式上未完結であっても，発話内力を有すると見られる。発話内力は，聞き手に対する作用という点において，要求性を潜在させていると解釈することが可能である。要求性は未完結文のみならず，すべての発話にあると考えられるので，要求性を基準とする分類により，未完結文を完結文と関連付け，すべての発話に対して統一した視点からの分析が可能になる。以上の考えをもって，本研究は，要求性に基づく未完結文の分類方法を提案した。未完結文や完結文を問わず，すべての発話における要求性を明確にするために，要求性の有無を出発点として，要求性に関する仮説を立てた。しかし，仮説には要求内容としての「行為」と「知識」の区分や要求性を決める基準などの問題点があり，それらの問題点を解決する

ために，要求性の仮説に対して修正を行った。その結果，要求性の有無から出発した一次元の排他的な関係にある仮説を，同時に二種類以上存在可能な多次元な修正案にした。具体的に，要求について，無標である社会規範的要求と有標である会話的要求に分けた後，会話的要求に対して，更に命題レベルと推意レベルの異なる尺度を立てた。そして，無標な要求は，【注意要求】【理解要求】【反応要求】の三種類があり，有標な要求は，【受容要求】【行為要求】【調整要求】の三種類があることを結論として述べた。

［4］に関しては，主に要求性に基づく未完結文の分類と未完結文における要求性の特徴の二つの内容について述べた。

未完結文の分類については，［3］で確立した要求性の考えに基づき，まず推意レベルから未完結文における有標な要求（会話的要求）によって，未完結文の要求性を【要求性なし】【行為要求】【受容要求】【調整要求】の四種類に分けることができるという前提を述べた。そして，実例に基づき，未完結文を大まかに，「接続助詞から要求性を容易に推測できるタイプ」と「要求性を推測しにくいタイプ」の二種類に分けた後に，それぞれについて形式ごとに考察した。その結果，「接続助詞から要求性を容易に推測できるタイプ」について，「たら」「ば」で終わる未完結文は，【行為要求】の性質を持っているものがほとんどで，「用言の否定＋と」で終わる未完結文は，【行為要求】と【要求性なし】の二種類があり，「のに」で終わる未完結文は，【要求性なし】の性質を持っているものがほとんどである。「要求性を推測しにくいタイプ」について，「ので/んで」「から」「が/けど」「し」「て」が具体的な表現になるが，要求性のタイプは限定しておらず，【要求性なし】【行為要求】【受容要求】【調整要求】の四種類が全部出現可能であるとわかった。

未完結文における要求性の特徴については，次の三点に分けて述べた。まず，未完結文の要求性を判断するには，主節の復元が必要とされる場合もあれば，必要とされない場合もあることを述べた。そして，未完結文の要求性は，主節の取り消し可能性によって，変化する可能性もあることを述べた。最後に，完結文の要求性は命題レベルと推意レベルの二段階に分けるのに対して，未完結文は完結文という言語形式のレベル，主節を復元した完結文の命題レベル，復元された完結文の推意レベルという三段階に分けて考える必要があることを述べた。

第 4 章では，主に次の一点をめぐって考察を行った。

［5］　未完結文における境界性及び意味機能の完結度の違い。

［5］に関しては，第 3 章の要求性の考えを踏まえ，主に統語論と語用論の二つの観点に分けて，未完結文の境界性の違いについての検討を通して，未完結文の完結度のばらつきを議論した。統語論の観点から，未完結文と完結文との文法的構造上の類似度を判断基準とし，「たら」「ば」「て」「と」を「弱境界」に，「ので」「のに」を「強境界」に，「から」「が/けど」「し」「って」を「特強境界」に分類した。語用論の観点からの考察

は，第 3 章で述べた要求性の考えに基づいて行われたものである。考察した結果，無標な要求のみ持っている【要求性なし】の未完結文と，要求の内容が未完結文の形式文脈に現れる場合は，未完結文の意味機能の完結度が高く，比較的に強い境界を持つという傾向がある。未完結文の意味機能の完結度は，形式のみならず，文脈との関係が緊密であるとわかった。

第Ⅱ部の静的な視点からの結果として存在する未完結文の考察を踏まえ，第Ⅲ部（第 5 章・第 6 章・第 7 章）では，動的な視点から未完結文の選好される動機を検討した。

次に，第Ⅲ部の内容について述べる。

第 5 章では，主に次の一点について検討した。

［6］　未完結文の使用条件と制約の確認。

［6］に関しては，未完結文の動機を考察するための前提として，未完結文の使用にある制約をまず［6］で考察した。未完結文は文法形式上不完全であるので，書き言葉では使用しづらいという予測の上で，話し言葉に限定し，未完結文が公的な場面で使用しづらいという仮説をもって，「聞き手の性質」「社会的な人間関係」「心理的な人間関係」という三つの外的要素と「発話の内容」という内的要素が，発話の公式度に関与することを明らかにした。そして，実例のデータに基づき，「発話の内容が雑談で，潜在的聞き手は存在しない場面，人間関係が平等である」ときは，未完結文がより多用されるという傾向があることや，逆に独話や聞き手に行為を要求するときは，未完結文の使用が制限されることを確認した。

第 6 章では，次の一点をめぐって議論を行った。

［7］　情報伝達という観点から，未完結文の選好される正の動機の解明。

［7］に関しては，未完結文のマーカーである「X」の有無によって情報の量に変化がある場合に限定し，情報伝達という観点から，未完結文が選好される正の動機を分析した。まず，未完結文は形式的に短いにもかかわらず，情報内容が豊富であるという特徴を述べた。そして，情報量と経済性の二点に分け，未完結文のマーカー「X」が削除された「A 類完結文」と，主節が補完された「B 類完結文」との比較を通して，未完結文が好まれる動機を明らかにした。即ち，多情報性と経済性を同時にバランスよく取れているからである。最後に，実用例に基づき，未完結文において活性化される情報が，情報内容とパラ情報に分類できることと，未完結文による情報伝達の成功に，話者間に知識が共有しているという基盤があることを述べた。

第 7 章では，未完結文への選好にある負の動機を解明するために，話者交替という観点から，次の二点をめぐって議論を行った。

［8］　メタポライトネスを定義した上で，話者交替における未完結文の位置づけと特徴の確認。

［9］　疑問文と平叙文との比較を通して，ストラテジーとしての未完結文の考察。

［8］に関しては，まず，従来のポライトネスを「言語内容によるポライトネス」であるとし，それとは異なる次元の言語内容の前段階にある「言語行動自体によるポライトネス」を「メタポライトネス」（meta politeness）と定義した。そして，統語形式と話者交替の関係性を議論し，各統語形式における TRP の強弱を比較した。その結果，「句の内部」は TRP なしであるが，「発話順番内の中にある句」→「節」→「平叙文」→「命令文」→「疑問文」の順序で，TRP が強くなり，話者交替における要求性が強くなることがわかった。最後に，自由な TRP として位置づけられた未完結文は，明確な反応機会場であり，その時点においてあいづちという最小限の反応をするという聞き手の疑似義務性があり，話者交替における予測性と柔軟性を持っていることを検討した。

［9］に関しては，［8］での基本的な考察を踏まえ，ネガティブポライトネスとポジティブポライトネスに分けて，メタポライトネスにおけるストラテジーとしての未完結文の特徴を考察した。具体的には，ネガティブポライトネスの考察において，まず，相手のネガティブフェイスを侵害する可能性があるという強い TRP である疑問文における話者交替の特徴を確認し，そして，疑問文より弱い TRP としての未完結文は，その危険性を回避し，聞き手のネガティブフェイスを侵害する度合いを弱められるネガティブポライトネスのストラテジーの一つであることを述べた。ポジティブポライトネスの考察において，まず，平叙文の後に，聞き手が発話権を取る可能性もあれば，話し手が発話権を保持する可能性もあるので，話者交替がスムーズにできなく，聞き手のポジティブフェイスを侵害する可能性があるという平叙文の特徴を確認し，そして，未完結文は，聞き手に反応機会を与えることを通して，平叙文によって起こる話し手と聞き手の発話権に関する曖昧な緊張関係や，平叙文の内容終了機能によって起こる聞き手のポジティブフェイスへの侵害を回避できると述べ，ポジティブポライトネスのストラテジーの一つとして位置づけた。

第Ⅱ部と第Ⅲ部の内容を踏まえ，第Ⅳ部（第 8 章・第 9 章・第 10 章・第 11 章）では，文法論が未完結文への選好によって与えられた影響を検討した。主に次の三点をめぐって議論を展開した。

［10］　意味機能の完結している未完結文を「言いさし文」という新たな構文としての位置づけ。

［11］　言いさし文の形成過程と特徴の考察。

［12］　使用頻度の増加とともに，言いさし文のマーカーは，自立性が高くなり，談話標識への変化過程についての考察。

［10］に関しては，主に第 8 章で議論した。第 8 章では，まず，用語を整理し，途中で

中止して言いさす力によって現れたことを考慮した上で，「形式上は未完結でありながら，意味機能が完結しているような従属節のみで終わる発話」を言いさし文と定義した。そして，形成要因によって，言いさし文を省略によるものと付加によるものの二種類に大別した後に，省略部分の性質の違いによって，省略によるものをさらに意味論的な省略によるもの（従属節の「AX」と主節の「B」が慣習化されたもの）と語用論的な省略によるものに下位分類した。その結果，言いさし文を「意味論的な省略による言いさし文」「語用論的な省略による言いさし文」「付加による言いさし文」の三種類に分けた。

［10］での分類に基づき，［11］では，具体的な形式を通して，この三種類の言いさし文を考察した。具体的には，第 9 章では「意味論的な省略による言いさし文」，第 10 章では「語用論的な省略による言いさし文」・「付加による言いさし文」のように二章に分けて議論を展開した。

第 9 章では，「意味論的な省略による言いさし文」の特徴を解明するために，典型的な定型表現の例として，「なきゃ／なくちゃ」言いさし文，「ないと」言いさし文，「たら／ば」言いさし文，「って」言いさし文を具体的に考察した。「なきゃ／なくちゃ」言いさし文は，「なければならない／なくてはならない」の慣習化によって省略されたものであり，類似する「ないと」言いさし文は，「なければならない／なくてはならない」の慣習化によって省略されたものである。そして，「たら／ば」言いさし文は，もとの定型表現の違いによって，「たら／ばどう」・「たらどうしよう」・「たら／ばよかった／いいのに」の三種類に分けて議論した。最後の「って」言いさし文は，「って言った／聞いた」の慣習化によるものであるが，意味論的な省略以外に，付加による場合もあると議論した。以上の考察の結果，全体から見れば，意味論的な省略によって形成された言いさし文は，定型表現の慣習化や文法化が大きく関与していることがわかった。

「意味論的な省略による言いさし文」と対照し，「語用論的な省略による言いさし文」と「付加による言いさし文」は，各形式との関係が緊密であるので，別々に分けるのではなく，同じく第 10 章で，形式ごとに考察した。具体的には，逆接関係の例として「のに」で終わる言いさし文と「けど」で終わる言いさし文を，因果関係の例として「から」で終わる言いさし文を，並列関係の例として「て」で終わる言いさし文をそれぞれ取り上げた。

「のに」で終わる言いさし文については，「p なら q のに。（r）」という基本形を確認し，付加による場合は存在しないという検討をした上で，「のに」言いさし文には，事実に対する話し手の不満以外に，第三者や聞き手に対する評価と聞き手への働きかけという推意もあることを確認した。「けど」で終わる言いさし文については，対比に基づき，「けど」の意味用法を「文法的対比」「意味論的対比」「語用論的対比」の三種類に整理した上で，「A けど，（B）。」という形式で現れる「語用論的な省略による言いさし文」と，「（A），B けど。」と「『（A）』『B けど』」という二つの形式で現れる「付加による言いさし文」に分けて，それぞれの特徴を述べた。「から」で終わる言いさし文については，理由を表さない「から」が存在しないという立場を確認した上で，因果関係の強さによって「から」の用法を整理し，そして，因果関係が強いものを「語用論的な省略による

言いさし文」とし，因果関係が弱いものを「付加による言いさし文」と位置づけ，最後に，「いいから」という定型表現を「意味論的な省略による言いさし文」としての性質を述べた。「て」で終わる言いさし文については，「なぜ～」という質問の想定を基準に，省略によるものと付加によるものに分けてそれぞれの特徴を考察した後に，「と思って」と「たりして」を通して，定型表現が「て」言いさし文の形成への関与を考察した。その結果，「て」言いさし文の形成には，少なくとも「論理関係の緊密度」，「発話内行為の明確性」，「定型表現」という三つの要素が関与していることがわかった。

［12］に関して，主に 11 章で詳細に議論した。意味機能上は完結している言いさし文の成立と使用頻度の増加とともに，「言いさし文のマーカー」である「X」が自立性が強くなり，発話解釈における手続き的な意味を担う談話標識への変化も観察できる。それについて議論したのは，第 11 章である。まず，加藤（2004）に従い，談話標識を「<<メタ談話情報>>を提示する要素」（加藤 2004：223）と定義し，談話標識の形式と機能をまとめながら，典型的な談話標識は自立性を持つ接続詞や副詞などの表現であるが，談話標識と見られる非自立性のものも自立性の用法を持つようになっているという変化があることを述べた。そして，談話標識に関する基本的な考えを踏まえ，連体修飾節に付く「みたいな」と連用修飾節に付く「というか」を例として，言いさし文のマーカーが談話標識への変化過程を考察した。具体的に，「みたいな」については，典型的な言いさし文との比較を通して「みたいな」を引用による言いさし文と位置づけた上で，「みたいな」の文末用法や使用動機，発話効果を考察した。その結果，「みたいな」は，言いさし文のマーカーの性質が残っており，典型的な談話標識への変化途中にあると結論した。「というか」については，「というか」の連結形式を「S というか S」・『「S というか」「H」』・『「H」「というか S」』・『「S というか」Ø』・『「H」「というか」Ø』・『Ø「というか S」』の六種類に分け，連結形式ごとに「というか」の機能を分析した上で，言いさし文のマーカーを経由し，脱文法化途上にある談話標識としての位置づけを述べた。

第Ⅳ部で，［10］と［11］における未完結文から言いさし文への変化の考察と，［12］における言いさし文のマーカーが談話標識への変化過程の考察を通して，語用論的選好が使用の頻度に影響し，そして使用頻度の増加によって，言葉の文法的な構造や特徴に影響することを明確にした。

第Ⅴ部は（第 12 章）は，全体のまとめと今後の課題である。

12.2　今後の課題

最後に，本研究での考察を踏まえた上で，今後の検討すべき課題について述べる。

第一に，未完結文における完結度についての考察を深める必要がある。第Ⅱ部の第 4 章で，未完結文の完結度について，統語論と語用論の二つの角度に分けて未完結文の境界性の議論として考察したが，語用論の観点からの考察は，単に要求性による完結度の傾向を指摘した。脚注 113 でも言及したように，要求性以外に，未完結文の形成要因（省略か付

加か）などのほかの角度からの分析も可能である。また，第 4 章で，統語論と語用論をそれぞれ独立的に考察をしたが，未完結文の完結度を明確にするには，形式と意味内容を総合的に考える必要もある。以上の点を踏まえ，今後，要求性以外のほかの視点を入れた後に，統語論と語用論を関連付けて未完結文の完結度を総合的に考察する。

第二に，未完結文の選好される動機を多方面に考える必要がある。第Ⅲ部で，正の動機と負の動機に分けて未完結文の選好される動機を分析した。正の動機では，単に情報伝達における未完結文の効果を分析した。第 2 章の 2.3.1 の本稿の研究対象で，会話参加者共同で発話を完成させる場合を例外的に扱うと述べたが，「AX」と「B」を二人が共同で完成する際に，会話参加者の共感を形成しやすいはずである。そこで，未完結文が選好される正の動機には，共感形成を立てやすいという理由もあると予測できる。さらに，未完結文と完結文を比較するために，同じ文脈で使用された未完結文を完結文に置き換える際に，自然な発話にするには，完結文が「のだ」文で終わる傾向が見られる。そのため，「のだ」文の回避も未完結文の選好される負の動機の一つとして考えられる。以上より，未完結文の使用動機についての考察を拡大して行う必要があると言える。

第三に，付加による言いさし文の考察を深める必要がある。第Ⅳ部で，言いさし文について，省略と付加によって大まかに分類した後に，省略をさらに意味論的な省略と語用論的な省略に下位分類したが，付加の下位分類については詳細に議論できなかった。付加によって形成された言いさし文は，具体的にどのようなタイプがあるかも考える必要があるので，それを今後の課題にする。

第四に，10.4 の「て」言いさし文に関する研究でも述べたように，全体から見れば，言いさし文の形成には，少なくとも「論理関係の緊密度」，「発話内行為の明確性」，「定型表現」という三つの要素が関与していることがわかった。第 10 章で，各表現ごとにそれぞれにおける言いさし文の形成を個別に考察したが，全体からの議論ができなかった。以上の三つの要素と関連し，個別の表現を超え，言いさし文全体の形成についての研究を深める必要があると言える。

第五に，研究対象を拡大して考察する必要がある。本研究は，「から」や「けど」などの典型的な連用修飾節を主な研究対象として議論を進めたが，未完結文の全体像を明確にするには，それら以外の非典型的な連用修飾節や連体修飾節で終わる未完結文についての考察も不可欠な存在である。それらについての考察を今後の課題にする。

第六に，分析資料に限定性がある。本研究は，ドラマや映画の台詞を分析資料にしたが，台詞は日常の自然な発話と違い，説明が多くて編集されたものであるので，分析資料として，限定性がある。本研究での議論が自然会話に適応できるかどうかは今後の課題にする。

以上のように，今後の研究では，研究対象を拡大し，個別の研究テーマを深め，残された課題を解決することを通して，未完結文の体系的な研究を行い，未完結文の研究や語用論的選好の研究に供することを目指す。

参考文献

李恩美（2008）「日本語と韓国語の初対面二者間会話における対人配慮行動の対照研究：ディスコース・ポライトネス理論の観点から」東京外国語大学大学院地域文化研究科博士学術論文

李恩美(2010)「日韓の『中途終了型発話』とポライトネス」『日本言語文化』第 17 輯　pp.123-144

李長美（2001）「若者語における「ていうか」の用法について」すっきゃねん若者ことばの会第 15 回 pp.1-17

家田章子（2005）「文末の『ノニ』に関する考察」『ことばの科学』名古屋大学言語文化研究会 18 pp.201-218

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学―言語と文化のタイポロジーへの試論―』大修館書店

石川創（2010）「あいづちとの比較によるフィラーの機能分析」『早稲田日本語研究 19』pp.61-72

石黒圭（2008）『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房

岩男考哲（2003）「引用文の性質から見た発話『～ッテ。』について」『日本語文法』3 巻 2 号 pp.146-162

岩澤治美（1985）「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56 号 pp.39－50

元智恩（1999）「日韓の『中途終了文』の丁寧さについて--断わる場面を中心として」『筑波応用言語学研究』6 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース pp.133-144

元智恩（2005）「日韓の断わりの言語行動の対照研究：ポライトネスの観点から」筑波大学博士学位論文

上村昂史（2014）「『言いさし文』における『という』の諸用法：終助詞的用法に関する一考察」『言語科学論集』20 pp.31-48

上原聡・福島悦子（2004）「自然談話における『裸の文末形式』の用法と機能」『世界の日本語教育』14 号 pp.109-123

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用－スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662　pp.27-42

内田安伊子（2001）「『けど』で終わる文についての一考察―談話機能の視点から―」『日本語教育』109 号 pp.40－49

内丸裕佳子（2006）「動詞のテ形を伴う節の統語構造について：付加構造と等位構造との対立を中心に」『日本語の研究』日本語学会 2（1）pp.1-15

梅澤実（1999）「『ていうか』の使用心理から探る中学生の友人関係」『日本語学』12 号

pp.79-83
大石初太郎（1971）『話しことば論』秀英出版
大場美穂子（2009）「文末に用いられる『みたいな』」『日本語と日本語教育』37 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要 pp.43-59
大堀壽夫（2000）「言語的知識としての構文――複文の類型論に向けて」『認知言語学の発展』ひつじ書房 pp. 281-315
――――（2002）『認知言語学』東京大学出版会
沖裕子（1999）「手のひらの言語学　若い人が使う『というか』はどんな言葉ですか。」『月刊言語』5 月号 pp.80-83
荻原稚佳子（2008）『言いさし発話の解釈理論―「会話目的達成スキーマ」による展開 』春風社
尾谷昌則（2003）「主体化に関する一考察:接続詞『けど』の場合」『日本認知言語学会論文集』3 号 日本認知言語学会 pp.85-95
小野正樹（2001）「『ト思う」述語文のコミュニケーション機能について』「日本語教育』110 号日本語教育学会 pp.22－31
尾上圭介（1975）「呼びかけ的実現－言表の対他的意志の分類－」『国語と国文学』52 巻 12 号，pp.68-80　（尾上圭介（2001）『文法と意味 I 』くろしお出版に再収録）
海寶康臣（2010）「話し手の論理と聞き手の論理は日本語にどのように反映されているのか : 英語との比較を通して」『立命館言語文化研究』22（2） pp.113-128
加藤重広（2001）「照応現象としてみた接続―『しかしの用法を中心に』」『富山大学人文学部紀要』34　pp.47-78
――――（2002）「言語使用者における動機のあり方について」『富山大学人文学部紀要』36 pp.43-50
――――（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社
――――（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社
――――(2007)「日本語の述部構造と境界性」『北海道大学文学研究科紀要』122 号 pp.97-15
――――（2008）「構文と推意―助動詞のタ形を中心に―」第 15 回中日理論言語学研究
――――（2009a）『その言い方が人を怒らせる―ことばの危機管理術』ちくま新書
――――（2009b）書評論文「Mira Ariel 著『Pragmatics and Grammar』」『語用論研究』第 11 号 pp.98-107
――――（2009c）「日本語の述部複合構造の境界性と非節化」北京大学日本語化日本語学科・中日理論言語学フォーラム（編）『中日理論言語学論集』北京外語出版社，pp.31-38
――――（2009d）「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128 号 pp.195-223
――――（2011）「日本語における文法化と節減少」『アジア・アフリカの言語と言語学』5　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 pp.33-57
――――（2012a）「言語学の知恵」『日本語学』11 月号　明治書院 pp.4-15
――――(2012b)「日本語における名詞性―名詞らしさの境界と段階」影山太郎・沈力（編）

『日中理論言語学の新展望③語彙と品詞』くろしお出版 pp.51-76
————（2013）『日本語統語特性論』北海道大学出版社
————（2014）「日本語の語用特性と複文の単文化」益岡隆志ほか編『日本語の複文構文』ひつじ書房
————（2015a）「構文推意の語用論的分析：可能構文を中心に」『北海道大学文学研究科紀要』146 号 pp.259-293
————（2015b）「発話的な効力と発話内的な効力　―日本語の疑問形式を出発点に―」加藤重広（編）『日本語語用論フォーラム 1』ひつじ書房
加藤陽子（2005）「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124 pp.43-52
許夏玲（2010）『意味論と語用論の接点からみる話し言葉の研究』白帝社
金美貞（2007）「接客言語行動における非定型表現」『待兼山論叢　日本学篇』41 pp.19-37
金城克哉（2001）「文末表現としての「けれども」の機能について」『言語文化研究紀要』10 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 pp.87 -101
金城克哉（2002）「文末表現『けれども』の機能についての再考」『琉球大学欧米文化論集』46 琉球大学法文学部 pp. 43-63
楠本徹也（2015）「中途終了型発話文『～けど』『～ので』の要求・断り行為場面における待遇的談話機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41 東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.47 -60
元春英（2009）「会話の文末における『タラ』『バ』の終助詞的用法―発話行為と対人関係から―」『言葉と文化』11　pp.199-216
甲田直美 (2000)「複合事態における文脈効果の復元について」『滋賀大国文』38 pp.105-116.
国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版
西條美紀（1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
三枝令子（2006）「話し言葉における『テ形』」『一橋大学留学生センター紀要』9 pp.15−26
坂原茂（1985）『認知科学選書 2　日常言語の推論』東京大学出版会
佐竹秀雄（1995）「若者言葉のレトリック」『日本語学』11 月号 pp.53-60
————（1997）「若者言葉と文法」『日本語学』4 月号 pp.55-64
佐藤勢紀子（1993）「言いさし『が／けど』の機能―ビデオ教材の分析を通じて―」『東北大学留学生センター紀要』第 1 号 pp.40-49
————（1994）「中上級日本語教育における中断文「…が／けど」の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』第 2 号 pp.17-26
島弘子（1993）「助詞の表現『～たらどうですか』『～すれば？』を巡って：ポライトネスの観点から」『金沢大学留学生教育センター紀要』2 pp.13-23
白川博之（1991）「『カラ』で言いさす文」『広島大学教育学部紀要第 2 部』第 39 号 pp.249−255

————（1995）「理由を表さない『カラ』」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお出版 pp.189－220
————（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
————（2015）「『言いさし文』の文法」『日本語学』第 34 巻 7 号 pp.2－13
鈴木義和（2000）「いわゆる『理由を表さないカラ』について」『神戸大学文学部紀要』27 神戸大学 pp.311-328
砂川有里子（1988）「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9 明治書院 pp.14-29
————（2006）「『言う』を用いた複合辞―文法化の重層性に着目して―」『研究叢書 357　複合辞研究の現在』和泉書院 pp.23-40
高木丈也（2012）「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる『中途終了発話文』の出現とその機能」『社会言語科学』第 15 巻第 1 号 pp.89-101
高橋太郎（1993）「省略によってできた述語形式」『日本語学』10 月号 pp.18-26
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
谷崎和代（1994）「談話標識についての一考察―「だから」を中心に」『大阪大学言語文化学』3 pp.79-93
趙剛（2007）『談話標識「というか」の用法と機能』『日本言語文化研究』第 10 号 pp.1-12
曺英南（1998）「『けど』で言い終わる発話の語用論的研究：場面における言いさしの『けど』を中心に（第 16 回日本言語文化学研究会発表要旨）」『言語文化と日本語教育 』16 お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 pp.80 -83
———（2000a）「『けど』で終わる発話の語用論的研究：『言い終わり』の『けど』を中心に」『言語文化と日本語教育』19 お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 pp.89 -100
———（2000b）「用件の会話における言いさし表現について：言いさし表現とその後の相手の反応を中心に」『言語文化と日本語教育』20 pp.27-38
———（2002）「韓国人日本語学習者における言いさし表現の習得研究 : OPI データを資料として」『言語文化と日本語教育』24 お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 pp.80 -85
———（2004）「字幕付き映画における韓日の言いさし表現の対応関係：「述部有り」の言いさし表現を中心として」『言語文化と日本語教育』27 pp.102-115
陳相州（2011）『コーパスを利用した日本語談話標識「でも」「だから」の使用に関する研究』名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文
陳文敏（2000）「日本語母語話者の会話に見られる『中途終了型』発話―表現形式及びその生起の理由―」『言葉と文化』創刊号 pp.125-141 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
———（2001）「接触場面の会話に見られる『中途終了型発話』―台湾人日本語学習者の場合―」『言葉と文化』第 2 号 pp.175-191.
角田太作（2012）「節連接の五段階」『国語研プロジェクトレビュー』7 東京：国立国語

研究所 pp.13―21
寺井妃呂美（2000）「談話における「トイウカ」の機能」『日本と中国ことばの梯―佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版 pp.175-186
中井陽子（2003）「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語教育研究』3　pp.23-39
中溝朋子（2002）「ノニについて―接続助詞的用法と副詞的用法―」『日本語教育』（114），pp.20-29
永田良太（2000）「接続助詞カラの用法間の関係について―発話解釈の観点から」『日本語教育』107 号（10 月）pp.36－44
永田良太・大浜るい子（2001）「接続助詞ケドの用法間の関係について―発話場面に着目して―」『日本語教育』110 号 pp.62－71
――――（2015）「談話展開から見た接続助詞ケドの言いさし表現―トピック展開とターン・テーキングに着目して―」『日本語学』 第 34 巻 7 号 pp.14－24
西阪仰（2008）「発言順番内において分散する文―相互行為の焦点としての反応機会場―」『社会言語科学』10（2）pp. 83-95
西野容子（1993）「会話分析について―ディスコースマーカーを中心として―」『日本語学』5 月 pp.89-96
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
――――（2001）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
――――（2005）「テ節・中止節」『新版 日本語教育事典』大修館書店
朴仙花（2008）「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現につい―『けど』『から』を中心に―」『言葉と文化』9　pp.253-270
―――（2010）「 OPI データにみる日本語学習者と日本語母語話者による文末表現の使用：接続助詞で終わる言いさし表現を中心に」『言葉と文化』11　pp. 217-235
―――（2012）「中国人日本語学習者による文末表現の 使用に関する考察 －断り発話を事例としてー」『言葉と文化』13 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 pp.95-113
蓮沼昭子（1987）「条件文における日常的推論：『テハ』と『バ』の選択要因をめぐって」『國語学』150 日本語学会 pp. 1-14
花薗悟（1999）「条件形複合用言形式の認定」『國語學』197 日本語学会 pp.104-90
姫野伴子（1995）「『から』と文の階層性 1 ―演述型の場合―」『阪田雪子先生古希記念論文集』三省堂 pp.129－144
福原裕一（2013）「『～みたいな』表現の分析」『国際文化研究』19 東北大学国際文化学会 pp.101-116
星野祐子（2009）「コミュニケーションストラテジーとしての引用表現 ： 発話末の『みたいな』の表現効果」『人間文化創成科学論叢』11 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 pp.133-142

堀江薫・プラシャント・パルデシ（2009）『言語のタイポロジー　認知類型論のアプローチ』東京：研究社
堀口純子（1989）「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文藝言語研究 言語篇』 15 筑波大学 pp.99-121
前田直子（2004）「文末表現「みたいな。」の機能」『月刊言語』33（10）大修館書店 pp.54-57
————（2007）「原因・理由表現とは」方言文法研究会編（2007）『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』科学研究費補助金研究成果報告書
————（2009）『日本語の複文　条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版
益岡隆志（2014）「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存」益岡隆志など編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房 pp.521－542
松本修（2010）『「お笑い」日本語革命』新潮社
丸山岳彦（2008）「『日本語話し言葉コーパス』の節単位情報」『日本語学』5　pp.82-89
水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』13 号 pp.7-13
三原嘉子（1995）「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』第 2 号 横浜国立大学留学生センター pp.79－89
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
————（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析　初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版
————（2015）「言いさしに見るポライトネス」『日本語学』第 34 巻 7 号 pp.26－37
宮崎和人（1999）「モダリティ論から見た『～と思う』」『待兼山論叢』（日本学）33 大阪大学大学院文学研究科 pp.1-16
メイナード，泉子・K（1993）『会話分析』くろしお出版
————————（2004）『談話言語学　日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
三好準之助（2013）「日本語の和らげ表現について―『試論』の諸問題―」『京都産業大学論集』46 pp.1-28
森純子（2015）「『言いさし』の事例から考える『文』と『行為』― 日本語学習者は何を学ぶのか―」『日本語学』34‐7 pp.38－50
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
森山卓郎（1992）「文末思考動詞『思う』をめぐって―文の意味としての主観性・客観性―」『日本語学』11－8 pp.105－116
————（1995）「推量・比喩比況・例示―「よう／みたい」の多義性をめぐって―」『宮地裕・敦子先生 古稀記念論集 日本語の研究』明治書院 pp.493-526
ヤコブセン・ウェスリー・M（2011）「日本語における時間と現実性の相関関係：『仮定

性』の意味的根源を探って」『国語研プロジェクトレビュー』5 国立国語研究所 pp.1-19
山崎誠（1996）「引用・伝聞の『って』の用法」『国立国語研究所研究報告集』17pp.1-22
山田富秋（1999）「会話分析を始めよう」『会話分析への招待』世界思想社 pp.1-35
山本裕子（2004）「発話を形成する要素についての一考察」『名古屋女子大学紀要』50 pp.153-166
横森大輔（2006）「接続助詞の文末用法をもたらす要因―相互行為における参与者の認知観点から」『言語科学論集』12　pp.57-76
――――（2011a）「自然発話の文法における逸脱と秩序 :カラ節単独発話の分析から」『言語科学論集』17 京都大学 pp. 49‐75
――――（2011b）「相互行為の資源としての複文構文の意味―カラ節とケド節の言いさし現象の考察から―」国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」ワークショップ
吉永尚（2012）「テ形節における統語的考察」『園田学園女子大学論文集』46　pp.113-123
李徳泳・吉田章子（2002）「会話における『んだ＋けど』についての一考察」『世界の日本語教育』12 号，pp.223－237
林茜茜（2008）「ブログにおける言いさし文」『杏林大学大学院論文集』5 pp.47-65
若松美紀子・細田由利（2003）「相互行為・文法・予測可能性―「ていうか」の分析を例にして―」『語用論研究』第 5 号 pp.31-43
渡辺学（1995）「ケド類とノニ―逆接の接続助詞―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版 pp.557－564

Ariel, Mira.2008.*Pragmatics and Grammar*, Oxford; OUP
Austin, John L.1962. *How to Do Things with Words*, Harvard University Press.（坂本百大訳（1978）『言語と行為』大修館書店）
Boyle，Ronald.2000."Whatever happened to preference organisation?’", *Journal of Pragmatics* 32 pp.583-604
Brown, p. and Levinson, S.1987.*Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press （田中典子訳（2011）『ポライトネス　言語使用における、ある普遍現象』研究社）
Evans,Nicholas.2007."Insubordination and its uses", In Nikolaeva, Irina (ed) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, Oxford：Oxford University Press.pp. 366-431
Goffman, E.1967.*Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, New York : Doubleday Anchor（浅野敏夫訳（2002）『儀礼としての相互行為：対面行動の社会学』法政大学出版局）
Grice, Paul H. 1975.“Logic and Conversation.”in Peter Cole and Jerry Morgan (eds.)*Syntax and Semantics* , New York: Academic Press, pp.41-58.（清塚邦彦訳（1998）『論理と会話』勁草書房

Hinds，John.1986『Situation vs. person focus 日本語らしさと英語らしさ』くろしお出版

Horn, Laurence R.1984. Toward a new taxonomy for pragmatic inference: Q-based and R-based implicature. Deborah Schiffrin (ed.), *Meaning, form, and use in context: Linguistic applications*， Washington: Georgetown University Press.pp.11‐42.

Kato, Shigehiro.2014."Insubordination types in Japanese -What facilitates them?-".*Asian and African Languages and Linguistics*,Vol.8.pp.9-30

Norde, Muriel. 2009.*Degrammaticalization*, Oxford：Oxford University Press

Levinson.Stephen C.1983.*Pragmatics,*Cambridge University Press（安井稔・奥田夏子訳（1990）『英語語用論』研究社）

Levinson.Stephen C. 2000. *Presumptive meanings: The theory of generalized conversational implicature*, Cambridge, MA: MIT Press.（田中廣明・五十嵐海理訳（2007）『意味の推定 新グライス学派の語用論』研究社）

Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff and Gail Jefferson.1974."A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation " *Language,* 50(4)pp.696‐735.（西阪仰訳（2010）「会話のための順番交替の組織――最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集　順番交替と修復の組織』pp.7-153）

Searle, John R.1969.*Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge University Press（坂本百大・土屋俊訳（1986）『言語行為――言語哲学への試論』勁草書房）

Searle, John R.1975."Indirect Speech Acts", in Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics Volume 3: Speech Acts*, Academic Press, pp59‐82

Schiffrin Deborah.1987.*Discourse Markers,* Cambridge University Press

Sperber,D.and D.Wilson.1986.*Relevance:Communication and Cognition*.Oxford: Blackwell（内田聖二他訳（1993）『関連性理論―伝達と認知―』研究社）

Sifianou, Maria.2012."Disagreements,face and politeness",Journal of Pragmatics 44，pp.1554-1564

Taguchi, N.2014.Development of Interactional Competence in Japanese as a Second Language: Use of Incomplete Sentences as Interactional Resources.The Modern Language Journal 98，pp.518－535

コーパス

宇佐美まゆみ監修（2011）「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年版）」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究 B（課題番号 20320072）研究成果

あとがき

私が日本語の勉強を始めたのは偶然のことであった。今になって考えると，それこそ運命だったのだと思う。外国語の魅力に引かれ，大学で日本語という専門を躊躇せずに選択した。奨学金をもらい，日本に留学するという希望がかなったなんて今でも夢のようである。この夢を成就できたのは，私の指導教官の加藤重広先生と同級生の靳（キン）園元さんのおかげで，今でも感謝の気持でいっぱいである。

好奇心半分，心配半分の気持で留学生活を始めてからこの論文を完成するまで，あっという間に 5 年半も経った。思い返せば，最初は北海道大学大学院の入学試験に合格できなければどうしようと心配もした。入学後は，週末や祝日を問わず論文に攻められ，書いては修正してまた書いては修正するという繰り返しの苦痛もあった。でも，新しいアイディアが浮かぶ一瞬の嬉しさもあり，一本の論文を完成した瞬間の満足は言葉で表せないほど大きいものだった。

そのような生活の繰り返しの中で，私の心を癒してくれたのは北海道の大自然だ。故郷の中国・石家荘と異なり，四季折々の表情を見せる北海道という美しい大地で日本語の研究に専念できることは，私にとってとても幸せなことだった。

私がさまざまな困難を乗り越えて，この論文を完成できたのは，さまざまな方の支えがあったからである。

まず，私が研究生の時期からお世話になっている指導教官の加藤重広先生に御礼を申し上げたい。加藤先生は日々，親切にご指導してくださり，論文の進展に困った時はご多忙中でも快くご相談に乗ってくださった。加藤先生のご意見はいつも，どんよりと曇った中に入ってきた一つの光のようだった。その一つ一つの光の集まりがあるからこそ，この論文が完成したと言っても過言ではない。それだけではなく，雪道での歩き方にいたるまで私の生活面にもお心遣いしてくださり，幾度となく短いけれど心温まる励ましの言葉をいただいた。言葉で言い尽くせないほど先生に感謝の意を表わしたいと思う。

また，言語情報学講座の小野芳彦先生，李連珠先生，池田証壽先生，佐藤知己先生には，言語情報学講座研究発表会や研究論文の審査会などで貴重なご意見やご指導をいただき，感謝に堪えない。そして，本論文の審査では，加藤重広先生をはじめ，いつも本を貸してくれたり，ご意見をくださる小野芳彦先生，修士の授業に参加させてくださった野村益寛先生からそれぞれ大変参考になるご示唆をいただいた。重ねて深く感謝の意を表わしたい。

さらに，同じゼミの先輩や同級生，後輩たちにも論文の悩みを聞いてもらい，貴重なコメントをいただき，あらためて感謝の意を表わしたい。そして，日本語の添削などを手伝ってくれた日本人の友人たちにも御礼を申し上げたい。

最後に，私の学業を終始支持し，生活費を支援してくれた母国にも心から感謝の意を表わしたい。